
竜騎兵と花嫁

海乃野瑠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜騎兵と花嫁

【Nコード】

N92220

【作者名】

海乃野瑠

【あらすじ】

ある出来事から女性不信となってしまった私掠船の若き船長アルテュス。

二度と恋などしないと誓った男は、運命の悪戯であどけない少女と結婚する羽目になる。

欧州ルネサンス時代を背景に、海の荒くれ男とちよっぴり天然な少女が織り成す物語です。

……彼らはそのようにして七年間暮らした

同じ船の上、相手が誰かも知らないままで

彼らはそのようにして七年間暮らした

船を降りる時になって初めて相手に気が付いた……

その男はラテディム海のオーガと呼ばれていた。

その6フィートを優に超す背丈と筋骨逞しい体躯は、特に戦闘の際には迫力あるものだったが、別に鬼のような風貌だった訳ではない。夜の海の色をした鋭い瞳や、短めに切った黒い髪、笑うと白い歯の除く赤銅色に日焼けした精悍な顔つきは、男慣れした女には大層魅力的に見えるのではないかと思われる。

また、子供の頃からよく人を食ったような奴だと言われてきたが、実際に人を食ったことはない。

その男の名をアルテュス・ド・タレンフォレストと言った。

中流貴族の家に次男として生まれ、学校に行く歳になると親にさつさと海軍兵学校に放り込まれた。

父方の祖父は一生を国の為に捧げた海軍将校だったのだが、その息子であるアルテユスの父親は軍人とはならず、香辛料の商いで成功していた。

仕事が忙しく留守がちな父親と、長男次男に続いて次々と子を生んだ母親は、長男ならまだしも丈夫な次男を構っている暇などなかった。

愛情に飢えた子供は、よちよち歩きの頃から周りの大人の気を引く為に悪さばかりしていた。

それが更に両親との関係を悪化させることは、子供心にも薄っすらと分かっていたのだが、どうしようもなかったのだ。

そして罰されれば罰される程、打たれれば打たれる程、アルテユスの悪戯はエスカレートしていったのである。

兵学校への入学が決まると、この次男の操行に散々悩まされてきた親は、やっとこのならず者を厄介払いできることを喜んだ。

アルテユスは学校を卒業すると同時に海軍に入ったのだが、3年程勤めると自主退職して故郷に帰って来てしまった。

親は驚いて何故そんな愚かなことをしたのか問い詰めたが、アルテユスはそれには答えずに父親に自分が相続する予定の金を貸してくれるように頼んだ。

金を貸してくれば直ちに家から出て行く、そして返却できるようになるまでは絶対戻らないと誓ったのだ。

渋る父親から殆ど脅すようにして金を搾り取ったアルテュスは、約束通り家族の前から姿を消した。

それから数年後、アルテュス・ド・タレンフォレストは私掠船の船長として、24門の砲門を持つ愛船『麗しのマリルー号』に乗り込み、50人の部下と共にラテディム海をまるで自分の遊び場でもあるように荒らし回っていた。

敵国の商船の船長達は、嵐より反乱より何よりも水平線に不吉なフリユートの影を見つけることを恐れていた。

『麗しのマリルー号』が見えた時には、既にその船は運命の神に見放されたものと言っても良かった。

アルテュスが海軍時代に仕入れた知識を基に改造されたこの3本マストの帆船は、スルスルと敏捷に敵の船に近付き、奇襲をかけることに優れていたのだ。

敵船が速やかに降参しなかった場合、接舷し合っただけの戦闘では、アルテュスは敵に対して容赦しなかった。

銃を二挺ベルトに挟み、右手に剣、左手に短剣を持って襲い掛かってくるこの大男を目の前にすると、いかに勇敢な戦士であろうとも体が恐怖に慄くのを避けられなかった。

その豪胆な振る舞いや派手な捕獲によって、アルテュス・ド・タレ
ンフォレストは着々とラテディム海一帯でその名を広めていった。

そして、敵国の水夫らは、血生臭い戦いの中をまるで楽しんでい
るかのようには暴れ回るこの船長を、いつしかオーガの名で呼び恐れる
ようになっていた。

その日、『麗しのマリルー号』は昼過ぎに無事ティミリアの湾に入
港すると錨を下ろした。

アルテュスは数人の部下に船の警備を命じると、残りの者には上陸
を許可した。

真夏の日差しが眩しい日であった。

男達は1年振りに故郷の土に触れ、受け取った給与をポケットに、
喜び勇んで港町に向かった。

アルテュスは暫く男達と一緒に歩いたが、町に入る前に別れた。

「では10日後に港で会おう。あんまり羽目を外し過ぎるんじゃない
いぞ。約束の時間に船に戻っていない者は置いて行くからな」

船乗り達は満面の笑顔で船長に敬礼すると、女と酒が待っている港
町を目指して道を急いだ。

部下達と別れたアルテュスは、久し振りに口笛を吹きながら町外れ

にある丘に登る坂道を急ぎ足で進んでいく。

嵐や悪魔を呼び寄せると言われる口笛は船の上ではご法度だったのだ。

後ろにはトランクを担いだ召使が汗水垂らしヒイヒイ言いながらついて来る。

途中、日差しを遮る植物は殆どなかった。

道の両脇の地面は青々とした羊歯に覆われ、潮風で擦れ曲がった松が所々に立っている。

海が見渡せる頂上には一年前にアルテユスが建てさせた大きな家があった。

そして家では許婚のマリルリーズが、彼の帰りを首を長くして待っている筈であった。

マリルリーズは港町の娼婦の娘だった。

幾許もしない内に死んだ母親と同様に客を取らなければならぬ運命だった所を、二年前のある日、この若く有望な船長に見初められ、娼館から連れ出されたのだ。

アルテユスはそんな環境で育ったとは思えない程、あどけなく朗らかな娘を愛しみ、服や宝石を与え彼女の為に家を建てさせた。

マリルイーズは美しい娘だった。

まだ幼さがいくらか残った顔は明るく、緑色の大きな瞳とつまんだような可愛らしい鼻、さくらんぼのような赤いぼつてりとした唇をしていた。

髪は栗色でたつぷりとして艶があり、マリルイーズは梳ったまま自然に背中に垂らすことを好んだ。

そして幼い顔つきとは対照的に、大層男心をそそる豊満な身体をしていた。

アルテュスは自分の恋人をまるで海の泡から生まれた美の女神のように美しいと思い、肌を合わせた後マリルイーズが眠ってしまつてからも、揺らめく蝋燭の光で恋人の姿をあきもせず見守るのだった。

だが幸せな生活も長続きはしなかった。

半年もしないうちに以前から冷戦状態にあつた隣国と東部の国境近くで争いが起こり、アルテュスは国王にラティム海を敵国の船が通行出来ぬように封じることを命じられたのだ。

そして、別れを嘆き悲しむ恋人を慰める為、アルテュスは戻ったら彼女と結婚することを約束したのだった。

トランクの中には、大きなエメラルドのついた金の指輪と外国の市場で競り落とした珍しい豪華な生地で作らせた婚礼の衣装が入っている。

エメラルドはマリルイーズの瞳に良く合い、燃えるような赤の衣装

は彼女の美しさをさぞかし引き立てることだろう。

アルテュスはそれを見て手を叩いて喜ぶだろう許婚を想い浮かべ、
厳つい顔に似つかわしくない優しい表情を浮かべる。

家に近付くにつれ段々足並みが速くなり、最後は殆ど駆けるように
して家に向かった。

錆付いた門を押して庭に入ると、アルテュスはずっと手入れをして
いなかったように見える荒れた庭に眉を潜めた。

雇った庭師はどこへ行ったのだ。

マリルイーズには纏まった金を渡して、毎月召使達に幾ら渡せば良
いかを教えている。

アルテュスは厳しい目付きで庭の真ん中にそびえ立っている家を眺
めた。

日差しを遮る為だろうか、一階の雨戸は全て閉っている。

アルテュスは庭を横切ると、玄関の階段を駆け上がった。

嫌な予感がする。

直ぐにでも、マリルイーズの可愛い顔を見て安心したかった。

「おい、誰もいないのか？」

家の中は薄暗く、蒸し暑かった。

居間を覗くが誰もいなかった。

客でも来たのか、ブランデーの瓶と華奢なコップが二つ銀の盆に乗っている。

瓶の蓋は開いたままだ。

蠅が一匹コップの周りを飛んでいる。

「マリルリーズ？」

アルテュスは階段の方に行きながら許婚の名を呼ぶが、答えはない。ギシギシと軋む木の階段を一息に駆け上がると、自分達の寝室に向かう。

その時、妙な物音が耳に入った。

アルテュスは顔色を変えると寝室のドアを蹴り上げた。

そこには、一番見たくない光景があった。

愛しい女は一糸纏わぬ姿で二人のベッドに横たわっていた。

そして、大きく広げられた脚の間には、浅黒い尻を剥き出しにした瘦せた男の姿があったのだ。

ドアが壁にぶつかる激しい音で楽しみを中断された二人は、闖入者に驚きと恐怖に見開かれた目を向ける。

アルテユスの形相に相手が誰か分かったのだろう、すぐさま女から飛び離れた男は、ズボンを引き上げるのもそこに窓辺に駆け寄った。

カツと頭に血が上ったアルテユスは素早く剣を抜くと、窓枠に手をかけた男にズカズカと近付いた。

だが男を斬ろうと剣を振り上げた時、女が叫び声を上げながら二人の間に割って入った。

「彼を殺さないで!!!」

アルテユスが怯んだ瞬間を見逃さず、男は二階から飛び降りた。

着地した時に痛めたのだろう、片足を引き摺りながら逃げていく男を二人共見てはいなかった。

アルテュスは女を睨みつけた。

どうしてやるのか？

ギリと歯噛みをしながら、女の裸体をジロジロと見る。

女は真つ青な顔をして震えながらも、逃げようとはしなかった。

真つ白い胸元に点々とつけられた紅い印を目にとめたアルテュスは、怒りがメラメラと炎のように自分の身体を駆け巡るのを感じた。

「…………死ぬ前に言うことはないか？」

落ち着いた声で話そうとしたが、掠れ声しか出なかった。

女はビクツとすると真つ直ぐにアルテュスを見つめた。

エメラルドのように美しい瞳に蔑むような色を浮かべて女は口を開いた。

「最後まで私のことを物のように扱うがいいわ」

「…………どういうことだ？」

「娼館から連れ出してくれたことには感謝してるわ。でも結局、貴方もあそこの客とまったく同じよ。服や宝石を与えて私の身体を自由にしただけ」

「俺に抱かれるのは嫌だったのか？」

「貴方にとって私は港町の娼婦と変わらない。貴方はいつも強引で私の心なんか決して分かるうとしなかった。悲しかったけど仕方がないと思ってた。だけど貴方が私を黙らせる為にあんな嘘まで吐いてここを去って行った時、何かが壊れてしまったの」

「嘘だと？」

「そうよ。貴方が私と結婚する気なんてないこと、ちゃんと分かっていたわ。私が怒って泣くと、貴方はいつもいい加減な約束をして宥めてくれたわよね」

「ずっと俺をそんな風に見てたのか？」

女はそれには答えしないで、話し続ける。

「あの人は違ったの。傍にいて私を一人の人間として見てくれた。貧しい人だから宝石なんか買えないけれど、自分の心を私にくれたの。私達は愛し合っているわ」

アルテュスは、鞘から抜いたままの剣の柄を手が白くなる程、きつく握り締めた。

胸が痛かった。

息が苦しくなり、まるで錐でも捻じ込まれたようにキリキリと痛む。

俺もおまえを愛している、そう口走りそうになった。

だが、今更そのようなことを言っただけになる？

暫く黙ってアルテウスを見ていた女が口を開いた。

「殺すのだったら殺せばいいわ。私は自由になりたいの」

裸で髪も乱れ青ざめていたが、女はこの世のものと思われぬほど美しかった。

この女を殺す？

俺が誰よりも愛していた、俺を裏切ったこの女を？

自分を裏切った憎らしい腹を滅多切りにする光景が頭に浮かんだ。

……血塗れになって横たわる女。

俺が誰よりも大事に想っていた……

アルテウスは女に背を向けると剣を納めた。

「出て行け。見逃してやるから俺が10まで数える内に消え失せろ。もし10まで数えても、まだこの窓から姿が見えたら撃ち殺す！！」

女の足音が扉に向かい、階段を駆け下りていくのが聞こえた。

アルテウスは銃を握ると窓辺に歩み寄った。

やっと女が出て来た。

白い背中を向けて、一度も振り返らないまま走って行く女に狙いを

定める。

急に視線がぼやけた。

銃を構えている手が震える。

「畜生！！！」

アルテュスは怒鳴ると空に向けて発砲した。

角を生やさされた哀れな男は、がっくりと部屋の椅子に腰を下ろすと頭を抱えた。

許婚に裏切られたことよりも更に彼女の言葉は身に応えた。

女は一度も謝ろうとも弁解しようとしなかった。

初めから愛などなかったのだ。

俺の腕の中で頬を染め甘い声を上げていた時も、俺が出した金の分だけ働いているつもりだったのか。

愛されていると思い込み、うきうきと婚礼の衣装など買って帰った俺はとんだ道化者だ。

アルテュスは顔を顰め、汚らわしそうに乱れたベッドを見た。

ベッドの上での女の仕草が頭に浮かび、髪を掻き毟り呻き声を上げ

る。

暫く座ったままきつく目を瞑り歯を食い縛り、拳を握り締めていたアルテュスは、急に立ち上がると唸り声を上げながらベッドを蹴り上げ敷布を引き剥がす。

「畜生、畜生、畜生！！！！！」

マットレスに短剣を突き刺し天蓋をズタズタに切り裂いた。

ベッドの脇に落ちていた女の服も同じ目に遭わせる。

アルテュスは荒い息に胸を波立たせながら、荒れ果てたベッドの脇に呆然と立ち尽くしていた。

やがて、不幸な男は部屋を出ると、のろろと階段を下りた。

ずっと様子を窺っていた召使が、びくびくしながら居間に顔を出した。

「お荷物はお部屋に運びますか？」

「いや、いい。町に行つて公証人を連れてきておくれ」

召使が出て行くとアルテュスはトランクの脇に膝をついた。

懐から錆付いた鍵を取り出すと重たいトランクの蓋を開ける。

自分の衣類を掻き分け、一番底から油紙に包まれた小箱と大きな包みを取り出した。

小箱の中にはエメラルドの指輪、包みの中には婚礼の衣装が入っている。

アルテュスは指輪を手に取りじつと見つめると、自分の首にかかっていた洗礼のメダルのついた金の鎖を外し、指輪を通してもう一度首にかけた。

そして立ち上がると赤い絹の衣装を腕にかけて居間を出て行った。

夕方になってひよっこりと港に戻って来たアルテュスを船に残っていた連中は喜んで迎えた。

船長が一緒ならば良い酒が飲める。

それに、この若く頼もしい船長を皆好きだったのだ。

「でも船長、今夜は久し振りに恋人と過ごす予定じゃなかったんですか？」

航海士のアレン・デズマルが尋ねた。

乗組員の中で一番年長のこの男は、船長とは対照的に冷静沈着な性格だったが、いくらか無遠慮な所がある。

アルテュスは顔を曇らせたが、差し出されたコップを受け取ると、中の酒を一気に飲み干した。

「別れてきた。家も家具も一切合財売り払ってきたので、今夜の宿もない」

苦笑いをしてそう言うと、周りの男達が大きく頷いた。

「船長、そりゃあ却って良かったですよ」

「女に真面目になつては碌なことがねえです」

「船乗りは嫁など貰ってはいけないんですよ」

口々にそう話す男達は、皆過去に痛い目に遭っているようだ。

彼らの話を聞いていると、腹の中に燻っていた怒りが段々と治まってくるのを感じた。

「そうだな。腹癒せにあいつの為に買った婚礼の衣装を『三人の水夫』のローザにくれちまったぞ」

樽のような腹の上に白い前掛けを巻き、丸太のような腕の袖を捲り上げた赤ら顔の男が酒瓶を掲げた。

「ほら船長、一杯飲んで元気出しておくれよ」

何故か片手に長い柄のついた木のしゃもじを握っているその男は、船乗り達に『悪酔いブイヨン』と呼ばれているこの船の料理長だ。

本名はジャック・グロセックと言うのだが、誰もそう呼ぶ者はいない。

遙か昔、初めて料理長として乗り込んだ船の船長に、お前の料理は見ただけで悪酔いしそうだと罵られ、それがそのまま渾名となってしまったのである。

しかし、アルテュスとその仲間達にとっては幸いなことに、その後、港町の料理店で真面目に就業した甲斐があつて、今では美味いと評判の居酒屋の料理人ぐらいの腕前となっている。

なみなみと注がれたコップをまた一息に飲み干したアルテュスは、袖で唇を拭いながら言った。

「船の名を変えなくてはならないな。いつそのこと『売女のマリル一号』にでもするか」

「そいつは勘弁してくださいよ。外国の港で船の名を尋ねられたら、俺は『売女のマリル一号』に乗っかってるなんて答えるのは嫌ですから」

「ルーを消しちゃって、『麗しのマリー号』にしたらどうですか？」

マリーという名の恋人でもいるのだろう、年若い水夫が頬を染めながらおぼろげと提案する。

「いや、駄目だ」

「では『ラ・ソリテア号』ではどうですか？」

ニヤリとしながらアレンが言った言葉にアルテュスは大きく頷いた。

「そりゃいい。今の俺にぴったりの名前だ。明日からこの船は『ラ・ソリテア号』だ」

「『ラ・ソリテア号』に乾杯！！」

「乾杯！！！！」

歌の上手い『髭の三日月』と呼ばれている男がリユートを取り出した。

ティム・ラミュという名の船乗りだが、アレンと共に、アルテュスが私掠船の船長になってからずっと一緒にいる仲間の一人だ。

渾名の由来は説明するまでもない。

『髭の三日月』は膝の上に抱えた楽器をちよいちよいと調弦すると、腹の底に轟くような力強い声で歌い出す。

暇潰しに歌おうよ

美しい娘の過去の恋

娘は水夫のなりをして

船に乗り込み職を得た……………

恋人の後を追って船に乗り込んだ娘の歌である。

船乗り達の理想の恋人なのだろう。

男達は肩を組んで、酒を飲みながら合唱する。

『悪酔いブイヨン』は音楽に合わせて、しゃもじで船縁を叩いている。

恋人の傍にいる為に、七年間も水夫として働く娘なんか本当にいる訳ないじゃないか。

そう思いながらもアルテュスは、酒瓶を片手に仲間達と一緒に声を張り上げた。

穏やかな夏の夜だった。

空には綺麗な半月が浮かび、爽やかな潮風が心地良い。

時折寄せてくる波に揺られて船はギィと軋んだ音を立てる。

ゆらゆら揺れるランタンの周りには、羽虫が群がっていた。

夕飯も食べずに飲んだ所為か、いつもより酔いが回るのが早いようだ。

アルテュスはごろりと甲板の上に大の字になった。

帆が畳まれた帆桁と縄の間から見える月の光が眩しくて腕で目を覆う。

「女なんか糞食らえだ。もう二度と恋などするもんか」

意識が途切れる間に呂律が回らない口調でそう唸ったが、その声は騒いでいる男達の耳には届かなかった。

船の洗礼名を変えることは、災いを招くと信じられていた。

その為、翌朝起きるとすぐ二日酔いでガンガンする頭を押さえながら、アルテュスはメインマストの下に魔除けの金貨の入った袋を置いた。

また、初出港の前夜には船乗り達は眠らず飲み明かし、船の前の名を惜しむという慣わしがあった。

だが『ラ・ソリテア号』の船長はその夜から出発するまで、毎晩その習慣を実行することを決めたのだ。

その為、数日後に休暇から戻った者達が見出したのは、数え切れないう程の酒樽を積み上げ、その横で濁った目をして酒臭い息を吐き、大声で喚いている酔っ払いの一团だった。

町から戻って来たもう一人の航海士であるメレーヌ・デュ・マゴエルは、水夫達に手伝わせ、騒いでいる酔っ払い達を甲板から引き摺って行き、全員を寢床に押し込んだ。

自分の知っている海軍将校のように口煩い男だといつも船長に言われているメレーヌは、まだ若い真面目で有能な男で仲間達に認められていた。

そして、その口煩い航海士のお陰で、翌朝、酔いも醒めた『ラ・ソリテア号』の乗組員達は、予定通り出発することができたのである。

船名が変わって初めての出港は、外海に出る前に自分達の航跡を3度横切って災いを避ける。

つまり数字の8を水の上に3回描くのである。

操船は時間がかかり、タイミングが悪いと失敗する可能性が高かった。

やっと外海に出ると、今度は風の神アイオロスと海の神ポセイドーンに捧げ物をする。

船長の特別貯蔵室から出してきた樽から、高価な酒がドボドボと海に流されるのを見た船乗り達は、ああと溜息を吐いたが、文句を言う者は誰もいなかった。

運を天に任せ荒海に漕ぎ出す船乗りは迷信深いのである。

酒をケチって、代わりに塩水をたらふく飲まされるのは真っ平御免だった。

陸で休暇を過ごした者達は、船の名が変わってしまったことに驚いたが、仕方がないという風に頷き合った。

『麗しのマリル号』の船長が高い金を出して買った女に逃げられたという話は、既に港町の酒場では有名だったのだ。

年若い水夫が船に残っていた連中に噂の内容を面白おかしく語っていた所に、噂の本人の船長が姿を現した。

アルテュスは真っ青になった水夫にズカズカと歩み寄ると、襟首を掴み上げ船縁に引き摺っていき、船の上では二度とあの女のこと

相手の男のことも話さないことを誓わせた。

そして震えている水夫を突き飛ばすと他の連中を見据えて言った。

「港ではどんな噂をしても構わぬ。だが、この船の上では俺が掟だ。俺を馬鹿にすることは許さん。文句があるならすぐさま海に飛び込んで港に帰ったらいい。止めはせぬ」

寝取られ男と笑われることで、アルテュスは自尊心を傷つけられたが、本当のことなので仕方がないと諦めてもいた。

しかし、船の上で部下が船長を軽視するようなことがあっては秩序が乱れる。

それだけは避けなければならなかった。

だが、実際にはその心配はあまりなかった。

男達は多少の差はあるが、過去に同じような苦い経験をした者が多かった。

その為、彼らの船長に対し同情する者こそあれ、まだ恋などしたことのない若造以外に馬鹿にする者はいなかったのだ。

「上手廻し用意!!」

船長の声が甲板に響き渡る。

「用意完了!!!」

位置についた船乗り達が一斉に答える。

「かかれ!!!」

操舵手が方向転換を開始すると、次々と降ってくる号令に従い船乗り達はタイミングよく帆桁を回していく。

『ラ・ソリテア号』はギシギシと船体を軋ませながら方向を変える。

「よし」

バタバタと遊んでいた帆がやっと風を受け船長は満足そうに頷いた。

その間も船乗り達は帆桁を回し続け、帆が風を捉えるに従って船はスピードを上げ始めた。

作業が終わり、自分の傍に二人の航海士を呼んだアルテュスは言った。

「俺達が敵船を追っ払っちまったので、ラテディム海は儲けにならん。タルヘブ海峡を越えて西に進むぞ」

夏の風を孕んだ白い帆が青空に映える。

『ラ・ソリテア号』の冒険は今始まったばかりだ。

南国の果物の香りや様々な香辛料の匂いが空気に混じり合い、店主が通行人に呼びかける活気ある声や家畜の鳴き声で騒がしいスチユニアの市場。

埃っぽい地べたに無造作に投げられた絨毯の上で、ウードとタールが奏でる異国風の調べに乗り、華やかな色彩の薄絹を纏った踊り子が舞っていた。

目を除いて顔はベールで隠されているが、濡れたように光る黒い印象的な瞳が美しい。

軽やかに足踏みする度に足首に結ばれた鈴がサラサラと鳴る。

やがて、徐々に速度を増す音楽に合わせ踊り子は激しく舞い始めた。

情熱的に身体を震わせ、まるで憑かれたかのように踊る女に、観客は熱狂し唸り声を上げ手を叩く。

時折ちらりと覗く華奢な足や、服の下に窺える妖艶な肢体に、男達は目をぎらつかせ鼻息を荒くする。

曲の調子が最高潮に達し、服の裾を広げるとくるくると独楽のように回っていた踊り子は、打ち上げられた太鼓の響きに合わせ観客の方を向いてぴたりと止まると、額が地面につく程の深いお辞儀をした。

割れるような拍手と共に、踊り子の足元に置かれた籠に硬貨がバラ

バラと投げ入れられる。

「いい女だなあ」

アルテユスの隣に立っていたアレンが唸るように言った。

「まったく」

二人と一緒にいた『髭の三日月』は相槌を打ったが、アルテユスは顔を顰めると何も言わずにその場を離れた。

流れ落ちる汗を拭おうともせず、男はどさりと仰向けに寝転がった。

逞しい胸が大きく波打っている。

傍らには豊かな白い臀部を晒した女が、身動きもしないで横たわっていた。

薄暗い部屋の中で、その用途の為だけに設えられた小さなベッドは、この男には些か窮屈で両足が外にはみ出してしまっている。

やがて、深い溜息を吐いた男は起き上がると、黙ったまま椅子に引っ掛けてあった服を取り身に着け始めた。

男が立ち上がると、眠っていると思われた女が肘をついて上半身を起こし振り返った。

物憂い眼差しで、自分に背を向けて上着の袖に手を通す男の姿を眺めている。

「泊まっていけないの？」

「……」

アルテュスは女の方を振り向きもせず、硬貨を数枚ベッドに放るとさっさと部屋を後にした。

身体の昂ぶりが治まると、残っているのは虚しさだけだった。

自分の体に裏切られたような気がする。

もう女なんか懲り懲りだと頭では思っているのだ。

だが、ほんの数分美人の踊り子を見ただけで、何故すぐさま女を抱きに行かなくてはならなくなるのだ？

散々な目に遭っている癖に、何故まだ女に温もりを求めるのだ？

アルテュスは苦虫を噛み潰したような顔をして肩を竦めると、初めに目についた酒場に大股に入って行った。

「何であんたらは船長を止めなかったんだ？」

怒りに顔を引き攣らせた航海士メレーヌの前に、しょんぼりした『髭の三日月』とアレンが立っている。

「ティミリアを出た時から、ずっと船長がイライラしていたのは知っていただろう？ ああいう時にちゃんと見張っていないと問題を起こす人だということをあんたらも今までの経験で分かっている筈じゃないか」

年上のアレンが弁解を試みる。

「そうなんだが、市場に向かった時は機嫌が良さそうだったし、ああいう場所にまでついて行くのは無粋と言っもんだろ？ 俺達が酒場に着いた時には既に時遅しだったんだ」

「だから、さつさと海事裁判所に向かって用事を済ませてしまえば良かったんだろう？ 市場で道草を食ってルベール族の踊り子を眺め、それだけじゃ飽き足らず売春宿で一発やって、その拳句に船長は酒場で出会ったならず者と喧嘩をして牢屋にぶち込まれただと？ 本当に呆れてしまうよ。あんたら船長の補佐として一緒に行ったんじゃないのか？」

「あんたの言うとおりで。俺達が悪かったよ」

『髭の三日月』が素直に謝った。

アレンは顔を顰める。

同じ航海士として『ラ・ソリテア号』に乗り込んでいるメレー又は、自分より経験も少ない航海技術も劣るのだが、こういう時はまるで自分が見習いの小僧のような気分になってしまっ。

「それで船長は？」

「幸い死者は出ていないので、公序を壊乱した罪で罰金だけだ。だが、喧嘩相手の一人は全治3週間、もう一人の男は全治1ヶ月の重傷を負った。二人目の方は一生利き腕を使えなくなるかも知れないそうさ。それに酒場の主人が彼らが壊した家具や食器の弁償を願っている」

「金を払えば牢屋から出してもらえるのか？」

「そうだが。俺が会いに行った時には船長は、喧嘩は向こうが吹っかけてきたのだから、自分はびた一文払わんと頑なに拒んでいたぞ」アレンと『髭の三日月』は途方に暮れたようにメレーヌの顔を見た。

「仕方がないから、罰金は帳簿係に言っただけで船の費用から出すさ。二人の男は怪我が治り次第、『ラ・ソリテア号』で雇うことを交渉してみる。残りは酒場の弁償金だけだ。悪いが、あんたらの給料から差っ引くぞ」

二人は諦めたという風に両手を上げて溜息を吐いた。

どうせ、これから一山当てに行くのだ。

古びた椅子を何脚かと縁の欠けた皿とコップ位では、大した出費にはならないだろう。

それよりも早く船長に船に戻ってもらわないと困る。

アルテュスは頭の下に手を組んで、硬い木の寢床に横になり、時折水滴が滴ってくる暗い石の天井を見つめていた。

先程から同じ部屋に閉じ込められた男が、しきりに話しかけてくるが無視している。

邪魔さえ入らなければ、居心地が悪いとは言いつれないな。

酔いも醒め、自分の置かれた状況の馬鹿らしさに苦笑いしながら考える。

直ぐにカツとして取り返しのつかないことをしてしまうのは、子供の頃からである。

そして中々素直に謝ることができないのも。

向こうから喧嘩を売ってきたとはいえ、大人気ないことをしたと思う。

酔っ払いの戯言など適当にあしらっておけばよかったのだ。

だが酒場に入った途端、数人の顔見知りの男に絡まれて、色男の旦那も女に振られたのかと下卑た笑い声を浴びさせられ、頭に血が上ってしまったのだ。

俺は俺のことを馬鹿にする奴ら全員と喧嘩するつもりなのか？

寝取られ男が滑稽なのは事実だろ？

自分も以前はそういう奴らを少しばかりの軽蔑と哀れみの混じった

目で見ていただろうが。

くそっ、あの女!!!

不意に自分を裏切った女の美しい顔が頭に浮かび、アルテュスは眉を顰め歯を食い縛った。

初めて好きになった女だった。

アルテュスはその恵まれた容姿のお陰で、海軍にいた頃から女に不自由したことはなかった。

けれども、休暇に仲間達と行くような場所には、男を利用することしか考えていない世慣れた女しかいなかった。

それはそれで楽しかったのだが、強かに逞しく生きている女の一人にアルテュスが恋をすることはなかったのだ。

孤児で不幸な身の上のマリルーズに初めて会った時、アルテュスは彼女が自分と同類だと感じたのだった。

表面は快活に振舞っているが、実際は身よりもなく一人ぼっちでも心細いのではないか？

だから、彼女を救い出し一生大事に守ってやりたいと思ったのだった。

だが彼女はそんなことを望んではいなかった。

アルテュスは苦しそうに身動きする。

いくら忘れようとしても、どうしても思い出してしまうのだ。

その度に胸がキリキリと締め付けられるように痛む。

一度泣いてしまえば楽になるのかも知れないが、物心ついた頃から何故か泣くことができないのだ。

どんなに叱られても涙を見せないアルテュスを、周りの大人達は可愛げのない子供だと罵った。

どうせ碌な男になるまい、大人になったら犯罪に手を染めるようになるだろうなどと言われ続けて育ったのだ。

アルテュスは溜息を吐くと起き上がった。

ここにいると嫌なことばかり思い出してしまう。

それなら酔っ払いの無駄話に付き合う方がまだましだった。

アルテュスは反対側の寝床に横になっている男の方を向くと口を開いた。

「ふうん、それじゃあんたは『働き者のラミー号』に乗っているのか。最近、タルヘブ海峡近辺を海賊が荒らしまわっていると聞いたんだが……」

それから数ヶ月後、アルテュスは『ラ・ソリテア号』の仲間達とタルヘブ海峡の海賊を追い回していた。

海賊なんかに見す見す稼ぎを持っていかれては堪らない。

それに、海賊は敵国の船ばかりだけではなく、我が国の商船も襲うのだ。

実際にやっていることはアルテュスも海賊も殆ど変わらなかったが、私掠免許を持っているかどうかで、戦いに敗れた時の扱いが変わってくる。

国王に発行された私掠免許を持ってさえいれば、敵に捕らえられた場合に捕虜と見なされる。

だが、捕らえられた海賊は絞首刑にされると決まっていたのだ。

数週間の追跡の末、タルヘブ海峡近辺を荒らし回っていた海賊船は『ラ・ソリテア号』に横腹に大砲を打ち込まれて沈没しかけ、慌てて降参したのだった。

捕らえた海賊達を一番近い港の海事当局に引き渡した後、アルテュスは針路を南西に変えさせた。

「思えば奴らも哀れなもんですよね。聞けば大半は、半年前にトルーベ海を横断中に反乱を起こしたガレー船『メリディアン号』の水夫だったと言うじゃないですか」

アレンがそう言うと、アルテュスは仕方がないという風に肩を竦めた。

「だが奴らをこの船で雇ってやる訳にもいかないだろ？ 俺も『メリディアン号』の船長のように殺されちまうのは嫌だしな」

二人の周りにいた男達はもつともだという風に頷いた。

その中にはスチュヌアの酒場でアルテュスと喧嘩をして怪我を負った二人の水夫もいた。

男達は哀愁の浮かぶ眼差しで、遠ざかっていく陸を眺めていた。

海賊達がこれからどうなるのか皆知っていた。

海の男が最も恐れている死に方は、溺死と絞首刑だったのだ。

北風の吹きすさぶ季節となった。

ラテデイルム海を避けて通る敵の商船を待ち伏せ、大型船2隻の捕獲に成功し、気を良くした『ラ・ソリテア号』の船長は更に西に向かって船を進めることを決めた。

5日後の夕方にはティアベの港に着く予定だ。

12月28日は幼子殉教者の日である。

その日から大晦日まで船旅は避けるべきと言われていた。

その期間は、海に沈められた町の教会の鐘が鳴り響き、溺死者の行列が波の間に現れると信じられていたのだ。

アルテュスは何度か行ったことのあるティアベの港で新年を迎えるつもりだった。

港町には船乗り達の溜まり場となっている酒場が多かったし、港に近いトリポルトという町にはアルテュスの兵学校時代の親友マテオ・ダヴォグルの屋敷があったのだ。

だがその日、何故か日没近くなって風がぱったりと止んでしまい、船が全然進まなくなってしまった。

夜が明けても風は吹かなかった。

船乗り達は、急に止んでしまった風に不吉なものを感じていた。

魚を釣ることぐらいしかすることがないので、皆トランプやサイコロで遊んだり歌を歌ったりして過ごしていたが、陽気になる者は少なかった。

数日そんな状態が続くと、小さな争いがあちこちで起こるようになっていった。

とうとう船長は、喧嘩を止めに入った航海士を殴った水夫を鞭打ちの刑にする羽目になった。

見せしめの為の刑罰であったが、顎に大きな痣をつくったメレーヌ

はその様子を見ながら冷ややかに言った。

「水夫を鞭打つと風が起ると言われているが、そうなればこの愚か者も役に立ったと言えるだろうよ」

「……………!!!」

まるで命綱に縋るように舵にしがみついているアレンがついた悪態は、風と波の音に掻き消されて他の者の耳には入らなかった。

「早く、帆を畳め!!!」

叩きつけるような激しい雨の中、水夫達は風に逆らい顔を顰めながら必死でメレーヌの指示に従う。

やっとこの数日間、皆が待ち望んでいた風が吹いたのだが、昼を過ぎたあたりから急に空模様が怪しくなった。

急いでその水域を離れようとしたが、雨雲の方が船よりも一足早かったようだ。

やがて立っていられないぐらいの暴風が吹き荒れ、稲妻が光り、雨が降り出した。

まだ畳まれていない帆がバタバタと乱暴にはためき、布の裂ける嫌な音がする。

アルテュスはアレンの隣に立ち、やっと最後の帆が下げられるのを

確認すると大きく息を吐いた。

嵐から抜け出すことは諦め、どうやって被害を最小限にとどめながらやり過ごすかだ。

空は黄味を帯びた鉛色で辺りはまるで夜のように暗い。

時々稲妻が暗灰色の雨雲の間を引き裂くように走る。

男達は皆濡れ鼠で、海に投げ出せれないように、悴んだ手で不器用に船縁に結びつけた縄を腰に巻きつけた。

荒れ狂った海の中で『ラ・ソリテア号』はまるでおもちゃのように振り回される。

前の方へ転がっていく桶を追いかけて水夫が一人持ち場を離れた。

「戻れ！！！！ 戻れ！！！！」

しかし、少年は男達の声も聞こえていないようで前屈みになって船縁に？まり必死で進んでいく。

ザザアという音と共に水飛沫を上げて船の底が波の谷間に沈み込み、次の瞬間には船の10倍ほどの高さの波が崩れ落ちてきた。

船がやっと水から出た時には、若い水夫の姿はもうどこにも見えなかった。

「見習い水夫が海に落ちたぞ！！！！」

身振り手振りで伝える男達にアルテュスは顔を顰めて首を振った。

愚かな奴だ、縄を腰に巻いていなかったのか。

哀れだが、この海の中から救い出すことは無理だろう。

『ラ・ソリテア号』はミシミシと悲鳴を上げながら、自分より遙かに強い怪物を相手に戦っていた。

一段と強い風に揺さぶられた瞬間、メインマストがまるで木の枝のようにポキリと根元から折れた。

その衝撃で帆船は危なく傾き、転覆しそうになった。

危うい所で船を安定させることができた航海士は唸り声を上げる。

幸いマストの下敷きになった者はいなかった。

男達は寒さと恐怖で顔を真っ青にして、忙しく口を動かしている。

歯をカチカチならしているのか、それとも祈りの言葉を呟いているのか。

船酔いしている者も多いようだ。

その中でアレンだけは、いつもどおりの顔つきで舵を握っている。

アルテュスはマストが倒れるのを見た時、生まれて初めて恐怖を感じ

じた。

背筋をぞくぞくと寒気が這い上がり、濡れた服が張り付いた体に鳥肌が立った。

不安そうにアレンの方を見ると、航海士は船長に傍に来るように手招きした。

そして船長の耳の近くで怒鳴る。

「こんな時は生まれて初めてですよ！！ これ以上長引いたら流石の私もお手上げです！！！！」

アルテユスも怒鳴り返す。

「どうすりゃいいんだ?!?!」

「もう神に縋るしかないんじゃないですか?!?!」

そして大声でパテル・ノステルを唱え始める。

アルテユスも子供の頃に習った祈りの言葉を呟いた。

だが嵐はいつこつに治まる気配がない。

アレンがアルテユスの腕を掴んだ。

「ちょっと舵を取っていてください!!」

アルテュスと場所を入れ替わると、アレンは自分の指から金の指輪を外した。

そしてそれを海に向けて放りながら叫んだ。

「これをあげますから、どうか静まってください！！ ほら、船長も海に何か捧げてください！！！」

航海士が舵の前に戻ると、アルテュスは懐から財布を取り出そうとしたが、ふと思いつき、自分の首元を探り金の鎖を引き千切った。

洗礼のメダルはそのまま懐に突っ込み、エメラルドの指輪を海に投げた。

エメラルドには海を静める力があると信じられているのだ。

普段はあまり迷信深くないアルテュスなのだが、今は何でも効き目がありそうなことはやる気になっていた。

暫くするとアレンが怒鳴った。

「もし嵐を治めてくれたら、一ヶ月間一滴も酒を飲まないことを誓う！！ それから金曜日には肉を食べないことを誓う！！」

次から次へと誓いの言葉を喚いていた男は暫く黙った後、顔をクシヤクシヤにすると泣き声で怒鳴った。

「……それから、それから、俺は二度とサイコロに触れないと誓うぞ！！！！！！」

アレンは仕事には真面目な男だったが、賭け事に目がないという欠点があった。

その為、彼の懐はいつも貧しかったのだ。

「船長も早く何か誓ってくださいよ!!」

アルテュスは考えた。

誓うと言ったって実行できるようなことじゃないと無理だろう？

「ほら、恋人と仲直りするとか、何でもいいですから!!」

そりゃ無理だ。

一生結婚しないとだったら誓えるが。

口を開きかけた時、隣でアレンが怒鳴った。

「船長が船を降りて最初に出会った女を嫁にすることを誓うぞ!!」
「!」

「なっ、何だと?!!! いい加減なことを言うな!!!!」

だがその時、『ラ・ソリテア号』は波に激しく揉まれ水を被り、まるで今にも木っ端微塵になってしまいそうな音を立てた。

甲板に放り出されそうになったアルテュスは隣の男にしがみつき、やっと息ができるようになると怒鳴った。

「もしも、この船が無事に港に着いたら、そこで最初に会った女と結婚することを誓う。だからお願いだから静まってくれ!!!!!!!!!!」
初めに会う女が若い頃に夫を亡くしたよぼよぼの婆さんかも知れないとは思いつかばなかった。

数時間後、随分と落ち着いた波に揺すられる甲板の上、『ラ・ソリテア号』の乗組員は放心したように座り込んでいた。

灰色の雲に覆われた空からちらちらと白いものが舞っている。

まだ午後も早いというのに辺りは薄暗い。

天気の時為か道を行く人はまばらだ。

そして皆、暖かい我が家への道を急いでいるようだ。

静かな狭い路地にある隣の建物に寄りかかるように傾いた石造りの小さな家の戸が開く。

青みがかったスレート屋根の上の捻じ曲がった黒い煙突から煙が一筋流れている。

家の中から出てきたのは深みのある赤のシヨールに包まった小柄な女だ。

女は何事か家の中に叫び、戸を閉めると、空を見上げた。

ぱつちりとした大きな青い瞳とふつくらとした薔薇色の頬が愛らしい少女だった。

少女は嬉しそうに暫く片手で雪を受け止めていたが、やがてもう一方の手に提げていた籠を持ちなおすと、薄っすらと雪が積もった泥濘んだ道を滑らないように気をつけながら歩き始めた。

教会の前広場で立ち止まり、幼子を抱いた聖母の像の前で片足を折

って軽く頭を下げると、教会の裏に続く小道に入って行った。

滅多に人が通らないその道には既に2インチ程の雪が積もっている。

やがて、少女は袋小路の突き当たりにある藁葺き屋根の家の門を潜り、石の階段を上がると戸を叩いた。

戸が開き、血色の良い太った中年の女が顔を出す。

「こんにちは、マリヴオン小母さん」

元気な声で挨拶をする少女に女は笑顔で答えた。

「まあ、エヴァちゃん。寒かっただろう？ ほら、早く中へお入り」

少女はシヨールに積もった雪を赤くなった手で払い落とし、女の後について家に入る。

女に暖炉に近づくように勧められたエヴァは、玄関で濡れて汚れた木靴を脱ぎ、籠を蠟で磨かれたどっしりとしたテーブルに置くとシヨールを取った。

黒っぽい服にパリツとした白い前掛けという質素だが清潔な身なりをして、頭には糊の効いた白い頭巾をきっちり和被って髪を覆い隠している。

「父さん、エヴァちゃんが来たよ！」

隣の部屋からか、しわがれた声で唸るような返事が聞こえた。

エヴァが扉を叩いて部屋を覗くと、毛布に包まって暖炉の前のベンチに横になっていた老人は、少女の方を向いてニコリともせず頷いた。

「こんにちは、ペレック爺さん」

体を起こした老人は、日に焼けて深い皺の刻まれた干し李のような顔を顰めて怒鳴った。

「モナ！！ 酒を持って来い」

暫くして部屋に入ってきたマリヴォンは、湯で薄めたブランデーの入ったコップを父親に手渡した。

「な、何だこれは?!?!」

一口含んだ酒を大袈裟に暖炉の中に吐き出した老人は、自分の娘を睨みつけた。

「わしが寝たきりの爺だからって馬鹿にしているのか？ 言っとくが、わしを騙そうたってそうはいかんど。何たってわしは40年もの間、王宮ご用達のブランデーや葡萄酒を運んでいたのだからな」

マリヴォンは父親の怒った口調にビクともせず、ずけずけと言いつ返す。

「それが何だい？ まさか王様のお酒を父さんが飲んでた訳じゃな

いだろう？ それに医者に酒は一日一杯だけって言われているんだから、今飲んだら夕飯と一緒に飲めなくなるよ」

「イヴオナが生きてりゃ……」

「生憎、母さんは10年前に亡くなっているんだ。これ飲まないんだったら持っていくよ」

マリヴオンがコップを片手に扉の方に向かうと、父親はその背中に懇願するように呼びかけた。

「モナ、モナ、お願いだ。ほんのちょびつとでいい。水で薄めてないやつをくれ」

親子二人の会話は毎度のことなので、エヴァは窓辺にある小さな机の前にちょこんと座り、大人しく待っている。

指貫きのように小さなコップに酒を入れたマリヴオンが戻って来た。

「ほら、これ飲んだら、大人しくするんだよ」

老人は唸り声を出したが、文句は言わずに、ちびりちびりとコップの酒を飲んでいる。

そして、やっとエヴァの方を見ると咳払いをして口を開いた。

10歳の時に母親が病で亡くなり、それからエヴァは父親と二人きりで暮らしていた。

父のゴンヴァルは、ティアベの町の代書人だった。

ティアベは中世から港として栄えた町で、古代の円形競技場のよう
な形に広がっており、西は海、南は山、北と東は森に囲まれている。

先王が建てた城壁と港の入り口にある2つの塔によって、敵国の侵
略から守られている。

エヴァ達の家は、港に近い下町にあった。

古く小さな家であったが、二人には十分な大きさで、エヴァと父親
はそこで大層居心地良く暮らしていたのだ。

代書人の仕事は大して儲からなかった。

ゴンヴァルは裕福な商人からはきちんと金を取ったが、遠い町に住
む恋人や家族に手紙を書いてもらいに來る若い船乗りや貧乏人には
無償で書いてやるが多かったからである。

だが、百姓は自分の畑で取れる野菜を持ってきたし、漁師は釣った
魚を持ってきた。

若者達は足の悪いゴンヴァルに代わって薪を割ったり、水汲みをし
たりしてくれた。

そして父が仕事をしている間、傍に立ってじっと見つめているエヴ
アの頭を撫で、時には珍しい南国の貝殻や木の実をくれたのである。

ゴンヴァルは普段は港町の教会の脇にある露店で仕事をしているの

だが、ここ数年、冬の間は持病のリウマチが酷くなるので、外に出るのを控えている。

その為、代わりに娘のエヴァが毎日港に通い、仕事をもらって来るのだ。

夏の終わりに15歳になったエヴァは歳の割にはしっかりした子で、母親が死んでから家事全般をこなしているだけではなく、最近はそのようにして父親の仕事も手伝っていた。

元船乗りで商人のペレック爺さんから仕事の話が来たとき、ゴンヴアルは自分の病気を理由にいったん断った。

だが、エヴァが自分が代わりにその仕事をすることを頼み込んだのだ。

父に教わってエヴァはラテン語、ギリシア語、それから国語であるガイドア語の読み書きができた。

死ぬ前に自分が経験した冒険の数々を書き残したいという爺さんの願いを叶えてあげたかったし、なによりも人生の半分以上を海の上で過ごした年寄りの船乗りの話を聞きたかったのだ。

そついう訳でエヴァは、二ヶ月程前から毎日、ペレック爺さんが娘夫婦と暮らしている家に通っている。

物忘れの酷くなってきている老人は、語っている途中でどこまで話したか忘れてしまうようで、エヴァは今まで書いた話を何度も声を

出して読み返さなければなかつた為、中々捗らなかつた。

どこまでが事実でどこからが空想なのかはつきりしないこともあったが、異国での生活や不思議な出来事の数々はティアベの町を出たことのない少女にとっては、とても興味を引かれるものであった。

話し疲れた老人がこっくりこっくりと船を漕ぎ始めるのを見ると、エヴァは立ち上がり机の上を片付けた。

これから港の郵便局兼宿駅まで、ひとつ走りしてこなければならぬのだ。

日が暮れて冷え込むまでには、家に帰り着きたい。

「あら、父さんたら寝ちゃったのかい？ エヴァちゃん、もう帰らなきゃならないの？」

エヴァが商売道具を籠にしまい、シヨールを被っていると、マリヴオンが台所から顔を覗かせた。

「はい、宿駅に用事があるので」

「ゴンヴァルさんの代わりも大変だねえ。じゃあ、これを持って行きな。裏庭の胡桃で作った菓子だよ。お父さんとお食べ」

「ありがとう！」

甘い香りのする包みを潰れないようにそつと籠に入れて布をかける。

マリヴオンが暖炉の傍で乾かしておいてくれたので、木靴は中に詰

めてある藁と干草もホカホカと暖かった。

もう一度礼を言っておいてエヴァは外に出た。

雪は止んでいたが、気温が下ったようで地面から冷気が深々と伝わってくる。

早く行かなくちゃ。

白い息を吐きながら、シヨールをきつちりと巻きつけたエヴァは、雪の積もった道を元気良く歩いて行った。

港町に着いた少女は、寒さにも拘らず大勢の人達が波止場の方へと走って行くのを見て驚いた。

何かあったのだろうか？

エヴァは立ち止まって考えた。

早く用事を済ませなくてはならないと思う一方で好奇心がムクムクと頭をもたげてきている。

宿駅に行く前に、ちょっとだけ何かあったのかを見に行こう。

もしかしたら仕事があるかも知れないし。

自分自身にそう言い訳すると、エヴァは皆の後に続いて波止場に向かった。

どうやら皆は港に入ってくる船を見ているようだったが、背の低い少女には男達の背中ばかりで何も見えない。

ああ、もうこんなことやっている暇はないのに。

そう思いながらも群れから離れ、駆け足で坂道を登って行く。

少し行くと左下に港が見渡せることを知っていたのだ。

やっと丘の上まで登ると息を弾ませながら下を覗いた。

丁度港に一艘の帆船が入って来る所だった。

エヴァは目を丸くした。

武装した立派な船だが、嵐にでも会ったのか、真ん中のマストは折れ帆は破れて垂れ下がっている。

甲板には大勢人がいる。

船を眺めていたエヴァは、その中で一際背の高い男が、自分の方をじっと見ているのに気が付いた。

知っている人かしら？

思い出せなかったが、お父さんのお客様かも知れない。

そう思ったエヴァは、その男に愛想よく笑いかけた。

だが、男は不愉快そうに顔を顰めるとエヴァに背を向け、二度と再びエヴァの方を見ることはなかった。

露店の古びた机の前に座ったエヴァは、悴んだ両手に息を吹きかけた。

客を待っているのだ。

簡単な手紙だったらその場でエヴァでも書けるが、難しい手紙や契約書などは客に家まで来てもらわなければならない。

馴染みの客は数人いたが、そうしょっちゅう仕事を頼みに来る訳ではない。

家で待っているだけでは、食べていけるだけの稼ぎがなかった。

その為、エヴァは父が働きに出られない冬の間、毎日露店に通うことを決めたのだった。

シヨールに包まったまま、隙間風が冷たい小屋の中に2時間程座っていたエヴァは、大きな溜息を吐くと立ち上がった。

寒さの所為か今日は客は一人も来なかった。

これ以上待っていても無駄だろう。

エヴァは震えながら、机の上の紙の束とインクの入った壺、鷲ペン、封印に使う蠟を籠にしまう。

そして、外に出ると窓を開けていたつつかえ棒を外し、窓と戸に鍵

をかけた。

一旦止んだ雪がまた降り出している。

だが、寒空に楽しげに舞う牡丹雪を見ても、凍えた少女は先程みたいに浮き浮きした気分にはなれなかった。

既に辺りは薄暗くなってきている。

宿駅に寄って用事を済ませて、早く帰らなくては。

馴染みの客に頼まれた手紙を出さなければならぬのだ。

あんまり遅くなるとお父さんが心配するだろう。

夕飯は昨日のスープが残っているし、パンもまだ半分程あるから、買い物しなくても大丈夫よね。

エヴァは急ぎ足で教会の脇を通り、港町の商店街に向かった。

馬車の絵が描かれた看板がかかっている煤で汚れたハーフティンバーの建物が、ティアベの港町の宿駅だ。

重い木の扉を開けると、ムツとした熱気と煮込んだキャベツの匂いに包まれた。

冷たい風と雪が吹き込み、細長いテーブルに着いていた男達が一斉にエヴァの方を見た。

知らない顔ばかりだ。

きつと先程入港した帆船の乗組員なのだろう。

エヴァは皆に挨拶するように強張った微笑みを浮かべると、奥の力ウンターで大きな素焼きのジョッキにビールを注いでいる、額の禿げ上がった小柄な男に近付いた。

「こんにちは、ジョシユア小父さん！」

周りの雑音に負けないように大声で挨拶する。

「おや、エヴァちゃん。寒いのにご苦労さん」

男はジョッキを乗せた重そうな盆を手伝いの小僧に渡すと、前掛けで手を拭き、エヴァが差し出した手紙と銀貨を受け取った。

そして手紙の宛先を見ながら言った。

「ああ、これは明後日の馬車で出るよ。家に帰る前に何か飲んでいくかい？」

「今日は儲けがなかったからいいわ」

釣り銭を受け取りながら少女は頭を振る。

「ほら、これを飲んで少し暖まりな。風邪ひいちまうよ」

横からジョシユアの女房のフランセザが、蜂蜜を入れて肉桂で味を

つけた熱い葡萄酒の入ったコップをエヴァに差し出した。

フランセザは、少女から金を受け取るうとした亭主を睨みつけて大きな声で言った。

「金はいらないよ。困った時は互いに助け合っもんだ」

「ありがとう」

涙が出そうになったエヴァは、急いで俯き葡萄酒を啜った。

やっと体も温まり、少し落ち着いた少女は辺りを見回した。

何て騒がしいのかしら。

酒を飲みながら大声で話している男達を呆れたように見ていると、奥のベンチに座っている若い男と目が合い、慌てて目を逸らした。

先程港で自分を怒ったように睨みつけた男だ。

何故睨まれたのか分からないけど、拘らない方が良さそうだな。

だが、男は急に立ち上がると大股にカウンターに近付いて来た。

「おい、ビールをもう一杯くれ」

亭主にそう言った男を横目でそっと窺う。

男はエヴァに背を向けるようにして、カウンターに寄りかかっている。

まあ、何て大きな人なんだろう。

お父さんの部屋にある箆笥よりも大きいわ。

エヴァはクスツと笑った。

こんなに大きな男と結婚する女の人は、家が狭くなって大変ね。

「何が可笑的い？」

不機嫌そうな低い声が頭の上から降ってきて、エヴァは驚いて声の主を見上げた。

冷たい瞳で自分を見下ろしている男に臆さず答える。

「背の高い人と思っただけよ。別に貴方のことを馬鹿にした訳じゃないわ。さつきも」

男はふんと鼻を鳴らすと、亭主が差し出したジョッキを掲げてビールを一気に飲み干した。

そして袖で口を拭くと、エヴァの方を見ずにぶっきらぼうに尋ねた。

「おまえの家はどこだ？」

まあ、仕事だわ！！！

エヴァは目を輝かせた。

「ティアベの下町です。ご案内しましょうか？」

急ぎ込んで答えたエヴァを嫌そうに見た男は、吐き捨てるように言
った。

「随分と商売熱心だな」

褒め言葉なのかしら？

怖そうな人だけど、この仕事を逃す訳にはいかないわ。

顔を顰めているのは、こんな雪の日にわざわざ家まで来たくないか
らよね。

素早く考えたエヴァは男を見上げて言った。

「私でよかつたらとても安く、すぐ近くでできますわ。行きましょ
う！」

急いでシヨールを被り、籠を手にしてカウンターの内の夫婦に声を
かける。

「ご馳走様でした！」

「エヴァちゃん、お客かい？ 良かったね！」

エヴァが嬉しそうに笑いながら二人に礼を言って扉に向かうと、後
から男もついて来た。

「おい、待てよ」

ずんずん歩いていくエヴァの後ろから男が声をかけた。

エヴァは訝しげに振り返る。

「おまえ、いつもこんなことしてんのか？」

「ええ。お父さんが病気になってからは」

そう答えた少女に男は何も言わなかったが、少しばかり表情が和らいだように見えた。

露店に着き、エヴァは戸を開けると男に言った。

「どうぞ。狭いけど外にいるよりは暖かいと思つわ」

普通に立つと頭をぶつけてしまう為、男は屈んで小屋に入った。

窓を閉めたままだと小屋の中は真っ暗だったので、エヴァは鯨油のランプに火を点した。

「こんな所で客を取っているのか？」

エヴァが勧めた椅子に腰を下ろした男は、泥で汚れた床を見て顔を顰めながら尋ねる。

「ええ」

男に背を向けしゃがんで籠から商売道具を取り出しながらエヴァは頷いた。

「凍え死んじまうぞ」

「だから早くしましょうよ。どうぞー」

椅子が1脚しかないので、立ったまま前屈みになり机に肘をついたエヴァの腰の辺りを男は何とも言えない顔で眺めた。

死の恐怖に負けて軽はずみな誓いを立ててしまったアルテュスは、嵐が治まった後、激しく後悔したが後の祭りだった。

自分の弱さを呪い、余計な入れ知恵をした航海士に当り散らした。

だがアレンはけろっとした顔で答えたのだった。

「船長よりも私の方がよっぽど犠牲を払っていますよ。何たって一生サイコロに触れないと誓ってしまったのだから」

「俺だってどこの馬の骨とも知れない女に一生縛られちまうんだぞ
！！」

両手で頭を抱えながら絶望的に叫んだアルテュスに、アレンは鼻でせせら笑った。

「比べ物になりませんよ。船長は女に家と金を与えて、数年に一度家に戻って夫の義務を果たせば良いだけじゃないですか。それに初めに会う女は若くて凄いい別嬪かも知れないし」

誓いを守らないという選択肢は考えても見なかった。

そんなことをしたら、これから先どんな不幸が『ラ・ソリテア号』とその乗組員を襲っても、誓いを破った船長の所為にされてしまうだろう。

嵐の後、急に気温が下り、陸に近付くと雪が降り出した。

やっとティアベの港が見えてきた時には、九死に一生を得た男達はホッと胸を撫で下ろし、ソワソワと落ち着きがなくなった。

皆早く岸に上がり、美味しい酒を飲みむつちりとした女の胸に顔を埋めて、自分達が生きていることを確認したかったのだ。

作業を指図する為、甲板に出たアルテュスは厳しい眼差しで近付いてくる陸を見つめていた。

帆船が港の入り口にある二つの塔の間を通った時、灰色の景色の中で鮮やかな花のようなものが目の隅に映り注意を引かれた。

それは赤い服を着た女だった。

崖から身を乗り出して船をじっと見つめている。

髪を隠しているが、まだ若く整った目鼻立ちをしているように見えた。

では、あの女を妻にしなければならぬのだな。

アルテュスは苦い気持ちでそう思った。

その時、アルテュスと女の目が合い、女はアルテュスをジロジロと無遠慮に見つめた後、親しげに頷いて愛想笑いを浮かべたのだった。

何だ商売女か。

アルテュスは顔を顰めて女に背を向けた。

娼婦を妻にしなけりやならない羽目に落ちるとは、俺はよっぽど呪われていたのだろう。

嵐でかなりの被害を受けた『ラ・ソリテア号』は修理が必要だった。乗組員に給与を支払い上陸を許した後、アルテュスは二人の航海士と共に海事当局に船を登録しに向かった。

その足で港の修理作業場に行き、帆船の修理代の見積もりを頼む。

どうやら建設中の船はないようで、以外と早く修理ができそうな話だったので、アルテュスは安堵した。

何ヶ月も足止めを食うのかと心配していたのだ。

その後、教会に寄り、主任司祭に会って嵐の海に落ちた水夫の為にミサを頼むと、やっと三人は宿屋に向かった。

アルテュスは、親友のマテオ・ダヴォグ ルに手紙を書き、運よく彼が屋敷に戻っていれば馬を借りて会いに行くつもりだったので、先に行った『髭の三日月』に宿駅に宿を取ってもらおうように言っている。

宿駅は小さな港町にしては、結構立派な建物だった。

案内の者の後についてギシギシと軋む磨り減った階段を上がり、やっと暖かい部屋に入ったアルテュスは随分久し振りに風呂に入った。

垢と塩でごわごわになった服を着替えて髭を当たり、さっぱりしたアルテュスは食堂に下りて行った。

既に席に着いていた数人の部下達の隣にどっかりと腰を下ろし、寛いでビールで喉を潤していると、入り口の扉が開いた。

急に冷たい空気が吹き込み、赤いシヨールに包まった女が入ってきた。

隣に座っているアレンに脇腹を肘で突かれ、顔を上げたアルテュスは、先刻の女を見とめると心底嫌そうな顔をした。

客を漁りに来たのかよ。

初めは女を無視しようとしたのだ。

しかし、自分の妻になる筈の女が他の男を客に取るのは我慢ができず、気が付くと立ち上がり女の方に歩み寄っていた。

どう声をかけるべきかと考えながら亭主にビールを注文すると、後ろでクスクス笑う声が聞こえた。

「何が可笑しい？」

振り返り、思わずきつい口調で尋ねていた。

女は澄んだ青い瞳でアルテュスを見上げてきた。

傍で見ると、まだ少女と言ってもいいあどけない感じの娘だった。

「背の高い人と思っただけよ。別に貴方のことを馬鹿にした訳じゃないわ。さつきも」

少女は少しの媚も窺えない率直な口調でそう答えた。

こんなに純情そうな顔をして、生娘らしい格好をしている癖に娼婦なんだから？

だから、女は一切信用できないんだ。

アルテュスは一気にビールを飲み干した。

さっさと片付けてしまおう。

運よく俺は女を娼館から貰い受けるのには慣れている。

「おまえの家はどこだ？」

そう尋ねると途端に女の顔がパツと明るくなった。

「ティアベの下町です。ご案内しましょうか？」

まるで飛び付かんばかりじゃないか。

客と見ればどんな男でもこうやって誘うのだろう。

嫌な気持ちになったアルテュスは、そっぽを向いて吐き捨てるよう

に言った。

「随分と商売熱心だな」

返事がないので女の方を横目で窺うと、真面目な顔で何やら考え込んでいる。

そして、大きく頷くとアルテュスを見上げ、熱心に言った。

「私でよかつたらとても安く、すぐ近くでできますわ。行きまじょう！」

アルテュスの答えも聞かずに女はシヨールを被ると、テーブルの上に置いていた籠を手を取った。

「ご馳走様でした！」

扉に向かいながら女が宿駅の主人夫婦に声をかけると、亭主がアルテュスを見てニヤニヤしながら言った。

「エヴァちゃん、お客かい？ 良かったね！」

亭主を睨みつけ、釘に引つ掛けてあつた外套を掴むと、アルテュスは女の後に続いて外に出た。

外は既に薄暗く深々と雪が降っている。

まるで走るようにずんずん先に歩いていく女に声をかける。

「おい、待てよ」

女は立ち止まり、アルテュスが追いつくのを待っている。

「おまえ、いつもこんなことしてんのか？」

「ええ。お父さんが病気になってからは」

親が病気なのか。

アルテュスは女の後姿を見ながら考えた。

薬を買う為に仕方なく、という訳か。

多分、生きていくのに必死なんだな。

そう思うと最初はあんなに腹が立った女がいじらしくなってくる。

女は教会脇の道をどんどん進み、ある小屋の前で立ち止まり戸を開けるとアルテュスに言った。

「どうぞ。狭いけど外にいるよりは暖かいと思うわ」

天井に頭をぶつけそうになったアルテュスは、用心深く屈んで小屋に入った。

中は真っ暗で湿っぽい匂いがして、外にいるのと変わらない程寒かつ

た。

女が鯨油のランプに火を点した。

勧められた椅子に腰を下ろし、壁にゆらゆらと揺れる女の影を見ながら尋ねる。

「こんな所で客を取っているのか？」

こんな泥だらけの床に横になるのか？

こりゃ、いくら安くても客は嫌がるだろ？

「ええ」

女は準備でもしているのかアルテュスに背を向けてしゃがみこんでいる。

「凍え死んじまうぞ」

立ち上がった女は、アルテュスの方に尻を突き出すような格好で上半身を屈めると、急かすように言った。

「だから早くしましよつよ。どうぞー！」

これは、服を捲り上げて後ろからやれと言っことか？

俺達の身長差では無理だろ？

それに、この狭い小屋の中では俺は立つこともできないだろうが。

こりゃ座ったまま膝の上に乗っけてやるしかないな。

そう思ったアルテュスは女の尻に手を伸ばしかけたが、その時、急に女が体を起こして振り向いたので手を引っ込めた。

「金額をお伝えしていなかったわね」

「ああ。そうだな」

「紙一枚だったら2ゾルです」

紙一枚って何のことだ？

アルテュスは眉間に皺を寄せる。

2ゾルって言ったら、港町の娼婦より高いだろ？

こんな場所で、こんなちっこいガキみたいな女に2ゾルも出す物好きがいるのか？

それとも、よっぽど凄い性技を持っているのだろうか？

そして、女が手に持っている物に気がついた。

何だ、鳥の羽か？

俺は道具を使ったりするのはあんまり好みじゃないぞ。

そう思いながらアルテュスは尋ねた。

「そんなもんで何するつもりだ？」

エヴァは手にした驚ペンを振って不安そうな顔になった。

「書いて欲しいのは手紙じゃないんですか？」

難しい契約書なんかだったらお父さんじゃないと分からない。

男はゆっくりと確かめるように言った。

「おまえの仕事って……」

「父はティアベの代書人なんです。私は見習いって言うか、お父さんの仕事を時々手伝っていて」

男が出し抜けに大声で笑い出したので、エヴァはギョツとして後退した。

何で笑うの？

もしかしてこの人、ちょっと頭がおかしいのかしら？

男は椅子の背に反っくり返り、小屋の低い天井を見上げ吼えるような声で笑い続けている。

薄暗く狭い場所に知らない男と二人きりなのに気付き、エヴァは急に恐ろしくなった。

どうしようっ？

こんな大きな男なら私なんて一捻りだろう。

何故か幼い頃に母に聞かされた御伽噺を思い出してしまう。

子供を頭から食べてしまう人食い鬼の話や、寒い冬の夜に人を噛み殺す狼男の話を。

仕事は諦めてさっさと帰った方が良さそうだ。

この人を刺激しないようにして、早く外に出なくちゃ。

慌てて商売道具を籠に戻すと、ランプを吹き消し、小屋の戸を開けた。

エヴァの後に続いて、やっと笑い止んだ男も出てきた。

そして、愉快そうな顔をして、怯えているエヴァに言った。

「どうやら、とんだ勘違いをしていたようだ。貴方のお父さんの家に案内して欲しい。手紙も書いてもらいたいし、お父さんに話がある」

急に丁寧な口調になった男を見上げて、エヴァはホツとした。

気が狂っている訳ではなさそうだ。

どんな勘違いだったのか知らないけど、仕事はちゃんともらえるよ
うだわ。

手が悴んだエヴァに代わって小屋の鍵を閉めながら男が言った。

「俺はアルテュス・ド・タレンフォレスト、あの帆船の船長だ。数日前に嵐に遭遇したお陰である有様だ」

「船長さんですか。でもあれ軍艦じゃないですよね？」

「ああ、あれは私掠船だ」

アルテュスの言葉にエヴァは目を輝かす。

「じゃあ、新世界に行かれたことがあるのですか？」

その様子に男は笑った。

「いや、俺の縄張りにはラテディム海とその近辺だ。ラテディム海に獲物がいなくなったので、最近タルヘブ海峡から西に出てきたのだが」

エヴァはとても興味を引かれたようで、男が今まで行った国や、海上の生活のことを色々と尋ねてきた。

アルテュスがエヴァの質問に答えているうちに二人は宿駅に着いた。

アルテュスは扉の前で立ち止まり少女を見下ろして尋ねた。

「そつえば、まだ名前を聞いていなかったな」

少女はにっこりした。

「エヴァです。父は代書人のゴンヴァルと呼ばれています」

エヴァだと？

アルテュスは苦笑いをした。

では我が花嫁は禁断の果実を男に勧め、原罪を犯した女と言う訳か。

アルテュスは宿駅の扉を開くと、エヴァに中に入るように促した。

「ちよつとここで待っていてくれないか？ 部下にこれから貴方の家に行くことを伝えてくる」

二人が一緒に入ってくるのを見ていた船乗り達は、肘で小突き合つて歯をむき出してニヤニヤしていた。

アルテュスは腹が立ったが、エヴァのしている前で彼らに怒鳴り散らすこともできず、硬い口調で代書人の家に行くこと、帰りは多分遅くなることを告げた。

扉の方に戻ろうとしたアルテュスに、こんな場所でも相棒のしやもじを放さない『悪酔いブイヨン』が呼びかけた。

「ちよいと待った、船長！」

『悪酔いブイヨン』に耳打ちされた台所の小僧が素早くテーブルの上に立ち、水夫の差し出したナイフで梁から吊り下がっている大きなハムの紐を切った。

小僧からハムを片手で受け取った料理人は、いきなりそれを船長に向かつて投げつけた。

どつしりとしたハムを危ういところで受け止めたアルテュスは怒鳴った。

「おい、これは何だ!!」

「婚約祝いです!!!」

満面の笑顔を浮かべた船乗り達が一斉に答える。

「花嫁さんによろしく!!!」

アルテュスは顔を顰め、不思議そうな顔をしているエヴァの所に戻って来た。

「酔っ払いの戯言に付き合ってはられない。行こう」

外は既に真っ暗だった。

雪の積もった地面だけがぼんやりと白く浮き上がって見える。

布巾で包んだハムを肩に背負い、片手にカンテラを持ったアルテュスは雪の道をエヴァと一緒に歩いて行く。

少女は男の歩調に合わせようと一生懸命だ。

だが、背の低いエヴァでは大男と同じ速度で歩ける訳もなく、木靴を雪に取られ転びそうになった。

エヴァが立ち止まって膝についた雪を掃い息を継いでいると、先に進んでいたアルテュスが振り返った。

「どうした？ 足が痛いのか？」

「大丈夫です」

エヴァの所に戻って来たアルテュスは、頬を火照らせ息を弾ませている少女を見下ろして言った。

「早く歩き過ぎたな。その籠を寄こしなさい。貴方がカンテラを持って前に行ったらいい」

エヴァはホツとした顔をする。

「ありがとうございます」

ゆらゆらと揺れるカンテラで道を照らしながら、エヴァは思った。

ぶっきらぼうで怖い顔しているけど、悪い人じゃなさそうね。

後ろで男の長靴が雪を軋ませる音が聞こえる。

木々に遮られ既に港の明かりは見えない。

港町から帰る時、この場所は人家も少なく、エヴァは暗くなってか

らここを通るのが少しばかり怖かった。

だけど、今日は安心して歩けるわ。

この大きな船長さんを襲う命知らずな人などいないだろうから。

お客を連れて帰ったら、この一週間仕事がなかったお父さんは喜ぶだろう。

両脇に古びた建物の並んだ細い道を進んでいた二人は、ある小さな家の前で立ち止まった。

少女は玄関の扉を開くと、アルテュスの方を向いて言った。

「どつぞー！」

そして、アルテュスの後から家に入りながら呼びかける。

「お父さん、今帰りました」

答えはない。

「眠ってしまったのかしら？」

アルテュスは案内された台所の小さなテーブルにエヴァの籠を置き、肩のハムを下ろした。

エヴァは男の外套を受け取り、自分のショールと一緒に暖炉脇の釘

にかけた。

それから、木靴を脱ぐと、アルテユスの足元を見て言った。

「長靴も乾かしましょうか？」

「いや、大丈夫だ」

父親の様子を見に行ってきた少女は申し訳なさそうに言った。

「眠ってしまっています。こここの所、夜は体が痛くて睡眠不足だそうなので、もう少しだけ眠らせてあげていいですか？」

「ああ、構わない」

「食事を準備したら起こしに行きます。大したものはないですけど、どうぞ私達と一緒に夕食を食べてみてください」

そう言ったエヴァにアルテユスは頷いた。

エヴァは屈み込み、暖炉の火を起こしている。

大きな暖炉の中には両脇に座れるようにベンチが備え付けてあり、火の上には鉄鍋が吊り下げられていた。

アルテユスは片方のベンチに座り、赤々とした火に照らし出される部屋を物珍しそうに眺めている。

部屋の隅には細かい彫刻を施した黒い木の棚が置かれていた。

よく磨かれた木のテーブルでは普段親子が食事をしているのだろう。端の引き出しには、半分程になった大きな丸い黒パンが挟まっている。

質素だがきちんと片付いた台所だった。

エヴァは棚から出した皿にマリヴオンにもらった菓子を並べ、水を張った深皿からバターの塊を取り出すと小皿に乗せる。

そして、水差しからビールを素焼きのコップに注ぐと、アルテュスに勧めた。

暫くすると鉄鍋から沸々と音がして、スープの匂いが漂ってきた。

少女がくるくると働いている様を、黙って感心したように眺めていたアルテュスが口を開いた。

「ハムを切ろうか？」

エヴァは目を丸くする。

「えっ、でも、食べてしまっているのですか？」

「ああ。その為に持って来たのだから」

アルテュスは可笑しくなった。

こんな重い物を何の為にここまで担いで来たのだと思っていたのだらう？

少女はアルテュスが薄く切って皿に並べたハムを嬉しそうに見ている。

そして、沢山食べ物に乗ったテーブルを見て手を叩いた。

「今夜はご馳走ね！」

その様子を見ながらアルテュスは考えていた。

俺は運が悪いとは言えないな。

女としてではないが、この娘は中々気に入った。

それにしても、さっきは手を出したりしなくて良かったぞ。

さて、どうやって結婚の話を切り出したものか？

父親が起きるのを待った方が良いのか、それとも娘にそれとなく匂わせた方がいいたらうか？

夕食の後、ゴンヴァルは客を書斎としている自分の部屋に案内した。部屋の奥にある小さな暖炉には火が赤々と燃え、二人の影を壁と天井に映し出している。

扉側の壁には一面に本棚があり、書物がびっしりと並んでいた。

反対側の壁には木の戸がついた小さなベッドが嵌めこまれている。

ベッドの横には天井まで届く程の大きな戸棚があった。

ゴンヴァルは暖炉の左側にある机に向かって、杖を突きながらゆっくりと歩いて行く。

やっと暖かそうな毛糸のクッションが詰まれた椅子に腰掛けた代書人は、机の上に紙を広げ鷲ペンを手に取った。

そして、前に座ったアルテュスをじっと見るとおもむろに口を開いた。

「先程からお話を伺っていると、どうやらちゃんとした教育を受けた方と思えます。手紙などご自分で書けるのではないですか？ 手紙は口実でしょう？」

不意打ちを食らったアルテュスは慌てて答えた。

「いや、手紙を書いてもらいたいのは事実だ。貴方に話があるのも

本当だが」

代書人は静かな眼差しでアルテユスを見ると言った。

「では、先にお話を伺いましょう」

そのように促されて男は、仕方なく小さな溜息を吐くと話し出した。

「なんですと?!?!」

正面に座った小柄な男に娘そっくりの青い瞳で見つめられ、アルテユスは居心地悪そうに硬い椅子の上で身動きした。

まるで悪戯を叱られているガキのようじゃないかと苦々しく思いながら、意図せずとも硬くなってしまつ口調で今言ったことを繰り返した。

「お聞きになった通りだ。ゴンヴァル殿のお嬢さんを頂きたい」

「……それは、どういう意味でしょうか？」

ゴンヴァルは心底驚愕した顔で恐る恐る尋ねる。

まさか手紙を書いてもらいに来た男の話がこんな内容だとは、思っ
てもいなかったのだろう。

「お許し頂けるなら、妻に迎えたいと思っている」

「……私の娘を前からご存知で？」

「いや、今日初めて会ったのだが……」

眉を顰めて黙り込んでしまった父親を見ながら、アルテュスは説明を試みる。

「急に見も知らぬ男にこんなことを言われて、さぞ驚かれたことと思う。だが、ある事情でこの町で始めて会った女性を妻にするという誓いを立ててしまったのだ」

「何もうちの娘ではなくても、貴方の申し込みを喜んで受ける女性は大勢いるのではないですか？」

「入港して初めて見たのが貴方の娘だったのだ」

ゴンヴァルは、アルテュスをジロジロと観察しながら口を開いた。

「そんなことを急に言われても、はいそうですかと娘を差し出す訳にはいきません」

「私は私掠船の船長として家族を養える位の金は稼いでいる。妻には生活に不自由しないだけの金を与え、一生大事にすると誓う」

「船乗りは浮気性と聞きます。貴方がそうか知らないが、私はあの子を不幸にしたくない」

「他の者のことは知らない。だが私は妻が誠実である限り、絶対に悲しませるようなことはしないと約束する」

アルテュスはゴンヴァルの方に身を乗り出すと熱心に言った。

「初めに会う女性がどんな人かと不安だった。それが貴方のお嬢さんで、自分はとても幸運だと思っている」

物思いに沈んでいたゴンヴァルは、やっと顔を上げアルテュスを真っ直ぐ見ると言った。

「どちらにしても、エヴァはまだ若過ぎる」

「確かに小柄だと思ったが、歳は幾つなのか？」

「夏の終わりに15歳になりました」

「では、結婚は1年後ということで、約束だけでもしてもらえないだろうか？」

父親は溜息を吐いた。

「1年後に貴方の考えが変わっていなかったら、この話を受けるかどうかお答えするということにしてください」

アルテュスは急ぎ込んで言った。

「私の考えは絶対に変わらない。1年後も10年後も」

そして、立ち上がり懐から財布を取り出すと、机の上に置いた。

「これを納めて欲しい。金貨200枚が入っている」

ゴンヴァルは頭を振ると、重たい財布を押しやった。

「受け取れません。娘は売り物ではない」

アルテユスはもう一度ゴンヴァルの方に財布を差し出すと言った。

「そんなことは思ってもみなかった。この金でお嬢さんに教育を受けさせて欲しい」

「しかし貴方にそのようなことをしてもらおう義理は……」

「私はこれを投資と考えている。1年後に貴方が反対しても、無理矢理結婚しようなどとは思っていないから、安心して欲しい。そうしたらまた2年後に同じ願いを繰り返すだけだ」

そう言ってアルテユスはニヤリとした。

その時、軽くノックの音がして、台所を片付けていたエヴァが扉の隙間から顔を出した。

二人の男は口を噤むと、少女が差し出した熱い酒の入ったコップを受け取った。

部屋を出て行こうとしたエヴァにゴンヴァルが声をかける。

「エヴァ、ちょっとこっちに来て座りなさい」

難しそうな顔をした父親を驚いたように見ると、少女は足元の小さな椅子に腰掛けて前掛けの皺を手で伸ばした。

その問いかけるような眼差しを暫く避けていたゴンヴァルは、咳払いをするとやっと娘を見て口を開いた。

「……エヴァ、実はこのお方がおまえを妻に欲しいと仰っているのだが」

エヴァは余程びっくりしたようで、目と口をぽかんと開けたまま固まっている。

それから夢から醒めたような顔をして、ゴンヴァルとアルテユスの顔を順番に見て呟いた。

「船長さんが？ 私を？ ……やっぱり頭がおかしいのかしら？」

澄んだ瞳に見つめられアルテユスは苦笑いをした。

「狂ってはいないぞ。真面目に貴方と結婚したいと思っている」

「でも、どうして……」

ゴンヴァルが遮った。

「1年後に彼の考えが変わっていなければ、考えてみてもいいと答えた」

「絶対に変わらないと誓う」

代書人はそう答えた男を冷たい目で見ると言った。

「貴方はそんなに簡単にあれこれ誓うことを止めた方が良いでしょう」

それからエヴァの方を向いて言った。

「おまえを学校にやって欲しいと言われている」

エヴァはパツと目を輝かせたが、直ぐに真面目な顔になる。

「お父さんを一人にはできません」

アルテュスが机の上の財布を指して言った。

「この金で誰か面倒を見てくれる者を雇えないだろうか？」

「私は寝たきりではないので、通いで家事をしてくれる人はすぐ見つかると思いますが」

「でも、お父さん……」

「おまえはこの町から一步も外に出たことがない。私がもつと元気だったら一緒に旅をすることもできただろうが。私が教えられることは教えてきたつもりだが、この機会に外の世界を見に行くのはとても良いことだと思う」

「だけど……」

ゴンヴァルはアルテュスを見て言った。

「学校と言ったら修道院ですかね？」

「修道院ならトリポルトにあるだろう。だが修道院に入ってしまったら外の世界など見ることはできないのではないか？」

「今更、刺繍などを習ったって面白くないかも知れませんが。でも女が行く学校と言ったら修道院しかないでしょう？」

エヴァは思わず立ち上がっていた。

「あの、……」

二人の男が少女を見た。

「私、修道院ではなくて兵学校に行きたいのですけど」

「何だと?!?!」

ゴンヴァルはとんでもないと言うように叫んだが、アルテュスは少女を面白そうに見た。

「女の身で兵学校に入るのは無理だろう。男装でもするつもりか？」

「ええ。駄目かしら？」

「エヴァ、何を言い出すんだ？ 駄目に決まっているだろう?!?!」

「何故、兵学校などに行きたいのだ？」

「お父さんと自分の身を護れるぐらい強くなりたいの。それから馬に乗りたいわ」

アルテュスはぴったりとした頭巾に包まれたエヴァの優しい顔を見ながら考えた。

まだ髭も生えていない少年と言ったら通用するのではないか。

歳を偽って入学することはできるかも知れぬ。

その時、よい考えが頭に浮かびアルテュスは両手を打ち合わせた。

数日後、アルテュスは『ラ・ソリテア号』の見習い水夫を連れてゴンヴァルの家に向かった。

リュカはまだ13歳だが、はしっこくてよく気が利くので、船乗り達にも重宝されている。

幼い頃に両親を亡くし、伯父の家に引き取られたが、子沢山の伯父と伯母にこれ以上迷惑をかけたくないと行って家を出た冒険好きな少年だ。

1年間のある日、海に憧れて田舎からティミリアまで一人で馬車を乗り継いでやってきたのだった。

港で雇ってくれる船を捜してうろつろしていた所を運よくメレーヌの目に留まり、『麗しのマリルー号』の見習い水夫となった。

「……でも、船長。こんな朝っぱらから一体どこに行くのですか？」

リュカが息を弾ませながら、前を歩くアルテュスに尋ねる。

「おまえじゃなけりや務まらない任務だ」

そっけない返事に少年は想像を膨らます。

普段は船長に直接話しかけられるようなことは滅多にない。

まして特別な任務を命じられるようなことも。

リユカは、溺れ死んでしまったもう一人の見習い水夫を思い浮かべた。

トマズの魂が安らかに眠れますように！

『ラ・ソリテア号』の周りをうろついて、船を海底に誘き寄せたりしませんように！！！！

あまり親しくはなかったが、ずっと一緒に暮らしていた仲間が死んでしまうのはかなりショックだった。

リユカは噂話の好きなトマズから船長が貴族出身であることを聞いていたのだ。

もしかして、王様の宮殿に密使として送り込まれるのかも知れない。

船乗りになることと共に、いつかは宮廷に出入りすることがリユカの夢だった。

この任務を果たせば、思ったよりも早く出世できるかも知れないぞ！

少年は自分の前を歩く大きな背中を見上げながら、夢見るような笑顔になった。

雪が凍ってザクザクと音を立てる道を歩きながら、アルテュスは昨夜、帰り際にエヴァの父親に言われたことを思い出していた。

ゴンヴァルは立ち上がったアルテュスを近寄るようと手招くと、娘に聞かれない様に低い声で言ったのだった。

「貴方が本当にエヴァと結婚するつもりなら、その誓いの話はあの子には言わないと約束して欲しい」

アルテュスが問いかけるように代書人の顔を窺うと、ゴンヴァルは頭を振って寂しい笑いを漏らした。

「優しくされたら、あの子は幾許もしないうちに貴方に恋してしまおうでしょう。このような話はすぐに断るべきだったのかも知れないだが、私がいなくなったら、エヴァはどうなってしまうのだろうといつも不安でした。だから、もし貴方が本当にあの子を幸せにくれるのなら、私も肩の荷を下ろすことができます」

アルテュスは絶対にエヴァを幸せにすることをその父親に堅く約束したのだった。

本当に幸せになるかどうかは分からないがな。

アルテュスはもう一人の女を思い出してしまい、苦々しい気持ちになる。

女の気持ちほど不確かなものはないのだから。

とにかく何不自由のない暮らしだけは保障するぞ。

エヴァの元気な笑顔や、正直そうな眼差し、はきはきとした物言いは好ましいと思ったし、病気の父親を助けて働く健気な娘をいじらしいとも思った。

澄んだ青い瞳も、薔薇色の頬も、可愛らしい唇も愛しく思える。

だが、それはエヴァを女として見ていないからではないのか？

自分は子猫や子犬を見るような目であの娘を見ているのではないか？

質素な身なりの所為もあって、そのほつそりとした姿とぴったりとした胴着に包まれた慎ましい胸は、男の欲情を誘うことはなかった。

エヴァが兵学校に行きたいなどと突飛なことを言い出した時、アルテュスはそのことをゴンヴァルほど驚かなかった。

港から家までの道でエヴァはアルテュスに様々な質問をした。

特にアルテュスの持っている武器について詳しく聞きたがった。

不思議に思ったアルテュスが訳を尋ねると、エヴァは真面目な顔をして答えたのだった。

「父は職業も宗教も関係なく頼まれた仕事を引き受けています。テイアベは今のところ安全に見えるけど、戦は終わっていないのです。父のお客様からそのような話を聞きました。その方は父が安易に仕事を引き受けていると、いつか危険な目に遭うだろうと言っていました。でも父はそれが自分の仕事だからと言って、止めようとしません。だから、万が一、父を襲おうとするような者がいたら、護ってあげることができないかと思って」

「確かに南部では頻繁に小規模の争いや虐殺が起こっているらしいが。この地方もいずれ巻き込まれてしまうのか、それは俺にも分からない。だが武器を持った兵に抵抗しようとしても無駄ではないのか？」

「では、家畜のように黙って殺されると？」

アルテュスは顔を赤くして叫んだ少女を宥めるように言った。

「銃を一丁貸してやっても良い。撃ち方も教えよう。気休めにしかならないと思うがな」

エヴァは頷くと、ホッと溜息を吐いた。

「元は同じ神を信じているのに、何故、殺し合ったりするのでしょうね？」

「それは、この戦が宗教だけが原因ではなく、貴族達の党派争いであると共に、隣国との争いにも関係しているからだ」

「王様には止められないの？」

アルテュスは口を開きかけたが、余計なことは話すまいとでも言うように黙ったまま頭を振った。

部屋から出て来たエヴァを見たアルテュスは愉快そうに笑い声を上げた。

「まるで兄弟のようだぞ」

少女はリュカの一張羅のシャツと上着を身に着けていた。

髪は服の中に隠し、黒い布の帽子を被っている。

帽子だけは父親の物だった。

リュカの隣に立つと丁度同じぐらいの背丈で、大きな青い目がそっくりで、アルテウスが感心したみたいに兄弟のようだった。

リュカは驚いた顔をして、ちらちらと隣の少年を見ると、問いかけるようにアルテウスを見上げた。

暖炉の前の椅子に座ったゴンヴァルは、二人の少年を見ながら複雑な顔をしている。

「やはり、エヴァ……」

「今日から貴方の名はエヴァン・ド・タレンフォレストだ」

アルテウスはゴンヴァルを安心させるように言った。

「トリポルトの陸軍兵学校には、私の親友のマテオ・ダヴォグールが教官として勤めている。明日、私はトリポルトに行つて、彼にエヴァンのことを頼み、入学手続きを済ませて来る」

「でも、もしばれたら……」

「入学手続きはリュカに行つてもらおう。そうすれば、身体検査で引

つかかるということもなかるう」

リュカは何やら秘密の匂いがする話に耳を敬てている。

「リュカ」

「はい！」

「聞いたとおりだ。明日はおまえはエヴァンの代わりに俺と兵学校に向かう。へまはするなよ」

「はい！！」

リュカは興奮して踊り出しそうに見えた。

これは、大役だぞ！！

大人しく立っている少年は、船長の言っているように、船長の親戚ではないだろう。

リュカはエヴァをしげしげと見ながら考える。

随分、育ちの良さそうな……

まるで女のように見えなくもないぞ。

誰か有力な貴族の子息だろうか？

まさか、……王族っていうことはないよな。

とにかく、これは見習い水夫リユカの出世への第一歩だ!!!

数日後、代書人の家に戻ったアルテユスは、エヴァン・ド・タレン
フォレストが、無事トリポルト陸軍兵学校の生徒となったことを告
げた。

「年が明けたら、学校に連れて行こう」

ゴンヴァルはまだ迷っているような顔をしていたが、エヴァが嬉し
そうに目を輝かすのを見ると、仕方がないという風に頭を振った。

「船長殿、娘をよろしく頼みます」

そう言って頭を下げたゴンヴァルにアルテユスは頷いた。

台所に引っ込んだエヴァが暫くすると男達を呼びに来た。

「お食事の支度ができました。お父さん、船長さんが色々持って来
てくださったので、今夜はご馳走よ」

男達が席に着くと、少女は木の器に肉の塊がごろごろ入ったシチュ
ーを注いだ。

いつもの水のようなキャベツと蕪のスープとは豪い違いだ。

厚めに切られた白パンはふわふわととても美味しそうだった。

育ち盛りの子供のような食欲を見せるエヴァを面白そうに見ていた

アルテュスは思った。

こりゃ、気持ちのいい程の食欲だな。

元気の良い娘だ。

働き者だし、料理の腕も確かだ。

それに見た目も大層可愛らしい。

この娘を妻にする男は幸福者だと言われるのだろうな。

俺はもう誰も愛さないと誓ったが、恋愛感情がなくてもこの娘を大事にしてやりたいと思う。

食事が終わり、帰る為に立ち上がったアルテュスを見送りにエヴァは一緒に玄関に向かった。

扉を開けると、冷えた空気が家の中に入ってきたが、エヴァはシヨールにしっかりと包まってアルテュスの後から外に出た。

「まあ、綺麗な三日月！」

珍しく晴れた空には漉したクリームのような色の三日月が浮かんでいる。

「今度、会う時は男の姿だな」

アルテュスは月明かりに白く浮かび上がる少女の顔を見下ろして言った。

少女の青い瞳はこの明かりの中では暗く深い海を思わせたが、月の光が反射してキラキラと輝いて見える。

「ええ。わくわくするわ」

アルテュスはそう言って笑ったエヴァを思わず引き寄せていた。

「まだ、貴方のお父さんに許された訳ではないが」

きよとんとした少女をまるで猫のようだと思いながら、アルテュスは屈み込むとそつと唇に接吻を落とした。

エヴァの唇は柔らかく瑞々しく弾力があり、自分の胸の中に欲望の炎がちらと点つたのを感じたアルテュスは慌てて娘を放した。

「風邪をひく。家に入りなさい」

「……」

顔を真っ赤に染めて目を潤ませたエヴァは、男の方を見ずに小さく頷くと急いで家に入った。

アルテュスは、閉じられた扉を見つめ溜息を吐いた。

それから、肩を竦め家に背を向けると凍った道を港に向かって歩き始めた。

エヴァは扉に寄りかかってしゃがみ込み、火照る頬に震える両手を
当てて、ザクザクと遠ざかる足音に耳を澄ませていた。

男は狭い座席の上で窮屈そうに身動きすると、前に座っている少年の視線を避けて曇った窓を擦り外を覗こうとした。

いや、少年ではない。

少年の格好をした少女である。

寒くないようにと何枚も重ね着をしている所為で、コロコロと太った子供のように見える。

澄んだ大きな青い瞳と寒さで赤くなった頬が、縁に毛皮のついた帽子と襟巻きの間から覗いている。

男は先程から少女が自分の方をチラチラと見ているのに気がついてしたが、知らん振りをしていた。

伸ばした脚が少女の膝に触れそうになり、男は苛立たしそうに舌打ちすると座席を蹴った。

少女はビクツとすると座席の隅に縮こまる。

アルテュスは自分自身に腹を立てていた。

なんでまた、あのような余計なことをしてしまったのだろうか？

あれから、今朝トリポルト行きの馬車に乗るまで、一度だけ代書人の家に行ったが、エヴァは以前のような明るい笑顔を見せなかった

だけではなく、アルテュスの方を見ようともしないで自分の部屋に引っ込んでしまったのだ。

怯えさせてしまったのか？

それとも、嫌われてしまったのだろうか？

まあ、どちらでも構わないが。

アルテュスは肩を聳やかすと、膝に手を置いてじっと俯いているエヴァを皮肉な目付きでじろじろ見た。

どうせ愛などない結婚相手なのだから。

その時、エヴァが顔を上げた。

「あの……」

続きを促すように男が片方の眉を上げると、少女は決心したようなきっぱりとした口調で言った。

「私の為に色々してくださいありがとうございます。ここからは私一人でも行けるので、もし船長さんは用事があるのなら……」

アルテュスの鋭い目付きに、エヴァの声は段々小さくなり、最後の言葉は馬車の立てる騒音に消されてしまう。

「俺と一緒に行くのは迷惑か？」

エヴァは慌てたように手を振った。

「そんなことありません！ ただずっと怒っていらっしやるみたいだったから、私を連れて行くのが面倒なのかなと……」

アルテュスは力を抜いて座席の背にもたれると、いくらか表情を和らげた。

「いや、面倒などとは思っていない」

それから溜息を吐いて、エヴァの方を見ながら口を開いた。

「この間は悪かった。貴方の許可なしに二度と手を出したりしないと誓うから、機嫌を直してくれないか？」

エヴァは薄暗い馬車の中でもそれと分かるほど真っ赤になると、小さく頷き震える右手をアルテュスに差し出した。

自分の手にすっぽりと納まる小さな手を握りながらアルテュスは、ほろ苦い気持ちになった。

俺は軽はずみなことをやって、何か大事なものを壊してしまったのかも知れない。

初めて会った時のような無垢な瞳でこの少女が俺を見ることはもうないだろう。

そして、とアルテュスは照れるような微笑を浮かべたエヴァを見ながら考える。

どうやら余計なものを呼び覚ましてしまったようだ。

媚を含んだと言うには青い瞳は清楚過ぎた。

アルテュスを男として意識し始めた眼差しとでも言えはいいのか。

今までとは違ってアルテュスは、少年の姿をしているにも拘らずエヴァに女を感じたのだ。

だが、この娘の手はまるで子供の手のように温かいぞ。

そう思ったアルテュスは何故かホツとした。

ガラガラと騒がしい音を立てて走る馬車の揺れに身を任せながら、エヴァは安堵していた。

自分が怒っているつもりだったが、それよりも更に怒っているように見える男にどう接していいのか分からなかったのだ。

出会ったその日に結婚を申し込んできたこの大男はエヴァにとって謎であった。

認めたくはなかったが、少しばかり恐れてもいた。

直ぐ近くには御者がいるとは言え、密室に二人きりなのは変らない。

隙を見せないようにしなければと思い、ずっと緊張していた。

だが男は出発してから一度も少女に話しかけなかったし、顔も見た

くなさそうだった。

その態度にエヴァは少しばかり傷ついていた。

だから男が素直に謝ってきた時、すぐに許してやる気になってしまったのだ。

気まずい沈黙を避ける為、アルテュスはこれから向かうトリポルトの町について話し始めた。

ティアベから一歩も出たことのないエヴァにとっては、馬車半日の旅でさえ、世界の果てにでも行くような気分だった。

初めはぎこちなかった少女も、話しているうちに以前のように打ち解けてきた。

「トリポルトに着いたら知り合いの屋敷に向かう。マテオ・ダヴオグールという男で、貴方が行く陸軍兵学校の教官を務めている。俺の兵学校時代の悪友なんだ」

「では、船長さんは陸軍兵学校に行かれたのですか？」

エヴァが首を傾げるとアルテュスは可笑しそうに口を曲げた。

「いや、俺達が行ったのはベガレストの海軍兵学校だ。入学して最初の3年間は船には乗れないんだ。だが、あいつは4年目になっても船に乗れなかったのさ」

「まあ、どうして？」

「酷い船酔いで立ち上がることもできず、航海中ずっと寝たきりで過ごしてたら、水夫は務まらんだろ」

「船に乗ったら病気になってしまっただけのことですか？」

「ああ、普通は徐々に慣れるのだろうが。船酔いしていたのはあいっただけではなかったしな。だが、マテオは、あんな思いは二度と御免だと初めての実習の後、陸に上がると休暇を取って家に帰っちゃまったんだ」

「学校を辞めようとして？」

「海軍兵学校から陸軍兵学校に転校する手続きの為だ。普通はそんなことはできないんだが、あいつは皆を上手く丸め込んでしまったらしい。恐ろしく口が達者な奴だからな」

「商人になれば良かったのにね」

「そうだな。口が減らない生意気な奴だが、信頼できる男だ。困った時は頼りにするといい」

少女は頷くと、男が行った学校について語ってくれるように頼んだ。

エヴァは興味深そうにアルテュスの話を聞いていたが、仲間達とやった数々の悪戯の話は特に彼女を面白がらせた。

腕白小僧達が持ち込んだ兎に驚いた教官が海に飛び込んだ話には、涙を浮かべて笑い転げた。

「何故、兎が怖かったのかしら？ 兎ってとても大人しくて可愛い

わよね？」

袖で涙を拭きながらエヴァが尋ねた。

「兎は麻が好物なんだ。帆船の縄と水漏れを防ぐ為に船板の間に詰める繊維も麻で出来ている。あちこち齧られたら船は沈没しちゃう。だから兎は船乗りには不吉な動物と見られて恐れられているのだ」

エヴァは可笑しそうに笑い声を立てた。

アルテュスのような大男が小さな兎を怖がって震えている様子は、想像するだけでも滑稽だった。

「船長さんも兎が怖いのか？」

「いや、だが俺も自分の船の上には兎を連れて行ったりしないぞ。船乗りの間では兎という言葉も禁句で『耳の長い動物』と呼んでいくようだ」

「では、船長さんが怖いものは一体何かしら？」

青い瞳を悪戯っぽく輝かせてそう尋ねた少女をアルテュスはじっと見つめた。

自分の気持ちを制御できずに、また女に恋しちまうことだろうか？

「さあ？ この前の嵐の時は流石に肝を冷やしたがな」

馬車がトリポルトの城壁を越え、町の外れにあるマテオ・ダヴオグ
ルの屋敷に向かう頃には、辺りは既に真っ暗だった。

少しずつ日は長くなっているのだろうが、まだはつきりと分かるほ
どではない。

屋敷では二人の到着を待っていたようで、馬車が中庭に入ってから行
くと、数人の召使が松明を掲げて走り出て来た。

馬車の扉を開ける前にアルテュスは、窓に踊る松明の明かりでぼん
やりと見えるエヴァの方を向いて言った。

「エヴァ、この馬車を降りたら貴方はエヴァンだぞ」

「はい」

「ばれないように男らしくしろよ」

その声の調子から男が微笑んでいるのに気付いたのか、少女は笑い
ながら答えた。

「分かっています」

アルテュスが扉を開くとエヴァは、手を借りずに男の後から身軽に
飛び降りた。

召使に案内されながら階段の方へ歩いていたアルテュスは、後ろの
エヴァを振り返って白い歯を見せた。

「元気なのは良いが、怪我するなよ」

「お気遣い頂きありがとうございます！」

立ち止まって元気な声でそう答えた少年は、ぴよこんと頭を下げた。
「行くぞ」

その様子に満足そうに目を細めたアルテュスは、屋敷の階段を上がり始めた。

扉の横には松明を掲げた召使が畏まっている。

案内された部屋にはどっしりとしたテーブルがあり、暖炉には赤々と火が燃えていた。

二人が外套を脱いで寛いでいると、いきなり扉が勢い良く開かれ若い男が入って来た。

「アルテュス!!」

「マテオ!!」

エヴァは傍に立って、二人の大男が抱き合って肩を叩き合うの目を丸くして眺めていた。

「……ッ!! 何しやがる!!!」

頬を押さえながらアルテュスが喚くと、マテオはゲラゲラと笑い声を立てる。

「ハツハツハ!!! 許せ。貴様が幽霊じゃないか確かめたんだ」

「幽霊だと？ おい、おまえの目は節穴か？ 俺が血の通った人間に見えないのかよ」

「だけど、ほら、よく聞くじゃないか。海で溺れた船乗りの妻の許に生前と変らぬ姿の夫が現れて……」

「俺はおまえの夫じゃないだろ!!!」

「口が減らない奴だな。俺が女でも貴様のような野蛮人は御免だわ。ラテディム海のオーガ殿」

そう言つて優雅な礼をしたマテオをアルテュスは呆れたように見た。

「どつちが口が減らないんだ。相変わらず騒がしい奴だな」

その時、アルテュスの後ろに立っているエヴァに気付いたマテオが言った。

「そして、これが貴様の秘蔵っ子という訳か」

俺は馬鹿か?!!

アルテユスは馬車を出すように命じると、座席にどっかりと座り込んで頭を抱えた。

あの娘は自分の役を見事に演じていた。

マテオは新入生のエヴァンがまさか女性で、友人が結婚しようとしている相手などは夢にも思っていない様子だった。

なのに、何で俺はあんなことを奴に言っちまったんだ？

別れ際に思わず口走ってしまった自分の言葉を思い出し、アルテユスは乱暴に両手で髪を掻き毟った。

まるで、独占欲丸出しのガキじゃないか!!!

今朝、居間に下りると既に準備を整えたエヴァが、別れの挨拶をする為に近付いて来た。

白い大きな襟のついたシャツに小さなボタンが並ぶぴったりとした紺色の上着を着て、鼠色の膨らんだ半ズボンを穿いている。

リュカの寸法で作らせた兵学校の制服はぴったりで、どこから見ても可愛らしい少年としか見えなかった。

頭には小さな黒い帽子を被っていたが、挨拶する時にそれを取った

ので、アルテュスは初めてエヴァの髪の色を知った。

「船長さん、色々とありがとうございます。時間がある時で良いですから、父のこともお願ひしますね」

エヴァは明るい瞳でアルテュスを見上げて頼んだ。

『ラ・ソリテア号』の修理で足止めを食っている間、アルテュスは時々ゴンヴァルの様子を見に行くことを約束していたのだ。

食事の世話などは、少女がトリポルトの学校に行くことを聞いた近所の者がしてくれることになっている。

「ああ、心配するな。ちゃんと二日置きに様子を見に行つてやるよ」

そう言つて頷いたアルテュスはマテオの方を向いた。

「エヴァンを宜しく頼む」

「安心してマテオ・ダヴオグ ルに任せたまえ。鼻も拭いてやるし、家族が恋しくて泣いてたら子守唄を歌つてやるよ」

二人の傍に来たマテオは、ポンと自分の胸を叩くと、エヴァの肩に手を置いた。

少女は頼もしい教官を見上げると微笑んだ。

アルテュスは眉を顰める。

「この子は利口で正直そうだ。気に入つたよ」

そう言うと少女の耳を軽く引つ張った友人の手をアルテュスは思わず掴んでいた。

「あんまりベタベタ触んな」

マテオはびっくりした顔をすると笑い出した。

「何だ、何だ？　まるで、嫉妬している恋人じゃないか。暫く会わないうちに趣味が変わったか？」

「たわけたことを！」

顔を顰めて二人に背を向けたアルテュスに追い討ちをかけるように、マテオが呼びかけた。

「そう言えば、前に会った時、あんなに熱心に話していた絶世の美女はどうなったんだね？　まるで直ぐにでも結婚するような口振りだったじゃないか」

アルテュスは舌打ちすると、横目でエヴァの方を窺った。

少女が大きな瞳で自分の方を見ているのに気付くと、思わず大声で言っていた。

「あれは結婚するような女じゃなかった。だが、今度は間違いないぞ！！」

「おい、おい。じゃあ、別の女と結婚するのか？　貴様、本当にあの女たらしのアルテュスか？　我が国の港と言う港に恋人がいると

「いう男なのか？」

「人聞きの悪いことを言うな!!!!」

これ以上ここにいたら何を言われるか分からないと焦ったアルテュスは、さっさと暇乞いをするとう友人の屋敷を後にしたのだった。

畜生、マテオの奴!!!!

余計なことを言いやがって。

エヴァはあんなことを聞いてどう思ったのだろうか？

バンとばかり座席を拳で打つ。

そのことが気になる自分にも滅茶苦茶腹が立った。

アルテュスが慌しく屋敷を去った後、エヴァは何事もなかったようにテーブルに着いて食事をしているマテオを眺めていた。

「どうしたんだね、浮かない顔して？ 学校に行くのが不安なのか？」

「いえ。あの、船長さんてそんなにふしだらな男だったんですか？」

そう尋ねた少年をマテオは面白そうに見た。

「ふしだら？ ふふん、潔癖だな。船乗りは海の上では禁欲生活を

強いられているからな。陸に上がると羽目を外す者が多いのだよ。それに男はそういうことを実際よりも大袈裟に自慢したがる奴が多いからな。アルテュスがそうだと言う訳じゃないんだがね。奴の話は同じ船の連中に聞いたのさ。エヴァンももう少し歳を取れば分かるようになるだろうよ」

「でも、そんな男と結婚する女の人は不幸ですよね」

「アルテュスと結婚する女は不幸になるとは限らないぞ。奴はああ見えても女には優しいからな」

首を傾げているエヴァを見ながらマテオは続けた。

「だが、家に戻れるのは数ヶ月とか数年に一度だろうから、まあ浮気はやむを得ないだろうけどな」

学校へ向かう馬車の中、マテオの前に腰掛けたエヴァは難しい顔をして考え込んでいた。

船長さんのお金で兵学校に行くなんて、私は間違ったことをしてしまったのではないかしら？

一年後、申し込みを断ることも出来る。

お父さんも私を不実な男に嫁がせようとはしないだろうし。

でも、お金を返して欲しいと言われたら、困ってしまうわ。

今すぐ、ダヴォグ ル様に謝って、家に帰った方がいいのかも知れない。

エヴァは俯いて唇を噛んだ。

どうしよう？

その時、マテオが窓の外を指差して言った。

「ほら、あれがトリポルトの陸軍兵学校だ」

「……」

ここまで来てしまったら仕方がない。

もう後戻りはできないだろう。

馬車を止め、御者が門番と話している。

やがて、馬車は門を通ると、ガラガラと喧しい音を立てて石畳の道を進んで行った。

窓から外を覗きながらエヴァは思った。

船長さんは悪い人じゃないと思うわ。

そして、頬を染めると小さな溜息を吐いた。

あの時はびっくりしたけれど、ちゃんと謝ってくれたし。

まだ後一年もあるから。

その間に船長さんの考えが変わるかも知れないわよね。

馬車は建物の前広場をぐるりと回ると、入り口の階段の前に横付けになった。

さあ、行きましょう。

エヴァン・ド・タレンフォレストの出番だわ。

エヴァは大きく息を吸い込むと、マテオの後に続いて馬車を降りた。

扉を開けるとムツとした熱気と喧騒が襲ってきた。

アルテュスを目敏く見つけた部下が声をかける。

「おい、船長！！ こっちだ、こっち」

トリポルトから戻ると、その足で港に向かい帆船の様子を見に行つた。

幸いなことにマスト以外に深刻な被害はなく、一月程で修理できそうだった。

船乗り達には別の船で仕事があれば、引き止めはしないことを伝えている。

夜になると港町の酒場は賑やかになる。

酒が入った船乗り達は歌い、騒ぎ、自慢話や、猥談や怪談に花を咲かせる。

やがて派手な格好をした女に続いて一人二人と姿を消すが、女にあぶれた者達は日が昇るまで、浴びるように酒を飲み続けるのだ。

アルテュスが狭いベンチに座ると直ぐに着飾った女が隣に来た。

コルセットで胸を締め上げ、深い襟ぐりからは豊かな胸元が零れるばかり、赤味がかかった金髪を結い上げ濃い化粧をした美しい女だ。

男が腰に手を回すと女は嬉しそうな顔をして、逞しい胸に寄りかかってきた。

アルテュスは上の空でむっちりとした尻や胸に触れながら、蜂蜜色の髪と澄んだ青い瞳を想っていた。

ふと気が付くと女はぴったりと自分の身体にくっついて、シャツの下に手を滑り込ませ熱い肌を弄っていた。

接吻をせがむ女を引き寄せ、仰向かせると唇を合わせる。

女は貪欲に男の口を貪り、大胆に舌を絡ませてくる。

唇が触れ合うだけの接吻で、顔を真っ赤にして目を潤ませていた娘の顔が目に見えかけた。

アルテュスは急に女を押し退けると立ち上がった。

「悪い。別の相手を探してくれ」

そう言つとさつさと酒場を出て行く男の背中に女が叫ぶ。

「何だつてんだよ。怖気づいたの？ それとも、立派ななりをして
いる癖に、まさか不能かい？」

男達の下卑た笑い声に肩を竦めたアルテュスは、外に出ると凍った
道を宿駅に向かって歩き始めた。

ふん、これで誰も俺があの子に誠実ではなかったなどと言えないぞ。

澄んだ青い瞳を曇らせたくなかった。

それに、とアルテュスは思った。

何故かあの娘に悪く思われたくないんだ。

どうしてだろう？

愛などない結婚相手の筈なのに？

エヴァは風や雨に打たれて色褪せた厩の扉に寄りかかり、朝食の時に配られた手紙の封を切って広げると、それを見つめたまま固まった。

「何これ？」

まるで酔っ払ったミミズが、のた打ち回っているような筆跡である。それも、紙一面に真っ黒なインクでびっしりと殴り書きされているのだ。

初めは果たし状かと驚いたが、どうやら違うようである。

差出人を確認したエヴァは目を丸くして、それからクスツと笑った。

こんなまめな男だと思わなかった。

私に手紙をくれるなんて思っても見なかった。

書き出しの「最愛なるエヴァンへ」のエヴァンのNが何故か大文字で残り、離して書いてある為、「最愛なるエヴァへ」とも読めるのだ。

筆跡とは反対に文面は丁寧で、ゴンヴァルの許しを得てこの手紙を書いていること、学校での生活で不都合はないか知りたいこと、返事はゴンヴァル宛に書いてくれても構わないとあった。

その後はトリポルトに向かう馬車の中で話してくれたような面白い逸話に溢れており、エヴァは腹を抱えて笑った。

学校の授業は面白かった。

だが、他の生徒達はエヴァよりも遥かに幼く貴族出身の者が殆どで、話が合うとはとても言えなかった。

皆はエヴァの親が港町の貧しい代書人と知ると、苛めたりはしなかったが、小馬鹿にした態度を取るようになった。

半月もしない内に厩の掃除など誰もやりたがらない仕事を押し付けられたり、休みの日に町に行く時は誰も誘ってくれず一人で出かけたりしたが、エヴァは皆の前では明るく振舞っていた。

それでも、やはり寂しく時々家が堪らなく恋しくなり、父から手紙をもらった夜などベッドの中でそっと涙を流すこともあった。

無理にではなく心から笑うのは本当に久し振りだった。

目の縁に薄っすらと浮かんだ涙を手の甲で拭いながら、そう思った。

もしかしたら船長さんは私が皆と仲良くできていないのを、ダヴォグール様に聞いて知っているのかもしれない。

でも、嬉しかった。

船長さんは怖そうに見えるけど、字は物凄く下手だけど、本当は優しい人なのだろう。

明日の自由時間に返事を書こう。

そう決心するとエヴァは晴れ晴れした顔で、壁に立てかけてあった熊手を手に取り、汚れた藁を掻き集め始めた。

馬の世話は嫌いではなかった。

初めは自分よりも遥かに大きな馬が少しばかり怖ろしかったが、慣れてくるとこんなに大人しく高貴な動物はいないと思われるから不思議だ。

動物達も毎日藁をきれいにしてくれる少女のことを覚えているようで、そつと手を差し出すと鼻面を押し当ててくる。

そして毎日厩に通う内に馬丁のブリスと装蹄師のオベル、鍛冶屋のセラファンという男達と親しくなった。

ブリスはのっぴでひよろりとした寡黙な男で話しかけてもあーとかうーとしか答えなかったが、エヴァのことは気に入っているらしく、乗馬の稽古の時にはいつもエヴァの所に一番大人しく扱いやすい馬を引いて来てくれる。

オベルはブリスとは反対に小柄で、小動物のようなくるとよく動く黒い目をしたおしゃべりな男だった。

天気の話や学校の教官達の噂話の合間に、馬の蹄の病気や蹄鉄の付け方を詳しく説明してくれる。

また魔除けにと古い蹄鉄をくれたので、エヴァはそれを大事に自分の棚にしまっていた。

二つあるから、一つはお父さんにあげよう。

もう一つは……

でも、船長さんはこんなものいらないうって言うかしら？

セラファンはその名前から思い浮かべるような容姿とは似ても似つかず、黒い強い髭を生やした大男だった。

暗く険しい顔の左の瞼から顎にかけて引き彎ったような傷跡があり、少年達は表情の乏しい男のことを怖がって陰では悪魔の親分などと呼んでいる。

だが、実際には見かけによらず穏やかな男で、エヴァを見ると、顔色が良くないから真っ赤に焼いた鉄を冷やした水を飲むといいと勧めたりする。

初めて会った時から、もう少し若くして髭と傷がなかったら少しばかり船長さんに似ているかも知れないと思っていたエヴァは、彼のことを怖がったりしなかった。

少女は薄暗い中に赤々と火が燃え盛り、陽気な鎚の音が響く小屋を、まるで幼い頃に聞いた神話の中のウルカヌスの家のようにだと思い、鍛冶屋の仕事を見に行くのが楽しみだった。

そして片隅に座って、セラファンが真っ赤な鉄の塊から様々な物を造り出すのを目を輝かして眺めているのだった。

この三人と教官のマテオ・ダヴォグールのお陰で、エヴァはまるきり一人ぼっちという訳ではなかった。

マテオは彼がひいきしているなどと噂されれば、エヴァンが苛められるのではないかと思い、必要以上に世話を焼くことはなかったが、困っているような時には直ぐに助けに来てくれた。

他の教官達も真面目な少年には親切だったし、エヴァにとって学校は決して居心地の悪い場所ではなかったのだ。

『ラ・ソリテア号』の修理は予定よりも長引き、アルテュスがゴンヴァルに別れを告げに来たのは、既に道端に白や黄色のクロッカスがちんまりと花を咲かせる頃だった。

まだ冷たい潮風も心なしか春の香りがするようには思える。

「結構慣れてきたようだな」

エヴァの手紙をゴンヴァルに差し出しながらアルテュスは笑った。

「この間、知り合いの教官からも手紙をもらったが、お嬢さんは火縄銃の扱いが素晴らしく上手らしい。トリポルト陸軍兵学校始まって以来の射手だと凄い褒めようだ」

ゴンヴァルは眉を顰める。

「危険ではないのでしょうか？」

「数年前の銃だと、火薬を詰め終わらない内に爆発して顔半分を吹き飛ばされたなどと聞いたことはあるが。最近の銃はかなり改良されているし、まあ大丈夫だろう。万が一、お嬢さんの顔に傷がついたりしても、結婚しようという考えは変らぬからご心配には及ばない」

ゴンヴァルはアルテュスを睨んだ。

「まだ娘を貴方にやるとは言っていないぞ」

アルテュスは苦笑いをすると言った。

「分かっている。実は今日は別れの挨拶に来たのだ」

「とうとう船出ですかね？」

「ああ、明日の朝早くティアベを発つ」

ゴンヴァルはゆっくり頷くと床を見つめ、そつと溜息を吐いた。

「年末には絶対に戻ってくる」

急ぎ込んでそう言ったアルテュスを、澄んだ瞳でじつと見ながらゴンヴァルは口を開いた。

「ご無事を祈ってますよ。まだまだ海の上の生活の方が、陸よりは危険でしょうから」

「どうかこれを」

そう言ってアルテュスが差し出した金の入った袋を代書人は押し戻した。

「前に頂いたのがまだ十分残っているから必要ないですよ。暖かくなれば私も仕事に出られますし」

「……そうか」

アルテュスはあっさりと袋を懐に納めると立ち上がった。

「では、ゴンヴァル殿、お達者で」

ゴンヴァルは男が出て行った扉を座ったままじっと見つめていた。

自分がしたことが正しかったのかどうか分からない。

一年後、約束通りにあの男は戻ってくるのだろうか？

貧しい代書人の娘のことなど、忘れてしまつのではないだろうか？

自分の身に何かあつたら、あの子はどうなつてしまつのだろうか？

エヴァは自由時間になると、今朝、受け取ったばかりの二通の手紙を懐に入れて教室を飛び出した。

他の生徒に手紙を読んでいる所を見られたくなかつたのだ。

この年頃の子供達にとって親からの手紙などは鬱陶しいものでしなく、そんなものに時間を使うのは女々しい奴か赤ん坊だけだと思っっている。

中庭を通り抜け裏の林の方に歩きながら、エヴァは二通共封を切ると、初めに見慣れている父親の流れるような筆跡の手紙を開いた。

「大事な我が子へ」と始まるその手紙の中で、ゴンヴァルはまるで日記でも書くように自分の日常生活を語っていた。

それは、まるでその場に自分がいるような気持ちにさせて、エヴァを安心させるものであった。

マリヴォン小母さんの料理がお父さんの口に合うようで良かったわ。

マリヴォン小母さんは本当に親切な人ね。

自分の父親の世話だけでも大変なのに、お父さんの食事の世話を毎日してくれるなんて。

ゴンヴァルは気温が少し上がり、身体の痛みで夜中に目が覚めるようなことはなくなったと書いていたので、エヴァは嬉しかった。

もう少し暖かくなれば港町まで歩いて行けるようになるだろう。

船長さんのくださったお金のお陰で毎日仕事を探しに行く必要はなくなっただけ、お父さんはあの露店で仕事するのが好きだから。

次に既に見慣れた怖ろしい筆跡の手紙を開くと、エヴァは嬉しそうに微笑んだ。

しかし、次の瞬間、真面目な顔になると小さな溜息を漏らした。

それは別れの手紙だったのだ。

エヴァはどうしようもない寂しさが胸を満たすのを感じていた。

自分がアルテユスの手紙を、毎週とても楽しみにしていたことを認めざるを得なかった。

では、船長さんはあの愉快的仲間達と冒険に出かけるのね。

お父さんの様子を見に行ってもらえなくなるのは残念だし、手紙が来なくなるのはとても寂しいけれど。

今度会う時には、また面白い話を聞かせてもらえるだろう。

アルテユスが自分を迎えに来ないかも知れないなどは、少しも考えなかった。

船長さんが考えていることはよく分からないけれど、約束は守る人だと思っわ。

だけど、お父さんは何と答えるのかしら？

私は、どうしたいのだろう？

船長さんと結婚する……

何だかぴんとこないけど、楽しそうじゃないかしら？

でも、この気持ちは何だろうか？

怖い物が潜んでいるかも知れない箱の中を覗きたくなるような……

エヴァは頭を振ると夢見るような瞳で、梢の間に覗く澄んだ空を見上げた。

港に戻ったアルテュスは、二人の航海士が乗組員を採用する為、船乗りにも面接を受けさせている酒場に向かった。

「船長、手紙です」

メレーヌに差し出された手紙を受け取ったアルテュスは、回りに立っている男達をぐるりと見回した。

どうやら半分以上は知らない水夫になりそうだ。

仕方がない。

2ヶ月近くも修理にかかってしまったのだから。

二人の航海士が残ってくれただけでも奇跡というものだろう。

アルテュスは手紙の差出人を確かめもせず懐に突っ込むと、男達に向かって口を開いた。

「俺が『ラ・ソリテア号』の船長のアルテュス・ド・タレンフォレストだ」

おお、と言うような声上がり、男達は感嘆の眼差しで彼らの船長を見つめた。

船乗り達にとって、ラテディム海のオーガは、恐れと同時に憧れを抱かせる存在だった。

ラテデイル海のおーガとその仲間達の冒険の数々は、尾びれをつけ港町の酒場で語り継がれていたのだ。

その伝説的な船長と荒海に挑むことは、冒険好きな海の男達にとって心躍ることであった。

アルテュスは皆に簡単に明日の予定を伝えたと、後ろに控えているアレンに言った。

「俺はいったん宿屋に戻って荷物を纏めてくる。明日の朝、港で会おう」

今夜はこの数ヶ月を過ごした部屋ではなく、船に泊まる予定である。

アルテュスは殆ど駆けるようにして宿屋への道を急いだ。

船に乗るのは本当に久し振りだ。

まるで、ずっと留守にしていた我が家に帰るように心が急ぐ。

やっぱり俺は生まれながらの船乗りだな。

苦笑いを浮かべながら考える。

早く塩辛い飛沫を浴びながら進む帆船の甲板に立ち、張り巡らされた縄と風をいっぱい孕んだ帆を見上げたかった。

多少居心地が悪くても、嵐に見舞われることや敵や海賊に襲われる危険があっても、俺は海が好きなんだ。

もし、妻がいたら陸に残りたいと思うのだろうか？

そう言えばエヴァは別れの手紙を受け取って、どう思ったのだろうか？
寂しいと思ってくれたのだろうか？

あの娘と文通するのは楽しかった。

子供のように好奇心旺盛な癖に、時折ハツとするような女らしい優しさを感ずるのだ。

アルテュスは、手紙なら少しぐらい心を許しても問題ないだろうと思っただった。

その結果、エヴァの手紙は親しい友人に書くようなものであったし、アルテュスの手紙はまるで妹か許婚に書くようなものに変化していた。

夕方、船に戻ったアルテュスは積荷を確認した後、部下達と一杯飲んだが、早々と寢室に引き上げた。

上着を脱ぎ扉の横の釘にかけようとした時、何かが乾いた音を立てて床に落ちた。

先程、メレーヌに手渡された手紙である。

アルテュスは足元に落ちた手紙を拾い、差出人を確認すると訝しげ

な顔をする。

封を切り内容にさっと目を通すと、苛立たしげに舌打ちした。

今更、何だっけ言うのだ？

別に勘当された訳ではなかったが、自分の中では家族とは縁を切ったつもりでいた。

当家の一大事？

知ったことが。

手紙は父からのものであった。

家には跡継ぎである兄がいるし、俺よりも出来のよい弟が大勢いるのだ。

俺がいないと解決できない問題なんてある筈ないだろう？

急に帰って来いなどと言われて、ほいほいと言うことを聞くと思っているのか？

俺は明日、出港するのだ。

今更、予定を変えるつもりはない。

この手紙は受け取らなかったことにしよう。

そう決心するとアルテュスは手紙を乱暴に破り捨てた。

折角の気分が親からの手紙の所為で台無しになったことを苦々しく思いながら、残りの服を手早く脱ぎ捨てると硬い寢床に横たわる。

子供の頃の様々な不愉快な思い出が頭に浮かび、アルテュスは大きな溜息を吐くと狭い寢床の上で寝返りを打った。

体の熱を冷まさねば、今夜は眠れそうもないぞ。

船に戻らずに、港町の娼館にでも行けば良かった。

まだ約束もしていないあの娘に誠実でありたいなどと愚かな事を考えた為に、ずっと女には触れていないのだ。

俺が何をしようとの娘に分かる筈はないし、大体あの娘に俺を咎める権利もないだろうが。

誰か使いをやって港町から女を呼ばせようと思いついたアルテュスは、起き上がるとランプに火を点した。

紙とペンを求めて壁に取り付けてある机の引き出しを開けると、フワッと甘い花の香りが狭い船室に広がった。

顔色を変えたアルテュスは唸り声を上げて引き出しを乱暴に蹴飛ばして閉めた。

自分を裏切った女の艶やかな髪や、白く丸い肩がぱつと頭に浮かんだ。

早く他の事を考えるんだ!!!

机の上にある瓶から大きなコップに並々と酒を注ぐと一息に飲み干す。

甘い喘ぎ声や熱い唇の感触までまざまざと思い出してしまったアルテュスは壁に頭を打ち付けて、余計な思い出を追い出そうとする。

こここの所、ずっと魔されることもなかったのに。

漸く穏やかな気持ちになれたと言うのに。

この忌まわしい思い出は、いつまで俺を追いかけてくるのだ？

やっぱりあの時、あの女を殺してしまえば良かったのだろうか？

コップに注ぐのももどかしく、直接瓶から喉に酒を流し込んだアルテュスは必死に考える。

港町から女を呼ぶ時間などない。

アルテュスは忘れたい女と正反対の女を何とか思い浮かべようとする。

だが、どこかの港で抱いた娼婦の浅黒い肌や情熱的な黒い瞳の代わりに、何故か澄んだ大きな青い瞳が頭に浮かんだ。

ふっくらとした薔薇色の頬。

瑞々しく柔らかい唇。

子供のような温かい小さな手。

可愛らしい笑い声。

蜂蜜色の髪を解いたら、どんな風に見えるのだろうか？

服を脱がせたら？

不謹慎なことを考える自分を胸の中でエヴァに詫びながらも、アルテュスはどうしてもその考えを止める事ができなかった。

接吻しかしたことの無い少女の身体を弄っている自分を想像する。

真っ赤になって震えているエヴァを抱き締め、胸元を開きスカートを捲り上げる。

あの娘はどんな表情を見せるのだろうか？

どんな声を出すのだろうか？

荒い息を吐き呻き声を上げながら、力尽きた男はどさりと仰向けに倒れ込む。

大事にしていた宝物を壊してしまったような後悔が胸に突き刺さった。

「……………エヴァ……………」

泥沼のような眠りに落ちる前に、アルテュスは許しを請うようにそっと少女の名を囁いた。

翌日、薄紅色の朝靄に包まれて『ラ・ソリテア号』は、ティアベの港を出港した。

甲板に立ち部下達が命令に従い次々と作業を進めて行くのを見守っていたアルテュスは、港の入り口にそそり立つ二つの塔をゆっくりと見上げる。

何を感傷的になっているのだから。

苦笑いをしながら心の中で約束をする。

9カ月後にはまた戻ってくるからな。

「よし、いいぞ」

速度を上げ始めた帆船に満足そうに頷いたアルテュスは、傍に立っているメレーヌに言った。

「更に西に向かう。先週、海事当局で耳にした話によると、敵国の商船は最近随分と臆病になっているそうだ。軍艦に守られているとなると厄介だから、俺達が敵の支配水域まで出向いて仕事をするぞ」

「鬼の口に飛び込んだが、飛び込んだ方も鬼だったという訳ですか。でも全員無事に戻れたら幸運ですね」

「そうだな。だが分かっているだろうが、敵海じゃなくても私掠船に危険は付き物だぞ。ある意味では軍艦より始末が悪いんじゃないか？」

「大いに結構ですよ。我々は自分の意思でこの船に乗っているんですから」

笑ってそう答えたメレーヌを満足そうに見下ろしたアルテュスは言った。

「俺は優れた部下に恵まれて幸運な男だな」

やがて、『ラ・ソリテア号』は船体を大きく傾かせて針路を南西に変えた。

作業に合わせ、船乗り達の力強い歌声が辺りに響き渡る。

日は既に頭上高くにあり、春らしい雲の流れる青空が眩しい。

そして、海はどこまでも青く目の前に広がっていた。

……パーン!!!!!!

青々と茂った草原に風が吹き渡り、銃声が轟いた。

銃を構えた少年の隣に顎鬚を扱きながら立っていた男は、眉を顰めて首を振る。

「手が震えてしまいました」

的を完全に外した少年は頭を掻きながら、次の生徒にどっしりとした銃を手渡した。

余程緊張したのだろう、額に大粒の汗をかいている。

「次はエヴァンか。皆、ちゃんと見ていなさい」

教官の言葉に生徒達は、エヴァの傍にぞろぞろと近寄って来た。

だが万が一、銃が暴発することを恐れて一定の距離は保っている。

エヴァは銃を地面に立てると、注意深く木の筒から火薬を銃口に入れた。

次に詰め物の紙と鉛弾を入れる。

カルカを銃口に突っ込んで、銃身の奥に火薬と玉を押し込む。

装弾された銃を地面に立ててある支えに乗せると、火皿に火薬を入れて蓋を閉じる。

火挟みに点火した火縄を挟むと準備完了だ。

エヴァは教官が頷くのを確認すると、3フィートの距離に置かれた的に向かって銃を構える。

目を細め口を引き締め、いつもの優しい表情とは似ても似つかない厳しい顔つきである。

「撃て！」

教官の声を合図に火皿の蓋を開け、引き金を引く。

的の中心に命中したことが分かった途端、エヴァは嬉しそうな笑顔になり、銃口から細く煙を出している銃を下ろした。

「お見事！！」

教官の言葉に周りの少年達も拍手した。

「おい、エヴァン」

自分よりも頭一つ大きい少年に肩を掴まれて、エヴァは驚いて振り向いた。

「何？」

「おまえ、何であんなに銃の扱いに慣れてるんだ？」

少年はエヴァの隣を歩きながら尋ねた。

「……別に、教官に言われたとおりになっているだけだけど」

反対側に別の少年が来て、エヴァは二人の間に挟まれる形になる。

「おまえ、貧乏人の倅なんだろ？ やっぱり密猟とかしてたんじゃないのか？」

エヴァは立ち止まり、訝しげな瞳で二人を順番に見た。

「何が言いたいの？ 銃に触れたのはここに来て初めてだったんだけど」

「嘘言っんじやねえよ!!!」

急に大きな少年に頬をぶたれ、エヴァはびっくりして目を見開いた。

ジンジンと痛む頬に手を当てている少女をもう一人の少年が突き飛ばす。

「生意気なんだよ!!! ちっとぐらい俺達よりも出来るからって威張りやがって!!!」

目にいっぱい涙を浮かべながら起き上がったエヴァは、少年達に叫んだ。

「威張ってなんかいない！ 何でこんなことするの?!」

少年達は顔を見合わせると噴出した。

「何だ泣いているぞ。女々しい奴だな」

「おまえみたいな赤ん坊は、さつさと汚い家に帰って、お母さんのおっぱいでも吸っていればいいんだ」

ニヤニヤしながら近寄ってくる少年達を、怯えたように見つめながらエヴァは、それでも逃げようとはしなかった。

突然、男の怒鳴り声が上がから降ってきて、逃げ出そうとした二人の少年はがっしりと首根っこを掴まれた。

自分達を捕まえた男を見上げた少年達は真っ青になる。

それは、目を合わせたら災いが降りかかると噂されている悪魔の親分だったのだ。

鍛冶屋のセラファンは二人の頭をぐつんとぶつけ合わすと、乱暴に揺さぶった。

「おい、おまえら!! 今度この子に何かしたら、命はないと思え
! ! ! !」

鍛冶屋の小屋の片隅に座り、頬を水で濡らした布で冷やししながら、エヴァはぼんやりと男達の話聞いていた。

いつもは大人しいセラファンは、興奮して逞しい腕を振り回しながらプリスとオベルを相手に喋り捲っている。

涙でよく見えなかったから、あの時一瞬、助けに来てくれたのは船長さんだと思ったの。

兄弟のいないエヴァは喧嘩をしたことがなかったし、ゴンヴァルも子供に手を上げることはなかったので、暴力を振るわれるのは生まれて初めてだったのだ。

だけど、戦になったら突き飛ばされるぐらいでは済まないのだわ。

ここから逃げ出したい、家に帰りたいたいという思いを打ち消すように頭を振る。

何を弱気になっているの？

お父さんを護りたいんでしょ？

自分で望んでここに来たのだから。

今更逃げ出すなんてみつともないことできないわ。

エヴァは硬い木のベンチを滑り降りると男達に近付いた。

「助けてくれてありがとう」

セラファンに頭を下げた少女の頭をオベルがぽんと叩いた。

「何かあったら絶対直ぐに俺達に言っただぞ」

「あの糞ガキ共は、あれで懲りただろうがな」

大男の鍛冶屋はにやにやする。

「あいつら、おまえのこと泣き虫だとか言っていたが、あの泣き声を聞いたか？ ちょっと小突いてやっただけなのに、あんなに怯えてちびりやがった」

三人の男が愉快そうに笑い声を上げると、エヴァもつられて笑い出す。

この人達がここにいてくれて本当に良かったわ。

私は幸せ者ね。

家にいた時もここでも、いつも親切にしてくれる人が近くにいる。

……………船長さんも。

今頃どこにいるのだろうか？

お元気かしら？

海の上の生活っていったいどのようなものなんだろう？

私が船長さんのことを考えるように、私のことを時々思い出したりしてくれているのかしら？

夢見るような表情になったエヴァンを男達は心配そうに見る。

三人共、この真面目で働き者の少年をまるで自分達の弟のように可愛がっていたのである。

狭い廊下を船室に向かいながら、アルテュスは溜息を吐いた。

あれから、どうしてもエヴァのことが頭から離れないのだ。

起きている時は仕事に追われて他のことを考えている暇はなかったが、仮眠を取る為、寢床に横になると決まって少女の優しい顔が目に浮かぶ。

気を抜けば自分の体を彷徨いそうになる手を握り締め、別のことを考えようとする。

だがその夜は忘れようとしている手紙のことを思い出してしまい、我慢できず飛び起きると、シャツと脚衣を身に着け船室を飛び出した。

狭い階段を上がり、船尾楼甲板に出る。

辺りはランタンもいらぬほど明るかった。

操舵手の隣に立っていたアレンがアルテュスに気付いて声をかける。

「あれ、船長？ 寝に行ったんじゃないか……」

「眠れない」

「でも今眠つとかなないと、明日辛いですよ」

「ああ、分かっている。少ししたら戻るよ」

アルテュスは船長専用のベンチにどさりと腰を下ろすと、煌々と辺りを照らす満月の浮かんでいる空を見上げた。

もうすぐ夏とはいえ、まだ夜は空気が冷たい。

だが、アルテュスは胸を肌蹴たまま、じっと月を見つめていた。

「眠れないのは、この月の所為じゃないですか？」

傍に来たアレンが言った。

「俺は狼男か？」

航海士に視線を移した船長は白い歯を見せて笑った。

それから真面目な顔になって暗い海を見ながら尋ねる。

「速度は？」

「さつき風向きが変わったので、6ノットに落ちましたが、日が暮れてから既に40マイル程進んでいます」

「この調子で進めば、明日の昼前には敵国の水域に着くな」

暫く考え込んでいたアルテュスは、立ち上がると言った。

「朝になったら、一番に武器倉庫の点検をするように。特に銃は全て装弾しておけ」

「分かりました。おやすみなさい」

さっきは全然なかった眠気が急に襲ってきた。

大きな欠伸をしながら傾いた寢床に横たわる。

明日が楽しみだ。

意識の途切れる瞬間に思ったのは、家族でも女でもなく、明日出会うだろう敵の船のことだった。

私掠船と敵国の商船との戦いは稀であった。

奇襲する際には、私掠船は敵国の船を装うことが多かった。

近付いて来た帆船のマストから馴染み深い自国の旗が降るされ、代わりに『ラ・ソリテア号』の印のついた敵国の旗がスルスルと掲げられると、それだけで震え上がった商船の船長達は即座に降参したのだった。

威嚇射撃の必要もなかったのである。

だがその日、『ラ・ソリテア号』が遭遇したのは商船ではなく敵国の軍艦だった。

それも、ガレオン船3隻、パターチエと呼ばれる小型船1艘からなる艦隊だ。

「船長、いくら何でもこれはまずいですよ。4対1では勝ち目はないでしょう。逃げますか？」

同意を求めるようにアレンが隣に立つアルテユスを見上げた。

アルテユスは何も言わずに、水平線に浮かぶ艦影を睨みつけて考え込んでいる。

この距離だったら追いつかれずに逃げ切ることは可能だった。

しかし、何もせずに逃げ出すのは癪に障る。

「よし。接近するぞ」

「えっ?!?!」

メレーヌが信じられないという顔で、アルテュスを見る。

船長は澄ました顔でアレンの方を見て言った。

「何発かぶち込んでやってから逃げる。舵取りを頼む」

「了解」

アレンも表情を変えずに頷くと舵を握った。

船長の命令がメレーヌを通して船乗り達に伝わると、皆の間にぴりぴりした緊張感が広がった。

だが、恐怖を顔に出す男は皆無だった。

私掠船の乗組員は嵐や病や迷信は恐れるが、敵に対しては勇敢だったのだ。

次々と下される命令に従って、敵の大砲の照準とならぬよう一番端のガレオン船の航跡を追いながら、『ラ・ソリテア号』は敵船の風上に回りこんで接近を図る。

ザッザーン、ザッザーンと波を掻き分けて、帆船はぐんぐんと軍艦に近付いて行く。

波の音に混じって男達の掛け声が切れ切れに響き、帆桁の動きに合わせて船はぎぎいと軋んだ音を立てる。

左舷、右舷の砲員達は既に位置につき号令を待っている。

弾丸を込めた火縄銃を持った連中も甲板に腹ばいになり指図を待っている。

敵船が射程に入ったと見ると直ちにアルテュスは旗を揚げさせ、ガレオン船の船尾から攻撃を開始した。

敵は少し前からフリユートの不審な動きを見止めていたのだが、判断を下すのが一瞬遅過ぎたのだ。

反撃しようとして慌てて向きを変えるガレオン船は、風上にいるアルテュス達にとって格好の的だった。

砲員達は号令に従い、次々と作業をこなし大砲を撃つ。

ドカーンと凄まじい音が辺りに響き渡る度に『ラ・ソリテア号』は、興奮に身を震わせ勇ましさを増すようだ。

「金ぴかの甲冑を着けて兜を被った奴が指揮官だろう。奴を狙え」

火縄銃を構えた者達は、敵の指揮官を狙い撃ち捲くる。

「やった!!!」

甲冑を着た軍人が崩れ落ちるのを目にした男達は歓声を上げる。

敵船も反撃してくるが、大砲の弾丸は『ラ・ソリテア号』の遙か上を飛んで行く。

だが、残りのガレオン船とパターチエが私掠船を挟み撃ちにしようと回り込んできた。

「とつとと逃げるぞ　　！！！」

アレンの舵取りで帆船は、きれいな曲線を描き軍艦の間をすりと抜け出した。

日の光を受けキラキラと輝く夏の海の上、白い航跡を引きながら、まるで鬼ごっこでもしているように逃げる帆船を追う軍艦。

「普通は鬼は一匹だろ？」

私掠船の船長は、執拗に追って来る敵船を見ながら呟く。

ヒュウと鋭い音を立てて敵の弾丸が船腹を掠めるが、あたりはしなかった。

私掠船の攻撃を受けたガレオン船は沈没しかけているようで、アルテュス達を追っている内の1隻が救助に駆けつけた。

残るのは、ガレオン船1隻とパターチエだけである。

撒けるかと思った時、『ラ・ソリテア号』はドーンと腹の底に響く音と共に衝撃を受け、激しく揺さぶられた。

「畜生！！！」

航海士が悪態を吐き舵を切る。

それでも風は『ラ・ソリテア号』の味方だったようだ。

急にアルテュス達にとって都合の良いように風向きが変わり、帆船はどんどん速度を上げ追っ手との距離を広げた。

少しすると被害を確認しに向かった大工とコーキン工の許から、水夫が一人報告に駆けつける。

幸いなことに被害は致命的なものではなく、船に備えてある木材で修理ができるようだった。

修理の間、穴の開いた左舷を上にして走らせると言われたアレンは顔を顰めたが、何も言わずに頷いた。

「修理が終わったら、この近辺で隠れる場所を探す」

船長の言葉に、次に会うのはどうか商船でありますようにと船乗り達は祈った。

我々は運が良かったのだろう。

負傷者も出さずに、これっぽっちの損害で済んだのだから。

「儲けはなかったが、楽しかったな」

そう言って笑ったアルテュスをメレー又は呆れたように見たが、ア

レンは何も言わずニヤリとしただけだった。

「エヴァン、今度はおまえの番だぞ」

赤毛にそばかすの少年が隣に座っているエヴァに言った。

向かいに座っている少年達もそうだ、そうだと囁し立てる。

兵学校に入ってから半年以上経ち、やっと友達ができたのだ。

赤毛の少年はアルカン・ド・ブロイズという名で、一ヶ月程前に入学したばかりだ。

王軍以外の軍隊は主に雇兵で構成されていた時代である。

兵学校といっても卒業証書などはなく、入学年齢もはっきりと決まっていなかった。

忙しい親が勉学の他に武器の扱いや乗馬などを息子に学ばせる為、送り込んでくるのだ。

学校を去った者が軍人になったかと言えば、必ずしもそうではない。

アルカンは賑やかで勇気のある少年で直ぐに人気者になったが、何故かエヴァのことを気に入り、どこに行くのにもエヴァを連れて行った。

その為、いつの間にか皆もエヴァを仲間外れにすることはなくなっ

たのである。

エヴァはアルカンのさっぱりした性格が好きだったし、何でも笑い事にしてしまう朗らかさには随分助けられた。

だが、同時に困ることもあった。

季節は夏になり、少年達は休み時間に外で水を被ったり、川に泳ぎに行ったりすることもあった。

誘われる度に何か旨い言い訳を考えて、断らなければならないのだ。

そして今、仲の良い少年達が納屋の隅に集まって打ち明け話の真っ最中なのである。

埃臭く薄暗い納屋の中、5人の少年が額に汗をかきながら頭を寄せ合って、膝小僧を抱いて座っている。

「それでエヴァンは、どんな女が好みなんだ？」

「好きな女はいるのか？」

「いつ、いや、そんな女はいない！」

慌てて答えたエヴァを少年達は疑わしそうな目で見る。

「その慌て振り、怪しいぞ」

「おっ、赤くなって。さては好きな女がいるんだな」

「いないって言ってるじゃないか!！」

「怒るところを見ると余計に怪しいぞ」

「ほらほら、吐けよ」

「俺達も話したんだから、おまえだけ黙ってるなんてずるいぞ」
「どうしよう?」

好きな女なんている筈なのに。

私の好きな人は……

追い詰められたエヴァは大きな溜息を吐いた。

「分かった。話すから」

少年達にはやりと顔を見合わせると身を乗り出した。

「で、別嬪か?」

「……………うん」

「髪の色は?」

「……………黒……………かな」

「目の色は？」

「黒」

「ほほう。髪と瞳の黒い女は情熱的と言いが、おまえの女もそうか？」

「そ、そんなこと知らない！」

やだ、変な汗が出て来た。

早く誰か可愛い女の子を思い浮かべなくちゃ。

エヴァは唇を噛むと柱に寄りかかり目を瞑る。

だが、頭に浮かんだのは、何故かアルテュスの日に焼けた笑顔だったのである。

なっ、何で船長さんのことなんか考えているの?!?!

「でかいのか？」

目の前の少年が両手で胸と尻を示しながら尋ねる。

「とっつても」

思わず答えてしまった。

「お　　!!--!!--」

エヴァは驚いて目を開いた。

えっ、何で皆手を叩いているの？

背が高い女の人だったら可笑しいのかしら？

「それで、おまえら、もう接吻した？」

「……………」

真っ赤になったエヴァを見た少年達は、少しばかり悔しそうに笑った。

「なんだ、恋人なんじゃないか」

「年上の女か。いいなあ」

「えっと……………接吻すると恋人なの？」

「普通はそうだろ」

「もしかしてあれもしたのか？」

エヴァはきょとんとした。

「あれって何？」

「知らないんだっいたら知らなくていい」

「エヴァンはその人のこと好きなの？」

アルカンが真面目な顔で尋ねた。

好きなのかしら？

「……分かんない。ただ、気が付くとあの人のこと考えているの」

「それって恋だろ？」

そうだろうか？

数日前に久し振りにアルテュスから手紙を受け取ったのだ。

彼が自分のことを忘れていないと知って嬉しかった。

だが同時にその手紙はエヴァを不安にさせた。

敵国の艦隊との鬼ごっこや、新世界から帰国途中の商船を捕獲した話が、面白可笑しく書いてあったのだ。

そして、いずれも自分の部下に死者負傷者はなしと得意げに書いてあった。

知っていたけど、船長さんの仕事はとても危険なんだ。

ちゃんと元気で戻って来るのだろうか？

気がつくとも家族を想うようにアルテュスのことを考えていた。

どうか、船長さんと船長さんが乗っている船をお守りください。

彼が怪我をしたり、病気になるったりしませんように。

季節はあつと言つ間に過ぎ、木枯らしの吹く頃となつていた。

朝食の後、校長室に呼ばれたエヴァは、何事が起こつたのかとびくびくしながら、呼びに来た兵の後について大理石の階段を上つた。

校長とは言つても、軍人で王の寵臣であるリユスカ公は、滅多に兵学校に顔を見せることはない。

エヴァも会うのは初めてだった。

エヴァの前を歩いていた兵が広間の扉を開き、中に入るように促す。

「公爵様、エヴァン・ド・タレンフォレストです」

兵の言葉に暖炉の前に脚を伸ばして座り、猟犬を撫でていた男が顔を上げ頷いた。

窓から外を眺めていたもう一人の男が振り返り、公爵に近付く。

その男は不安そうな顔をしたエヴァを見ると、安心させるように頷いて見せた。

アルテユスの親友のマテオ・ダヴォゲールである。

エヴァは二人の前に来ると、帽子を取って片膝をついた。

「立ちなさい」

ジル・ド・リュスカは、3年前に父親を暗殺された後、ド・リュスカ家を継ぎ、王軍の将校として活躍していた。

軍服ではなく流行のぴったりしたビロードの上着にレースの飾り襟を着けた男は、神経質そうな顔に鋭い目付きで、尖った顎鬚を蓄えていた。

エヴァをジロジロと観察していた男は、教官の方を見ると言った。

「健康そうな少年だな。これなら使い物になるだろう」

「エヴァンの腕前をご覧になりますか？」

「ああ。俺は目を瞑って買い物するのは嫌いなんでね」

マテオはついて来るようにエヴァに手招きすると、公爵と前に立って部屋を出た。

公爵がピュ と口笛を吹くと、猟犬が駆けてきて主人の斜め後ろにぴったりと寄り添う。

二人の男の後をついて、銃の訓練に使われている野原に向かいながら、エヴァはドキドキしていた。

私の腕前って射撃のことよね？

どうなるのかしら？

教官が距離を測ってのを置くと、公爵は自分の銃を寒さに身を縮め

ているエヴァに差し出した。

「これで撃ってみろ」

訓練で使っている火縄銃とは違って銃身が短く軽い銃だった。

金属の部分には細かい唐草模様が彫ってある。

指先に息を吹きかけて温めた。

口元を引き締めると銃を構える。

火縄も何もないけれど、このまま撃てばいいのかしら？

「撃て！！」

エヴァは引き金を引いた。

「ダヴォグール様、待ってください」

公爵の馬車を見送った後、さっさと踵を返した男にエヴァが呼びかけた。

泣き出しそうなエヴァの顔を見たマテオは驚いたように眉を上げた。

「そんな顔してどうしたんだ？ 素晴らしいことじゃないか、リュスカ公に認められるなんて。荷物を纏めておけよ。アルテュスも秘蔵っ子の手柄を聞いたら喜ぶぞ。俺は早く行って奴に手紙を書かな

きゃならん」

「とても、とても有難いんですけど、その話は受けられません」
通りかかった兵が不思議そうな顔をして二人を見る。

マテオは兵を睨みつけ一喝すると、エヴァの背中を押した。

「俺の部屋で話そう」

教官の書斎となっている部屋で、マテオはエヴァに自分の前の椅子に座るように手で示すと口を開いた。

「ちゃんと分かるように説明してくれ。公爵様は、おまえを竜騎兵として自分が指揮する部隊に迎えたいと仰った。普通なら後4年は逆立ちしたって望めない幸運だぞ。竜騎兵って言ったら制服も格好いいもんだぞ。おまえの好きな馬にも乗れるし、確か武器は銃と剣と斧だったと思う」

「はい、とても有難いと思っています。でも……」

「もしかして、怖いのか？ おまえの歳では戦が怖いのは当たり前だ。だが、軍人として成功する為には、それを乗り越えていかなきゃならないんだぞ。アルテュスはどうか知らんが、俺も初めて前線にやられた時は、ちびってしまう程怖ろしかった。でも戦場では頭を空っぽにして上官の命令だけを聞いて動いていれば、そのうち恐怖を感じなくなるんだ。まるで麻痺してしまったようにな」

「はい、ですけど……」

「アルテュスはおまえを一年だけ兵学校に預けると言っていたが、奴だつてこの話を聞いたら喜んで受けるはずだ。公爵は来週にでもおまえを寄こすようにと希望されてるから、奴が戻つて来るのを待つ訳にはいかないが。だから手紙を書いて、奴が港に着いたら直ぐに見れるようにしておこうと……」

ぺらぺらと話し続ける男に、口を挟めない少女は両手を揉み合わせ泣き声を上げた。

「ダヴオグール様……！」

エヴァの様子にマテオは驚いた顔をした。

「どうした？」

「どうか、私の話を聞いてください」

エヴァは立ち上がると頭を下げた。

「今まで貴方を騙していたことをお許しください。私はその話をお受けすることはできません。その理由は……」

「その理由は？」

「いっそう深く頭を下げる。」

「……私が女だからです！」

「……」

何も言わない教官に少女はおずおずと顔を上げた。

「そんな馬鹿な！ 性質の悪い冗談は止したまえ」

男は少女を頭から爪先までジロジロと不躰に見ながら叫ぶ。

「冗談ではありません」

小さな声でエヴァが答え、服の中に隠していた三つ編みにした髪を見せた。

マテオは顔を真っ赤にして立ち上がると、部屋の中をのしのと歩き回り始めた。

「畜生！！！！ アルテュスの野郎、一杯食わせやがったな！！！！」

耳を塞ぎたくなるような暴言を吐きながら、荒々しく目の前を行ったり来たりする教官を、少女は怯えたように見ている。

でも、船長さんが悪いんじゃないわ。

私が望んだことを船長さんは叶えてくれただけ。

勇気を出すと教官の傍に駆け寄り叫んだ。

「ダヴォグール様！！ 悪いのは船長さんではなくて私なんです。私が兵学校に行きたいなんて言ったから……」

マテオはエヴァの前で立ち止まると言った。

「ばれたら俺の首が危ないってことを、あの馬鹿は知っていて……」

「私がダヴォグール様は、何も知らなかったって証言します。罰は私が受けますから」

いきなり大声で笑い出した男に少女は目をぱちくりさせた。

そして、いつか冬の夜に同じように笑っていたアルテュスを思い出した。

やっと笑い止んだマテオは、手を伸ばしてエヴァのふっくらとした頬を抓んだ。

「あの詐欺師め。だからベタバタ触るなどか言っていたんだな」

それから、何かを思い出したように目を細めるとエヴァの顔を見た。

「もしかして、奴が結婚する相手って貴方のことか？」

「……結婚して欲しいと言われています」

エヴァは頬を薄っすらと赤らめて答えた。

「まだ承知していないってことか？ あんな親友を騙す男なんか止めちまえ！！」

「でも……」

「それよりも竜騎兵になった方がよっぽどいいと思うぞ。貴方が奴に惚れているって言うんだったら別だが」

真つ赤になったエヴァを見て、マテオはニヤニヤした。

「凶星か、そりゃ残念だったな」

急に真面目な顔つきになった男は言った。

「冗談はさておき、これから奴が迎えに来るまで一月ある。貴方が女性だと分かった今、知らぬ振りして兵学校に残ることは無理だ。リュスカ公に断るのにもっともな理由を考える為にも、貴方はここにいない方がよい」

「家に帰った方がいいのでしょうか？」

「いや、俺はアルテュスの野郎に二言三言、言いたいことがある。奴が恋人を迎えにのこのこと現れるまで、貴方には俺の屋敷で暮らしてもらおう」

その日の内に荷物を纏めたエヴァは、10ヶ月暮らしたトリポルト陸軍兵学校を去った。

厩と鍛冶屋の小屋に行き、馬丁のブリス、装蹄師のオベル、鍛冶屋のセラファンに別れを告げた。

友達ができてからは、彼らの所に行く回数は減っていたが、それでも別れはとても悲しかった。

俯いてぼろぼろと涙を流すエヴァの肩を叩いた三人は、困ったことがあつたらいつでも力になることを約束してくれた。

エヴァが別れの挨拶をすると、仲良くしていた少年達は羨ましそうに言った。

「竜騎兵になるなんて、エヴァンはいいなあ！」

だが、前広場に送りに出たアルカンは、エヴァの手を握ると言った。

「達者でな。またいつか会えるだろうか？」

少女は少年の緑色の瞳を真っ直ぐに見つめると頷いた。

「今まで本当に有難う。また会えるかどうか分からないけど、君のことは忘れないよ」

広場に止まっている馬車に乗り込むと、既に中にはマテオが座っていた。

馬車が出るとマテオは窓のカーテンを閉めて、向かいに座ったエヴァに布の包みを投げて寄こした。

「これに着替えてくれ」

包みの中は地味なドレスと外套が入っていた。

赤くなって自分の兵学校の制服を見下ろしたエヴァを見て、男は目の前で手を振ってクツクツ笑った。

「いや、制服を脱ぐ必要はないさ。そんなことしたら奴に殺されちまう。上から羽織ればいいんじゃないか？」

ガラガラと揺れる狭い馬車の中で、制服の上になんとかドレスを着たエヴァは溜息を吐いた。

女の格好をするのは、とても久し振りだから何だか変な気持ちだわ。

外套を着てフードを被ったエヴァを見ながらマテオは呟いた。

「何で今まで気が付かなかったんだらうな」

霧雨の降る寒い冬の日の午後、G国陸軍大尉およびトリポルト陸軍兵学校教官マテオ・ダヴォグールの屋敷の前に馬車を乗りつけた者がいる。

馬車が止まるとすぐに跳び降りた男は、迎えに出た屋敷の主人に挨拶の代わりに頭を振ると怒鳴った。

「エヴァンはどこだ?!」

「おい、おい。挨拶もなしにいきなりそれかよ」

肩に手を置いた友人を押し退けるようにすると、アルテュスはぐりりと辺りを見回した。

「ここにいるのか？ それとも学校か？」

「学校だ」

舌打ちして眉を顰めイライラと歩き回る男を、マテオは呆れたように横目で見ながら口を開く。

「先程呼ばせたから、もう着く頃だろう。中に入って待たないか？」

おい、怒っていいのは俺の方じゃないのか？

何でこいつはこんなに不機嫌なんだ？

友人の態度に腹が立ったが、マテオは肩を竦めると、平静を装って穏やかに言った。

「中に入りたまえ。会わせたい人がいる」

「……誰だ？」

「見てのお楽しみだ」

「女か？」

マテオの後について階段を上がりながらアルテュスが尋ねた。

「ああ。俺の大切な人だ」

「ふーん」

友人の言葉にアルテュスは表情をいくらか和らげて言った。

「何とか男爵夫人だったか、人妻は諦めたのか？」

「……まあな」

「そりゃ、よかった」

それ以上言葉を交わさずに二人の男は居間に入った。

壁と高い天井は彩色や彫刻を施した蛇腹で飾られ、右側の壁には大きなタペストリーが2枚掛かっていた。

部屋の奥にある大きな暖炉の両側は窪みになっていて、木のベンチがぐるりと置いてあり、ガラスを嵌めこんだ大きな窓があった。

赤々と火の燃える暖炉の前にはどっしりとした椅子があり、その脇に猟犬が2匹寝そべっている。

二人の足音に、椅子に座っていた婦人が振り向き、びっくりしたように立ち上がる。

ひだ飾りを施し糊をきかせた立て襟をつけた豪華なドレスを纏った女だ。

繊細なレースが女の丸い首を囲み、深い緑色のビロードの胴着がほっそりとした上半身を締め付けている。

同じ色の膨らませたスカートは上の部分は前が開いて金系の縁取りが刺繍されており、下から唐草模様を浮き彫りにした青いブロードが覗いていた。

アルテュスは帽子を取り、すらりとした女をじろじろ見ながら首を傾げた。

嫁入り前の貴族の娘は、絶対に一人で独身男の屋敷を訪ねて来ることはないだろう。

こんな服装をしているが、素性の卑しい女なのか？

それとも奴が、どこからか略奪でもしてきたのだろうか？

女は黒いベールを被っていたが、男達が近付くと顔を覆っているべ

ールを上げた。

頬を薔薇色に染め、悪戯っぽい笑みを唇に浮かべて青い目を輝かせている。

アルテュスは驚愕に目を見開くと叫んだ。

「エヴァ?!!! 何だその格好は!!!」

それからマテオの方を向くと、感情を抑えているような低い声で尋ねた。

「さっき言ってたのは、どういうことだ？」

マテオは、アルテュスの怒鳴り声にビクツとして俯いてしまったエヴァの隣に行くと、彼女の手を取って指先にそっと口付けた。

そしてニヤリと笑ってアルテュスを見る。

「聞いたとおりだ。彼女は一月前からうちで暮らしている。エヴァ、俺のベッドの寝心地はどうか？」

顔色を変えてマテオに掴みかかりそうになった男に気付かず、エヴァは真面目に答えた。

「お陰様で、とてもよく眠れます」

「そういうことか!?!」

唇を噛み締め目をぎらつかせ二人を睨みつけていた男は、吐き捨て

るように言っつて踵を返すと大股に居間を出て行く。

「だが、俺に文句を言う権利はない。未永く幸せに！」

「おい、アルテュス。待てよ！！」

階段を駆け下りる男の後を急いで追うが、顔を強張らせた男は待たせていた馬車にさっさと飛び乗ると門を出て行く。

厩の方に走りながらマテオは悪態を吐いた。

「あの馬鹿男は、冗談も通じなくなっちゃったのか？」

馬具を着けるのもそこそこに馬に飛び乗り、馬車の後を追った。

慌しく二人の男が出て行った部屋で、エヴァはぼんやりと立っていた。

何が起こったの？

どうして、船長さんは出て行ってしまったのだろう？

何だかとても怒っているように見えただけ。

私を迎えに来てくれたのではないの？

文通しているうちに、船長さんのことをよく知っているつもりになっていた。

仲良くなれたと思っていたのに。

とんだ自惚れだわ。

彼の考えていることは全然分らない。

こんなことで結婚なんてできるのだろうか？

エヴァは小さな溜息を吐くと椅子に腰を下ろした。

船長さんが家まで送ってくれないなら、ダヴォグール様に馬車を頼んでもらわなくてはならないわ。

ダヴォグール様は本当に親切な方。

自分の部屋が屋敷中で一番暖かくて居心地がいいからって、私に譲って別の部屋に移ってくださいました。

この衣装だって私には勿体無いつて言ったのに、船長さんの婚約者に召使のような格好をさせる訳にはいかないと仰って。

船長さんは本当に帰ってしまったのだろうか？

ずっと会うのを楽しみにしていたのに。

鼻がつんとして、エヴァは慌てて頭を振った。

やだ、何でこんなことで涙が出てくるのだろうか？

私の姿を見て、結婚するのを止めたくなつたのではないかしら？

馬車を追い越した馬が急に前に躍り出てきて、御者は慌てて手綱を引き締めた。

「アルテュス!!」

息を弾ませながら、馬を下りた男は馬車に駆け寄り扉を開く。

座席の背にだらしなく寄りかかっていたアルテュスは、体を起こすと馬車の中を覗き込んだ男を睨みつけた。

「まだ何か用か？」

「貴様は勘違いしてるぞ。まあ、そう仕向けたのは俺だが。ちよいと仕返ししてやりたくなつたのさ」

「……」

「あの人がずっと俺の部屋で休んでいたのは本当だが、俺は別の部屋に寝ていたのだ。俺を親友の恋人を盗つたりする奴だと思つたのか？ 裏切り者は貴様の方だろ？ 人のことを平気な顔して騙しやがって」

アルテュスは顔を顰めたまま何も答えない。

「とにかく、俺と一緒に戻ってくれ。嫌われたんじゃないかって、可哀想に涙を流していたぞ」

「どうして分かった？」

「何が？」

「エヴァンが男じゃないって」

アルテユスの顔を見てニヤニヤする。

「誰もあの人の裸を見たりしてないから安心しろ。実はな……」

マテオは馬車に乗り込むとアルテユスの隣に腰掛けて話し始めた。

初めはなかなか眉間の皺を緩めようとしなかった男も、饒舌な友人の話にやがて口元を僅かに綻ばせた。

ガラガラと馬車の音が聞こえ、エヴァは窓辺に駆け寄った。

船長さんが戻って来た!!!

慌てて廊下に出て階段を駆け上がり、与えられた部屋に向かう。

早く着替えなくては。

マテオが付けてくれた侍女に手伝ってもらい、急いで着替えていると、誰かが扉を叩いた。

「どなた？」

「エヴァ、俺だ。入ってもいいか？」

焦ったエヴァは大声で答える。

「着替えたらすぐ行きますから、下で待っていてください！」

遠ざかる足音にホッとして、身体を隠す為に搦んだクッションをベツドに戻した。

貴婦人の衣装を脱ぐと兵学校の制服を着る。

この服を着ることはもうないと思っていたけど。

船長さんはこのドレスが嫌いみたいだから。

居間に入って来た少年の姿をした少女を見て、アルテュスは苦虫を噛み潰したような顔をする。

エヴァが前に来ると、眉を顰め顔を逸らしてぼそつと言った。

「さっきは、怒鳴ったりして悪かった」

エヴァが何も言わないので、不安そうな目でちらと見て付け加える。

「……それから、さっきの服、よく似合っていたぞ」

少女が嬉しそうに、輝くような微笑みを浮かべるのを見た男は、胸の中がほっと熱くなるのを感じた。

ティアベに向かう馬車の中、曇った窓を指先で擦り丸い穴を開けて外を覗きながら、エヴァはそつと溜息を吐いた。

向かいには難しい顔をして腕を組んだアルテュスが座っている。

船長さんに話したいこと、会ったら話そうと思っていたことが沢山あった。

仲良くなった鍛冶屋と馬丁と装蹄師のこと、とても大人しいマピュスという名の馬のこと、射撃の練習のこと、公爵様に認められたこと。

そして、やっとできた友達のこと。

だがアルテュスはそのような話には興味がないのか、時折頷くだけでずつと黙っていた為、エヴァは段々口数が少なくなり、最後には完全に口を噤んでしまった。

「エヴァ」

男に呼ばれて少女は窓から離れた。

「結婚の件なんだが」

まあ、やっぱり結婚を止めたくなったのだわ。

そう思ったエヴァはアルテュスの目を避けて頷いた。

「やむを得ぬ事情で数日後に実家に戻らなくてはならなくなった。それで、もし貴方のお父さんが許してくれるのなら……」

エヴァは慌てて遮った。

「絶対許してくれます。頂いたお金は、学校とお父さんの生活費に大分使ってしまったと思いますけど、これから私が働いて少しずつお返しします」

「金？ いや、金なんかどうでもいい。貴方の気持ちが聞きたい」

「私なら大丈夫です。船長さんのお決めになったことが正しいわ。それに、船長さんのお陰で兵学校にも行けましたし、とても有難く思っています」

にっこり笑ってそう答えたのだが、何故か最後の方は少しばかり声が震えてしまった。

「そうか。では、そのようにお父さんに話そう」

その後は二人共黙り込み、車輪の立てる音だけがガラガラと辺りに響いていた。

お父さんはまだ承諾していなかったのだから、船長さんが約束を取り消しても、許すも許さないもないと思うけど。

アルテュスが自分のことをしげしげと見つめている感じがしたので、エヴァは外套に包まり座席の背に寄りかかって目を閉じた。

家に着くまで眠った振りをしていよう。

結婚の話がなくなって、寂しい気持ちになっている自分にエヴァは戸惑っていた。

アルテュスに対する自分の気持ちは、まだはっきりと分からなかった。

会ったのはほんの数回、でもこの一年間、毎日のように船長さんのことを想っていた。

特に初めの頃は、皆に仲間外れにされて、お父さんと船長さんからの手紙が唯一の慰めだったのだ。

でも、これからは、以前のようにお父さんと二人で助け合って生きていこう。

船長さんのことはすぐには忘れられないと思うけど。

あまりにも大きくて印象の強い人だから。

彼のことをもつと知りたいと思ったのは、学校で皆に言われたように彼に特別な気持ちを持っていたから？

それともただの好奇心なのだろうか？

それに、結婚が取り消しになったからって、もう会えないって決まった訳ではないわ。

そんなことを考えながら体を馬車の揺れに任せていると、そのうち

段々瞼が重くなってきた。

外は今にも雪が降り出しそうな天気なのに、エヴァは何故か花の咲き乱れる野原に寝転んでいる夢を見ていた。

「エヴァ、着いたぞ」

耳元で低い声がして、エヴァは小さく身動きした。

とっっても暖かくて気持ちいい。

もう少しこのまま……

「おい、このまま馬車の中で夜を明かすつもりか？」

耳に入った不機嫌そうな声に薄っすらと目を開ける。

「……………えっ？」

自分がどこに頭を乗せて眠っていたのか気が付いたエヴァは、真っ赤になつて飛び起きた。

「う、ごめんなさい！！！！ こんな厚かましいこと」

慌てて後退つて、壁に頭をしたたかぶつけた。

痛む頭を擦りながら、狭い馬車の隅っこに縮まっておろおろしている。

その慌て振りに、アルテュスは呆れたような顔をしながら答えた。

「いや。馬車の揺れで頭があちこちぶつかっていたからな。怪我でもしたら困るだろうと思ってこっぴどしたまでだ」

「重たかったですでしょう？ すみませんでした」

申し訳なさそうに謝るエヴァに頭を振って、馬車の扉を開ける。

「貴方の家に着いたぞ」

エヴァはアルテュスに続いて泥濘んだ地面に降り立った。

屋根に薄っすらと霜の降りた小さな家は、一年前に出て行った時のままだった。

だが兵学校の大きな建物やマテオ・ダヴォゲールの屋敷を見慣れた後だからか、以前よりも小さくみすばらしく見えた。

少女はドレスの裾を泥で汚さないように絡げると、家に向かって転ばないようにそろそろと歩き始めた。

アルテュスは御者に駄賃を払うと、エヴァの後からゆっくりとついて来た。

しんとした空気が凍えるように冷たい。

「お父さん、ただいま帰りました！！」

エヴァの呼びかけに奥からゴンヴァルが答える声がする。

親子二人の再会を邪魔しては悪いと思ったアルテュスは、狭い台所に向かうと木のベンチに腰を下ろした。

辺りは一年前と何も変わっていない。

ゴンヴァルの様子を見に来てくれる近所の者がしてくれるのだろう。台所はきれいに片付いていた。

テーブルに肘をつき頭を抱える。

火の気のない台所は吐く息が白く見えるほど寒かったが、アルテュスはその場所を動かこうとしなかった。

ゴンヴァル殿は許してくれるのだろうか？

この数ヶ月は遠くまで出向いた甲斐があつて、予想以上の儲けがあつた。

商船の積荷はよい値段で売れたし、何よりも他の船と逸れてしまった新世界からの貿易船を略奪できたことが大きかった。

今回は嵐に見舞われることもなく、予定通りクリスマスの数日前に無事ティアベの港に着くことが出来たのだった。

だが海事当局で自分宛の手紙を受け取ったアルテュスは、今までの

陽気な気分が一変に萎むのを感じた。

立ち寄る全ての港で自分を待ち受けていた手紙と同じ筆跡のそれを、イライラと封を切ると乱暴に広げて目を通した。

途中の港で受け取った手紙の内容は、一番初めにティアベで受け取ったものと全て同じだったが、今回のものには当家の一大事についてももう少し詳しく説明してあった。

読み進めていく内に段々と険しい顔つきになったアルテュスは、読み終わると腹立たしげにその手紙を破り捨てたのだった。

今回はどうしても避けられぬようだ。

だが相手の要求を全て鵜呑みにするつもりはない。

こっちも条件を出してやろう。

駄目だと言っならそれまでだ。

家がどうなろうと知ったことじゃない。

海への誓いは神聖なのだから。

そう決心したが、ゴンヴァル殿に反対されたらどうにもならない。

もう、そろそろ様子を見に行っても良いだろう。

アルテュスは、ベンチを大きく軋ませ立ち上がると、ゆっくりと居間に向かった。

パチパチと燃え盛る薪が音を立てている暖炉の前にゴンヴァルは腰掛けていた。

少女は父の足元に座り、その膝に頭を乗せている。

頭巾を被っていない、きちんと結い上げた黄金色の頭を節くれ立った男の手がそつと撫でている。

少女は扉の方に顔を向けていた。

安心しきったように目を閉じて唇には優しい微笑を浮かべている。

それは、まるで絵のように美しい光景だった。

心が温まると同時に何故か懐かしい物悲しい気持ちになる。

暫し黙って見とれていたアルテュスに気付いたゴンヴァルは、頭を下げ挨拶の言葉を述べた。

目を開いた少女は立ち上がり、もう一つの椅子をアルテュスに勧めた。

「ゴンヴァル殿、約束通り戻って来た」

ゴンヴァルは黙って頷く。

「それで、結婚の話なんだが」

「なかつたことにして欲しいということですね？」

やっぱりとても言うように薄っすらと笑みを浮かべたゴンヴァルに、
急ぎ込んで答えた。

「そうではない！ 去年は貴方の了承を得るまでいつまでも待てる
と言ったが、状況が変わったのだ」

部屋を出ようとしていたエヴァは、扉の前で立ち止まって振り向き、
大きな声を出したアルテュスに物問いたげな顔を向ける。

そんな少女をちらと見てからその父親に向かって言った。

「婚礼は結婚告示をしなければならぬし、衣装などの準備も必要
だろうから数カ月後でも構わぬが、来週、お嬢さんを婚約者として
私の家に連れて帰ることを許して欲しい」

エヴァは目を真ん丸くして頬を染め、二人の男を順番に見ている。

その様子を見てアルテュスは苦笑いを浮かべた。

「先程、お嬢さんは結婚することを承諾してくれたと思っていたの
だが、どうやら私の思い違いだったようだ」

ゴンヴァルは咳払いをして答える。

「その状況が変わったと言うのは、どうということなのか、きちんと説
明してください」

暫く黙つて暗い瞳で赤々と燃える火を見つめていたアルテュスは、椅子に座りなおすとゴンヴァルを正面から見て口を開いた。

「船の仕事を始める時に父からかなりの額の金を借りたんだ。いつか、返却できるようになるまでは、家には戻らないと決めていた。でも心の中では永久に返却するつもりなどなかったのさ。今回、実家で不幸が相次ぎ、父からのすぐ戻るようにとの手紙が航海で立ち寄る全ての港で待っていた。最後の手紙には、私に家を継がせることを決めた、その為には結婚することが必要なので、相手も既に決めているようなことが書かれていた」

「でしたら、もう……」

「いや、私は家を継ぐつもりなどなかったんだ。だが、拒否するのだったら貸した金を返せと言ってきた。裁判にかけると脅してきたのだ。出来損ないの次男とはいえ自分の息子にだぞ。全額返すことになれば、私は船を売らなければならない」

「まあ」

二人の傍に戻つて来て話を聞いていたエヴァが、小さな声を漏らす。

アルテュスは肩を聳やかせると話を続けた。

「だから一度家に戻って交渉してくるつもりなのだ。自分の条件を呑んでくれるなら考えてみてもいいという風にな」

不安そうにゴンヴァルが尋ねた。

「その条件とは？」

「第一に私は船を降りるつもりはない。父の商いは信頼できる使用人にも任せればよい。第二に結婚相手は自分で決める。私は貴方のお嬢さん以外の女性を妻とするつもりはない」

「エヴァ、台所に行って呼ぶまで待っていていなさい」

扉に向かったエヴァの耳に入ったのは、父親の怒ったような声だった。

「事情は分かりました。お話によると貴方はご両親とあまりよい関係にないように思われますが、ご家族の許に私の娘を連れて行って婚約者として紹介したいのですね。貴方は彼女の身の安全や幸福を保障できるのですか？」

クリスマスをティアベで過ごした後、エヴァとアルテュスは馬車で雪の道を男の故郷に向けて旅立った。

ティアベから船でラティム海に戻り、ティミリアから馬車で行った方が早いのだろう。

幼子殉教者の日には港に着いていなければならないので、すぐにも出港したかったのだ。

だが、ゴンヴァルを説得できなかったアルテュスは、最後の切り札としてエヴァを連れて行く代わりに『ラ・ソリテア号』を見返りとしてティアベに残すことを申し出たのだった。

それにエヴァを船に乗せるのは少々問題があった。

船乗り達の間では、女は船に災いを招くと固く信じられていたのだ。ガタゴトと進む馬車の中、アルテュスはゴンヴァルとの会話を思い出して、不愉快そうに眉を顰め唇を歪めた。

「気の向くままに貴方が海に出て命を危険に晒している間、あの子を護ることはできないでしょう？ 万が一貴方の身に何かあったら、娘はどうなるのですか？」

「私は船乗りだ。家業を継いでも継がなくても、ずっと妻の傍にいろんことはできない」

「二人の家に残していくのと、あの子をよく思わない人々の中に残していくのでは随分違うと思います。ご実家の方に貴方が留守の間も誰かエヴァの味方となってくれくれる人がいるのでしょうか？」

それならゴンヴァルも自分達と一緒に来たかどうかとアルテユスが提案すると、自分は住みなれた家から一步も動く気はないと返された。

頑固親父めと腹が立ったが、抑えて落ち着いた口調で言った。

「では、私が海に出る時には、お嬢さんにはここに帰って来てもらうようにしたらどうだろうか？」

「一度嫁に出した娘をまたこの家に迎えるつもりはありません」

「だったら、お嬢さんに順応してもらおうしかないだろう！」

声を荒げた男にゴンヴァルは、そのとおりというように頷くと話を変えた。

「港で貴方の噂を聞きました。船乗りの間では勇敢で頼りがいのある船長ということで評判は良いようですね。絶対に娘をやりたくないと思うような話も色々耳にしましたが」

「前にも言ったとおりだ。どんな噂を耳にされたのか分からぬが、妻が私に誠実である限り、悲しませるような真似は絶対にしない」

アルテユスの暗い瞳をじっと見つめて、代書人は最後に言ったのだ。

「私は噂よりも自分の目と勘を信じます。どうやら貴方は信頼できる男のようだ。娘の意見を聞いて彼女に決めさせます」

初めは家に戻ってすぐまた父親を一人にすることを躊躇した少女だったが、最後には頷いた。

自分が留守の間、住み込みで家事をしてくれる人がすぐ見つかった為だった。

クリスマスをアルテュスは『ラ・ソリテア号』の仲間達と騒がしく、エヴァは父と静かに過ごした後、慌しく婚約式を挙げた二人は、ゴンヴァルに別れを告げティアベを発った。

エヴァはこのような長旅をするのは、生まれて初めてなので、前の夜は興奮してなかなか眠れなかった。

その結果まだ午後も早いというのに、欠伸を噛み殺し、頭を振ったり頬を抓ったりして眠気と戦っているようである。

向かいに座った男はその様子を面白そうに眺めている。

絶対に認めたくはなかったが、ひとりで実家に戻ることを少しばかり恐れていたのだ。

自分が不幸な幼年時代を過ごした家。

エヴァとの結婚をゴンヴァルに許してもらえたことで、幸先がいいのではないかと思ってしまう。

「眠っていいぞ。どうせ夜にならなけりや宿屋には着かないのだから。この前のように膝を貸そうか？」

最後の言葉は半分冗談だった。

「い、いいえ、結構です！ こうして休みますから」

顔を赤くしてそう言った少女は、外套に包まると木靴を脱いで座席の上に丸くなった。

家にいた時と同じ質素な服を身に着け頭巾を被った姿は、エヴァを歳よりも幼く見せていた。

丸い腰の線と服の裾から覗いている裸足の小さな爪先を見ながらアルテュスは考える。

確かにその方がいいだろう。

船の上で色々想像してしまっただお陰で、こんな純情そうな姿にも惹かれてしまう。

だが我慢しなけりやならないぞ。

俺はこの娘の父親に結婚式を挙げるまで絶対に手を出さないと誓ったのだから。

一緒に旅をしていたら、他の女で性欲を発散させる訳にもいくまい。

畜生、俺にいつまで禁欲生活を続けさせるつもりなのか？

まるで、イエズス会の修道士にでもなっちまった気分だぞ。

父と呼ばれアルテュスと結婚したいのかどうかを尋ねられた時、初めは断るつもりだった。

嫌いではなかった。

信頼できる頼もしい男性と思っていた。

何を考えているのかよく分からないこともあるけれど。

彼のことをもっと知りたいとも思っていた。

同時にこの男を恐れる気持ちも少しばかりあった。

不機嫌そうにされると不安になり、声を荒げられるとハラハラした。

彼の妻になれば、今までのような静かな暮らしは到底望めないだろうと思っていた。

外の世界にはとても興味があつたし、彼と一緒にいることで少しだけ彼とその仲間達の冒険に参加している気持ちになれた。

一緒に暮らせば面白い話を毎日聞かせてもらえるだろう。

しかし、病気の父をひとり残して自分だけ楽しい思いをするつもりはなかった。

既に兵学校に行っている間、父に寂しい思いをさせたことを申し訳なく思っていたのだ。

それが例え、父のことを護る為であっても。

だが実際に家に戻ってみると、父親は自分のいない生活に慣れてしまっていた。

エヴァは自分の居場所がなくなった気がして、元に戻るのに時間がかかった。

数ヶ月前から住み込みで家事を仕切っていた女は、エヴァが戻ると家を出たが、どうやらゴンヴァルは彼女を引き取りたがっているようだ。

その女は数年前に農夫だった夫と子供を病で亡くし、農家を一人で続けて行くことが出来なくなり、全て売り払って兄の家に身を寄せていた。

それは母を失ってからずっと父と二人で暮らしてきたエヴァにとって、少なからず衝撃的なことだった。

だが数日考えると冷静に結論を出すことができた。

お父さんはお母さんが亡くなってからずっとひとりで私を育ててくれたんだもの。

これからは自分の為に生きて欲しい。

もしその女の人と幸せに暮らせるのなら、私が反対する理由はないわ。

そして、父が必要としているのは自分ではないと気付いた少女は、アルテュスと一緒に行くことを選んだのであった。

馬車が宿駅に着いた頃には、既に日はすっかり暮れていた。

大きな看板の架かった古い建物からカンテラを持った召使が走り出てきて、玄関までの道を照らしてくれる。

アルテュスは馬車の駄賃を払うと、召使に荷物を部屋へ運ぶように言いつけた。

広間には白い前掛けをした赤ら顔の亭主が、両手を擦り合わせながら出迎える。

「いらつしゃいませ！！ さ、さ、どうぞこちらの暖かい席にお座りください」

二人は外套を脱いで壁の釘に引つ掛けると、長いベンチに座っている人達が空けてくれた暖炉前の席に腰掛けた。

日が暮れてからは結構冷え込んできたので、暖かい火が有難かった。

すぐに熱い豆のスープとパンが運ばれてきて、エヴァは思わず喉をごくりと鳴らした。

アルテュスは肉の料理と酒を注文しているようだ。

昼は馬車の中で家から持ってきたパンとチーズで済ませたので、二人共大層腹が減っていたのだ。

やがて、串に刺して暖炉の中で丸焼きにした若鶏が運ばれてくると、アルテュスは柔らかかそうなところをエヴァに切ってくれたが、残りは殆どひとりで平らげてしまったので、周りの人々は目を丸くしていた。

「素晴らしい食欲ですね!!」

油の滴る腿肉の骨の部分を手で掴み、白い歯で食いちぎる男を眺めながら、前に座った商人風の中年男が感嘆の声を上げた。

「若い人は羨ましい。私は数年前に胃を病んでからさっぱりなんですよ。全然食欲がないんです。酒も飲めなくなってしまうましたし」

「そりやつまんないな。俺は酒が飲めなくなったら死んだ方がましだな」

テーブルの端に座った髭面の傭兵と思われる男が大袈裟に顔を顰めながら言った。

「お二人は兄妹でしょう?」

商人が尋ねると、アルテュスはふんと鼻を鳴らした。

「可愛らしい妹さんで」

アルテュスは男を睨みつけると、テーブルに着いている男達をぐるりと見回して凄みを利かせた声で言い放った。

「いいか？ こいつに手を出す奴は誰であろうと絞め殺す」

一瞬あつけにとられた一同は、小さな妹を護る大きな兄を微笑ましくと思ったのか、頷きながら相好を崩した。

自分の妹でも思い出しているのか、商人風の男が目を潤ませ鼻を噉って尋ねる。

「それで、お二人はどこまで行かれるのです？」

水で割った酒のコップを両手で包むようにして温めていたエヴァは、問いかけるように隣の男の顔を見上げる。

肉の最後の一切れをパンと一緒に口に入れ、酒で流し込みながらアルテュスは答えた。

「東に向かっていているのだが、最近この地方を旅した者はいるか？」

商人の隣に座っている若い男が手を上げた。

役者が音楽家だろうか？

薄汚れた宿屋には不似合いな洒落た格好をしている男だ。

「道はどんな具合だ？」

「数日前に僕らが通った時は、まだ雪はそんなに深くなかったので順調でした」

連れの男が付け加える。

「この調子だと今夜は雪は降らないだろうし大丈夫だと思いますよ。それに……」

傭兵が遮った。

「それより更に東北に向かうのだったら気をつけられた方がいいぞ。セールの辺りでは、どうやら新教徒の暴漢らが村を焼き討ちにするのが流行っているらしい」

「今年の春に両軍は条約を結んだのではなかったか？」

「そんなのは紙の上だけの話だよ。都で耳にした噂なんだが、サン・アノエ公が傭兵を募集しているそうなんだ。実は自分もこれからジュアンの町に向かうところなんだが」

それから男はアルテュスの逞しい肩や腕をジロジロ見ながら残念そうに言った。

「妹さんがいなければ、あんたも俺と一緒に行って一旗揚げられるのにな」

「いや、彼女が一緒じゃなくても行く気はない。敵がはつきりしていない戦は嫌いなんだ」

傭兵は酒瓶を持って立ち上がるとアルテユスの前に来た。

「敵ならばつきりしているじゃないか。新教徒は皆、殺すべき敵だ」

「女子供を殺害するのは、戦とは言わないだろうか？」

男は疑い深そうに目を細めるとアルテユスとエヴァを代わる代わる見た。

「おい、もしかしておまえらは奴らの仲間か？」

ガタンと音を立てて、立ち上がったアルテユスにエヴァが驚いて叫び声を上げる。

「船長さん、喧嘩は止めてください！！」

自分の袖に縋っている少女を見下ろすと、アルテユスは大きく息を吐き、腰を下ろした。

「そうですよ。ご婦人の前では喧嘩なんかするもんじゃありませんよ」

二人の大男が敵意を露に立ち上がったのを見て、役者達は逃げ出そうと腰を浮かしかけていたが、商人風の男はのんびりとした口調で宥めるように二人に言った。

「船長さんと呼ばれているということは、もしかしてお仕事は船乗りですか？」

「そうだ」

「海では今陸で起こっているような戦はないんでしょうね？」

大分落ち着いたアルテュスは、商人の質問に答えている。

「海では敵がはっきりしているから、良心がとがめることはない」

商人はアルテュスの職業に興味を持ったようで、色々と尋ねてくる。

アルテュスは辛抱強く質問に答えていたが、エヴァが眠そうにしているのを見ると言った。

「明日も早いので、寝に行くぞ」

「私達ももう引き上げましょう」

男は役者達にも声をかけ、一同は亭主に挨拶すると広間を出た。

真っ先にエヴァと廊下に出たアルテュスには、酒瓶を振りながらひとりテーブルに残った傭兵が呟いている言葉は聞こえなかった。

「船長だって？ 奴は海軍の脱走兵じゃないのか？ あの女が妹つてのも絶対怪しいぞ」

怖い兵隊さんと顔を合わさなくて済むようにと、まだ暗いうちに隣のベッドを抜け出したエヴァに起こされたアルテュスは、顰め面で広間に下りてきた。

馬車の準備ができるまでの間、昼に食べるパンやパテなどをバスケットに詰めてもらい簡単な朝食を取る。

不安そうに廊下の方をちらちら見ていたエヴァは、馬車の座席に座るとやっと笑顔になった。

雪は降っていないが、昨日よりも気温が下ったようで、馬車の中でも吐く息が白い。

どうやら窓も凍ってしまっているようだ。

エヴァは自分の外套に包まっていたが、寒くて仕様がなかった。

向かいに座り、少女の隣に脚を投げ出した男は、帽子を目深に被り眠っているようだ。

座席の上に膝を抱えて蹲り、頭から外套を被って震えていたエヴァが、くしゅんと小さなくしゃみをした。

馬車の立てる騒がしい音に掻き消されてしまったが、僅かな物音にも敏感な海の男の耳には入ったようで、アルテュスは帽子を引き上げるとエヴァの方をジロリと見た。

「寒いのか？ 風邪でもひかれたら厄介だな」

そして、自分の体にかけていた大きな外套を持ち上げると言った。

「こっちに来い。温めてやる」

「大丈夫です！！」

真っ赤になって、ぶんぶんと頭を振るエヴァに男は繰り返した。

「早く来い。病気にでもなられたら迷惑だ」

それでも動こうとしない少女に痺れを切らしたアルテュスは腰を浮かした。

「来ないんなら俺がそっちに行く」

エヴァの隣にどっかりと腰を下ろすと、隅に縮こまった少女を引き寄せる。

膝の上に抱き上げて、自分の外套に入れてやった。

少女の頭を自分の胸に押し付けると、怯えさせないようにそのままじっと動かない。

そして、絶対にもう眠れそうもなかったが、眠っている振りをした。

自分の心臓の音が馬車の中に反響しているようだ。

恥ずかしくて顔を上げられない。

エヴァはアルテュスの膝の上で、俯いてじっと息を潜めていた。

そのうち息が苦しくなり、ふうと大きな吐息が出てしまった。

男がびくともしないので、少し安心して体の力を抜いた。

私は船長さんの婚約者なんだもの。

何も怖がることはないだろう。

暫くすると、男に触れている部分から段々体が温まってきた。

もう降りた方がいいのではないだろうか？

でも動いたら起きてしまつかしら？

そっと離れようとする、男は低い唸るような声を出す。

「動くな」

エヴァはビクリと体を硬くすると悲鳴を飲み込んだ。

アルテュスが裾から出ていた自分の足を掴んだのだ。

そして黙って冷え切った爪先を大きな掌で包むようにして揉んでい

指にはしもやけができているのか、ジンジンと痛かった。

エヴァは羞恥心に押し潰されそうだった。

心臓はドクンドクンと妙な具合に鼓動しているし、頭に血が上ってぼーっとして何も考えられない。

何かに縋らないと崩れ落ちてしまいそうだ。

自分が何をしているのか、よく分からないまま、遅しい胸に寄りかかり男の服の襟の辺りを掴んで握り締めていた。

急に座席の上に投げ出されたエヴァは、びっくりしてアルテユスの顔を見上げた。

不機嫌そうに眉を顰めた男は、自分の外套を怯えている少女の上に放り投げると、向かいの座席に座りそっぽを向いた。

暫く戸惑ったように重い外套を抱えてアルテユスの方を見ていたエヴァは、おずおずと口を開いた。

「何か気に障るようなことをしてしまったのなら謝ります。でも、これ着ないと船長さんが風邪ひいてしまいますよ」

ちらと少女の方を見ると不貞腐れたような顔で頭を振る。

「いや、謝らなくてもいい。余計なことをして済まなかった。着ていなさい、毛皮の方が温かいだろう」

エヴァは自分の外套を脱ぐと、それを丸めて男の膝の上に置いた。

「だったら私のを使ってください」

そして、顔を赤らめると口早に付け加えた。

「船長さんのお陰で温かくなりました。ありがとうございます」

アルテュスは横を向いたままで答えなかったが、厳つい顔が少しばかり和らいだように見えた。

その日は凍った道を一日東に向かい、暗くなってからやっと泊まる予定の町に辿り着いた。

宿の者に案内されて煤けた広間に入ると、煮込んだ塩漬けキャベツの匂いに包まれた。

エヴァは思わず鼻に皺を寄せたが、アルテュスは嬉しそうな顔をした。

本日のおすすめ料理なのだろう。

細長いテーブルは旅人達でいっぱい、皆、山盛りのキャベツと塩漬けの豚の脛肉にかぶりついている。

やがて自分達の前に運ばれてきた料理を見て、エヴァは首を傾げた。

皆が食べている煮込み料理の他に、直火で焙った分厚いハムと生の塩漬けキャベツがあっただのだ。

「キャベツの匂いが苦手なら、生の方を食べたらいい」

そう言ったアルテュスは黒パンを二切れ取ると、マスタードを塗り、ハムとキャベツを挟んでエヴァに差し出した。

そして自分にも同じものを作りながら、子供のような顔をして笑った。

「俺の好物だ」

両手でパンを持ったまま、その顔に思わず見惚れていたエヴァは、アルテュスに促されてやっと食べ始めた。

表面をカリッと焼いた柔らかいハム、シャキシャキの酸っぱいキャベツにピリツとしたマスタードがよく合って、とても美味しかった。

「とっても美味しいです」

少女がそう言うと、男は自分もパンを頬張りながら嬉しそうに答えた。

「美味いだろ。船の連中は、もう塩漬けキャベツはうんざりだと文句を言っているがな」

食事が終わると、アルテュスは同じテーブルの者に酒を振舞うよう

に亭主に言いつけた。

これから向かう地方について詳しく聞きたかったのだ。

腕っ節には自信があるので、恐怖心は微塵もなかったが、エヴァを少しでも危険な目には遭わせたくないと思っていた。

ご馳走様と杯を掲げながら、鋭い目付きをした中年男が口を開いた。

「この季節にご婦人連れで旅をするのは大変だろう？」

「やむを得ない事情があるのだ」

アルテュスに行き先を聞いた男は、顎をぽりぽり掻きながら言った。

「東北に行かれるのなら、ルーゲンの町までは比較的安全だと言える。あの町は公爵様の領地にあるからな」

男が公爵様と呼ぶのは、王の弟君のボワイエ公のことである。

「そこからは多分、警護の兵を雇っていかれた方がいいだろうな」

男の言葉に頷いたアルテュスは、旅人達を見回して尋ねた。

「最近、都に行つた者はいるのか？」

「あなた達の来る前にここを発つた巡礼者達は都からと言っていたな」

「都から入ってくる情報はあまり面白くないものばかりだぞ」

「我が国の王は名ばかりの王だからなあ。成人されても一人前と認められてないそうだし」

「病気がちの方だし、それも仕方ないのだろうな」

「外国人の母后様と腹黒い大臣に実権を握られているとは、あまりにも情けない。もう、この国もおしまいだな」

「貴族達が殺し合いをするのは別に構わんが、新教徒との争いで国中が不安定になってるだろう。これじゃ安心して商いもできないし、隣国にどんどん追い抜かれていくだけではないのか？」

男達の話を目を丸くして聞いていたエヴァだったが、政治のことは良く分からないしあまり興味もない。

それよりも、少し前から部屋の隅でテーブルに背を向けて座っている男が気になっていた。

そっとテーブルを離れるとそちらに歩いて行く。

長い白髪を後ろに束ねた髭面の老人が、前に座った若い男の似顔絵を描いていたのだ。

「こんばんは。見ていてもいいですか？」

画家が頷くのを見て、エヴァはベンチの端に腰を下ろした。

老人の節くれ立った指が膝の上に広げた紙の上を踊り回り、驚くような速さで目の前の男の顔が現れてくる。

出来上がった絵を手渡されると、男は感嘆の声を漏らし懐から硬貨を出して老人の手に握らせた。

「あんたの番だよ」

画家に前の椅子を示されたエヴァは慌てて頭を振った。

「お金を持ってないの」

「金はいらない。わしがあんたを描きたいんだ。可愛い娘っ子を描くのは本当に久し振りなんでね」

嬉しそうに頬を染めたエヴァが前に座ると、老人は膝の上に新しい紙を広げ、木炭を手を取った。

暫く黙ってじつと少女の顔を見つめている。

納得したように大きく頷くと、素晴らしい勢いで紙の上に手を走らせ始めた。

エヴァはどんな絵が描かれているのかとても興味があったが、我慢してじつとしていた。

いつの間にか画家の後ろにアルテュスが立っていた。

「可愛らしいでしょっ?」

老人の言葉にアルテュスは黙って頷くと、絵をエヴァに差し出した。

「まあ、鏡を見ているみたい！」

少女は鏡というものをマテオ・ダヴォグールの屋敷で、生まれて初めて見たのだった。

自分がどんな顔をしているのかは、水桶に映したりして知っていたが、こんなにはつきりと見たことはなかった。

まるで鏡の中に入り込むようにずっと自分の姿を眺めていて、マテオに散々からかわれたのだった。

画家は金はいらないと断ったが、アルテュスは銀貨を一枚材料費だと渡し、どこから来たのかと尋ねた。

ある貴族のお抱え画家として長年暮らしていたが、肖像画ばかり描くの嫌気がさし、十年ほど前のある日、家を出て修行の旅に出たそうだった。

だが結局、食べていく為にこうやって旅の途中の宿屋で客の似顔絵を描いては、少しばかりの金を稼いでいると笑った。

部屋に向かう階段の途中で、描いてもらった絵を大事に抱えながらエヴァは後ろにいるアルテュスを振り返って言った。

「これ、お父さんへのお土産にするわ」

船長さんの様子がおかしい。

少し前からエヴァは、隣に座ったアルテュスを気遣わしげにちらちらと見ていた。

馬車の揺れにもびくともしないその大きな体から、ピリピリするよ
うな緊張感が漂って来るのだ。

だがその目には重い瞼が垂れ下がり、まるで眠っているように半分
閉じられている。

眠っているのかしら？

病気じゃないわよね。

二人の前の座席には、昨夜泊まった宿駅でアルテュスが雇った傭兵
が座っている。

中肉中背だが敏捷そうな体つきをした、楔のような尖った浅黒い顔
の若い男である。

男は先程から落ち着きがなく、貧乏揺すりをしながら、度々馬車の
窓から外を窺っている。

アルテュスの様子がおかしいことには気付いていないようだ。

今朝、宿屋を発ってから、わざとらしい笑い声を上げながら、ひっ

きりなしにアルテュスに話しかけていたのだが、相手が眠ってしまったと思っただのか、少しばかり肩の力を抜いたように見えた。

エヴァに口を利くことを禁じられていた男は、雇い主が眠り込んだと見ると、少女の方を向いた。

男は少女に歯を剥き出して笑いかけ、身を乗り出すようにすると、自分の懐に手を入れた。

エヴァも微笑もうとしたが、男の目を見た途端、何故か背筋がぞくりとして腕に鳥肌が立つのを感じた。

.....!!!!

一瞬、何が起こったのか分からなかった。

エヴァは飛び起きた大男によって馬車の隅に弾き飛ばされた。

ぶつけた腕を擦りながら慌てて起き上がると、恐怖に目を見開いた。

薄暗い馬車の中では二人の男が揉み合っている。

傭兵の手に短剣が握られているのを見たエヴァは真っ青になった。

体格的にはアルテュスの方が有利なのだが、何しろ大きな男だ。

狭い馬車の中では十分に動けないのである。

アルテュスが体勢を立て直した時、傭兵の腕が自由になり、短剣の鋭い刃がエヴァの隣のカーテンを切り裂いた。

少女が小さな悲鳴を上げ、次の瞬間、アルテュスに頭突きを食らわされた男は意識を失い床に崩れ落ちた。

「怪我はないか？」

唇が震えてどうしても声が出せず、エヴァは蒼白な顔で男を見上げると頷いた。

「その袋を取ってくれ」

重い麻の袋には、荷造りに使う縄の余った分が入っている。

アルテュスは座席の間でやっとのこと男をつつぶせにすると、敏速に縄で腕と脚を縛った。

「絶対解けない結び方だ」

そう言って安心させるようにエヴァに頷いて見せたアルテュスは、腰から短銃を取り出すと少女に差し出した。

「何があっても貴方を護る。だが、もし馬車の扉を開けるものがいたら躊躇せずにつつ放せ」

そして自分ももう一丁の銃を手に取ると、御者に聞こえるように座席を蹴飛ばし大声で怒鳴った。

「おい、聞こえるか?! 罠に嵌められたようだ!! 気をつける
!!--!」

御者の驚いたような叫び声が聞こえ、馬車が大きく揺れて止まった。アルテュスは素早く片手で窓のカーテンを閉じた。

馬の嘶きと男の怒鳴り声に続き、バタバタと走り回る足音がして同時に左右の扉が開かれた。

エヴァは銃を構えたまま凍りついたように動けなかった。

黒い影が襲い掛かってきて、悲鳴を上げようとしたが掠れ声しか出なかった。

「エヴァ、撃て!!!」

指が動かない。

誰かに乱暴に肩を掴まれ、少女は身を竦めて目を閉じた。

その瞬間、辺りに銃声が轟いた。

馬車に乗り込もうとしていた男は、驚いたような顔のまま暫く立っていたが、やがて仰向けにひっくり返った。

その様子を眺めながらエヴァは、両手に銃を抱えたまま、放心したように座り込んでいた。

足元では漸く気がついた男が悪態を吐いて起き上がろうとしている。

外に飛び出したアルテュスが扉を閉めていったので何も見えないが、どうやら戦いは続いているらしく、慌しい足音や金属のぶつかり合う音が響いている。

反対側の扉は開いたままで、身を切るような冷たい風がヒュウと音を立てて入ってきた。

扉を閉めなくてはと思うのだが、立ち上がることができず、エヴァは座ったまま震えていた。

縛られた男は暫く喚きながら暴れていたが、縄を解くことはできず、今は大人しくなっている。

そのうち、エヴァは外からの物音が消えているのに気がついた。

船長さんはどうしたのだろうか？

様子を見に行ったほうがいいのかしら？

アルテュスの身に何かあったらと思うと、怖ろしくて口から悲鳴が漏れそうになる。

急に近くで男の話し声がした。

続いて、馬車の後ろを回って歩く足音が聞こえ、開いている扉にアルテュスが姿を現した。

「大丈夫か？」

普段と変わらないその顔、その声に、張り詰めた糸が切れたようにエ

ヴアは、ぼろぼろと涙を流してしゃくり上げた。

腕に怪我をした御者の代わりにアルテユスが手綱を握り、捕らえた暴漢達を乗せた馬車は、その日の午後遅く泊まる予定のなかった町に着いた。

宿屋に着くと、亭主に言っ行政官と医者呼びに行かせ、自分達は広間に腰を落ち着けて食べ損なつた昼食を注文した。

久し振りに体を動かして腹が空いたと、串刺しの肉にかぶりついていたアルテユスは、ふと顔を上げエヴァが何も食べていないのが気がついた。

「気分が悪いのか？」

「……………」

泣いた所為で目元は赤いが、顔色は悪く目の下には隈ができている。

「エヴァ」

ずっと前を見たまま動かない少女の肩に手を置くとビクツとして、怯えたような顔で見上げてきた。

アルテユスは顔を顰めた。

迂闊だった。

泣き止んでから町に着くまで、御者の世話を甲斐甲斐しくして元気に振舞っていたから、大丈夫だと思ったのだ。

いくら兵学校に行ったからって、戦に慣れている筈などないのに。

生まれて初めてあんな目に遭って、どんなに怖ろしかったのだろうか？

「おいで」

動かない少女に優しく言った。

「ほら」

腕を取って立たせると、殆ど抱えるようにして階上の部屋に連れて行く。

通り際に宿屋の女房に蜂蜜を入れた熱い葡萄酒を一杯、上に持って来るように頼んだ。

寝室には広間の暖炉に繋がっている煙突が片隅にあり、煉瓦で囲われたその場所は大層暖かった。

アルテュスは外套を床に敷くと、煉瓦の壁に寄りかかるように座り、自分の膝の間にエヴァを座らせた。

少女はまるで人形のように抵抗もせずに男の腕の中に納まった。

「怖い思いをさせて悪かった。最近では宗教戦争で治安が悪化してい

るのを利用して悪事を働く奴らがいるのだ。しかし、まさか奴らがぐるになってあんな所で待ち伏せをしているとは思わなかった」

台所の小僧が温めた酒を持ってきたので、アルテュスは懐から小袋を出すと、中に入っていた紙に包んだ香辛料を注意深くコップに注ぎ入れた。

胡椒や肉桂、チヨウジなどを粉末状にしたものである。

ナイフの先でかき混ぜると湯気を立てているコップをエヴァに差し出した。

「ほら、これを飲んでみる」

少女は両手でコップを受け取ると呟くように礼を言う。

「俺が人選を誤ったのも悪いのだが、あの愚かな雇兵のお陰で罫を予測することができたからな。奴は今、俺に雇われたことを猛烈に後悔しているだろうが」

そう言って小さく笑ったアルテュスにエヴァは頷いた。

熱い酒を一口飲むと、胸の中が温かくなり、ホッと息を吐いた。

アルテュスの気遣いが嬉しかった。

船長さんは私を護ってくれる。

大事にしてくれる。

でも、私は何も出来なかった。

自分自身を護ることも。

船長さんを助けることも。

撃てと言われたのに、襲ってくる男に向けてどうしても引き金が引けなかったのだ。

撃たなければ殺されていたのに。

結果として自分の代わりに船長さんにあの男を撃たせてしまった。

「…………ごめんなさい」

声が震える。

役に立たなくてごめんなさい。

意気地なしでごめんなさい。

私を護る為に貴方の手を汚させてしまっでごめんなさい。

「謝ることなど何もないぞ」

アルテュスはそう言うと、エヴァの顔を覗きこんだ。

ぼろっと零れた涙を優しく指で拭ってやる。

そんなことを気にして泣いているのか？

いじらしくて堪らなくなり、思わず自分の胸に頭巾に包まれた小さな頭を抱き寄せていた。

「エヴァ」

「今度は逃げたりしない。ちゃんとするから……」

アルテュスは頭を振ると、見上げてくる青い瞳を見つめ、震える唇に指をあてて黙らせる。

「俺が絶対に護るから。だから、できれば今日のことは忘れてくれ」

俺の為に良心の呵責を感じる必要はないんだ。

「ありがとう」

そう言って無理に微笑んだエヴァの白い額にそっと口付けた。

雪の積もった小道を息せき切って走る男がいる。

足跡がずっと雪の上が続いているところを見れば、男は背後に聳え立つ古びた塔から出てきたようだ。

塔の階段にでも落としたのだろうか頭に帽子はなく、赤茶けた髪が風に靡いている。

厚い毛の外套を身に纏い腿までの長靴を履き、寒さで頬と鼻を赤くした若い男だ。

やがて屋敷の門を潜った男は、二段跳びで階段を駆け上がる。

そして忙しく息を吐きながら、二階の廊下の一番奥の部屋をノックした。

「入れ」

暖炉に燃えさかる火に照らされた部屋は、天井が低く濃い茶色で纏められている。

暖炉の前ではチェスボードを間に向かい合っていた二人の男が、家来の方を向いて話すように促した。

「あの男が着きました!!」

二人の男の容姿はまるで鏡を見ているようにそっくりだ。

熊のような大きな体、下膨れの顔に短い金髪、狡猾そうな小さな黒い目をしている。

同じように鼻に皺を寄せた二人はそろって唸り声を上げた。

「そうか、とうとう来たか！」

左側に座っている方が、手にした駒をことりとボードに置き、口を歪めて笑い声を漏らす。

「チエツク」

「おい兄貴。遊んでいる場合じゃないぜ」

負けた方は駒を手で払い除けると立ち上がり、窓辺に歩み寄った。

「負けを認めないのがおまえの悪いところだなあ」

椅子に座ったままの男はそう言うと、家来に向かって尋ねた。

「それで、奴はどんな感じだった？」

「若い女と一緒にでした」

「女だって？ 奴の妻だろうか？」

「いえ、召使だと思います」

「召使？ ああ全ての雑用をこなす女中ってことだな？」

全てを強調してそう言った男はニヤリとすると、数分しか歳の違わない弟に向かって呼びかけた。

「さあ、こつちに来たまえ兄弟。やっとこの20年間待ち望んでいた機会がやってきたのだ」

弟は兄の前に座ると、チェスボードの上に手を組み合わせ、黒い目を光らせて言った。

「復讐か。ゾクゾクする言葉だな」

男の後に続いて馬車を降り立った少女は、中世を思わせる造りの城を目を丸くして見上げている。

まあ、まるで御伽噺に出てくるようなお城だわ！

船長さんは小さい頃こんなお城で暮らしていたのね。

男が振り返りもせずはずんずん歩いていってしまうのに気がつき、慌てて後を追いかける。

あの事件の後は何事も起こらず、旅は順調だったのだが、数日前から酷く機嫌が悪くなった男に気を使って疲れてしまった。

一日中、馬車の中でも食事中も口を利こうとしなかった男に、我慢できなくなり理由を尋ねたのだ。

「貴方の所為ではない。放つといってくれ」

吐き捨てるようにそう言われ、エヴァは泣きたくなった。

船長さんのことが分からない。

この間まではとても優しかったのに。

何故怒っているのか分からないけれど、こんな顰め面を見ていたら食事も美味しくないわ。

「彼女を部屋に案内してやってくれ」

物思いに沈んでいた少女はアルテユスの声で我に返った。

男の隣には白い頭巾を被り、コルセットで胸を締め付けた鼠色の服を着た若い女が立っている。

エヴァのことを頭の天辺から爪先まで、ジロジロと見ていた女が澄ました顔で言った。

「どつぞこちらへ」

召使の後について歩きながら少女は辺りを見回した。

暗くてあまり良く見えないが、石の壁は豪華なタペストリーで覆われているようだ。

薄暗いホールから階段を上がると広い踊り場があり、正面には両開きの扉があった。

「少々こちらでお待ちください」

扉の脇にある、肘掛と足の部分に動物を彫った木のベンチをエヴァに示しながらそう言くと、女はノックして部屋に入って行った。

エヴァはベンチに腰を下ろし、両手でスカートの皺を伸ばした。

少しばかり心細くなった少女は、背筋を伸ばして大きく深呼吸をする。

すっかりしなくては。

これから新しい家族に会うのだから。

十年振りに足を踏み入れた我が家は、何も変わっていなかった。

薄暗い廊下も、軋む扉も、湿っぽい部屋の匂いも、自分が子供の頃に嫌で堪らなかった陰気な空気もそのままだ。

あの頃のやるせない気持ちや反抗心まで蘇ってきそうだった。

アルテュスは案内された部屋のベッドに仰向けに寝そべると、暗い天井を見上げて考えた。

まだ、父とは顔を合わせていない。

食事の時まで、挨拶をしに行くつもりはなかった。

父からの手紙で、一年前の流行病で母と兄、弟と妹二人が亡くなったことを知っていた。

兄以外の兄弟とは遊んだ記憶もなかったし、死んだと聞いても悲しい気持ちは起きなかった。

けれども母にはちゃんと別れを告げたかった。

横暴な性格の父に長年連れ添い、多くの子を産んで育てた母は、幸せだったのだろうか？

仕事で留守がちの父には怒られた記憶しかない。

そういう時、母は自分を庇ってはくれなかった。

でもそれでも、少しばかりは気に留めていてくれたのではないのか？

そうであって欲しいとずっと願っていたのだ。

もう確認することもできなくなってしまった。

アルテュスは苦笑いを浮かべると起き上がった。

何を女々しい気持ちになっっているのだ。

物悲しい角笛の音が響き渡る。

それは、食事の準備ができたことを知らせる合図だった。

風呂に入り、旅で汚れた服を着替えたアルテュスは、重々しい足取りで食堂に向かった。

口元を引き締め、眉間には深い皺を刻んでいる。

広間に入ったアルテュスは、既にテーブルに着いている父親に向かって頭を下げた。

頬がこけ髪と髭にも白いものが多くなったが、その鋭い眼差しや驚鼻、力強い顎は記憶のとおりだった。

長細いテーブルにはずらりと子供達が並び、帰ってきた兄を好奇心に満ちた眼差しで見上げている。

そして父親の隣には見覚えのない中年の婦人、それから反対側には若い婦人が座っている。

召使に案内され若い婦人の前に座ろうとしたアルテュスは、父親の言葉に眉を潜めた。

「私の妻とおまえの婚約者だ」

アルテュスは二人の女を見た。

では、父は母が死んでから一年もしないうちに再婚したのか。

そして、俺の婚約者だと？

テーブルにエヴァの姿はない。

「私と一緒にここに来た女はどうした？」

「貴方の女中のことでしたら、台所で食事を与えています」

そう答えた中年の女性をじろりと睨んだアルテュスは、父に断ると席を立ち扉の方に足早に向かった。

「私を待たないで、先に食事をしていてください」

台所への階段を下りながら、アルテュスは自分に腹を立てていた。

自分のことばかり考えていて、エヴァのことをすっかり忘れていた。

知らない家に連れてこられて、召使と一緒にされ、心細くて泣いているのではないか？

護ってやると約束したのに、俺はいったい何をやっているんだ？

台所に近付くと、ざわざわとした喧騒の中に誰かが詩を朗読しているような声が聞こえてきた。

既に食事の終わった使用人達がテーブルの隅に集まって何やらしているようだ。

楽しそうな笑い声も聞こえる。

ご主人様の食卓とは偉い違いだなと苦々しく思いながら、男は台所の中を覗いた。

入り口に立ったアルテユスの所からは、エヴァの姿は見えなかった。しかし、次期当主に気付いた者が驚いた声を出し、皆がアルテユスの方を見た。

皆が体を起こしたお陰で、真ん中に座っている少女の頭巾が見えた。驚ペンを手に握り、何か一生懸命に書いているようだ。

「エヴァ」

アルテユスが声をかけると少女は顔を上げ、嬉しそうに微笑んだ。

「そんな所で何をしている？」

エヴァは隣に立っている女の方を見て答えた。

「手紙を書いています。この方の娘さんは、なんとティアベに住んでいるのですって。だから私達が帰る時に手紙を届けてあげようと思っ……」

「ここに来てまで仕事をしなくてもよい」

「仕事ではありません」

「とにかく、早く来なさい。皆が食堂で待っている」

エヴァは澄んだ青い瞳でアルテユスの顔を見上げた。

「お願い、書き終えるまで後少しだけ待って……」

「あの、続きは明日でも大丈夫ですから」

傍からアルテユスの顔を窺うようにしていた女が遮った。

「では、また明日続きを書きますね」

少女が約束をして立ち上がると、アルテユスは使用人達を見回して言った。

「俺の婚約者が世話になつたな」

ぴよこんとお辞儀をすると、次期当主の後を小走りで追う少女を皆はあんぐりと口を開けて見ていた。

階段に足をかけたアルテユスは振り返ると思い出したように言った。

「エヴァ」

「はい」

「マテオの奴に作ってもらった服を着るといい」

「え？ でもひとりでは……」

「誰か手伝いに寄こしてやるつ」

「どうして、あんなことを？」

エヴァは咎めるような口調で囁いた。

だが、扉の前に立っている背の高い男に注がれるその眼差しは、不
安げに揺れている。

「仕方がないだろう。ああでも言わなきゃ納得しなかっただろうか
ら」

男は不貞腐れた顔で少女を見返した。

「でも、あの女の方は……」

「関係ない。兄が死んだからって、俺が兄の許婚と結婚しなきゃな
らない義務はないだろう」

「だけど貴方のお父様は……」

「父にとっては残念なことに、俺は成人してから既に2年以上経っ
ているからな。結婚相手は自分で選ぶ権利がある。それに……」

ノックの音にエヴァは飛び上がり、アルテュスは口を噤んだ。

鼠色の服を着た侍女が扉口に姿を現し、お辞儀を言った。

「奥様、お着替えをお手伝いいたします」

少女が両手を揉み合わせながら途方に暮れた顔をすると、アルテュスはその縋るような瞳を避け扉の方に向かった。

「下で酒を飲んでくる。先に寝ているがいい」

「お飲み物ならここに……」

侍女が戸棚からコップを出そうとするのを遮って言った。

「いや、父がまだ起きていたら話したいことがあるのだ」

そして、エヴァの方を見ることもなく、さっさと部屋を出て行った。

深みのある赤いビロードの天蓋のついた、高さのあるベッドが、あまり大きくないその部屋の真ん中にあった。

ベッドの脇には一面に狩の絵を彫刻したどっしりとした箆笥と先程侍女が飲み物を出そうとした戸棚がある。

薄い黄色と透明のガラスを格子縞に嵌めてある窓の近くには、木のベンチが置いてあり、その隣には小さな机がある。

そして奥には赤い火の燃えている、古めかしい石造りの暖炉があった。

装飾も家具も立派なものだが、どことなく時代遅れの感じのする部屋だった。

侍女が長い柄のついた銅製の行火で温めてくれたベッドに潜り込んだエヴァは、アルテユスのことを考えていた。

緊張の所為で胃の辺りがキュツと捻れるように痛い。

この部屋に戻ってくるのかしら？

あんなことを皆に言ってしまったのだから、多分戻ってくるのだろう。

夕食の席で家族にエヴァを自分の婚約者として紹介したアルテユスは、婚約を認めないと言った父親と口論になり、最後に父親を黙らせる為にとんでもない嘘を吐いたのである。

つまり、自分は既にエヴァと結婚している、ここに来る前に教会で式を挙げ完遂したと断言したのだ。

だから兄の許婚と結婚することはできないと言ったのだった。

船長さんのお父様はとても怒ってらした。

あたりまえよね。

親の許可も祝福もなしに結婚したなんて。

そして、アルテユスが寝室は妻と一緒にいいなどと言った為、エヴァはこの部屋で休むことになってしまったのだ。

婚約者とはいえ、男と二人きりで同じ部屋で寝るのは初めてだ。

エヴァはドキドキする胸を押さえ、ふうと溜息をついた。

どうしよう。

何だか逃げ出したくなってきたわ。

でも、どこに行ったらいいのだろうか？

その時、急に乱暴に扉が開かれ、驚いた少女は布団の中に潜り込んだ。

布団からそつと顔を出すと、机の上に置かれた燭代の光に照らされて、よく知っている男の姿があった。

先程まで逃げ出したくなっていたのに、入ってきたのがアルテウスだと知ってエヴァはホツとした。

だけど、どうしたのだろうか？

お父様とまた喧嘩をしたのだろうか？

アルテウスは扉を背にして、暫く動かずに暗い顔でエヴァの方を見ていた。

何かに耳を澄ませている風でもあった。

それから、肩を聳やかせると、扉に鍵をかけズカズカとベッドに近

付いた。

そして、枕元に屈み込むと、エヴァが声を出さないように唇に指を当てて小声で尋ねた。

「今ここに誰か来なかったか？」

エヴァは両手で顎までシートを引っ張り、硬い表情で答える。

「いいえ、誰も」

眉を潜めたアルテュスは考え込みながら言った。

「では、あれは父のスパイか」

そして納得したように続けた。

「その廊下で大急ぎで出て行く男にすれ違った。どうやらこの部屋の前で聞き耳を立てていたようだ」

スパイですって？

では、この親子の間には信頼関係はないということ？

エヴァは自分の父親が懐かしくて堪らなくなった。

何やら考え込んでいたアルテュスの表情が徐々に変化して、最後には悪戯っ子のような笑みを浮かべるのを、エヴァは不安そうに見つめていた。

靴を脱ぎ捨てたアルテュスが急にベッドに飛び乗ったので、エヴァは小さな悲鳴を上げた。

船長さんは気が狂ってしまったの？

それとも酔っ払っているのだろうか？

アルテュスは天蓋を閉じると、いきなりベッドを酷く揺らし始めたのである。

エヴァの所からその顔は見えないが、どうやら声を出さずに笑っているようだ。

男の体重でベッドはミシミシ、ギイギイと壊れそうな音を立てている。

エヴァは顔を青くして布団にしがみ付いている。

バキツという妙な音と共に一層大きく揺れたベッドから放り出されそうになった少女は泣き声を上げる。

「もう、やめて!! お願い!!! ……壊れちゃう!!!」

すると男は揺さ振るのを止め、枕側の壁に唸り声を立てながら体当たりを始めた。

暫く繰り返すと、最後に一際大きな声で叫びボタンとベッドの上につつぶせに倒れた。

エヴァは隅に縮こまって震えている。

……怖い。

男の気が狂ったとしか思えなかった。

もしかして狂犬病にかかってしまったのだろうか？

子供の頃、ティアベの町で狂犬病にかかった男が兵に捕らわれたのを見たことがある。

人間が動物のように地面に蹲り、涎を垂らしながら唸り声を上げているのを見るのは遠くからでも怖ろしかった。

アルテュスは顔を上げると、怯えて泣きべそをかいている少女を見て、慌てて起き上がり謝った。

「驚かせて悪かった。だが、これで奴も、俺達がどんなに仲が良いか父に報告できるだろ」

潤んだ瞳に問い掛けるように見つめられ、アルテュスは居心地悪そうに咳払いした。

「分からないんだったらいい」

ゴンヴァル殿に約束しちまったから、教えたくても無理なんだが、と少女に聞こえないように呟いた。

エヴァは分かったと言うように頷くと、やっと微笑んだ。

「船長さんは子供の頃を思い出していたのですね。でも大人になってからこんなことしたら家具が壊れますよ」

クスクス笑っている少女を、アルテュスは苦笑いをしながら眺めていた。

揺さ振られているうちに、おさががすっかり解けてしまい蜂蜜色の髪がふんわりと肩を覆っている。

胸元でリボンを結んだ、たつぷりとした白い綿の肌着を纏った少女はとても可愛らしかった。

船で思い描いたよりもよっぽど……

二人は手を伸ばせば触れられる距離でじっと見つめ合う。

まるで包み込むような、男の優しいが力強い眼差しに少女は頬を染める。

これ以上、こいつを見ていたら手を出しちまいそうだ。

アルテュスは艶やかな髪を一房手に取ると、そっと口付ける。

「お休み、奥方。良い夢を」

そして、はにかんだ微笑みを浮かべた少女の薔薇色の頬をそっと撫でると、侍女がベッドの足元に置いていった余分の毛布を掴み、ベ

ツドを降りて木のベンチの方に向かった。

アルテュスが木のベンチで寝ようとしているのを見たエヴァが慌てて起き上がった。

「私がそちらで寝ますから、船長さんはちゃんとベッドで……」

肩からずり落ちそうになった肌着を押さえながら、自分の方に来ようとする少女を押し止める。

「気にしなくても良い。俺は船で硬くて寝心地の悪い寝床には慣れている」

「でも……」

「いいから、もう黙って寝なさい」

少女のそんな姿をこれ以上見ていたら、何だか具合の悪いことになりそうだった。

アルテュスが蠟燭を吹き消し、辺りは暗闇に包まれた。

エヴァは温かいベッドに横になったが、目を閉じる前に窓の方を向いてそっと囁いた。

「……ありがとう。おやすみなさい」

エヴァは朝食のテーブルに着き、煮た果物を掬った匙を口に運んで

いた。

できるだけ音を立てないように飲み込もうとするのだが、先程から二度ほどしゃっくりのような音を立ててしまっている。

前にはアルテュスの父親の再婚相手と兄の元許婚が座っていた。

既に食べ終わっているのに席を立たないで、エヴァのことを冷たい眼差しでジロジロと観察しているのだ。

早く食べて部屋に戻りたい。

アルテュスはどこに行ってしまったのか、朝から姿が見えなかった。

若い方の女がコホンと小さな咳をした。

整っているが表情の乏しい白い顔をした娘で、小さな顎に鼻は尖っており、細い目は灰色で黒く長い睫に縁取られている。

唇だけは赤く柔らかそうで、女の表情にいくらか暖かみを与えていた。

髪も黒に近い色で、流行の形に高く結い上げられている。

隣りに座っている婦人と同じ腰の部分を膨らませた形の地味な色合いの服を着て、毛のショールを肩に巻いていた。

その婦人は対照的に血色がよく、目鼻立ちがはっきりとした顔からは若い頃の美貌が偲ばれる。

二人共、初めは敵意というより好奇心に満ちた目でエヴァを眺めていたのだが、あまりにも無垢な少女を見ているうちに残酷な気持ちになってしまったらしい。

中年の婦人が口を開いた。

「お名前はなんと仰るのですたっけ？」

エヴァはパンの塊を慌てて飲み下すと答えた。

「……エヴァです」

「ご両親のお名前は？」

「父は代書人のゴンヴァルと呼ばれています。母は私が子供の頃に亡くなりました」

「まあ、では貴方のご両親は貴族ではないの？」

若い女が驚いたような声を出した。

エヴァは黙って頭を振った。

「お家は？」

「ティアベの下町に小さな家を借りて暮らしていました」

若い女が独り言のように呟いた。

「どうしてアルテユス様と結婚できたのかしら？」

「でも勿論、持参金はおありだったのでしょう？」

「持参金って何でしょうか？」

女達は顔を見合わせた。

「旦那様があつかりなさるのも無理ないわね」

「アルテユス様は気難しそうな方だけど、どうやって取り入ったのかしら？」

「愛らしい顔や瑞々しい姿に惹かれたのでしょうか。数年すればそのようなものはなくなってしまうというのに」

「大人しそうな顔をしていても、やっぱり卑しい生まれの方は、お金持ちの男の人の気を引くのに慣れていらつしやるのね」

「アルテユス様も若き日の過ちだと、もう少ししたらご自分でもお分かりになって、大層後悔されるでしょうよ」

堪らなくなったエヴァは、ご馳走様と呟くと椅子から腰を浮かした。

「結婚を無効にすることはできないと旦那様が仰ったから、アルテユス様がやもめになるのを待たなければならぬわ」

「貴方がいなくなれば、喜ぶ人は大勢いるということをお忘れしないで頂戴ね」

食堂を出て行く少女の背中に残酷な言葉が突き刺さった。

アルテユスの実家に着いてから既に3週間が過ぎていた。

まだ2月の初めだというのに、数日前からずっと暖かい日が続いている。

エヴァは、出来るだけアルテユスの家族と顔を合わせないようにして、静かに暮らしていた。

食事や礼拝の時間には、やむを得ず家族の集まる食堂や礼拝堂に行ったが、他の時間は庭に出たり、自分の部屋で過ごしたりしている。

ひとりであるのには慣れていたので苦にならなかったが、やはり新しい家族に疎まれていると思うのは辛い。

ある日、エヴァは散歩に出た裏の林で、木の枝を拾っているアルテユスの弟と妹達に鉢合わせてしまった。

エヴァが顔を強張らせながら挨拶すると、子供達は好奇心に溢れる明るい瞳で自分達の新しい義姉を見つめ、笑顔で挨拶を返してきた。

嬉しくなった少女は、子供達に木の枝で何をするつもりなのかと問いかけた。

遊びで使う旗を作ると答えた子供達は、エヴァに裁縫ができるかと尋ね、できるなら古い布で旗を縫って欲しいと頼んだ。

その日から彼らは、義姉に対してまるで自分達の仲間のように振る

舞い、毎日のように遊ぼうと誘いに来るので、一人っ子のエヴァはまるで兄弟ができたようでも嬉しかった。

13歳のヤンを頭にマリー、グレゴール、ユナの4人がエヴァの遊び仲間だった。

兄弟の中でアルテュスに一番似ているとエヴァが思ったのが、グレゴールだった。

目鼻立ちはまだ子供らしく優しいが、縮れた髪や大きな黒い瞳がそっくりなのだ。

船長さんもこんな可愛らしい子供だったのだと思うと可笑しくて堪らない。

しかし性格はヤンの方が似ているらしく、急に何かを思いついて突っ走っていくヤンを、エヴァは微笑ましい気持ちで眺めていた。

彼らは厩の裏にある今は使われていない納屋を隠れ家としていて、古いカーテンやシート、壊れた家具、樽、麻の袋、底の抜けた鍋などを使い実に様々な遊びを考え出すのだ。

即席の舞台で、家族で都に行った時に観たという笑劇を演じたり、手作りの楽器で音楽会を開いたりするのだった。

最初はエヴァはもっぱら見物人だったのだが、そのうちに役を与えられ、皆と一緒に台詞を言ったり、歌を歌ったりしている。

今皆が一番気に入っているのは新世界発見ごっこで、エヴァがアルテュスやペレック爺さんに聞いた話を基に、子供達は逆さにした一本脚のテーブルに乗って、転覆した船から筏で脱出し、新世界の島まで流れ着く冒険者になるのだった。

ヤンが台所からくすねて来た羨びたりリンゴや、チーズの塊などを、死んだ船乗りの人肉だなどと言いながら、皆で仲良く分け合って食べた。

遊び疲れたユナが膝の上で眠ってしまい、ずっしりと重たくなった柔らかな体が冷えないように外套で包みながらエヴァは胸の中が暖かくなった。

この家にこの子達と親切な使用人がいてくれて本当によかったわ。

何度か台所に顔を出すうちに、手紙を書いてやった女の他にも数人の召使達と仲良くなったのだ。

エヴァは兵学校で親しかったセラファンやアルカンのことを思い出した。

皆元気でいるかしら？

いつかまた会えるのだろうか？

エヴァン・ド・タレンフォレストは、竜騎兵になる為リユスカ公の許に向う途中、事故に遭い行方不明になったことになっていた。

心配させてしまったのじゃないかしら？

彼らには本当のことを伝えたかったのだけど。

マテオ・ダヴォグールに禁じられ、彼らに手紙を書けなかったのだ。

アルテュスは毎日のように朝早くから日が暮れるまで父親と外出していた。

夕食には戻ってきたが、二人共、不機嫌なことが多かった。

いかにも気が立っている様子の兄に兄弟達は近寄ろうとしなかったし、アルテュスも彼らに無関心そうだった。

初めの頃は兄の元許婚のマダレンは、食事中にアルテュスの気を引こうと一生懸命話しかけていたのだが、男のあまりにも無愛想な態度に今では完全に愛想を尽かしたように見える。

アルテュスはエヴァに対して、夕食の席では皆に見せ付けるように優しくかったが、二人きりの部屋に入るとがらりと人が変わったように素っ気無くなるのだった。

そして、エヴァの話を知りながらもせむしに眠ってしまった。

その夜も薄暗い部屋の中で、窓際から聞こえてくる静かな寝息に耳を澄ませていた少女は、そっと溜息を吐いた。

今夜は珍しく月が出ているようで、窓の下に黒い影が横たわっているのが見える。

エヴァは悲しかった。

船長さんのことが分からない。

ここに着いた夜はとても優しくかったのに。

子供みたいにベッドの上で飛び跳ねたりしてびっくりしたけど。

エヴァは髪に接吻されたことや、頬を撫でられたことを思い出し、暗闇の中で赤くなる。

傭兵に襲われた日、宿屋で慰めてくれたこと、馬車の中で体を温めてくれたことなど、アルテュスに優しくされた時のことを一つ一つ思い浮かべていると、寂しくて堪らなくなった。

とてもドキドキして恥ずかしいけど、船長さんに優しく触れられたい。

エヴァはそつとベッドを抜け出した。

上靴がどこにあるのか分からず、裸足で床に降りる。

ひんやりとした床をぼんやりと浮かんで見える窓に向って歩く。

ベンチの上には毛布を被った男が背を向けて眠っていた。

大きな男の体はどつやらベンチからはみ出してしまっているようだ。

男の呼吸に合わせて毛布がゆっくりと上がり下ったり下ったりしている。

エヴァはベンチに近寄ると、そつと頭がある辺りを覗き込んだ。

急がばと起き上がった男に腕を掴まれ、エヴァは小さな悲鳴を上げた。

「エヴァか？ どうした？」

寝起きの掠れ声でそう尋ねたアルテュスは、目を擦りながらベンチに座ると少女を膝の間に引き寄せた。

穴があつたら入りたいと思った。

アルテュスに優しくして欲しい一心で傍に来てしまったが、その後どうするか全然考えていなかったのである。

「何でもありません。起こしてしまつてごめんなさい」

腕を振り切つて逃げようとする少女を放さずにアルテュスは言った。

「何でもないってことはないだろう。震えているではないか？」

エヴァは消え入るような声で呟いた。

「……優しくして欲しいの」

アルテュスは何も言わずにエヴァの腕を放した。

嫌われてしまったのかと怖くなる。

思わず男に取り縋って口走っていた。

「お願い、嫌わないで。私、船長さんのこと……」

男の手で口を塞がれた。

「もう何も言うな」

アルテュスはエヴァを抱き上げベッドに運ぶと、寒くないようにしっかりと毛布に包んでやった。

エヴァが見上げると、屈み込んでいる男の顔は暗くて見えないが、暗い瞳が自分を見つめているのを感じる。

「避けている訳ではなくて、別のことに気を取られて余裕がないだけなんだ」

自嘲的な口調で男が言った。

「貴方のことは大事にしたいと思っている」

エヴァは小さく頷くと、布団から手を出して指先でそっと男の頬に触れた。

髭が伸び始めているのか、ざらざらした感触に思わずゾクリとした。

大きな温かい手が少女の手を絡め取る。

指先に男の唇を感じ、少女は身を震わせた。

月が雲に隠れたのか、辺りは闇に包まれている。

「今日、商業登録簿に俺の名前を登録してきた。これで正式に父の跡を継ぐことが決まった。これから数日間、留守にするが、戻ってきたらティアベに帰れるぞ」

耳元で、そう囁いたアルテュスに不安そうに尋ねる。

「どこに行くの？」

「港にある倉庫と父の船を見てくる」

暗闇が少女を大胆にさせた。

男の首に腕を回すと震える声で囁いた。

「今夜はここにいて……」

隣の領地を見張っている赤毛の男が、大急ぎで屋敷に向って走っていた。

階段を駆け上がりノックもそこそこに扉を開けると、双子の主人達は取り込み中だった。

「しっ、失礼しました!!」

慌てて回れ右をしようとした家来に、女の上に覆い被さっていた方の男が少々息を弾ませながら、振り向いて声をかける。

「おい、何があつたのだ？」

あられもない姿で長椅子の上に四つんばいになった女の前には、もうひとりの男が立ち、顔を真っ赤にして目を白黒させている。

家来は豊満な肉体を見ないように目を逸らせながら、しどろもどろに塔の上から見た光景を二人に報告する。

やっと女から離れた男は、身繕いをするとパシンと音を立てて女の尻をぶった。

「ほら、さつさと失せろ」

しっしつとまるで犬を追い出すような仕草をした男は、家来の方を見てもう一度今言ったことを繰り返すように命じた。

額の汗を袖で拭いながら二人は、顔を見合わせると頷き合った。

「そうか、領主と一緒に旅立ったか。では、奴が跡を継ぐことが決まっただんな」

「これで、ゆっくりと作戦が練れるな」

最高の気分で男達は声を揃えて高笑いをした。

「それから」

怯えたような顔で双子を見比べていた家来が口を開いた。

「一緒に来た女性は、どうやらあの男と結婚しているそうです」

「ほほう、奴は女中を妻にしたのか？」

「馬鹿な奴だ。どうせ、孕ませちまって、結婚しなかったら死んでやるとか脅されたんじゃないのか？」

考え込んでいた男が呟いた。

「奴の留守の間に、どうにかして、近付きになれないものかな？」

「いや、それはまだ早いのではないか？ もう少し計画が煮詰まってるからにした方がよからう」

男達はニヤニヤと顔を見合わせる。

「愛する奥方が俺達の手に落ちたと知ったら、奴はどうするかな？」

雨に濡れた石畳の道を外套に包まって歩いていた二人の男は、赤いレンガ造りの建物の前で立ち止まった。

煉瓦の壁は灰色っぽい蔦に覆われている。

家の二階程の高さに明り取りが並んでいた。

そして正面には鉄の門がついた頑丈そうな木の扉があった。

扉は大きく開いており、先程二人を追い越して行った荷馬車が横付けにされている。

体格のいい男がひとり、馬車の後ろに地面から板を斜めに立てかけている所だった。

二人が近付くと男は帽子を取り元気な声で挨拶をしてから、倉庫の方に口笛を吹きながら歩いて行った。

アルテュスは胡散臭そうな顔で辺りを見回すと、自分の前に立つ父親の背中を見ながら言った。

「香辛料の商いだと思っていました」

奥行きのある建物の中は、見渡す限り酒樽と思われる大きな樽が積みまれている。

奥の方では頭を布で包み、シャツの袖を捲り上げた男達が元気な掛

け声をかけながら樽を転がしている。

「高級なシェリー酒だぞ」

父親が後ろに控える召使に命じると、召使は樽の蛇口からチヨロチヨロと出てくる酒を小さなコップに受け、アルテュス達の所に持つてくる。

アルテュスはコップを受け取ると、父親の方を見ながら目の高さに掲げ一息に飲み干した。

「悪くない」

そう呟いた息子を渋い顔で見ていた父親は話を続ける。

「香辛料だけじゃ儲からぬ時代になったのだ。おまえは家を出ていだから知らないだろうが、酒や織物など徐々に商売を広げ、最近は武器の貿易も手がけているのだ」

呆れたような顔をした息子は隣で自慢げに話す父親を見下ろした。

「武器もですか」

「ああ。ルカナル産の最新式の大砲は値段は高めだが、購入する価値はあるぞ」

これにはアルテュスも興味があるようで、しかめっ面は相変わらずだが、父親に色々と質問をしている。

敷地内に並んでいる倉庫を一通り見回った男達は、待たせていた馬

車に乗り込むと港に向った。

3カ月後に新世界に向けて旅立つ予定の船を見に行くのである。

その頃には現在航海中の船が帰国している筈だった。

港に着くと、事務所で仕事がある父親と別れ、アルテュスは霧雨の降る中をひとり波止場に下りて行った。

父親との別れ際の会話を思い出し、アルテュスは歩きながらも、眉間に皺を寄せ考え込んでいた。

「3カ月後に家の貿易船の護衛として新世界まで行くつもりはないか？」

確かに最近、私掠船としての儲けは限られてきている。

敵海まで赴かなければならない有様だ。

船乗りとして西の海には興味があったし、未知の世界には冒険心がそそられた。

だが、何も問題なかったとしても最低2ヶ月はかかる旅だ。

半年間は家に戻れないと思った方がいいだろう。

澄んだ青い瞳が脳裏を掠めた。

結婚したばかりで何ヶ月も留守にすると言ったらエヴァはどう思うだろうか？

アルテュスは目を細めて、父親の所有物である排水量800トンのキャラック船と400トンのガレオン船を眺めた。

錨を下ろした船の帆は畳まれ、濡れそぼった旗はマストに張り付いてしまっているが、丸みを帯びた船体や大きな船尾楼は、大層美しく見えた。

もし『ラ・ソリテア号』が護衛するなら、商船はあまり武装しなくてすむ。

その分、荷を積むことができるのである。

行ってみようじゃないか。

アルテュスは不敵な笑いを浮かべると、船には乗らずに港町の方に歩き出した。

頭の中で素早く出発までに残っている日にちを数える。

そうと決めたら俺の船にも西の海をよく知っている者が必要だ。

そう決心すると、アルテュスは足取りも軽く、初めに目に入った鵜の絵を描いた看板の下っっている酒場に入ってしまった。

城の台所がこんなに賑やかだったことは初めてだった。

初めは恐縮して隅の方に固まっていた使用人達も、楽しそうにして
いる子供らに次第に打ち解けてきた。

「ここで食事するのは始めてよ。音立ててもおしゃべりしても叱
られない！」

ユナが嬉しそうに匙で粥の入った皿を叩きながら言った。

シートとマリーがたしなめるように妹の腕に手を乗せる。

「グレゴール、どうしたの？ もっと食べたいの？」

隣でモジモジしている少年が頷くと、エヴァは料理人に声をかける。

「デヴィーさん、この子にもう少しお粥をあげてくださいな」

少年の皿に気前よく粥をよそいながら料理人のデヴィーが笑った。

「デヴィーでいいですよ。若奥様」

「僕にもおくれ」

傍からヤンが口を出す。

食堂の給仕に行っていた召使が戻って来て、他の使用人達と何やら
話している。

その様子を横目で見ながらヤンが言った。

「あの女が悪いんだよ。義姉上のことを食堂から追い出そうとしたりして。今更、僕達が台所で食事するのはまずいって言ったって知ったことじゃない。父上に言いつけたければ、言いつけるがいいんだ」

エヴァが言われたとおり素直に朝食のテーブルを立てて台所に向おうとすると、義姉上が召使達と食事をするなら僕達もとヤンを先頭に子供達もぞろぞろと後について来たのだ。

どうやらヤンは、兄が留守の間、自分がエヴァを護ると決心した様子だった。

頼もしい子だこと。

エヴァは頑固そうな少年の横顔を見ながら考える。

船長さんも子供の頃はこんな感じだったのかしら？

いつも悪戯して、叱られてばかりいたというようなことを前言っていたけど。

その日は朝から雨が降っていたので、子供達が勉強している間、エヴァは自分の部屋で荷物の整理をしていた。

マテオ・ダヴォグールに作ってもらった服は最初の晩から着ていなかった。

楽な服装の方が好きだけど、船長さんと結婚してここに戻ってきた

ら、多分毎日このような服を着なければならぬのね。

学校では仕方がなかったとはいえ人前で髪を見せること、それから首や胸元の肌を見せることに抵抗があったのだ。

数少ない自分の服を畳みなおし、ベッドの足元の長持に入れる。

それからアルテュスの服を手を取った。

洗ったばかりの白いシャツはラベンダーの香りがする。

まあ、何て大きなシャツなんだろう！

私が二人入りそうだとわと思ったエヴァは笑い出した。

こんなに大きな人は貧乏だったら大変ね。

衣類には人一倍布が必要だし、食べ物だって……

丁寧に畳んだシャツを長持にしまいながらエヴァは優しい気持ちになっただ。

アルテュスが残していった上着を手にとると、ふわりとよく知っている男の香りがしてエヴァは頬を赤く染めた。

いやだわ、私ったら。

船長さんの匂いがただけで動揺している。

部屋には誰もいる筈がないのだが、エヴァは確認するように辺りを

見回すと、男の上着に顔を埋めた。

そしてそっと呟いた。

「お願い、早く帰って来て」

夜はひとりきりの部屋で少しばかり心細かった。

継母が悪巧みをするかも知れないからとヤンに言われて、扉には鍵をかけてあった。

いつものように温められたベッドに入っても、長椅子に横たわった黒い影が見えないだけでこんなに肌寒く感じる。

数日間と言っていたけど、いつ帰ってくるのだろうか？

エヴァは最後の夜にアルテュスに抱き締められて眠ったことを思い浮かべた。

暗闇の中で赤くなり、ドキドキする胸を押さえホッと息を吐く。

あの時、時折頭や額に落とされる接吻や背中を撫でてくれる大きな手がとても優しく、何故か胸が苦しくなり涙が溢れそうになったのだ。

このままずっと船長さんの力強い腕の中にいたいと思った。

何故とても幸福なのに、切ない気持ちになるのか分からなかった。

恋をするってこういう気持ちなのだろうか？

船長さんはもつと私を自分のものにしたいけれど、お父さんと約束してしまつたからティアベに戻るのを待つと言つた。

よく意味が分からなかつたけれど、何だか聞いてはいけないことのような気がした。

学校で生徒達が話していたあのことやあれというのに似ている。

でも船長さんは大人だから、私が何も知らないって分かつたらちゃんと教えてくれるわよね。

船長さんが戻つてきたら、私達はティアベに戻つて結婚式を挙げる。

そして船長さんの船でここに戻るのだ。

女性は船に災いを招くと言われているから、誰にも知られずに乗り込むと言われていた。

どうするのだろうか？

また男の子の格好をするのかしら？

でもティアベまでの道が心配だわ。

この前のようなことにまたなつたら……

絶対に私を護ると言つてくれたけど、私は船長さんのことが心配な

んだ。

..... 航洋船の船長は水夫を船首楼に呼び付けて

微笑みながらこう言った

おまえの優しい顔も

金の巻き毛も、たおやかな姿も

あの人を思い出させるのだ

遠い港に残してきた愛しい人を.....

ガラガラと騒がしく走る狭い馬車の中に力強い歌声が響く。

エヴァは目を丸くして、リユートを掻き鳴らすしゃくれた顎の男を見つめている。

今朝、馬車に乗り込む時にアルテウスに紹介された男はティムと名乗ったが、アルテウスが傍から『髭の三日月』と呼んでやれと言った為、それからずっとむくれてしまっていたのだ。

船乗り達には渾名で呼ばれても構わないが、船長のべっぴんな嫁さ

んには本名で呼んでもらいたかったのである。

『髭の三日月』は、馬車が出るとすぐ脚を投げ出して目を瞑ってしまつた船長の方を恨めしそうに横目で見ていた。

「ティムさん、リユートで何か弾いてくださいな」

だが、男が膝に抱えている荷物を見たエヴァがそういった途端に機嫌を直して、楽器を取り出すと歌い始めた。

海の男は単純なのだ。

暫くするとアルテュスも起き上がり、よく知っている歌を『髭の三日月』と一緒に歌い始めたので、エヴァはもうこれ以上はできないという位、目を見開いて熱心に二人の歌を聴いていた。

船長さんは船の仲間達という時、こんな顔しているんだ。

いつものしかめっ面とは随分違うわね。

船の上でもこんな顔をしているのだろうか？

生き生きとして、何て楽しそうなんだろう。

歌が終わるとエヴァは、カ一杯手をたたく。

私はこの人の笑顔が好きだ。

アルテュスはどうやってあの話を入アにしたものかと悩んでいた。凶暴な海賊や敵に立ち向かう時はまったく冷静でいられる癖に、青い瞳が涙で曇るだろうと思うと勇気が萎んでしまうのである。

まあ、ティアベに着いてからゆっくり話せばいいさ。

『髭の三日月』とは、偶然、港町の酒場ですれ違ったのだ。

去年の冬に『ラ・ソリテア号』を降りてから別の私掠船に乗ったり、北の地方で鱈の漁船に乗ったりしていた船乗りは、いつかまたアルテュスの船に乗ることを願って、暫く前にティミリアに戻って来ていた。

ティミリアでは誰も『ラ・ソリテア号』の行方を知らなかった為、帆船が立ち寄りそうな港を転々としながらアルテュス達と別れたティアベまで戻ろうとしていたと語った。

そして、運よくアルテュスと出会って新世界への旅の話の聞くと大喜びで、一緒にティアベに戻ることにしたのである。

二人の航海士はあのまま『ラ・ソリテア号』にとどまってくれていた。

料理長の『悪酔いブイヨン』も港町の定食屋に職を見つけてティアベにいる。

この数ヶ月間、一緒だった船乗りの中にもティアベに残っている者が数人いるだろうし、新たに採用するにしても大して時間は取らないだろう。

アルテュスの頭には、既に大航海の準備のことしかなかった。

多くの私掠船の船長とは違い、アルテュスは『ラ・ソリテア号』の持ち主でもあった。

船舶艤装者として乗組員の雇用、航海中に必要な飲食物や備品、武器などの手配もしなければならない。

そうしてみると3ヶ月というのは決して長い期間ではなかった。

エヴァは馬車の揺れに体を預けながら、向かいに座った男達を眺めていた。

『髭の三日月』は大袈裟な身振り手振りで、アルテュスに鱈の漁獲について説明している。

エヴァは、船乗りが自分達と一緒に旅をすると知った時は驚いたが、同時にアルテュスと二人きりにならずに済むと思いホッとしたのだ。つた。

男に対する自分の気持ちに気づいた少女は、男が戻ってきてから以前のように自然に接することができなくなってしまっている。

目が合うとどきまぎして声が上がってしまうので、話しかけられると逃げ出したくなるのだ。

同時に暫く男の姿が見えないと気になって探してしまうという、自

分でも理解できない状態に戸惑っていた。

傍に来られると、何故か身体がかっと熱くなったり、すうと寒くなったりする。

そして、耳鳴りがする程心臓がドキドキと轟いている中、男の眼差しが自分に向けられるだけで、頭には血が上り目が潤んでしまっただ。

そんなエヴァをアルテュスはまじまじと見つめたが、何も言わずに、その後はいつもどおりに振舞っていた。

道中が安全ではないので『髭の三日月』の他に馬に乗った兵が数人、馬車の前後に就いている。

それが自分のことを護る為だと知ったエヴァは、アルテュスに感謝の眼差しを向けた。

暴漢に襲われる心配がなくなると、旅は楽しみだった。

風はまだ冷たいが、春がすぐそこに迫っていると思えるような晴天が続いている。

ティアベに戻るの嬉しかった。

結婚式はちょっと不安だけど。

そう言えば、衣装はどうするのだろうか？

私の持っている晴れ着で大丈夫だろうか？

マテオ・ダヴォグールに作ってもらった服は豪華過ぎて、港町の教会にはそぐわないだろう。

向こうには一週間程滞在する予定だった。

父に会えるのも嬉しかったし、親しかった近所の人々にもきちんと挨拶をしたかった。

数日後、天気が急に崩れた。

その日は朝から嵐の前触れのような風が吹き雨が降っていた。

エヴァは不安そうな顔で隣に座っているアルテユスの顔を見上げた。

昨夜、泊まった宿屋で、御者とアルテユスが話しているのを聞いてしまったのだ。

耳に入ってきたのは、はにかみを忘れさせてしまうような怖ろしい言葉だった。

エヴァが横を通ると階段の下にいた二人は口を噤んだが、少女に背を向けるとすぐにまた小声で話し始めた。

その後、男達は別に何かあったと思わせるような素振りもなく、普段どおり笑ったり話したりしている。

どうかしたのかと尋ねたら、これ以上質問するなというような口調

で、何でもないから心配するなと言われたのだ。

しかし、護衛の兵にも情報は確かに伝わっているらしく、先程、雨の合間に休憩した時には皆同時に食事をせずつ見張りを立たせていた。

それにアルテウスが短銃をすぐ手に取れる場所に置いたのを見てしまったのだ。

行きのようなことになるのだろうか？

今度同じような状況になったら、いったい私は引き金を引くことができるのだろうか？

エヴァは膝の上でスカートを握り締めた。

もう船長さんの背中に隠れるような卑怯な真似はしたくない。

船長さんと一緒に戦いたい。

「船長さん」

窓から外を覗いていた男が振り向いた。

「どうした？」

エヴァは息を吸い込むと一息に言った。

「どのようなことになっているのか、ちゃんと教えてください」

向かいに座り、やはり窓から外を覗いていた『髭の三日月』がアルテユスの顔を見て言った。

「村に入ったようです」

アルテユスは顔を顰めると、エヴァの澄んだ瞳を覗きこんだ。

そこに固い決心が浮かんでいるのを見ると、溜息を吐いて口を開いた。

「船の上では、どんなに不味い状況でも乗組員に事実を伝えるように心がけている。確かに人は、特に海の男は敏感だから、どんなに平静を装っても感じてしまうからな。だが、その時にはどうすればその状況から抜け出すことができるのかを、相手が信じ易いように伝えなけりゃならん。50人も人間が混乱すると怖ろしいことになる。反乱でも起こされたら堪らぬからな」

アルテユスは馬車の外を手で示しながら続けた。

「だが、今回のことは知ってもどうにもならん」

「何も知らされない方が不安です」

「俺はできれば貴方には騙されていて欲しかったのさ」

少女は頷いて微笑んだ。

「でも、私、大丈夫です。船長さんが一緒にいてくれるから」

「数日前にある村が焼き討ちに遭った」

エヴァはビクツとしたが、続きを話してくれるように促した。

「……村人は女子供も全員皆殺し、中には生きてままだま家に火をつけられて焼き殺された者もいると言う」

「それで、今私達が通っている村がその村なのですね？」

「ああ、そうだ。暴漢共は何処ともなく立ち去ったそうだが、同じ場所に戻って来ることはまずないだろう。我々が襲われる危険は少ないと思うが、念の為……」

馬車の中にも、きな臭い匂いが漂ってきた。

雨音と馬車の立てる音に混じって、腹の底に沁みるような歌声が聞こえてきた。

ミサ・プロ・デフンクティス、死者の冥福を祈るレクイエムだ。

アルテュスは目を閉じて歌う『髭の三日月』を呆れた顔で見る。

まったく、こいつのレパートリーの広さには驚かされるな。

だが、これで何も分からぬうちに命を絶たれた子供達の魂も地上を彷徨わずに、まっすぐ天に昇ることができるだろう。

アルテュスは、手を組んで頭を垂れ静かに祈る少女の姿を眺めていた。

どうやらこの娘は大丈夫なようだ。

これだったら、俺の不在中もちゃんと留守を守ってくれるだろう。

その後は別に何事もなく、旅は無事に終わろうとしていた。

「この調子で進めば、午後にはティアベに着きますよ」

昼食の為、馬車を降りた『髭の三日月』が両手を上げて背筋を伸ばしながら、嬉しそうに言った。

「俺はちつとばかりゴンヴァル殿の家に用があるから、先に宿屋に行って部屋を取っておいてくれないか？」

鶏の腿肉を齧りながらアルテュスが『髭の三日月』に言った。

木の実のペーストを塗り薄切りにした酢漬けの胡瓜を乗せたパンを両手に持ったエヴァが、問いかけるような視線を向ける。

「婚礼について貴方のお父さんと話さなければならぬだろ」

少女は頬を染めると頷いた。

アルテュスの希望で、式は司祭の都合が合えば、旅立ちの前日に行われることになっていた。

だけど、私も一緒に船に乗ることは皆は知らないのだわ。

どうなるのだろう？

胸がドキドキして落ち着かない。

少しばかり恐れる気持ちもあるけど、わくわくする気持ちの方が勝つよつだ。

船長さんと初めて会った時に見たあの船に乗れるのね！

あの時は嵐で随分傷んでいたけど、それでもとても大きくて美しいかった。

その日、ティアベの広場は祭りに来た人々でごったがえしていた。

祭りとは四旬節中日の謝肉祭である。

この3週間、食事の節制と祝宴の自粛を守っていた人々も、この日は明日から復活祭までの蓄えだとはかりに卵をふんだんに使い粉砂糖をまぶした揚げ菓子を頬張り、晴れ着を着てどんちゃん騒ぎをする。

そして、日が暮れると周囲に松明を灯した広場で、ハーディ・ガーディヤバグパイプの奏でる音楽に合わせて夜通し踊り狂う。

そのうえ、今年は珍しい見物が用意されていた。

港や周囲の村からも大勢の野次馬が、地元の貧しい代書人の娘と大胆不敵で有名な私掠船の船長との婚礼を観に来ていたのだ。

四旬節の期間は通常、婚礼や洗礼は行われぬ。

今回は、花婿が教会に多額な寄付をして免除してもらったというもつばらの噂だった。

中央に井戸のある石畳が敷き詰められた広場の奥には、中世時代に建てられた小さな教会があった。

ずんぐりとした石造りの建物で、低い屋根は青みを帯びた黒い粘板岩で葺かれ、裏には先の尖った四角い鐘楼がある。

教会の鐘が賑やかに鳴り響き、皆は人垣の後ろから首を伸ばした。金儲けの機会は逃さないとばかり、樽を担いだビール売りの男や、胡桃や干し葡萄入りのパンを売る男、揚げ菓子の入った籠を腕に下げた女達が人々の間を縫って歩く。

その日は朝から曇っていたが、幸いなことに雨は降りそうもなく、時折、雲の間に青空がちらと顔を出している。

やがて、蹄の音が石畳の上に響き、がやがやとしたざわめきの中、素晴らしい黒の儀仗馬に乗った花嫁花婿が姿を現した。

二人の後にバイオリンや笛太鼓の楽隊と親族友人が続いている。

アルテュスの手に縋って馬から下りたエヴァは、目を丸くして辺りを見回した。

どうしてこんなに大勢の人がいるの？

まるで私達を待っていたみたい。

「エヴァ、行くぞ」

その声にエヴァは頬を染めると、唇を引き締め、澄んだ瞳で傍らの男を見上げた。

騎士のように凛々しく櫂のように頑丈そうな大男に寄り添う娘の上品で可憐な姿に、人々は感嘆の声を漏らす。

絹糸で刺繡された胴着以外は白と黒ですっきりとまとめた花婿に対し、花嫁は古風だが雅やかな衣装を纏っていた。

頭に被っているのはいつもの頭巾ではなく、繊細なレースを使った美しいものだ。

そして、大粒の真珠を使った金のブローチで留めた勿忘草色のビロードの外套の下から、レースの肩掛けと一面に金糸で刺繡を施したぴったりとした上着が窺われる。

上着と同じ濃鼠のスカートはたっぷりと踝まであり、縁飾りのある裾から、いつもの木靴ではなく金糸の刺繡をした小さな革靴が覗いていた。

頭巾と靴はティアベに着いてから新しく誂えたものであったが、服はアルテュスの母親の婚礼衣装を仕立て直したものだ。

ティアベに着いた日、少女を父親の家に送り届けたアルテュスは、婚礼の段取りについてゴンヴァルと話していたが、最後に大きな布の包みを机の上に置くと言ったのだ。

「もしエヴァが嫌でなければ、母の衣装を着て欲しい」

包みを開いたエヴァは目を見張った。

「まあ、何て綺麗な衣装なんでしょう！ 本当に私が着てもいいのかしら？」

「ああ、その為を持って来たんだ」

「ありがとうございます。喜んで着させてもらいます」

目を輝かせ頬を紅潮させた少女は、震える声で男に礼を述べたのだ。
った。

正面の入り口で待っていた司祭の後について二人は教会の中に入った。

梁が露になっている天井は、逆さにした船底のような形をしており、紺色に塗られた空には星が描かれていた。

明るい水色に塗られた漆喰の壁には聖書の場面や花模様が描かれ、小さな窓には色ガラスが嵌めこんである。

所々にある出っ張りや窪みには聖人の像や十字架があった。

入ってすぐの右側の窪みには、船乗りの守護聖人である聖エラスムスの像が祭られている。

子供の頃、エヴァは、彼が自分の腸を巻きつけた車盤を握っているのがとても不思議だったのだ。

その前には船乗りやその家族が灯した蝋燭の炎が揺らめいている。

そして反対側には、大きな帆船の模型が飾ってある。

エヴァにとっては、幼い頃から通い慣れた場所であったが、アルテユスは物珍しそうに辺りを見回していた。

二人は良く磨かれた黒い木のベンチの間を通り、祭壇まで司祭の後に続いて歩いた。

エヴァの手が震えているのを感じたアルテュスは、右手で自分の腕に置かれた小さな手を包み込む。

「寒いのか？」

少女は真っ赤になると男とは目を合わさずに頭を振った。

「……いえ、ちょっと緊張してしまっただけ」

アルテュスは優しい目をしてフツと微笑んだ。

「逃げ出すんなら、今のうちだぞ」

エヴァはびっくりしたように男を見上げた。

「そんなことしません!!」

思わず大きな声が出てしまった。

「俺も逃がすつもりはない」

「式を挙げる前から夫婦喧嘩ですか？」

司祭が二人に腰掛けるようにとベンチを示しながら言った。

アルテュスは苦笑いをして答えた。

「いや、彼女の気持ちを確かめただけです。どうぞ、お始めください」

斜め後ろにはゴンヴァルと近所の者達が座っている。

反対側には一張羅を身に纏った『ラ・ソリテア号』の船乗り達が、帽子を手に握り締め狭いベンチに大きな体を縮めて、窮屈そうに腰掛けていた。

ラテン語の祈りの言葉を聴きながらエヴァは、隣に座るアルテュスをそっと見上げた。

何かをじっと考え込んでいる風の男にチクリと胸が痛んだ。

結婚式の日ぐらいそんな怖い顔をしなくてもいいのに。

船長さんは私と結婚するのが嬉しくないのだろうか？

初めに結婚したいと言ったのは彼なのに。

そういえば、私は船長さんに一度も好きとか、愛してると言われたことがない。

普通は婚約者にはそういうことを言うのではないのかしら？

大事にしたいとは言われたことあるけど。

私は傍にいただけで胸がドキドキするのに、船長さんは何も感じないのだろうか？

エヴァはそつと溜息を吐いた。

溜息が聞こえたのか、アルテュスはエヴァの方を見ずに、その手を取った。

大きな手は大層温かく、少女の手をすっぽりと包み込んだ。

ホツと肩から力が抜け、温かい気持ちが胸の中に広がる。

大事にしてくれると言った船長さんを信じよう。

物思いに耽っていたエヴァは、アルテュスに軽く腕を揺す振られ慌てて前を見た。

「誓います」

司祭の問いに男は低い声で答えた。

続いて司祭は花嫁の方を向く。

「汝、エヴァはここにいるアルテュスを生涯の夫とすることを誓うか？」

「……誓います」

少女の高く澄んだ声が教会の天井に響いた。

司祭の祝福を受けた二人は立ち上がった。

花嫁の震える左手を取った男は、華奢な指に古風な指輪を嵌める。

ルビーと小粒のダイヤモンドをあしらったその指輪は、船で立ち寄った外国の港町で買い求めたものだ。

細かい唐草模様などが金属の部分に入った流行のものよりも、飾り気のない上品な指輪がエヴァに合うだろうと思ったのだ。

アルテュスは、潤んだ瞳でおずおずと見上げてくる花嫁の頬を優しく包み込み、そつと唇に口付けた。

エヴァは期待して待った。

だが、花嫁が待ち望んでいる言葉が発せられることはなく、黙ってもう一度エヴァの頬を撫でたアルテュスは、顔を背け皆の方を向いた。

アルテュスは平静を装おうと努力していた。

だが、素っ気ない態度を取ると、この娘はひどく傷付いたような顔をする。

今にも泣き出しそうな顔を見ると、まるで自分がとんでもなく酷いことをしたように思われ、罪悪感に苛まれるのだ。

優しくしてやりたいと思うのだが、あまり自分の心を許し過ぎない

よじとずつと自制していた。

父親の家で縋ってくる少女を抱き締めて眠った時には、やり過ぎたと後悔した。

もう絶対に余計なことはするまいと決心して戻って来てみると、エヴァは自分の姿を見た途端、真っ赤になってうろたえた。

話しかけただけで動揺して、まるで失神でもしかねないほど自分のことを意識しているのが分かる、男は少女を哀れに思う一方で腹立たしい気持ちになったのだった。

ずっと自分を追ってくる潤んだ眼差しが鬱陶しくてならなかった。

何故、愛もなく結婚しようとしている俺のことをそんな熱い瞳で見つめるんだ。

馬鹿げた期待をしてしまうだろうが。

今は俺に惚れているのかも知れないが、どうせ、長続きはしないだろう。

女の心のように不確かなものはない。

しかし、エヴァが誰か他の男に今自分に向けられているような瞳を向けると考えるだけで、胸が引き裂かれるような気持ちになる。

それは俺の自尊心が傷つけられるからだろう？

断じて恋愛感情ではない。

可愛がっている動物に対するような執着心なのだと思います。
ていた。

妙なところで実直なこの男は、絶対に偽りの愛の言葉を少女に言う
まいと決めていた。

ゴンヴァルに約束したとはいえ、何度も本当のことを話してしまお
うかと思った。

自分は嵐の時に立てた馬鹿げた誓いの所為で、貴方と愛もなく結婚
しようとしているのだと。

だが、少女が傷付くと思うと言い出せずにいる。

アルテュスは自分がエヴァに惹かれていることを認めようとしな
か
った。

そうなる前にさっさと逃げ出すつもりだった。

あの誓いは港で初めに会った女と結婚するということだった。

その女を愛するとは誓っていないのだから。

首元と袖口をレースで飾った白い肌着を着たエヴァは、ベッドの中に膝を立てて座り、居心地悪そうにちらちらと男の方を窺っていた。アルテュスは先程から、これ以上ないほど不機嫌な顔で、まるで檻に閉じ込められた熊のように部屋の中を歩き回っている。

どうしたのかしら？

私が何か気に触ることをしたのだろうか？

食事中は船長さんの仲間達が色々面白い話をしてくれて楽しかった。

船長さんも笑っていたのに。

少女の小さな部屋は、近所の女達が作ってくれたドライフラワーの花輪のお陰で、甘い香りがする。

しかし、それ以外は飾り気の無い質素な部屋だった。

窓辺の机の上には、水差しと小さなコップ、それから火の点った燭台があった。

蝋燭の光がゆらゆらとエヴァの頼りなげな影を壁に映し出している。暖炉がないので冬は寒かったが、ベッドには布団の上から暖かそうな毛布がかけてある。

壁は漆喰のまま、ベッドの頭の所に小さな木の十字架とゴンヴァルに手紙を書いてもらいにやって来た巡礼者がくれた聖母の絵がかかっていた。

反対側の壁には旅の間に放浪の画家に描いてもらった少女の肖像画がかかっている。

食事の後、聖水を入れた器と聖水散布器を持った司祭が家に来て、新床を祝福した。

その時はまだ怒っていなかったわよね？

お父さんと普通に話していたもの。

不機嫌になったのは、私と二人で部屋に入ってからだ。

「船長さん」

アルテュスは立ち止まってベッドの方を見た。

そして、肩を竦めると黙ったまま歩み寄り、エヴァに背を向けるような格好でドサリとベッドの端に腰を下ろした。

私の方を見てもくれない。

謝った方がいいのだろうか？

口を開きかけた時、急にアルテュスが立ち上がった。

「どこに行くの？」

外套を手に部屋を出て行くところする男の服の裾を思わず掴んでいた。

アルテュスは顔を顰めて立ち止まる。

振り返らずにいと、ベッドを降りた女が自分の前に来た。

顔を真っ赤にして、必死な眼差しで自分を見つめてくるエヴァから目を逸らす。

今夜ここで抱くつもりはなかった。

少しでも触れてしまったら、後戻りはできなくなるだろう。

アルテュスは自分の体だけではなく、心の暴走も止められなくなるのではないかと恐れていた。

だから、いつか家業を継いで、跡継ぎが必要になるまで我慢しよう。

性欲を発散させるだけなら、別にこの女じゃなくても、他にも大勢いるだろうが。

彼女には気の毒だが、気持ち冷めるまで待たせてもらおう。

だが、これ以上この場にいたら、俺は抵抗できなくなる。

「……………船に行く」

「行かないで。お願い」

明日の朝、迎えに来ると言い捨てて立ち去ろうとしたが、エヴァは掴んだ服を放さない。

への字に曲げた唇が震え、大きな瞳がみるうちに潤んでくるのが目に入った。

男は天井を見上げ目を瞑ると大きな溜息を吐き、観念したように、唇を噛んで俯いている少女の肩を引き寄せた。

「エヴァ」

抱き上げてベッドの中に押し込むと、自分もその傍に先程のように、今度は少女の方を向いて腰掛けた。

そっと自分のシャツの袖で零れた涙を拭ってやる。

エヴァはくすぐったそうに目を瞑り、それから、はにかんだような微笑を浮かべた。

アルテュスは少女との間に必死で築き上げた堤防が跡形も無く崩れ落ちるのを感じた。

……畜生!!!

この娘は、まるで海のようにだ。

抵抗してもどうにもならない。

波に吞まれてしまう。

唇が触れ合うとエヴァはビクッと身を強張らせたが、避けようとはせず、おずおずと柔らかな両腕を男の首に巻きつけてきた。

大きな手が溶けた蜂蜜のような髪の中に差し込まれ、骨ばった指が小さな白い耳を撫でる。

身を震わせながらしがみついてくる女の頬を両手で包み込み、何度も何度も唇を合わせた。

口付けが深くなり、男の手がエヴァの肌着にかかる。

丁度その時、隣の部屋から寝返りを打つような音と大きなくしゃみが聞こえてきた。

動作を止め息を潜めて見つめ合っていた二人は、声を立てずに笑い出す。

男はエヴァの耳元に屈んで囁いた。

「一緒に来るか？」

アルテウスが蠟燭を吹き消し、できるだけ音を立てないように窓を開くと、ひんやりとした風に乗って遠くから賑やかな旋律が流れてくる。

その大きな体からは想像できないほど身軽に窓から飛び降りた男は、

エヴァの方に腕を伸ばした。

そして、外套に包まった柔らかな身体が転がり落ちてくるのを受け止める。

男は笑いながらエヴァの手を取ると、二人は広場に向けて駆けて行った。

広場には昼間の行列に参加した人々が、ハーディ・ガーディの奏でる賑やかだがどことなく物悲しい音楽に合わせて踊っていた。

松明の明かりで周囲の建物が赤く浮かび上がり、そこだけ幻想的な雰囲気を作っている。

「踊るか？」

手を握ったままアルテュスが尋ねると、エヴァは嬉しそうに笑って頷いた。

ずっとこの町で暮らしていたが、日が暮れてから祭りに来るのは初めてだ。

近所の者に誘われたこともあったが、15歳になるまでは駄目だと父親が許さなかったのだ。

そして、ゴンヴァルが病気になるるとエヴァは父親をひとりにすることを好まず、同じ年頃の娘達と夜に出かけることはなかったのである。

二人が踊りの輪に近付くと、陽気な笑い声が上がった。

「やあ、新婚さんだぞ!!」

驚いたことにアルテュスは踊りが巧みだった。

少しばかり強引に導いていく男に身を任せ、息を切らしながらもエヴァは幸せだった。

顔を上気させ、キラキラする瞳で男を見上げる少女は美しかった。

アルテュスもそんな少女を優しく見ていた為、周りの人々は二人を愛し合っている夫婦だと思い、感心したように頷き合っていた。

だが暫くすると、踊り疲れたエヴァに蜂蜜酒を買ってやり、自分はビールで喉を潤しながら、アルテュスは逃げ出す方法を思い巡らしていた。

海に抵抗できないのは分かっているけど、俺は死ぬまで抵抗し続けるだろうからな。

それと同じことだ。

さて、どうやってこの娘を泣かさずに、家に戻すかだ。

その頃、『ラ・ソリテア号』には、明日の出港に向けて準備をしていた船乗り達が集まっていた。

「あの二人、今頃よろしくやっているのだろうな」

アレンがニヤニヤしながら、隣で酒を飲んでいるメレーヌの脇腹を小突く。

メレーヌは眉を顰め、真面目に答えた。

「船長は後で様子を見に来るなどと言っていたが、流石に初夜に花嫁をほったらかしにする訳にはいくまい」

「そりゃ、あんな可愛らしい娘を妻にしたらな」

「畜生、羨ましいぜ！」

「今まで船長が付き合ってきた女とは、ちとばかりタイプが違うようだがな」

「遊ぶ女と結婚する女は種類が違うのさ」

船乗り達はやがやと好き勝手なことを言っている。

「明日はちゃんと時間通りに来るだろうか？」

「おい、絶対遅れて来ることに、俺は酒1瓶賭けるぞ」

「じゃあ、俺はこの金の鎖を賭ける。壊れているが、直せば酒2瓶の価値はあるだろう。船長は絶対に時間を守るぜ」

「まさか、結婚した翌日に花嫁と別れちゃうんだぞ。そんなに簡単に放しっこないじゃないか」

「何でまた花嫁と一緒に連れて来ないのかね？」

「そりゃあ、女は船に災いをもたらすとされてるからだろ？」

「船長の女だったら問題ないんじゃないか？」

確かに船に女は不吉だという迷信があったが、船長の情婦だけは例外だったのだ。

その為、海賊船などにも船長の女が数人乗り込むことが頻繁にあったのである。

勿論、船長の女なので、他の船乗りは手を出すことは出来ず、無礼を働いた者は死刑と決まっていた。

「そうだな。だが俺達が良いと言っても、あの人は強情っぱりだからな」

船乗り達は暫くそのようにして話していたが、メレーヌが立ち上がって言った。

「さあ、そろそろ寝に行く時間だぞ。明日は早いんだ」

そして見張りの者を残して、男達はそれぞれ自分の寝場所に向かった。

雲の後ろにぼんやりと白い月が見える。

もうすぐ春だが、この季節は夜はまだかなり冷え込む。

波止場には黒々とした船の影が威圧的な存在感を感じさせていた。

時折、波の音がちゃぷんと聞こえ、船はぎいと身を軋ませる。

見張りの男は手に息を吹きかけながら、暗い空を見上げ、時間が経つのを待っていた。

マストに登っている男が声をかけてくる。

「おい、パエール。起きてるか？」

「……ああ、起きてるぞ」

「今夜は時間が経つのが遅いな」

「そうだな。夜が明けるまで、後5時間ほどか」

「……パエール、おまえは誰がいるのか？」

「ん？ 何だ？」

「女だよ」

パエールは立ち上がりマストを見上げた。

暗くてよく分からないが、見張り台に座った男は脚をぶらぶらさせているようだ。

「女か。……いるって言えはいるがな」

「何だはつきりしねえな。実は俺はティミリアに幼馴染の奴がいるんだ。もう2年ほど会っていないんだが、俺のことを待っていてくれる筈なんだ」

男の潜めた声から浮き浮きとした感じが伝わってくる。

「そうか。じゃあ、戻ったら結婚すんのか？」

「さあ、わかんねえ。船乗りが家庭を持ってもなあ」

男達は黙り込んで、物思いに耽っていた。

その時、船に近付いてくる足音が男達の耳に入った。

「おい、誰かいるぞ」

「不審者か？」

パエールは傍に立てかけてあった火縄銃を抱えると、船縁から身を乗り出した。

「……誰だ？」

見張り番の問いに黒い影が答える。

「俺だ」

「船長?!?!」

男達の驚いた声が甲板に響き渡った。

ティアベの町は白い朝靄に包まれていた。

やっと東の空が薄つすらと明るくなつてきている。

しんと澄んだ空気の中に、ぎいと音を立てて小さな家の戸が開く。

シヨールに包まった少女がそつと顔を覗かせ、急いで外に出ると、音を立てないように注意して戸を閉めた。

眠そうな腫れぼつたい瞼をしているが、口元はきりつと引き締められている。

外の空気は冷たいが、透き通った空が晴天を予告していた。

腕に籠を抱えた少女は、まだ薄暗い道を足早に教会の方に歩いて行く。

途中朝早くから仕事に出かける職人達にすれ違つと、会釈を返しながらずんずん進んで行った。

昨夜の祭りの名残のがらくたが広場の隅に積んである。

教会に着くと、少女は中には入らずに裏に回る。

教会の裏には小さな墓地があつた。

細かい模様が彫られたどっしりとした十字架が並び、墓場の中心に

はまるで御伽噺に出てくるような半分崩れかけた古い石の塔が立っている。

知っている小道をどんどん行くと、奥の隅の方に小さな墓石が並んでいる所があった。

少女はそこで立ち止まると、籠からエニシダで作った小さな箒を取り出し、辺りの枯葉を掃き集めた。

そして、綺麗になった墓石の上にドライフラワーの花輪を置き、その前に跪くと石に刻まれている名前を指でなぞった。

「お母さん」

優しい声でそっと囁く。

自分が10歳の時に亡くなった母親をエヴァはよく覚えていた。

少女のように朗らかで、優しくった母のことを。

だが、家では滅多に母親のことを口に出さない。

私がお母さんの話をするとお父さんが辛そうにするから。

少女はまるで死んだ母が傍にるように小声で話しかけている。

「これから当分来れなくなるけど、マリヴォン小母さんが時々様子を見に来てくれるって約束してくれたから」

エヴァは親切な近所の者に母が好きだった雛菊の季節になったら、

墓に花をあげてくれるように頼んだのである。

それから少女は、母親の墓の隣にある小さな墓石を撫でた。

その下には、生まれて2日で死んでしまった弟のミケルが眠っている。

エヴァが生まれてから中々次の子に恵まれなかった両親が、やっと授かった命だった。

寒い冬の日、ゴンヴァルは生まれたばかりの赤ん坊を教会に連れて行った。

産声も満足に上げることができなかったその子の命はあまりにも儚く見えたので、急いで洗礼を受けさせなければならなかった。

吹雪の中、家に戻った父親が赤ん坊を包んでいた毛布を広げてみると、小さなミケルは既に青白く冷たくなっていたのである。

ゴンヴァルの妻は夫を咎めはしなかったが、二人共、寒い中に連れ出さなければもしかしたら、ミケルはもっと長生きしたのではないかという思いを拭い切れなかった。

エヴァの母親は春になっても床を離れることはできなかった。

夫も娘も愛する者が日に日にやつれて行くのを見守ることしかできなかつたのだ。

幼いながらもエヴァは、家事を受け持ち、病人の面倒もよく見た。

秋になり少し元気になった母親は冬の訪れと共に風邪をひき、それが原因で肺炎になり、息子の命日も待たずに呆気なく死んでしまった。

「お母さん、ミケル。私、幸せになるから。だから、心配しないで安らかに眠ってね」

二人に別れを告げたエヴァは立ち上がり、膝の土を掃い籠を手に持つと、ゆっくりと来た道を戻り始めた。

教会の前に立っている聖母の像に挨拶すると、扉をそっと押した。

昨日の賑やかさは微塵も窺われず、しんとした薄暗い教会の中は乳香と蝋の匂いがする。

エヴァの木靴が立てる音だけが辺りに響いている。

少女は昨日アルテュスと並んで座った場所に向くと、硬いベンチに腰掛けた。

暗い祭壇を見上げてホッと息を吐く。

目を瞑ると夫となった男の顔が瞼に浮かび、エヴァはほんのりと頬を染めた。

彼の考えていることが時々分からなくなるけど、私のことをとても大事にしてくれるわ。

あの時も船長さんの手はとても温かかった。

私に不安になると、あの人は直ぐに気がついて、いつも安心させてくれる。

昨夜は、昼間からの出来事と初めて夜の祭りに行つて興奮した私は、蜂蜜酒を飲み過ぎたのだ。

気持ち悪くはならなかったけど、目を回した私を船長さんは家まで送ってくれた。

そして……

昨夜のことを思い出した少女は真っ赤になると目を潤ませ、火照る頬に冷たい両手を当てた。

……船長さんに抱き締められるのが好き。

船長さんに接吻されるのが好き。

そんなこと思うのは、はしたないことかしら？

大きな手で撫でられると、あまりの心地良さにまるで猫のようじろごろと喉を鳴らしたくなるの。

あんなに大きくて強そうなのに、私に触れる時はいつもとても優しい。

抱き締められると、胸がドキドキして頭がくらくらするの。

昨日の晩は船で仲間と共に過ごした船長さんが、もうすぐ迎えに来てくれる。

そして、一緒に船に乗るんだ。

これからはずっと一緒なのね。

ふと気が付いて顔を曇らせる。

違うわ、一緒なのは陸にいる間だけよね。

エヴァはゆっくりと立ち上がると出口に向ったが、船乗りの守護聖人の前で立ち止まり、硬貨を傍に備え付けてある箱に入れると蝋燭に火を灯す。

聖エラスムス様、どうか、どうか、私の船長さんをお守りください。

彼が必ず私の許に帰ってきますように……

船尾甲板に立った船長の指示を受け、航海士の下す号令に従って、乗組員達はきびきびと作業をこなして行く。

帆桁にはずらりと見習い水夫が並び、掛け声に合わせて展帆作業を行っている。

白い帆がばさりと広がり、やがて風を孕んで大きく膨らんだ。

錨が上げられ、帆船は身を軋ませながらゆっくりと向きを変える。

伝説的な船長『ラテディム海のオーガ』の船『ラ・ソリテア号』の
出港である。

波止場は見送りに来た人々や野次馬で賑わっていた。

ティアベの二つの塔を背に『ラ・ソリテア号』は、風を受けどんど
ん速度を上げる。

空気は冷たいが、太陽は既に空高く輝いており空は真っ青だ。

春の兆しは海に出る船乗り達を浮き浮きさせた。

暫くして視界から港が消え、辺りが全て暗く青い水だけになると、
男達はホツとしたように持ち場を離れた。

甲板から船長の姿が消えると、見張り台に立った男が、帆桁から降
りようとしている見習い水夫達に声をかける。

「おい！」

「……何ですか？」

見張り台の一番近くにいた少年は、何を言われるのだろうとびくび
くしながら、縄に？まったまま止まって尋ねた。

「俺がいる所からははつきり見えなかったのだが、最後に船長が担
いで来た、あのでかい荷物は一体何だ？」

そんなことを聞かれるとは思っていなかった見習い水夫は、にやに

やしなから答える。

「ああ、ありや多分人間ですよ」

「……死体か？」

見張り台の男は、身を乗り出して恐る恐る尋ねた。

「死体？ いやいや、まさか。そりゃ違いますよ」

ハハハと笑っていた少年は声を潜めた。

「ポールの奴があれば絶対女だと言っていました。靴を履いた足がちらと見えたそうです」

「女だと？ いったい誰だよ？」

「多分、船長の嫁さんじゃないですか？」

少年が目くるくるさせてそう言つと、見張り台の男も歯をむき出してにやにやした。

「おまえら、後でそつと様子を見に行くんじゃないのか？」

「勘弁してくださいよ。見つかったら、それこそぶつ殺されますよ」

船長の船室に閉じ込められたエヴァは、船が動き出すのを感じると、寝台から起き上がり小さな窓に駆け寄った。

アルテュスは絨毯に包んだ少女をまるで荷物のように船室に置く、後で来るからと言いつ捨ててさっさと行ってしまった。

船長さんなんだもの。

きっと仕事が沢山あるんだわ。

窓からは海しか見えなかった。

少しばかり心細くなったが、この船にはアルテュスが乗っている。

それに婚礼の時に会った船乗り達も皆乗っている筈だ。

ここから新しい生活が始まるのだわ。

そう思うとしつかりしなくてはと気持ちも引き締まる。

父との別れは辛かった。

今度はいつ会えるのだろうかと思うと涙が止まらなくなったけど、迎えに来てくれた船長さんが傍に来て、年に一度クリスマスと大晦日の間に私を連れてティアベに来るからと約束してくれた。

あの人は優しい人だ。

恐れることは何もないのだろう。

船長さんと一緒だったら幸せになれる筈はない。

船の中を自由に歩き回ることができなくて残念だ。

でも、船長さんの部屋に入れただけでも嬉しいわ。

これで、船長さんが留守にしている間も、彼がどんな生活をしているのか想像することができるわ。

エヴァは嬉しそうに船室に備え付けてある家具に触れた。

そっだ、私の荷物を片付けてしまおう。

そう思った少女は、船室の隅に置かれた自分の荷物を解き、辺りを見回すと枕元の小さな戸棚を開けてみた。

そこは、アルテュスの酒蔵のようで、酒瓶とグラスが幾つか入っているだけだった。

こっちの棚かしら？

低い方の棚を開けると、何も入っていなかったので、そこに自分の衣類を入れさせてもらう。

それから籠から商売道具を出すと、机の引き出しを開けた。

ふわりと甘い薔薇の香りが広がった。

何かしら？

引き出しには、紙が何枚かと驚ペン、封印に使う蝋と印章や角のペーパーナイフが入っていた。

そして一番奥にはとても美しい女物のレースのハンカチが、さも大切な物のようにしまつてあつたのである。

エヴァはそつとハンカチを元に戻すと、引き出しを閉めた。

船長さんの大事な物なのね。

私が勝手に自分の物をしまつたりしたら、多分嫌がるだろう。

どうして、胸が痛いのか？

エヴァは力が抜けたように、ぼんやりと寢床に腰を下ろした。

「エヴァ？」

船室の扉を開けたアルテュスは驚いた声を上げた。

「何で暗闇の中にいるんだ？　ここにランタンと火打石があるだろう？」

アルテュスは手探りで、食堂から持って来たブリキの椀を机の上に置くと、明かりを灯した。

寝床に座り頂垂れているエヴァを見て、眉間に皺を寄せる。

「ひとりにして悪かった。腹が減っただろう。温かいうちに食べたらいいい」

少女は差し出された湯気の立つスープの入った椀とパン切れを受け取ると小声で礼を言う。

温かいスープを飲んだら、胸の中の苦々しい気持ちが少しだけ薄れたような気がした。

自分の荷物を手早く片付けていた男は、エヴァが食べ終わったのを見て空になった椀を取り床に置いた。

そして、気遣わしげにその顔を見る。

「気分が悪いのか？」

「……いいえ」

「では何故そんな顔をする」

少女は暫く俯いて唇を噛んでいたが、決心したように顔を上げた。

「船長さん」

「どうした？」

「本当に私と結婚してしまってよかったんですか？」

アルテュスは眉を顰め、怒ったような顔で少女を見る。

「何が言いたい？」

俯きそうになったが、膝の上でスカートをきつく掴むと一息に言った。

「船長さんは誰か大切な人がいたんでしょう？ その人のことはいいのですか？ もし私と結婚したことを後悔しているのなら……」

「後悔なんかしていないぞ。その人って誰のことだ？」

エヴァは唇を震わした。

「引き出しに入っているハンカチの持ち主の方です。ごめんなさい、荷物をしまおうとして見つけてしまいました」

絶対に泣くまいと思ったのに、瞼が熱くなり鼻がつんとして、涙が溢れそうになる。

顔を背けると歯を食い縛り、きつく目を瞑った。

「引き出しだと？」

アルテュスは乱暴に机の引き出しを開けるとごそごそやっていたが、奥から香水の香りのするハンカチを引っ張り出した。

ここにこれがあったことをすっかり忘れていた。

こんなものの所為でそんな悲しそうな顔をしていたのか？

頂垂れている少女が愛しくて堪らなくなり、ハンカチを丸めると窓を開け海に放り投げた。

「エヴァ、そんな顔をするな」

目を丸くして冷たい風の入ってくる窓を見つめている少女を抱き寄せた。

薔薇の香りは狭い船室の中に執拗に残っていたが、全然気にならなかった。

あれは過去のことだ。

ずっと思い出しもしなかった。

随分前から俺はこの娘のことばかり考えている。

この娘に対して恋愛感情はないと思いついてきたが、それではこの胸の痛みは何なのだ？

自分の腕の中にすっぽりと納まっている少女を覗き込む。

大きな瞳からぼろぼろと涙が溢れるのが見えた。

ちくしょう、もう限界だ。

がんじがらめに捕らわれて、身動きもできない。

波に吞まれてしまふ。

……降参だ。

俺はこの娘にどうしようもなく惹かれていることを認めるよ。

彼女をちゃんと自分のものになりたい。

「貴方だけだ。信じて欲しい」

嬉しい言葉を囁いた船長さんは真っ直ぐな瞳で私を見つめてくる。

ほっとして、嬉しくて涙が溢れた。

「船長さんじゃなくて」

アルテュスは少女の脛に接吻を落とし、涙を唇で拭いながら言った。

「ちゃんと名前で呼んでくれ」

エヴァは頬を染めると、泣き顔に必死で微笑を浮かべようとする。

「……アル……テュス」

「そうだ」

とても恥ずかしいけど、同時に嬉しい気持ち。

「アルテュス」

「そうだ」

男は目を細めて眩しそうな顔をする。

「……アルテュス」

「エヴァ」

頭巾に包まれた頭を両手で抱き締めると、指を柔らかな耳たぶや首筋に滑らす。

そっと頭巾を脱がせると、髪を纏めていた櫛が落ちて、ランタンの明かりで黄金色に輝く髪の毛がふわりと広がりエヴァの肩を覆った。

アルテュスは立ち上がると船室の窓を閉め、熱のこもった眼差しを寝床に座り込んでいる少女に向ける。

エヴァは頬を染め潤んだ瞳で、上着を脱ぎ捨てて近付いてくる男を見つめた。

可愛い女。

俺の妻。

子供みたいに好奇心旺盛で冒険好きの癖に、健気で優しくてこんなにも愛らしい。

「エヴァ、君が欲しい」

真っ赤になって何かを言いかけたエヴァの唇を奪うと、肩を抱いて服に手をかける。

脅えさせたくはなかったので、逸る心を抑えゆっくりと服を脱がせていく。

少女は震えているが抵抗もせず、子供のようにされるがままになっている。

あまりにも柔らかく滑らかな肌に、触れている男の手が震えた。

ゆらゆら揺れるランタンの明かりに、白く清らかな身体が浮かび上がると、もう止まることはできなかった。

時折、ミシミシと音を立てながら船は波に揺す振られていた。

窓の下からざあと水が流れる音がする。

船の動きに合わせてランタンの明かりも揺れる。

狭い寢床に仰向けに横たわったアルテユスの上には、息も絶え絶えのエヴァがぐったりと頭を男の胸にもたせかけていた。

蜂蜜色の髪が強靱な筋肉に覆われた男の上半身を覆っている。

その様子は、まるで愛する者を守ろうと翼を広げている天使のようにも見えた。

男の手が宥めるように優しく妻の背中を撫でている。

アルテユスは床に落ちていた毛布を手探りで拾い、自分達の体にかけた。

エヴァは夫の逞しい胸に頬を摺り寄せた。

ぼんやりとした頭で考える。

皆があれとかあのことと言っていたのは、このことだったのね。

愛し合う男女が閨ですること。

でも、皆が匂わせていたような卑猥な感じはなかった。

それはそれは、恥ずかしくて消えてしまいたくなっただけ、あまりにも幸せで胸が一杯になって涙が出た。

私は本当にこの人の妻になったんだ。

……アルテュス。

声を出して呼ぶのはまだ恥ずかしいけど、胸の中で何度も何度も愛しい名前を呼んでしまう。

今までの好きとはちょっと違う、彼を想う愛しい気持ち。

こんな大きな男の人を守りたいと思うなんて。

生まれたままの姿で抱き合っているというのに、ついさっきまで感じていた耐え難いほどの羞恥心は不思議と消えていた。

エヴァは夫の胸の上から身体を起こした。

先程、ちらと目に入ったものをもう一度見たかったのだ。

男の丁度心臓のある辺りにオリーブの枝を啜えた小鳩が鮮やかに描かれていたのである。

アルテュスは薄っすらと目を開いたが、エヴァが何やら熱心に自分の身体を見ているのに気がつくくと、苦笑いを浮かべてまた目を閉じた。

もっとよく見ようと屈み込むと、脇の方に剣傷のような傷が見え、エヴァはびくつとする。

肩や脇腹にも白い傷跡があった。

エヴァは痛々しそうに顔を歪めた。

指の先でそつと傷跡をなぞり、溜息を吐く。

船長さんの仕事が危険だということは知っているけど、こんなに沢山怪我をしているなんて思わなかった。

不安な気持ちでいっぱいになり、アルテュスにしがみつく。

神様、お願いです。

船長さんをお守りください。

私からこの人を取り上げないで……

「……過ぎ去った時は良好、

これから更に良くなるように！

良い時と悪い時、

全ては神の思し召し

時の流れと共に、航海に幸あれ

前方注意、そして良い当直を！」

キンキンする高い声で、見習い水夫が喚きながら船の中を走っていき

船の上の時間は、見習い水夫の声によって刻まれているのだ。

「喧しい！……」

甲板に出て来たぼさぼさ頭の船乗りが、縄の切れ端を丸めたタワシを投げつけるが、少年は慣れたもので、上手くかわしながら叫び続け走り去った。

当直交代の時間である。

一晩中、見張りに立っていた男達は寒さに強張った体を伸ばし、まるで夢遊病者のようにふらふらしながら、船先に用を足しに行く。

それから暖かいスープを飲み、食堂へと走っていく。

食堂といっても甲板の中央の一部を板で囲った簡単なものだ。

椅子もテーブルもない。

「ほらよ」

差し出された湯気が立つ椀を受け取ると、男達は隅の方にしゃがみ込み、ふうふう言いながらスープを啜る。

船乗り達はしゃがんで食べるのだ。

船長と航海士の為にだけ、テーブルと椅子代わりになる木箱が置いてある。

食堂の脇にはやはり風除けの板で囲った、煉瓦の竈がある。

傍らには転がらないように縄で結わえた鉄鍋やブリキの食器が入った籠が置いてある。

近付くと塩漬けキャベツの匂いが強烈に漂って来る。

そこは、『ラ・ソリテア号』の料理長である『悪酔いブイヨン』の領地だった。

相棒のしゃもじを片手に『悪酔いブイヨン』は、食堂に出てきて腰に手を当て、物凄い勢いで食べている男達をまるで自分の子供を見るように目を細めて眺めている。

「あー、あつたかい！！ こりゃ、はらわたに染み入るぞ」

「おお、生き返るようだ！！」

「あんたの料理は天下一品だよ」

無精髭を伸ばした男達の声に、赤ら顔の料理長はにんまりと笑った。

船の上では掃除の時間だった。

裸足になりズボンを捲くつた水夫達は掛け声をかけながら、縄を結んだ桶を海に放り込んで水を汲む。

海水を甲板にぶちまけると、エニシダの篙や縄のタワシで洗い清めるのだ。

「おお、冷たい！！」

「足の指が千切れちまうようだ！」

特に寒い季節には、皆が嫌う甲板の掃除は当番が決めてある。

さぼることは許されなかった。

掃除が終わると、帆の様子を確認し、船底の艙水溜の水を掻き出す。

磨り減った縄や破れた帆を繕ったり、積荷の確認など他にも仕事は

沢山ある。

船乗りの一日は忙しかった。

数人を必要とする作業では自然に元気な歌声が上がる。

全員が声が良いとは言えなかったし音痴の者もいたが、『髭の三日月』がいると何故かしっくりと纏まるのである。

帆を揚げる、錨鎖をたぐる、水を掻い出す、それぞれの作業のリズムに合わせた歌がある。

そして、休憩時間に歌われる歌や踊りの歌もあった。

船乗り達は皆同じ地方から来た訳ではない。

その為、それぞれの故郷の歌も合わせると、かなりの曲の数になったのである。

アレンと交代したメレーヌがアルテュスの許に来た。

この男にしては珍しく、居心地悪そうにもじもじして中々話し出さない。

何か叱られるようなことでもしたのかとアルテュスが片方の眉を上げた時、やっと航海士は口を開いた。

「船長、どうか奥さんを閉じ込めるのは、止めてくれませんか？」

アルテュスは面食らった顔を見ると、低い声で尋ねる。

「何故知っている？」

メレー又は額に汗をかき、急に自分の靴に興味を惹かれたかのように俯いて、自分の足を踏んづけたりしている。

「皆知っていますよ。あんな狭い船室に一日中閉じ込めていたら、いくら何でも可哀想ですよ」

そして話は終わったとばかりに敬礼をすると、さっさと背を向けた。

航海士の後姿を見送りながら、傍にいた舵手がアルテュスに言った。

「奥さんがいるから船が沈むなんて誰も思っちゃいないですよ。それに、この船には、船長の持ち物にちよっかい出すような怖いもの知らずはいませんし」

ここまで言われてはとうしようもなく、アルテュスは渋々船室にエヴァを迎えに行った。

狭い階段を上がり、外に顔を出したエヴァは眩しそうな顔をした。

真綿のような雲の流れる青い空に日の光が眩しく、強い追い風が吹いている絶好の航海日和である。

傾いてグラグラする甲板を歩くのは、船室の寝台に腰掛けているの

とは勝手が違った。

足をふらつかせるエヴァの肘をアルテュスが掴んで囁いた。

「おい、ひっくり返ったりするなよ。皆が見ているからな」

確かに皆、それぞれの仕事に集中しているような振りをして、横目で二人の方を窺っているようだ。

外套に包まって船長のベンチに落ち着くと、エヴァは興味深そうに辺りを見回した。

風を孕んだ帆が立てる音、帆桁の軋む音、それに波の音や船乗り達の掛け声や歌声が入り混じる。

若い船乗り達は船長の可愛い奥さんを意識して、普段よりも大声で話したり、走り回ったりしている。

「この様子だと思ったよりも早くティミリアに着きそうだな」

メレーヌに船の速度を聞くとアルテュスは満足そうに頷き、コンパスを確認する航海士から離れ、エヴァの傍に来た。

コンパスの針は北極星を好むが、軍人と女を嫌うと信じられている。

確かに剣を帯びた船長が近付くと、針は不安そうな動きを見せるのだ。

「寒くはないか？」

「いいえ、とても気持ちいいです」

エヴァはアルテュスが隣に腰を下ろすと、顔を赤らめて微笑んだ。男の仕事振りが見れて嬉しかったのだ。

どうやら船長はその部下達に随分と慕われているようだった。

恐れられてもいるようだが。

ずっと晴天と春風の吹く日が続き、『ラ・ソリテア号』は刻一刻と目的地に近付きつつあった。

エヴァは船長の席に座って、破れた帆を繕っていた。

皆が働いているのに自分だけ何もしないで座っているのは嫌だから、何か仕事をさせてくれとアルテュスに頼んだのである。

アルテュスは良い顔はしなかったが、エヴァがどうしても言い張るので、渋々許したのだ。

船の上を飛び交うカモメの鳴き声が騒がしい。

港が近くなってきた証拠だ。

エヴァは空を見上げると眩しそうに目を細めた。

こうして見ていると船乗りの仕事は、とても楽しそうに見えた。

勿論、雨が降る寒い日もあれば、時化する時もあるだろう。

仕事だって危険を伴うものも多く、過酷で体力を必要とするものが殆どだろう。

でも、船乗り達の日に焼けた顔は明るく、生き生きとしている。

そして、エヴァは甲板に立って作業を指示している夫を優しい瞳で見つめた。

陸にいる時も凜々しいと思うけれど、船の上ではなんと立派なのだろう。

船長さんは海が好きなのだ。

……多分私には、彼を陸に引き止めておく力はないだろう。

そう思うと少しばかり悲しかったが、気を取り直して思った。

私は海が好きな船長さんが好きなのだから。

その日の昼過ぎに『ラ・ソリテア号』はティミリアに入港した。

畳帆作業を興味深く眺めていたエヴァは、水夫達の手際の良さに目を見張った。

瞬く間に帆は全て畳まれ、帆船はまるで盛装した貴婦人が休む為に

服を脱いだように見えた。

錨が下ろされ、係留索が次々と投げられて、岸に飛び移った水夫が鉄の輪に通し結び付けて行く。

机代わりの木の箱を前に帳簿係が座り、並んだ船乗りひとりひとりに給料を手渡している。

見張りの者を残し、最後の一人が金を懐にしまい喜び勇んで船を降りて行くと、帳簿係の脇に立っていたアルテュスは二人の航海士の方を振り返って言った。

「海事当局に行く」

アルテュスはアレンに妻と船を任せると、帳簿係、メレーヌと共に、港の海事当局と修理作業場に向った。

『ラ・ソリテア号』を登録して、大航海の前に船体の点検および修理をしなければならないのだ。

手続きを済ませ馬車を頼んだアルテュスが船に戻ると、エヴァはすっかりアレンと打ち解け、楽しそうに話しているところだった。

アルテュスは眉を顰め、不機嫌そうな声でエヴァを呼んだ。

「馬車を待たせている。早く船を降りるぞ」

そしてアレンに向かって言った。

「一週間程で戻って来る。留守の間、よろしく頼む」

その言葉にエヴァは驚いたように男の顔を見上げた。

アルテュスは歯が痛むような顔をした。

「馬車の中で説明する」

エヴァは口元をきゅっと引き締めて、向いに座っているアルテュスを大きな瞳で見つめている。

男は渋い顔をして黙ったままだ。

とうとう我慢ができなくなったエヴァが口を開いた。

「あの、一週間で戻るって？」

「……再来月から半年程、航海に出ることになった」

顔を背けてぼそつと言った男にエヴァはぼんやりと呟いた。

「半年……」

「ああ、半年から一年ぐらい留守にするとと思う」

泣きそうになり、暫く唇を噛んで俯いていた。

船乗りの妻がどんなものか、分かっていたつもりだったのに。

結婚したばかりで、もういなくなってしまっの？

そんなに長い間？

「エヴァ」

顔を上げるとアルテュスが手招きしていた。

「おいで」

隣に座ると膝の上に抱き上げられた。

堪らなくなって男の胸元にしがみつく。

この人の匂いを低い声を温かい手を身体に染み込ませたい。

刻み付けて欲しい。

「エヴァ、泣くな」

頭をぎゅっと抱き締められる。

「泣かれると、どうしていいか分からなくなる」

エヴァは頷いて涙を拭いた。

「ごめんなさい」

二人はそれからあまり口を開くこともなく、それぞれの思いを抱えながら馬車に揺られていた。

辺りは既に春である。

まだ枯葉に覆われた地面には黄色い水仙が咲き乱れ、所々に董も固

まっぴら咲いている。

木々はポツポツと青い芽を出し、長い眠りから覚めたようだ。

馬車は乾いた道を軽やかな音を立てて走っている。

窓から外を覗いていたエヴァはホッと溜息を吐いた。

いつもだったらとても好きだったこの季節。

でも今は浮き浮きするどころか、どんよりと暗い気持ちになってしまっている。

一週間で港に戻るということは、家には三日しかないということだ。

喉に何か塊が痞えているような感じがすると同時に、気が急いで落ち着かない。

三日間で何が出来るというのだろうか。

それから一年間も会えないの？

でも出発するのは、再来月と言っていたから、それまでは港にいるということだろう。

だったら……

「私も一緒に行きます」

アルテュスは驚いた顔をする。

「無理に決まっているだろう?」

「船旅ではなくて、港に一緒に行きます。それだったらいいでしょう?」

エヴァは不安そうに男を見つめた。

アルテュスは眉を潜めて考え込んでいる。

「俺は航海の準備で、相手をしている訳にはいかないんだ。ひとりで宿にいても退屈だろう?」

「でも、船長さんも夜には宿屋に戻って来ますよね?」

名前で呼べって言われるかと思ったけど、船長さんは唸るような声を出すと横を向いてしまった。

でも諦めない。

船長さんが港町にいると知っているのに、それからずっといなくなってしまうのに、ひとりで家に残っていたくないわ。

馬車が城に続く階段の所で止まると、子供達が飛び出してきた。

どうやら新しい遊び仲間がいつ帰ってくるかと、ずっと待っていた様子だ。

アルテュスの後に続いて馬車を降り立ったエヴァは、胸の中に温かい気持ち広がるのを感じていた。

待たれていると感じるのは嬉しいものね。

前を歩く夫の背中を見ながら思う。

船長さんも船に乗っている時、私が家で待っていると思ったら嬉しいのかしら？

「義姉上、早く早く！」

「父上がとても面白いものを持ってきてくださったの」

子供達に手を引かれ、部屋に落ち着くことも出来ず、後について中庭に出て行く。

「おしゃべりでき……」

言いかけたユナの口を乱暴に塞いでグレゴールが舌打ちした。

「秘密だつて言ったじゃないか」

エヴァはベソをかくユナの肩を抱いて、口を尖らしている少年を睨んだ。

「妹を苛めちゃ駄目よ」

気を悪くしたグレゴールはむっつりと黙り込んでしまった。

その横顔を見ながらエヴァは可笑しくて仕方がない。

何て船長さんに似ているのかしら。

特に不機嫌な顔なんかそっくりだわ。

子供達に連れて行かれた鳥小屋には、レースのように細かい細工の鉄製の鳥かごがあった。

その中にはエヴァの見たこともない色の鳥がいた。

「これは？」

鳥かごを静かに囲んでいた子供達は、驚いて目を丸くしているエヴァに満面の笑顔を向けた。

「鸚鵡っていうんだって」

「貴方達が染めたの？」

「違うよ。初めからこの色だったの！」

その時、眠っていると思われた鳥が先の曲がった嘴を開いてしゃがれ声を出した。

「ハジメカラコノイロダッタ」

エヴァは思わず大声を出してしまつた。

「まあ、鳥がしゃべったわ!!」

「マア、トリガシャベッタ!」

子供達は笑いながら、口を押さえ鳥小屋を飛び出して行く義姉の後を追いかけた。

「怖がらなくても大丈夫よ」

マリーがまるで自分の方が年上のように義姉の肩を抱いた。

エヴァは思わず笑い出した。

「びっくりした。話で聞いたことのある宮廷で流行っている自動人形かと思つたわ」

「父上の船が新世界から持って帰って来たの」

「船乗りの鳥なんですって」

「父上が兄上に結婚祝いに贈るそうだよ」

エヴァは暫く黙って考えていたが、顔を赤くすると笑った。

「船長さんの言葉で話してくれるのなら、私が傍に取っておきたいわ」

翌日、エヴァは昼から姿の見えないアルテュスを探して、城の中を歩いていた。

女性達の部屋の方には近付かないようにして、広間や図書室を見て回るが、探している人はいなかった。

どこにいるの？

まさか、私に何も言わないで港に行ってしまったんじゃないわよね？

慌てて階段を駆け上がり、自分の部屋の扉を乱暴に開いた。

扉の音に荷物を作っていたらしいアルテュスが、驚いて顔を上げる。

「どうした？」

エヴァはホツとした顔をすると、衣類が散らばったベッドに歩み寄った。

「お手伝いします」

大きなシャツを畳んで重ねていく。

胸が痛くて唇を噛んだ。

立ち上がったアルテュスは、暫くその様子を見ていたが、ふと思いついたように口を開いた。

「裁縫箱を出してくれ」

エヴァは自分の荷物の中から裁縫道具を取り出した。

「何か繕い物があるのですか？」

「いや、鋏を貸して欲しい」

鋏を受け取ったアルテュスは、窓辺に近寄った。

どうやら自分の髪を切るつもりのようにだ。

「私にやらせてください」

エヴァがそう言うと、アルテュスは頷いてベッド脇の椅子に腰掛けた。

「できるだけ短く切ってくれ」

海の上では天気の良い日に服の上から海水を浴びる以外、風呂に入することはできない。

緊急事態に備えて船乗りは、寝る時も服を脱ぐことを禁じられているのだ。

虱や蚤が湧くことも頻繁にある。

そのうえ船乗りは髪を切ると嵐が起こると信じられているので、船の上では髪を切ることができないのだ。

髪を一房手に取ると、そろそろと鋏を入れる。

背を向けたまま男が言った。

「床に捨てておけ。後で片付けさせるから」

エヴァは微笑んで、何も言わずに切った黒い巻き毛を窓辺の机の上に並べている。

切り終わると後片付けをするからと、ひとり部屋に残ったエヴァは夫の髪を集め、リボンで纏めて結わえた。

そして、そつと溜息を吐き、それに唇を押し当てると、大切な物をしまつてある小さな木箱に入れた。

パタンと木箱を閉じると胸が寂しさでいっぱいになり、エヴァはアルテュスを探しに行く為に急いで部屋を出た。

「駄目だ！」

「でも……」

「絶対に駄目だ!!!」

「お願い!!!」

「問答無用だ」

言い争っていた男女の女の方が、顔を背けショールを掴むと部屋を出て行くとする。

だが、扉を開ける前につしりとした腕に遮られた。

「エヴァ、聞き分けのないことを言うな」

涙声で答える。

「少しでも一緒にいたいことが、そんなに悪いことなの？」

男ははあと大きな溜息を漏らす。

エヴァは捕らえられている腕から逃れようと身を捻る。

アルテュスは腕の力を僅かに緩めたが、放そうとはしなかった。

「一緒にいたいと言ってくれるのは嬉しい。だが君を危険な目に遭わせたくないんだ。分かって欲しい」

涙の溜まった大きな青い瞳が男を見上げる。

「貴方の弟のヤンと一緒に来てもらうわ。それでも駄目？」

「……昼間は何をしているつもりなんだ？」

「天気の良い日には港を散歩して、夕方には貴方が戻るのを宿屋で待っているわ」

「港には様々な場所から流れ着いて来たならず者がうじゃうじゃしているんだ。厄介なことに巻き込まれるかも知れないし、引つたぐりに遭うかも知れないんだぞ」

エヴァは涙で濡れた頬を男の胸に擦り付けた。

「絶対大丈夫だから。危険そうだったらすぐに逃げ出すから、一緒に行かせて？」

アルテュスは頷かなかったが、見上げてくる妻の頭を抱き寄せ、目を合わさないようにする。

顔を見せて、自分の決意が少なからず揺らいでいることを見せたくはなかった。

男は大きなベッドに仰向けに横たわり、荒い息を静めながら天井を

見つめていた。

暫くして額の汗を腕で拭くと、傍らの女を抱き寄せその頭の天辺に唇を押し当てる。

最後の夜だ。

エヴァは自分の頭を撫でるアルテユスの手を取ると、大きな手に頬を摺り寄せた。

まだ一緒に港に行くことを許されていないのだ。

「……船長さん」

夫の逞しい胸に寄り添って囁いた。

「ん？」

「あの、私にも船長さんと同じような絵を描いて欲しいのだけど」

「……何の話だ？」

「もっと小さくて鳩じゃなくてもいいから。駄目かしら？」

アルテユスは肘を立ててぐいと体を起こすと、呆れたような顔でエヴァを見た。

「駄目に決まっているだろう？ 刺青したいなんて、一体何を考え
ているんだ？」

「船長さんが戻って来るまで消えない印が欲しいの」

「駄目だ。これは針で皮膚を刺して描くんだぞ。君に我慢できる筈がないだろうが」

「できるわ」

アルテュスはベッドの上に起き上がると、怒った声で言った。

「エヴァ、この前から馬鹿なことばかり言って、どっいつつもりなんだ？」

エヴァは唇を震わした。

「貴方と一緒にいたい、貴方のものだっていう印が欲しいって言うのが、馬鹿なことなの？」

男は勘弁してくれと言うように天井を見上げると、布団に潜り込んで泣いている妻の方を横目で見た。

「エヴァ」

布団の中に手を入れて、エヴァの頭を撫でようとするが、手を振り払われる。

「エヴァ、君を傷つけないんだ。それに男の彫師などに触れさせたくない」

「……女の彫師はいないの？」

ひとりだけ知っているがと独り言のように呟いたアルテュスは、慌てて打ち消した。

「今のは聞かなかったことにしてくれ」

エヴァはひょっこり布団から顔を出すと、涙に濡れた瞳を輝かせた。

「だったら……」

「駄目だ」

「お願いします」

「駄目だ」

「お願い、アルテュス!!」

剥き出しの両腕を首に巻きつけられた男は、顔を顰め苦し紛れに言った。

「分かった。尻にだったら許す」

どうだと言っばかりに女の顔を見つめた。

「お尻に?」

エヴァは動きを止めると、顔を赤くして首を傾げる。

「それ以外は何を言っても無駄だ」

「……いいわ」

絶対断るだろうと思っていたアルテュスは絶句した。

「嬉しい！！ 明日は一緒に行けるのね。ありがとう！！」

呻き声を出して頭を抱えたアルテュスは、ばたんと仰向けに倒れた。

楽しそうにおしゃべりしている二人を見ないように、男は壁の方を向いて目を瞑っていた。

だが、馬車の立てる音に混じって、二人の声は嫌でも耳に入ってくる。

知らない内に家族と仲良くなっていたのだなと感心すると共に、妻は思っていたよりもずっと遅しいのかも知れないと思う。

縛り付けたい訳ではなく、守ってやりたいと思っているのに。

女はいつも俺の気持ちを理解しようともせず、俺を置き去りにして行ってしまっ。

エヴァは俺の帰りを待っていてくれるのだろうか？

急に不安になり目を開くと座席の上に座り直す。

アルテュスの方を見たエヴァが嬉しそうに微笑んだ。

澄んだ瞳を輝かせ頬を薔薇色に染めて愛らしい。

こんなに嬉しそうな顔をするのは、後暫く俺と一緒にいられるからか？

本当に俺のことが好きなのだろうか？

自惚れではないのか？

エヴァを港町の彫師の許に連れて行くのは、まったく気が進まなかった。

アルテュスは、思わず口走ってしまったことを大層悔やんでいた。

あの女に余計なことを言わぬよう口止めしとかなくてはな。

エヴァに泣かれるのは本当に苦手だと思った。

それにしても、この数ヶ月で驚くほど女らしくなっていないか？

兵学校から戻ったばかりの時は、まだ子供のようにだったのに。

夕方、一同は宿屋に落ち着くと、夕食を注文した。

「兄上の船を見に行ってもいいでしょうか？」

豆のスープをすくいながらヤンが、おずおすと前に座った兄に尋ねた。

ちらと自分の皿から目を上げたアルテュスは、渋い顔をして頷いた。

「……明日、俺が行く時に一緒に来たらいいだろう」

横でエヴァが、にこにこしている。

「船長さんの愉快的な仲間にもまた会えるのが嬉しいわ」

「僕も兄上と一緒に新世界に行きたいです」

「船に興味があるのか？」

アルテュスは初めて歳の離れた弟に関心を向けた。

ヤンは船にとっても興味を持っている、そして船乗りの兄をとっても尊敬していると興奮した様子で話した。

アルテュスは苦笑いをしながら、それでも嬉しそうだ。

顔を紅潮させ質問を浴びせる弟に丁寧に答えてやっている。

そんな二人をエヴァは優しい眼差しで見守っていた。

この前、聞いてみたのだ。

何故もつと自分の兄弟と話さないのかと。

皆とてもいい子だからと。

その時アルテュスは、兄弟といっても見知らぬ他人と同じだし、ガキは煩くてかなわんとそっぽを向いたのだった。

だから初めてアルテュスが兄らしく弟に話しかけるのを見て、エヴァはとても嬉しかったのだ。

特にヤンは性格が兄に良く似ていると思われたので、共感できることも多く、気が合うのではないかとひそかに思っていたのだった。

ティミリアはエヴァの生まれ故郷のティアベと違って、大型貨物船が多く立ち寄る港だ。

港町も比べ物にならないほど、大きく活気に溢れ騒がしい。

街を歩いていると、外国の商人と見られる異国風の服装をした人々とすれ違う。

港町には船乗り達の溜まり場となっている酒場や定食屋が立ち並び、毎日夜が更けるまで賑わっていた。

波止場近くには新鮮な魚介類を売る漁師の掘っ立て小屋が並ぶ。

エヴァとヤンは午前中、アルテウスが色々と船旅の為の買い物をするのに付き合い、昼は掘っ立て小屋で簡単な食事をした。

二人にとって、小さな丸パンに酢漬けの鯿を挟んだだけの食事は、物珍しく楽しかった。

傍では波止場で働いていると思われる男達が立ったまま、さつと塩をしただけの小魚を玉葱の輪切りと一緒に丸ごと口に入れている。

男達もぐもぐと口を動かしながら、港で仕入れてきた噂話に花を咲かせている。

「おい、噂を聞いたか？」

「ああ、王が母后様とご一緒に視察旅行に出られたって話だろ？」

「ティミリアにも秋頃には立ち寄られるそうだよ」

「それよりも、早く新教徒との争いを何とかして治めて欲しいもんだがな」

「安心して商いも出来ないじゃないか」

「こういつ時だけ、皆お祭り騒ぎで出迎えるんだろうな」

その話にエヴァとヤンは顔を輝かせた。

秋頃に港に来れば、王様ご一行を見ることが出来るかも知れないのだ。

食事の後、三人は石畳の道を歩いて、『ラ・ソリテア号』が船体修理の為に置いてある作業場に向った。

船底にこびり付いた貝や海藻を取り除き、腐っている板を交換して、麻の繊維を混ぜたタールで水漏れしないように塗り固める。

一年に一回はこのような修理が必要だった。

作業場は船が置いてある場所には屋根がなく、『ラ・ソリテア号』は材木を組み合わせて作った台の上に乗せられていた。

船体にはいくつもの梯子がかけられ、頭に布を巻いた男達が掛け声

をかけながら削り道具を持った手を威勢よく上下に振り動かしている。

ガリガリという音と共に貝殻の破片や乾いた海草が辺りに散らばった。

アルテュスは甲板から外して作業場の隅に並べてある大砲を見に行った。

24台あるうちの半分を父親が自慢していた新型の大砲に交換することにしたのである。

アルテュスが技術者や船大工と話している間、ヤンは傍に立って熱心に聴いていたが、エヴァは話が長引くと退屈になり作業場の入り口の方に行ってみた。

外は風が冷たいがとてもよい天気である。

散歩に行きたいと思ったエヴァは、道路まで歩いて行ってみようと思立った。

大きな荷物を運んだり、樽を転がす人達で辺りは騒がしい。

エヴァは足取りも軽く、石畳で舗装された細い道を歩いて行った。

道端の茂みにはポツポツと黄緑色の芽が見える。

海の方からは、騒がしいカモメの声が聞こえてくる。

波止場に下りる道を眺めながら、作業場に戻ってアルテュスがまだ

忙しいようだったらヤンを散歩に誘ってみようと思った。

踵を返そうとしたエヴァは、通りかかった男に声をかけられ驚いて立ち止まった。

レースの襟に黒いビロードの上着、膨らませた半ズボンといういでたちの男は愛想笑いを浮かべながら近付いて来た。

「何でしょうか？」

エヴァは悪びれる様子もなく、羽飾りのついた小さな帽子を取った男の顔を見上げる。

大柄な男はまだ若く、短い金髪に小さな黒い瞳をしている。

男は目を眇め、ふらふらと手を右左に振って尋ねた。

「ちょっと、道をお尋ねしたいのですが。港町はどちらですかね？」

「あちらです」

エヴァが指差す方向を見ながら男は言った。

「そうですか」

そのまま立ち去ろうとしない男にエヴァは首を傾げる。

男は大きな溜息を吐くと、まるで頭痛でもするように手を額に当て

た。

「ご気分が悪いのですか？」

心配そうに尋ねると、男は手を外して苦笑いをして言った。

「見知らぬ方にこのような話をするのもどうかと思うのですが。少しだけ話を聞いて頂けますか？ 実は私には幼い子供がいるのですが、母親が数週間前に私達を捨てて家を出てしまいました」

目を見開いて話を聞いているエヴァに男は頷いて話を続けた。

「母親が出て行ってから、子供はずっと泣き通して食事も喉を通らない有様で。数日前にやっと妻がこの港町にいるという話を聞きましたので、こつやつて尋ねて来たのです」

「まあ、それはお気の毒に」

エヴァが同情すると、男は後ろを指差して言った。

「その裏道に馬車を待たしているのですが、情けないことに私は今まで子供の面倒を見たことがなく、どうしていいかさっぱり分からないのです。女性の方を見たら少しは泣き止んで何か食べてくれるのではないかと思えます。一緒に来て子供を見ては頂けないでしょうか？」

エヴァは青い澄んだ瞳に涙を溜めて頷いた。

男は眩しそうに視線を逸らし、エヴァの頭越しに作業場に行く道を見ていたが、急に顔色を変えると背を向けてその場を走り去った。

後には、ぼかんとしたエヴァが取り残された。

背後の足音に振り返ったエヴァは、夫と義弟の姿を認めると微笑んだ。

「エヴァ、誰と話していた？」

傍に来ると眉を潜めてそう尋ねたアルテュスをエヴァは無邪気に見上げた。

「困っている方がいるの。様子を見に行ってもいいかしら？」

「何を言われたんだ？」

「小さなお子さんがあるのに、奥さんが家を出て行ってしまったのです。その角に馬車を止めているそうなので、ちょっと赤ちやんの様子を見に……」

アルテュスはエヴァの腕を掴むと、目と顎で弟に合図をした。

ヤンは心得たという風にその方向に駆け出し、角を曲がって見えなくなっただ。

暫くして戻って来たヤンは頭を傾げながら言った。

「馬車など止まっていますよ。辺りには人っ子一人いませんでした」

アルテュスは、目を丸くしているエヴァを不機嫌そうな顔で見下ろした。

「エヴァ、知らない奴と口を利くな。話しかけられても返事をするんじゃないぞ」

「でも、ちゃんとした身なりの人だったし。言葉遣いも……」

急にアルテュスに肩を強く掴まれ、エヴァは顔を顰めた。

「悪事を働くような奴らは、人混みで見分けられないような様子をしているもんだ。気をつける」

「大丈夫よ。これから気をつけるわ」

男を宥めるように微笑みながら見上げると、アルテュスは一層険しい顔をした。

傍ではヤンがしきりに頭を捻っていた。

「遠くから見た感じでは、誰か見たことのある人のような気がしたけど……」

数日後の夕方、何度も催促されて仕方なしにアルテュスは、妻と一緒に港町に向っていた。

弟は船乗り仲間の泊まっている宿屋で留守番をしてもらっている。

カモメの飛び交う空は紫色の雲がなびき、大層美しかった。

港には夕日を背に次々と漁船が戻って来る時刻だった。

エヴァは大股で歩くアルテユスの後に嬉しそうに小走りで行く。

新鮮な魚の入った桶を陸に上げる者達の掛け声に、カモメの声が入り混じり、辺りは大変騒がしい。

漁師達は波止場に投網を手早く広げ、日が暮れぬうちに絡まった海草を取り除き穴を繕う。

二人はごみごみとした古びた建物の並ぶ細い路地に入って行った。

煤で黒く染まり傾いだ建物の前で立ち止まる。

アルテユスが錆び付いた重い鉄の輪のついた戸を押すと、二人はギシギシと音を立てる薄暗く狭い階段を上り始めた。

屋根裏まで上ると、小さな木の扉があった。

扉には何やら札が下っている。

目を近づけて見ると、「邪魔しないでください」とたどたどしい字で書いてある。

アルテユスは構わずにドンドン扉を叩いた。

暫く待つと、誰かが大声で呪い文句を喚きながら扉に近付いてきた。

「誰だよいったい！ 邪魔すんなと書いてあるだろうが！！！」

そう叫んで扉を開けたのは、腰に両手を当てた大柄な女だ。

「ジェン、俺だ」

女はまじまじとアルテウスを見つめると、いきなり大声で笑い出して男の首っ玉に飛びついた。

「おい、放せよ。連れがいるんだ」

女はアルテウスの後ろから顔を覗かせたエヴァを見ると、まあと声を上げ男から離れた。

「暫く会わないうちに趣味が変わったのかい？ そう言えば、マリルは樽屋の職人と一緒になってこの近所に住んでるよ。この前会ったら、そろそろ二人目が生まれると言って大きな腹を抱え浮腫んだ顔をしていたがね。あの娘も馬鹿なもんさ。玉の輿を蹴って貧しい男と一緒になるなんて……」

「煩いぞ。部屋にも入れてくれないのか？」

二人を西日の眩しい部屋に招き入ると、女は改めてエヴァのことを見た。

エヴァも目を丸くして相手を見つめている。

女はまだ若く、頭には派手な模様の深紅の布を巻き男の格好をしていたのだ。

彫りの深い顔は小麦色に日焼けしており、大きな深黒の瞳が美しい。

「私はジェニファー、ジェンと呼んでおくれ」

「エヴァです」

「俺の妻だ」

頬を染めて隣の男を見上げるエヴァを眺めていた女はにっこりした。

「可愛い子じゃないか。どこで見つけてきたのかい？」

「ティアベだ」

「ティアベです」

揃って答えた二人にジェニファーは笑い声を立てた。

「仲が良くて羨ましい。うちとは大違いだ」

アルテュスは落ち着かなかった。

エヴァを騙そうとした男のことが頭から離れず、彼女を絶対ひとり
にしないように警戒していた。

そして一緒にいる時には常に回りに注意を払っていたが、あれから
何もおかしいことは起きなかった。

だが、ヤンと三人で波止場の道を歩いている時も、定食屋で昼食を
とっている時も、いつも誰かに見られている気がするのだ。

海の男の直感とでも言うのだろうか。

アルテュスはもう少し傍にいたいという誘惑に負け、エヴァを港に
連れて来てしまったことを心から後悔していた。

そして、初めは『ラ・ソリテア号』を見送ってからエヴァとヤンは
二人で家に戻る筈だったのだが、予定を早めて自分で家まで送って
行くことに決めた。

それでもしないと航海中ずっと気を揉んでいなければならないだろ
う。

家にいればいつも誰か周りにいるから安全だ。

エヴァはそのようなアルテュスの気持ちに全然気付いていないよう
に見えた。

ただ夫の傍にもう暫くいられることを喜んでるようだ。

無邪気で愛らしいと思う一方で、もう少し危機感があつた方がいいのではないかと思われたが、彼女の喜びを壊したくなかつた。

アルテュスは自分の感じている不安をエヴァには話さないことにした。

弟には注意をするように言ったが、見られている気がすることは言わなかつた。

気配がするだけで根拠がないのである。

自分を英雄と崇めている弟に心配性で意気地なしの兄とは思われなくなつたのだ。

359

ある晩、宿屋でアルテュスは、隣で船乗り達の話していることに興味を引かれた。

「おい、その話、もう一度語ってくれ」

急に船長に声をかけられた水夫は驚いた顔をしたが、頷くと緊張した面持ちで話し出した。

「昨夜、仲間達と一緒に『三人の水夫』に行つたんです」

『三人の水夫』は売春宿だ。

水夫は許しを乞うようにちらと船長を見たが、アルテュスは早く続きを話すように促した。

彼らとは既に契約を結んでいるが、陸にいる間は自由なのだ。

浴びるほど酒を飲んで喧嘩をしようが、何十人の女と寝ようが、船長が口を挟むことはない。

出港日に五体満足で、しらふで、きちんと持ち場に就いていれば問題ないのだ。

水夫の話はやたらと長かったが、省略すると以下のようなものだった。

数人の女を交えて仲間達と酒を飲んでいると、そこにいた客らしい男が声をかけてきた。

『ラ・ソリテア号』では女も雇っているのかと。

ひとりがそんなことはないと答えると、男は驚いた顔をして言った。

だが『ラ・ソリテア号』の船長は自分の女を船に乗せているのではないか？

水夫達は、ティアベからここに来る時には船長の奥さんが一緒だったが、通常は『ラ・ソリテア号』には女は乗せないこと、新世界への航海は船長の奥さんを連れては行かないことを話した。

男は他にも『ラ・ソリテア号』の行く先や乗組員のことなどを色々

尋ねたが、水夫達は男が職を探しているのではないかと思い親切に答えてやったというのだ。

アルテュスは眉間に皺を寄せ暗い表情で考え込んでいた。

その男の特徴を尋ねると、返って来る答えは様々だったのだ。

男達は既にかなり飲んでいたのでろう。

話をしていた水夫は髭を生やした赤ら顔の大男だったと言い、ある者は髭などなく色白の太って小柄な男だったと言った。

別な者は他の港で見かけたことのある船乗りだったと言い張った。

髪の色や目の色もてんでバラバラなのだ。

アルテュスは男達を睨みつけると皮肉を込めて言った。

「つまり、そいつは髭面で髭がなく、赤ら顔で色白で、背が高くて低く、黒い髪で金髪で、黒い目で青い目だったと言っ訳か」

水夫達は申し訳なさそうに顔を見合すと、おずおずと口を開いた。

「男は普通の船乗りの格好をしていて、別に怪しいところはありませんでした」

アルテュスは顔を顰めて頭を振った。

仕方がない。

明日は『三人の水夫』に行つて、その場にいた女達に直接話を聞いてやるう。

そう思つたアルテュスは翌日、エヴァを迎えに行く前に『三人の水夫』に立ち寄つたが、女達も一回来たきりの客などよく覚えてはいなかつた。

日々は飛ぶように過ぎて行く。

その時その時を大切に生きようと思つていたエヴァだったが、やはり時間が進むにつれ、笑顔を見せることが少なくなつた。

午前中は毎日ジェニファアーの家に通い、昼に迎えに来たアルテュスとヤンと一緒に行きつけの定食屋で食事をする。

午後は天気の良い日は、ヤンと散歩をすることもあつたが、大抵早いうちに疲れて宿屋に戻つていた。

アルテュスの前では快活に振舞つていたが、ヤンと二人になると口数も少なくなり、ぼんやりとしていることが多い。

ヤンはそんな義姉を心配そうに見ていたが、何も尋ねなかつた。

初めは自分で決めたこととはいえ、エヴァはジェニファアーの家に行くのが苦痛だつた。

ジェニファアーが昔アルテュスの恋人だつたことを知つた為だ。

過去のことだ。

今はジェニファアにも元船乗りの夫がいると知っていても、どうしても嫌な気持ち拭い去ることができなかった。

できればアルテユスの過去を全部消し去ってしまいたかった。

自分がそうであるように、アルテユスにも自分ひとりであって欲しかった。

ジェニファアの家では普通にしていたエヴァアが、宿屋に戻りアルテユスと二人だけになると急に泣き出した。

嫉妬に胸を焼かれるような思いで唇を噛み涙を流す妻を、アルテユスは黙って優しく抱き寄せた。

エヴァアは嗚咽を堪えながら、以前アルテユスの友人のマテオ・ダヴオグールに聞いた話を思い出していた。

ジェニファアだけじゃない。

他にも大勢いたのだろう。

エヴァアは自分の髪を撫でる男の手を振り払った。

他の女に触れた手で触って欲しくなかった。

どうにもできないことは分かっているけど、胸が苦しくて仕方がなかった。

宿屋ではアルテュスは自分とエヴァの為に屋根裏の小部屋を借りていた。

普通は客を泊めない部屋であったが、宿屋の主人の馴染みであるアルテュスは、昔からティミリアに来る度にその小部屋を借りていたのだ。

マリルリーズと出会い別れた後、ここに戻ってくるのは初めてだった。

床下には大勢の客の泊まっている大部屋があることが分かっているので、音を立てるわけにはいかなかったが、人目に晒されずに二人きりで寛げる空間はありがたかった。

アルテュスはジェニファーとこのことをエヴァには言っていなかったが、どうやら知ってしまったようだった。

自分から話した方が良かったのか？

だが随分昔のことであるし、自分にはエヴァが気にするような気持ちは何もないので、余計なこととは言わぬ方が良いと思ったのだ。

このような場合、いつもなら面倒臭いと思うアルテュスだったが、エヴァは本当に苦しそうで放っておくことはできなかった。

多分このような気持ちが自分の中にあるとは思ってもいなかったのではないか？

自分の手を跳ね除ける一方で、縋りつくような瞳で見つめてくるのだ。

過去に嫉妬して涙を零す妻が愛しかった。

アルテュスは言い訳染みたこととは何も言わなかった。

だが振り払われても避けられても、エヴァから離れず優しく接した。そして、逃げようとする妻を少しばかり強引に押さえつけると、泣き疲れてぐったりなるのを待ってから優しく服を脱がし、何もかも分からなくなるまで情熱的な愛撫を与える。

「……こんなことをするのは始めてだ」

「君だけだ……」

このような言葉を囁かれながら、夢と現実の間を恍惚と漂ううちにいつしか過去は過去として受け止める気持ちがすとんと自然にエヴァの胸の中に納まった。

二人が一緒にいる所を見ていれば、アルテュスとジェニファーの間に恋愛感情はないことがはっきりと分かったし、今はエヴァだけだと言う夫の言葉も信じることができた。

残っている僅かな時間を大切にしたいと思った。

エヴァが甘えるように逞しい胸に頬を摺り寄せると、まるで壊れ物

でも扱うように優しく抱き締めてくれる。

このまま時が止まってしまえばいいのに。

彼が留守の間、御伽噺の中のお姫様のようにずっと眠っていらればいいのに。

やきもち焼いて泣いたりした所為か、船長さんは最近私をとても気遣ってくれる。

まるで世界中から私を守ってくれるように。

嬉しいけれど少しばかり申し訳なく思う。

他にも色々心配事はあるだろうに、私のことで余計な気を使わせて。だから船長さんの前では、寂しそうな素振りは絶対に見せないと決めた。

泣いている顔や怒っている顔ではなくて、笑顔を覚えていて欲しいから。

海から吹き寄せる風が段々と暖かくなるにつれ、別れの時は刻一刻と迫っていた。

今まで人前では夫に対して控え目な態度だったエヴァも、帰りの馬車の中ではずっと彼に寄り添っていた。

そして、記憶に焼き付けようとしてもするように、大きな目を見開いてアルテユスの顔をじっと見つめている。

短く刈った黒い縮れ毛、日に焼けた頬や少しばかり皮肉に歪ませたその口元を。

アルテユスはその眼差しに気付いていないように、正面に座ったヤンと話していた。

それでも、時折ちらとエヴァの方を見ると、何気ない様子で手を伸ばし、頭巾のリボンに触れたり、丸みを帯びた頬を指の腹で撫でたりする。

その度にエヴァは嬉しそうに頬を染めて、男の大きな体に身を摺り寄せる。

ヤンは眩しそうな顔をして、そんな二人を眺めていた。

この冒険好きな少年の頭の中は、敵国の艦隊や海賊、はたまた新世界の原住民やらで一杯で、今まで異性のことなど真面目に考えたことはなかった。

いつか大人になったら、死んだ母のように優しい人と結婚したいとぼんやりと思ったことはあるが、それだけだった。

だが、エヴァが家に来てから、睦まじくしている兄夫婦を見ているうちに、憧れを抱くようになった。

エヴァは家にいる女達、継母や死んだ兄の許婚のように気取ってはいなかったし、口煩くもなかった。

自分達兄弟と子供のように夢中になって遊んでいるかと思えば、小さい子がむずかかったりすると今度は母親のように抱き締めてくれるのだ。

一度しか見たことないが、彼女は豪華な衣装を身に纏うと、まるで御伽噺に出てくるお姫様のように美しかった。

でもヤンは、質素な普段着で頭をぴっちり頭巾で覆っているエヴァの姿の方が好きだった。

そして、いつか義姉上のような可愛らしい女性を見つけて、兄上のように愛されたいと願うのだった。

アルテウスが家にいられる時間をできるだけ伸ばそうと、三人は日が暮れても宿屋に泊まらず、馬車を乗り継いで道を急いだ。

日中は暑い位に気温が上がるが、夜はまだ冷える。

暗い道を馬車はガタゴトと音を立てて走って行く。

窓の閉じたカーテン越しに、馬車の脇に吊るしてあるランタンがゆらゆらと動いているのがぼんやりと窺えるが、明かりは狭い馬車の中までは入ってこない。

暗闇の中で弟に見えないのを幸いとばかり、アルテュスはエヴァが風邪をひかないようにと外套に包んで自分の膝の上に抱き上げた。

「でも、こんな格好で寝たら船長さんの体が痛くなります」

エヴァが困ったように囁いた。

「船長さん？」

「……アルテュスの体が痛くなるわ」

アルテュスは喉の奥で低い笑い声を立てると、エヴァをしつかりと抱えなおす。

「大丈夫だ。居心地悪いのには慣れてるから」

エヴァはもう抵抗もせず、に逞しい胸に寄りかかると目を閉じた。

自分よりも体温の高い男の体は心地良く安心する。

「おやすみなさい」

もう一度身を起こしてそう囁いた妻の唇を、男は答え代わりにそつと自分の唇で塞いだ。

田舎道を夜通し走った馬車は、翌日の昼過ぎに家に着いた。

アルテュスとヤンの後に続いて馬車を降り立ったエヴァは眩しそうな顔で辺りを見回した。

出発した時から城の回りの景色がまったく変わってしまった。

木々には柔らかな葉が生い茂り、あるものは花盛りだ。

地面も緑の草で覆われ、雑草までが小さな花を咲かせている。

心地良い風には、甘いライラックの香りが混じっているように思えた。

明日のことは考えない。

今日一日を大事に生きよう。

そう決心したエヴァは、きりっとした微笑みを浮かべると、男達の後を追って階段を上り始めた。

庭で遊んでいたらしい子供達が、慌てて駆け込んできた。

階段は一斉に賑やかになる。

この子供達を見ると家に帰って来たという感じがするわ。

エヴァは両脇で自分の袖を掴んで一生懸命おしゃべりをしている。ナとグレゴールを見て笑い出した。

「そんなに一度に話されたら、何が何だか分かりやしないわ」

「僕が最初に話し始めたんだよ！」

少年が妹を片手で押し退けると、少女も負けていない。

「いつもグレゴールばかりでずるい！」

「ユナ、グレゴール、順番に話を聞くから喧嘩はよして」

子供達の話の聞いているうちにアルテュス達は姿を消してしまった。

部屋に戻ったアルテュスは燭代を窓際の机の上に置くと、部屋の真ん中にあるベッドに近付いた。

天蓋を開くと、いつも妻が寝ている左側がこんもりと盛り上がっている。

どうやら布団の中に潜り込んでいるようだ。

「エヴァ、眠ってしまったのか？」

エヴァは眠っていなかった。

怒っているのだ。

最後の日だというのに、アルテュスは午後はずっと父親と出かけており、漸く戻ってきたのは夕食も終わった時間だった。

「何だ泣いているのか？」

答えはない。

アルテュスは小さく溜息を吐いて、ベッドに腰を下ろした。

黙っているとむくむくと布団の小山が動き出した。

暫くするとエヴァが布団から顔を出し、裸足でベッドを抜け出すと、港から持って帰ってきた自分の荷物の中をこそこそやっている。

港町に忘れ物でもしたのかと思っていると、布に包んだ何かを大事そうに抱えて戻って来た。

「どうぞ、これを」

そう言っ得意そうに差し出されたのは、小さいわりに重い物だった。

包みを解いて中身を確認めると、アルテュスは尋ねるように顔を上げた。

「これは……」

「兵学校の装蹄師にもらいました。魔除けになるから持っててくださー」

アルテュスは蹄鉄の効き目など信じていなかったが、自分の為を持って帰ってきてくれたエヴァの気持ち嬉しかった。

「礼を言つぞ。さっそく船に戻ったら、マストに釘で打たせよう」
そう言うと、嬉しそうに目を輝かせている妻の手を取って引き寄せた。

ドタバタと慌しい足音に続き、キンキンした声が辺りの沈黙を破った。

「時刻は真夜中、全ては正常!!!」

当番の見習い水夫が、夜回りをしているのである。

声大きいと寝惚けた船乗りにも罵られ物を投げつけられるが、声が小さくて皆の耳に入らなかつたりすると翌朝水夫長に呼びつけられて大目玉を食らうのだ。

足音が遠ざかり、船の上はまた静かになった。

月は雲の後ろに隠れてしまい、辺りは闇に包まれている。

魚でも跳ねたのか暗い水面からちやぽんと水音がした。

船は時折、波に揺れ身を軋ませる以外は、まったく静かで深い眠りについているようだ。

日暮れから風が止まり、船は全然進まなくなってしまうた。

見張りの者以外は皆眠っているようだが、船尾の船室では大きな男が狭い寝床の上で悶々としていた。

閉じた瞼の裏には、家に残してきた妻の顔が焼きついていてる。

港に向うアルテュスを見送りに、家族と一緒に前庭に出て来たエヴァの目の下には、寝不足の所為か薄っすらと青い影が見えた。

そして青い瞳を潤ませ、唇には強張った微笑を浮かべていた。

アルテュスは家族に挨拶をした後、前の晩に既に別れは告げていたので、エヴァにはただ頷くと召使が引いて来た馬に飛び乗った。

その時、港町で感じたように誰かに見られている気がしたのは気の所為だったのだろうか？

不吉な思いがしたのは、以前同じような悲しい眼差しで自分を見送った女に裏切られたからか？

男は大きな溜息を吐くと、暗闇の中で起き上がり手さぐりで靴を履いた。

余計なことばかり考えちゃまって眠れやしない。

上がって風が出そうかどうか見に行こう。

エヴァは、絶対に俺のことを裏切ったりしないだろう。

胸の中でそう断言すると、釘に引っ掛けてあった上着を手に取り船室を後にした。

朝靄の中に固まった帆船の姿が、まるで城のように浮かび上がった。

キャラック船1隻にガレオン船2隻、それに完全武装をしたフリユートである。

日が暮れる前に一番先に進んでいたガレオン船『サン・フラガン号』に他の船が追いつき、互いに声が届く距離で夜を過ごしたのだ。

嵐に見舞われることも海賊に襲われることもなく日々は順調に続き、長かった旅もやっと終わりに近付いた。

途中、水平線に敵船と思われる帆船の影が見えたことがあったが、道を急ぐ商船だったらしく、アルテュス達を追って針路を変えることはなかった。

『ラ・ソリテア号』の乗組員達は皆元気だったが、商船では体調を崩した者も数人いるようだ。

船の上では海賊よりも恐れられている病がある。

この原因不明の病にかかると数週間で元気だった者が、憂鬱な気分になり力を無くす。

そして、顔は腫れ上がり節々の痛みを訴えるようになる。

病が重くなると、体中が吹き出物と打ち身のような痕で斑になり、皮膚や歯茎から出血し歯が抜け落ちて死んで行くのだ。

病状が軽い者は陸に上がって、原住民がアンネダと呼んでいる木の葉と皮を煎じて飲めば数日で治る。

できるだけ早く陸に着いて治療することが必要だった。

商船と連絡を取る為、甲板に出たアルテュスは空を見上げた。

抜けるような青空に真綿のように千切れた薄い雲が流れている。

今日も暑くなりそうだ。

陸に近付いている証拠に、ここ数日鳥の姿を目にするようになった。

故郷の港で見慣れているカモメのような鳥もいたが、大きな嘴を持つ灰色の鳥や、尾に長い飾りのついた白い鳥が船の周りを飛んでいる。

また波の間に海草が流れているのが見えた。

商船から報告を聞いた『ラ・ソリテア号』の船長は、後ろに立っている航海士を振り向いた。

「我々の計算が正しければ今夜、もしくは明日の朝には陸に着くメレー又は真面目な顔をして頷くが、その瞳は期待に満ちている。

やがて風向きが変わり北東の風が吹き出した為、針路を西に変えさせた。

「さて、『悪酔いブイヨン』の素晴らしい料理に舌鼓を打ちに行くとするか」

悪い冗談をとでも言うように顔を顰めながらメレー又は、アルテュスその後続く。

新鮮な食料はとうに底を突き、数週間前から穀物と豆の粉を水で溶いたスープと干した肉、それに水夫達が釣った魚が毎日のメニューだった。

樽の底に僅か残った船長の好物の塩漬けキャベツは、発酵が進み強烈な匂いを放つようになったので、『悪酔いブイヨン』はそれを塩水で洗って煮込んでいる。

ビールと葡萄酒がまだ残っているのが、せめてもの救いだ。

その日は一日中爽やかな風が吹き、日が暮れる直前に一番西を走っていたキャラック船から情報が伝わった。

「陸を発見!!!!」

船室で仮眠を取っていたアルテュスは、報告を受け満足そうに頷いた。

問題なければ明日の朝には目的地に着くだろう。

話でしか聞いた事のない新しい大陸を見るのが楽しみだ。

子供達と草むしりをしていたエヴァは、額の汗を袖で拭い空を見上げた。

色とりどりのタチアオイの花に囲まれて、そよ風に気持ち良さそうに目を細める。

青く高い空には雲ひとつなく、辺り一面に黄金色の光が降り注いでいる。

どこか世界の果てで、あの人もこの空を見上げているのだろうか？

夫が出港してから既に二ヶ月が経ち、古めかしい城の中でエヴァは少しずつ自分の居場所を造ってきた。

召使にかしずかれる貴族の生活には、どうしても慣れることができなかった。

身の回りのことは今までどおり自分でやることにして、義母には眉を潜められたが、花壇の世話をすることと子供達の衣類を縫うことをいつの間にか自分の仕事にしてしまった。

召使達も初めの頃は、エヴァの次期城主の奥方らしくない振る舞いに戸惑っていたが、そのうち彼女が自分達のやり方を変えようとしている訳ではないと分かると、そっとしておいてくれるようになった。

アルテュスからは一度手紙がきたきりで、それから音沙汰がない。

無事に新世界に到着したのだろうか？

嵐に遭遇したり、敵の船と闘ったり、海賊に襲われたりしたのではないか？

長い航海では病人も多く出ると聞いたことがある。

熱病で苦しんでいるのではないだろうか？

怪我をしているのではないか？

じっとしているとどうしても悪いことばかり考えてしまう。

仕事をしていれば、余計なことを考えなくて済む。

エヴァは毎日朝早くから起きて、朝食に降りる前に自分の部屋とアルテユスの部屋の掃除をする。

アルテユスの部屋は二人で使っていた寝室である。

彼がいた時から何一つ変わってなく、中庭を見下ろすことができる窓辺に座ると、今にも階段を上がる夫の足音が聞こえてくるような気がする。

その部屋で朝日が窓にはめ込んだガラスを薄紅色に染めるまで、エヴァは一人で思い出の儀式を行うのだ。

夫が残して行った服を長持から出して、一枚一枚ベッドの上に広げていく。

大きな上着に顔を埋め、生地に染み付いた彼の匂いを思い切り吸い込む。

そうする度に胸が締め付けられるように痛むけれど、何故か口元には自然と微笑みが浮かんでしまう。

上着のポケットに手を入れると、中に入っていた物をひとつひとつ取り出してベッドの上に並べる。

幾つかの硬貨、

飾り気のない男物の銀の指輪、

擦れて殆ど数の読み取れなくなった角のサイコロ、

面白い縞模様の入った平たい石、

錆びた小さな鍵、

数字の書かれた破れた紙切れ。

じっと見つめていると、それらの物はまるで息づいているようで、アルテュスがここにいたという確かな証拠のように思えてくるのだ。

エヴァは深い溜息を吐くと、ひとつひとつ大切にポケットに戻す。

それから、夫の為に心をこめて一針一針縫い上げた新しい肌着を丁寧に畳み直すと全てを長持にしまうのだ。

長持の蓋をぱたんと閉じると、それが儀式の終わりの合図だったように、エヴァはすっきりした顔をして部屋を出て皆のいる広間に下りて行く。

「「うちそつさまでした」

小声でそう言って席を立ったエヴァは、大きなテーブルの端に座っていた女に声をかけられ、驚いて振り向いた。

「何でしょうか？」

義兄の許婚だった女の顔を真っ直ぐに澄んだ瞳で見つめながら、それでも恐る恐る尋ねる。

女は白い顔を歪めて笑った。

「よかったです少しお話ししない？」

エヴァは両手でスカートの皺を伸ばしながら黙って頷く。

この家に戻ってから、いつも食事はアルテユスの家族と一緒に食堂でしている。

アルテユスが義父から何か言われたのか、義母も以前のようにエヴァを追い出そうとはしなかった。

毎年この時期になると、城から半日程行った所にある町に大きな市が立つ。

三日の間、近辺の町や村から大勢の人が集まり大層賑やかになる。

毎年そのうちの二日間は、義父は仕事も兼ねて家族全員で町に出かけるのだ。

子供達もとても楽しみにしていたので、エヴァは留守番を買って出た。

義兄の許婚のマダレンも皆と一緒に行く予定だったが、今朝になって頭痛を口実に城に残ったのである。

「外は暑いから、私の部屋に行きましょう」

エヴァは先に立った女の後に続いて食堂を出た。

風の入る窓際のベンチに腰掛けたエヴァは、正面の椅子に座った娘を見つめた。

マダレンは居心地悪そうに椅子の縁飾りを弄っている。

そして、コホンと咳払いをすると、窓から外を見るように腰を浮かした。

「ここから花壇が良く見えるわ。風が吹くと良い香りが部屋に入ってくるの」

エヴァは嬉しそうに微笑むと、大切に育てている花を見下ろした。

「いつも楽しそうにしている貴方が羨ましいわ」

エヴァが不思議そうな顔をするのをちらと見てマダレンは顔を背けた。

「私は今まで楽しいことなんて何一つなかったもの」

どうやらこの娘は自分に胸の内を打ち明けたくなったようだ。

エヴァは目を丸くすると、話を続きを待つように座りなおした。

「持参金があるからこの家でも大事にしてもらえているけど。皆、本当は私のことを嫌っているわ。貴方だってそうでしょう?」

エヴァは首をふるにつこりした。

もとより根に持つ方ではないし、年の近い同性の話し相手ができることが嬉しかったのだ。

「8歳の時、両親が流行り病で相次いで亡くなってしまったの。母がド・タレンフォレスト家の遠い親戚だったから、この城に引き取られることになったけど、多分父の残してくれた財産がなかったら、誰も私の面倒を見てくれなかったと思うわ。貴方のご両親は?」

「私も子供の頃に母を亡くしましたが、ティアベに父がいます」

「そう言っていたわね。それに、今はド・タレンフォレスト家次期当主の奥方ですものね。私がそうなる筈だったのに」

マダレンは溜息を吐いた。

「アルテュス様が貴方と結婚してしまったから、城主様は今度は私をあのを憎たらしい小僧と一緒にするつもりなのよ」

エヴァはびっくりした。

小僧とはヤンのことだろう。

「でも、ヤンは……」

「多分嫌がるでしょうね。貴方にはこの気持ちはわからないでしょう？ アルテユス様に愛されているんだもの。誰も心から私を欲しがる人なんていないの。亡くなったフェリス様だって城主様に逆らうことはなかったけれど、他に好きな人がいたようだし」

マダレンは虚ろな瞳で明るい庭を眺めた。

羽音を立ててミツバチが花々の間を飛び回っている。

エヴァはそっと溜息を吐く。

いくらお金があったとしても、この人達の生活を羨ましいとは思えないわ。

信頼関係のない形だけの家族、親に決められた婚約者。

私は船長さんが求婚してくれなかったら、どうしていたのかしら？

お父さんと一緒に暮らして、そのうち自分と同じ身分の男の人を好きになってその人と結婚して、貧しいけれども幸せな家庭を築いたのだろうか？

そして、船長さんはマダレンさんと結婚していたのかしら？

そしたら、二人は幸せだったのだろうか？

もしアルテュスと出会っていなかったら……

二人の娘はそれぞれの思いを抱えて窓から外を眺めていた。

隣の領地で怖ろしい計画が立てられていることも知らないで。

「こっちに来ないの？」

背中を向けてしどけない姿でベッドに腰掛けていた女が振り向いた。

「動くな!!」

閉まった扉を背にして立った男の鋭い声が飛ぶ。

妙な男だ。

折角久し振りにいい男を釣れたと思ったのに、どうやら自分に触れたくないようだ。

病気持ちだとも思っているのだろうか？

女は肩を竦め、挑発的な仕草で長い髪を後ろに掃うと壁の方を向いた。

まあ金を払ってくれさえすりゃ、どうでもいいこと……

ここは、G国植民地ノヴス・ティミアの港町だ。

まだ歴史は浅いというのに、既に酒場が軒に娼館まである。

祖国の港町とは比較にもならないが、それでも数ヶ月を海の上で過ごしてきた船乗り達にとっては楽園のように感じられる。

入港した翌々日の午後になって、やっと積荷の荷降ろしと商館での入荷手続きを済ませたアルテュスは、商船の船長達と酒場で一杯飲んでいただけだが、いつの間にか客引きの女数人に囲まれていた。

女達は濃い化粧をして色とりどりの派手な衣装を身に纏っている。

半年程前に旧大陸で流行った、途中を何箇所か膨らませリボンで結んだ袖のドレスである。

酒場の澱んだ空気には、海の上では嗅ぐことのなかった甘い香水の香りが、魚の揚げ物や汗の匂いに混じって漂っていた。

見え透いた世辞を言って機嫌を取る女達に商船の船長らは鼻の下を伸ばし、さつさと相手を選んで姿を消した。

断つても断つても追って来る女達に面倒になったアルテュスは、その中で一番小柄で痩せた女を選び一緒に酒場を出た。

薄暗く埃っぽい部屋に入ると、女に服を脱いで髪を解き自分の方に背中を向けてベッドに座るように命じた。

顔はまるで違ったが、たつぷりとしたその髪は金色で祖国に残した妻の髪に似ていたのだ。

妻以外の女を抱くつもりはなかった。

でも、女の背中に広がる髪を見ながら自分で処理することぐらいは許して欲しい。

「もういいぞ。さつさと服を着ろ」

女は不満げに鼻を鳴らしたが、アルテュスは全然構わず金を渡すと部屋を出た。

父親が建てさせたノヴス・ティミアの家は、海を見下ろせる丘の上にあった。

既に夕食時だというのに、まだ辺りは明るかった。

同じような商人の家がこの地域には多い。

この地方は建設に使える石を切り出す場所が少なく、土地の面積の多くを森林が覆っている為、一部の家を除いて殆どの建物が木造だった。

この家もそうである。

2階建てで油紙を張った大きな窓があり、ポーチのついた玄関が外に迫り出している。

家の中の壁には上塗りや壁紙もなく、ざらざらとした木のままだった。

丸太から染み出てくるヤニの強い香りは嫌いではなかった。

アルテュスは迎えに出た召使に飯はいらないと伝えて寝室に上がった。

大きなベッドの上に仰向けに寝そべると、頭の後ろに手を組んで天井を見上げる。

このベッドだけは国から遙々と船で運んできたものであった。

ぐらぐら揺れない寝床は久し振りである。

屋根を支える梁を眺めながら考える。

エヴァは今頃何をしているのだろうか？

時には俺のことを想ってくれているのだろうか？

夜は寂しがってベッドで泣いたりしているのではないか？

先程、欲望を吐き出したにも拘らず体が熱い。

エヴァが欲しい。

偽者では駄目だ。

蜂蜜色の柔らかな髪、澄んだ青い瞳、ふっくらした薔薇色の頬、優しい笑顔……

たっぷりとした髪に鼻を埋めて、すべらかな背中や細い肩に触れた

真っ赤に染まった耳に口付け、前で組んでいる腕をそつと解かせ、羞恥心に伏せようとする目を見つめながら服を脱がせたかった。

思い浮かべると堪らなくなってくる。

次に抱き締めることができるのは、一体いつになるのだろうか？

それでも、体は相当疲れていたようで、目を瞑ってじっとしていると、井戸の底に吸い込まれるようにすうと意識が遠くなった。

グレゴールの上着を繕っていたエヴァは、机の上に裁縫道具を置くと窓辺を離れた。

夏は日が長いが、それでも既に辺りは暗くなってきている。

この所、良い日和が続き、日が暮れてもなかなか涼しくならない。虫が入らないように一度窓を閉めてから蠟燭を灯したが、直ぐに体が汗ばんで我慢できなくなった。

仕方がないから、もう寝ましょう。

明日、明るくなってから片付ければいいわ。

エヴァはそう思うと、蠟燭を吹き消し窓を大きく開けた。

雨でも降るのかしら？

湿気を含んだ風が頬を撫でる。

エヴァは頭巾を取ると机の上にそっと置き、それから服を脱いで椅

子にかけた。

ベッドの方に向かいながら、左手の薬指の指輪に唇を触れると、外して暖炉の上の飾り棚に乗せた。

明日は皆が帰ってくるから、また賑やかになるわ。

クスリと笑ってベッドに這い上がると、小さな欠伸をしながら枕を引き寄せた。

枕の下には、何度も何度も繰り返して読んだ夫の手紙と黒い巻き毛が入った小箱が忍ばせてある。

「おやすみなさい、船長さん」

そう囁くと唇に微笑みを浮かべたまま目を閉じた。

アルテュスは階段を上っていた。

ミシミシと軋む狭い木の階段は、父親の城の階段ではない。

自分が建てさせた丘の上の新しい家の階段だ。

階上の寝室では、愛しい妻が自分の帰りを待っている筈だ。

息を切らせながらアルテュスは懸命に上ろうとする。

だが、何故か足は鉛のように重たく、いつまでたっても踊り場に辿

り着けないのだ。

焦った男は苛立たしげに手摺りを掴むと叫び声を上げる。

「エヴァー!!!」

すると急に足の呪縛が解かれ、アルテュスは残りの段を一息に駆け上がった。

ノックもそこそこに扉を開けば、そこには一番見たくない光景があった。

女に覆い被さって腰を振っていた男は、驚いた顔をしてアルテュスの方に振り向いた。

敷布の上には、長い蜂蜜色の髪が渦を巻いて広がっている。

横たわった女はゆっくりと目を開き、感情のない冷たい青い瞳でアルテュスを見つめた。

呻き声を上げて飛び起きたアルテュスは、じつとりと寝汗をかき、暫くの間自分がどこにいるかも分からず、ベッドの上に蹲って震えていた。

……エヴァは？

エヴァはどこだ？

ガチガチと歯を鳴らしながら頭を抱える。

いや、あれは違う、エヴァではない！！

俺の妻である筈はない！！！！

嫌な汗がつつと背中を流れるのを感じて身震いをした。

その頃になって、やっと目が闇になれ、自分がどこにいるかを思い出した。

アルテュスは大きく息を吐くと、ベッドに仰向けに倒れ込んだ。

そして、動悸が治まるのを待ちながら思った。

こんな夢を見るなんて、俺はどうかしているぞ。

あの女のようなことをエヴァがする訳がないじゃないか。

俺は妻を信じている。

蝋燭の炎がゆらゆらと二つの大きな影を壁に映し出した。

「兄弟、とうとうその時が来た」

「ああ」

薄暗い部屋で二人の男は顔を見合すと、にやりとして頷き合った。

興奮と緊張の為に強張った顔を蝋燭の光が照らし出す。

扉の前には、輪にした縄を肩にかけた家来が控えている。

この数ヶ月、機会を狙って隣の領地を監視し続けていたのだ。

ド・タレンフォレスト家に使用人として密偵を潜り込ませたお陰で、城の内部の様子は分かっている。

彼らが目指す部屋は運良く領地の外を向いていた。

門番は眠り薬の入った酒を飲んで、今頃は酔い潰れて眠っているだろう。

そして、庭にいる猟犬達には、毒を仕込んだ肉団子を与えている。

何度も何度も作戦計画を練り直し、細部まで確認して予行演習までしたのだ。

作戦は完璧の筈だった。

二人はアルテュス・ド・タレンフォレストを憎んでいた。

それは遙か昔、まだお互いに子供だった頃、あの男に酷い目に遭わされてからずっとだった。

だが、子供の頃からあの男は、人一倍体が大きく喧嘩も強かった。

力では叶わない。

だったら、野獣のように罾に落としてやろう。

いつか絶対に復讐してやる、互いにそう誓い合いながら生きてきた。アルテュスが海軍兵学校に行ってしまった時には、獲物が逃げたままだったと悲しかった。

しかし、天は自分達の味方だったようで、この数年でド・タレンフオレスト家は次々と不幸に見舞われ、あの男は生家に戻って来た。

あどけない少女を連れて……

エヴァは夢を見ていた。

ゆらゆらと揺れる帆船の上。

ごうごうと水が流れる音が聞こえ、船は身を軋ませながら走る。

狭くて暗い船室に開け放した窓からひんやりとした空気が流れ込んだ。

体を起こせないエヴァの代わりにアルテュスが窓を開けてくれたのだ。

傾いた寝床がギシと音を立て、夫の温かい手が身体にかかった。

「……………エヴァ」

夫の低い声が耳元で囁く。

「エヴァ、愛してる」

ずっと待ち望んでいた言葉。

でも、これは本当のことではないことが夢の中のエヴァには分かっている。

胸が締め付けられて、鼻がつんとする。

「何を泣いている？」

不安げな声。

「嬉しくて……」

夫を安心させたくてそう言った。

ずっと傍にいて欲しいのに、彼はいつも自分を置いて遠くに行ってしまうのだ。

行かないでと言いたかった。

だけど、夫は海の上の生活が好きなんだ。

そんなことを言って困らせたくない。

でも、船乗りの完璧な妻になるのは、何と辛いだろう……

領地の端にある林から続く芝生や花壇を銀色に照らしていた三日月

が雲に隠れた。

そして、開け放された寝室の窓に大きな黒い影が浮かび上がる。

ひゅつと音を立てて静かな部屋に雨を含んだ風が吹き込んだ。

床が軋み黒い影は荒い息を吐きながら、エヴァがぐつぐつと眠っているベッドに近付いた。

「ほっ」

思わず感嘆の声が漏れる。

蝋燭の明かりで浮かび上がった女の姿は、大層魅惑的であった。

あの粗暴な大男とどんな夜を過ごしているのだろうか？

男に組み敷かれても雛菊のような清楚な感じはそのままなのだろうか？

いつかティミリアの港町で声をかけた時から、エヴァのうぶで愛らしい様子は、男達の嗜虐心を煽り色々と妄想を抱かせていたのだ。

今、女は枕を両腕で抱えるようにして、うつぶせになって眠っている。

蝋燭の光にキラキラと輝く金髪が辺りに散らばり、シーツに覆われた身体は丘のようにこんもりと盛り上がり、魅力的な線を描いている。

そして暑かったのか、捲れたシーツの裾からは雪のように白いふくらはぎと小さな足が覗いていたのである。

指先でシーツを抓むとそろそろと剥ぐ。

男達はごくりと唾を飲み込んだ。

シートと一緒に肌着が捲り上がり、白く丸い尻が露になったのだ。燭台を持っている方が、女の身体に顔を近づけて囁いた。

「女房に家畜のように烙印を押すとは、趣味の悪い男だな」

男達の目的はエヴァを部屋から連れ出して、自分達の屋敷の地下牢に監禁することだった。

そして自分達は楽しみながら、アルテュスに脅迫状を出して身代金を搾り取ってやるつもりだった。

だが、眠っている女の艶かしい様子を見ているうちに、この場で味見をしてしまいたくなつたのである。

「残念だが、折角あんたの物だと書いておいても、何の役にも立たなかつたな」

目をぎらつかせた男達は薄ら笑いを浮かべると、エヴァの方に手を伸ばした。

アルテュスの背後に忍び寄る影に気付いたエヴァは、叫び声を上げようとした。

でも、舌が口蓋に張り付いてしまったようで声が出せない。

どうして？

焦ったエヴァは大きく手を振って、夫に危険を知らせようとする。

お願い、こつちを見て！

そうしているうちにも、影は音もなくアルテュスに近付くと、鋭く尖った短剣を振り翳した。

自分の不甲斐なさに涙が溢れる。

逃げて、アルテュス！！！！

掠れた悲鳴が漏れた。

その瞬間、何者かに乱暴に枕に頭を押し付けられたエヴァは夢から醒めた。

それとも、これは悪い夢の続きなのだろうか？

息ができなくなり、自分を押さえつけている手から逃れようと必死でもがいた。

やっと顔が自由になったが、叫び声を上げる前に大きな手に口を塞がれてしまう。

無遠慮な手が自分の身体を彷徨うのを感じ、気が遠くなりそうになる。

お願い、誰か！！！！

夫にしか許したことの無い肌を弄られ絶望的になった。

無我夢中で口を塞ぐ手に噛み付き、手が離れた隙に大声で助けを求めた。

目の前に火花が散った。

ベッドに崩れ落ち、意識が遠のくのを感じながら、エヴァはアルテユスに許しを請うていた。

……ごめんなさい。

自分を守ることができなくて、ごめんなさい。

男は眉間に皺を寄せ、驚ペンを片手に考え込んでいた。

手元の紙は既に半分程真っ黒だ。

上着を椅子の背にかけ、たっぷりしたシャツの袖を肘まで捲り上げている。

驚ペンを握る手は大きく骨ばっていて、逞しい腕は褐色に日焼けしている。

男が手紙を書いている机には書類が山と積まれ、崩れ落ちそうになっていた。

古ぼけた木の机はインクの染みに覆われ、封蝋が点々とこびり付い

ていた。

ナイフで刻んだような痕もある。

書類が飛ばされないように大きな窓は閉じられている。

日光を遮る為にカーテンが引かれているが、それでも部屋の中は蒸し暑かった。

隣の部屋では何か怒っている男の声がしている。

手続きに思ったよりも時間がかかることに苛立った商人だろうか？

時折、事務員が駆け込んできて、両手に抱えた新たな書類の束を机の上に積んで行く。

男は深い溜息を吐くと、手紙の続きを書き出した。

3ヶ月か……

残念だが、これ以上早くは無理だ。

これでも十分な休息を得られなかったと、船乗り達には散々文句を言われるだろう。

もしかしたら、ここに残りたがる奴らもいるかも知れん。

書き終わった手紙を折り畳み、封印しながら男は思った。

この手紙を受け取ったら、妻は喜んでくれるのだろうか？

大人しそうな姿とは裏腹に手強い女だ。

男は舌打ちすると、くつきりと齒形のついた自分の手を見つめた。

蠟燭の明かりでも血が滲んでいるのが見える。

「おい、先を譲れよ」

もう一人の男がベッドに這い上がった。

気を失っている女の脚を抱え上げると、手早く自分の前を寛げる。

その時、どしんと扉が音を立てた。

そして、呼びかける声が扉越しに聞こえた。

「エヴァ様、いかがなさいました?!」

男達は顔を見合わせると女を放し、さっとベッドから飛び降りた。

窓に駆け寄ると、口笛を吹いて下で待っている家来を呼ぶ。

その間も部屋の前にいる者は、女主人に呼びかけてはがたがたと扉を揺さ振っている。

扉に体当たりでもしているのだろうか、次第に音は大きくなってくる。

「ずらかるぞー!!」

男達が窓から縄をつたって庭に降り立った頃、やっと蝶番が外れてド・タレンフォレスト家の召使が部屋に駆け込んできた。

「若奥様、どうなさったのです？ 誰か、誰か早く気付け薬を持って来てくれ!!」

肌着姿の女中が酔の入った小瓶とハンカチを持って来た。

「エヴァ様、エヴァ様!!!」

別の女中がエヴァの手の甲を叩きながら泣き声を上げる。

エヴァは薄っすらと目を開くと、辺りを見回して顔を顰めた。

頭が割れるように痛む。

殴られた頬は既に腫れ出しているようで、ジンジンと熱く目が開け難かった。

「ああ、気がつかれたようだ」

「よかった、よかった」

「若奥様、大丈夫ですか？」

「これでお顔をお冷やしてください」

口々に心配そうに話しかける召使達に頷くと、エヴァは皆に静かにするように頼んだ。

そして、ベッドから降りるとふらふらしながら窓辺に向かい、机の引き出しを開ける。

その中には、アルテウスにもらった短銃が入っていたのだ。

兵学校でリュスカ公に借りた銃に似て火縄がなく、金属の部分には唐草模様が描かれ、虹色に光る貝殻のビーズが嵌め込まれている美しいものだった。

銃を見た召使がぎょっとして何か言いかけるが、エヴァは手を上げて黙らせた。

月は雨雲に隠れ、窓の外は真っ暗だった。

エヴァは銃を構えると耳を澄ませた。

湿っぽい風が芝生を吹き抜け、木々の枝をざわざわと揺する音が聞こえる。

それから、遠退いて行く足音が地面に微かに響いている。

どうしても指が震えてしまう。

すっかりしなくちゃ。

エヴァは、目を瞑って深呼吸すると銃を構え直した。

召使達は、いつもの優しい表情からは考えられない程、厳しい顔つきをしたエヴァを驚いたように見た。

下唇を噛み、鋭い眼差しで闇を見つめる。

遙か遠くに消え去りそうな足音に意識を集中させる。

召使達は息も吐かずにその様子を見守っていた。

そして、皆の緊張が最高潮に達した時、エヴァは引き金を引いた。

行きの晴天とは打って変わって、『ラ・ソリテア号』は、ノヴス・ティミリアの港を出た時から悪天候に見舞われていた。

荒れた海と横殴りの風雨に弄ばれ、船足の遅い商船と逸れないようにするのが精一杯で、これでは予定よりもかなり時間がかかりそうだった。

商船は酒や織物の代わりに、香辛料や干した果物、カカウワトウルと呼ばれる豆、ペティンと呼ばれる植物の葉を乾燥させて粉末にしたもの、それから少しばかりの金塊や銀塊を積んでいる。

一週間ほど前から降り続けている雨の所為で、船乗り達は服を乾かすことも出来ず、叩きつけるような雨と風に逆らいながら憂鬱な顔で作業をしている。

こんなに早く出港することを決めた船長を恨めしく思っている者も少なからずいるようだ。

文句を言われる前に、アルテュスは乗組員の酒の配給の割合を増やすことに決めた。

馴染み深いビールや葡萄酒と違って、ペティンと呼ばれるイモ類から作った酒で、淡泊な味でアルコール度数が高いものだ。

だが、何日もしないうちにペティン酒の割り当ては、一日に一人あたり一杯と制限しなければならなくなった。

殴り合いの喧嘩をして怪我をした者が数人出た他、酔っ払った船乗りの一人が素っ裸で帆桁に上がって大騒ぎをした挙句、頭から海に落っこちたのだ。

幸いそれを見ていた泳ぎの得意な者が海に飛び込み、冷たい水で酔いも醒めた愚か者が溺れる前に救出することができた。

もう少し海が荒れていたら助けることは無理だっただろう。

船の上では、それをもたらすものが病気であつても事故であつても、死は不吉なものとして恐れられている。

船を棺と定めた死者が船ごと海に沈めようとすると思はれているからだ。

その日は夕方から更に風が強まり、波が高くなった。

水夫達は船底に溜まつた水を掻き出すのに忙しい。

「こりや治まるまで大人しく待つしかありませんね」

アルテュスは、鼻に皺を寄せてそう言ったアレンをぎろりと睨んだ。

だが、船長の視線にもビクともせず航海士は肩を竦める。

「我々だけだつたら何とかなるかも知れないけど……」

確かに私掠船一隻の時と違って、商船をほつたらかしにする訳にはいかない。

アルテュスは帆を畳むことを許可した。

そして、顔にかかった雫を手で払い、厚い灰色の雲に覆われた空を見上げると、何も答えずに船室に向った。

どうせ手紙が家に届くのは一ヶ月以上先のことだ。

一週間や二週間、船の到着が遅れたってどうってことはないだろう。

「それで、兄上には……」

「知らせないわ。遠く離れている人に心配かけたら悪いから」

それは間違っているのではないだろうか？

ヤンは長椅子にもたれているエヴァを痛々しげに見つめながら思った。

愛らしい顔は、片方の頬から顎にかけて紫色と黄色の斑になった痣が覆っている。

それでも、幸いなことに傷は打撲傷だけで、鼻や歯は折られていなかった。

腫れが引くのに一週間もかかったのだ。

睡眠不足なのだろう、顔色は透き通るように白く、目の下には暗い影がある。

兄上は心配するだろうけど、知らせた方が良いのではないだろうか？

「義姉上は遠慮し過ぎですよ。家族なのだからもつと兄上にも甘えたら良いのに」

エヴァは困ったような顔をした。

ヤンはあの日エヴァを残して、皆と一緒に町へ出かけてしまったことをとても悔やんでいた。

父上も兄上もない時、家を守るのは自分の役目なのに。

義姉上が酷い目に遭っている時に、僕は蜂蜜酒を飲みながら暢気に芝居など観ていたのだ。

初めヤンは義母かマダレンが事件に関係しているのかと疑っていた。

しかし、義母はともかくマダレンは大層ショックを受けているようで、事件の日から数日、食事もせずに寝込んでしまっていた。

誰が、いつたいどうして？

皆が言っているように本当に強盗だったのだろうか？

もしかして義姉上は港町に行った時から、誰かに付け狙われているのではないのか？

大きなベッドの片隅でエヴァは肩を震わせながら、声を押し殺して泣いていた。

昼間は皆の前では気丈に振舞っているが、夜になると気が弱ってしまふのだ。

事件の翌日から部屋を移り、今はアルテユスの寝室で寝泊りしている。

義父は窓を開け放して寝るなど無用心なことをするからだと冷たく言い放ったが、警備を強化したので城の中は安全な筈だった。

それでも、毎晩決まって怖ろしい夢を見てしまう。

うなされて自分の出した声で目を覚ますのだ。

「アルテユス……」

そつと囁くと悲しさが増し、エヴァは枕に縋りつきながらすすり泣いた。

大切な物を盗られてしまったことがとても悲しかった。

あの後、暖炉の上の飾り棚に乗せていた指輪が見当たらなかった。

アルテユスにもらった大事な大事な指輪。

床に落ちて蹴られて遠くまで飛ばされてしまったのかも知れないと思いい、部屋の隅々まで確認したのだが、どこを探しても見つからなかった。

それから、強盗は貴重品でも入っていると考えたのだろう、枕の下に忍ばせていたアルテュスの髪の入った小箱と手紙を盗んでいったのだ。

これらの物を失ったことで、自分と夫を繋ぐ糸が切れてしまったような気がする。

もしかしてアルテュスは戻って来ないのではないかという思いが脳裏を掠め、エヴァは恐怖感に襲われた。

「お願い、早く帰って来て……」

「やっぱり医者を呼ぼう！」

薄暗い部屋の中をイライラと歩き回っていた男は、立ち止まって両手で髪を掻きながら叫んだ。

部屋の隅にあるベッドに横になった男が大儀そうに首を横に向ける。立っている男とそっくりだが、熱でもあるのか真っ赤な顔をしている。

「いや、それは止めてくれ。もしこのことが明るみに出れば、家を潰されるぞ」

「だが、このままじゃ」

「熱さえ下れば大丈夫だ。お願いだから医者には呼ばないでくれ……」
ベッドに背を向けて立った男は、鋭い口調で吐き捨てるように言った。

「兄貴の身に何かあったら、あの二人に絶対後悔させてやるからな
！！」

「……俺達の計画は完全に失敗した訳じゃない。ちよつと耳を貸せ」
「……」

体を屈めて兄の言葉を熱心に聴いていた男の顔が、段々と明るくなつた。

「そつか、その手があったか」

「ああ、だからもし俺がまだ出歩けない状態だったら、おまえが奴の帰りを待つて実行に移すのだ」

「兄貴、俺に任せてくれ。今度は絶対に失敗なんかしないぞ」

苦しみ悶える若い夫婦の姿を思い浮かべ、二人はほくそ笑んだ。

「おい！」

弟の方が、部屋の隅に控えている家来を呼びつけた。

「隣に潜り込ませているあの女だが」

「はい」

「余計なことをしゃべられたらまずいから、早いうちに誘き出して始末しちまえ」

家来は、ハツとした顔で主人を見上げるとゆっくりと頷いた。

「承知しました」

「どうぞ、召し上げね」

居間の開け放した窓辺に座って針仕事をしていたエヴァの許に、柳の籠を抱えた子供達が走り寄って来た。

差し出されたのは、真っ赤に熟したさくらんぼである。

「まあ、美味しそうね！」

子供達の手も口元も果汁で赤く染まり、グレゴールとユナは服に染みまで作っていた。

「マダレンさんもどうぞ」

エヴァの向かいで刺繍をしていたマダレンは、子供達が差し出した籠の中から恐る恐る艶のある赤い果実を摘んだ。

子供達は真面目な顔をして、さくらんぼを口に入れたマダレンの表情を見守っている。

その様子を見ながらエヴァは微笑んだ。

事件から半月が経ち、顔の傷も癒え、やっと気持ちも落ち着いてきた。

皆が留守の間には散々な目に遭ったけど、彼女と仲良くなれたことは良かったわ。

「残りは台所に持って行って、デヴィーにタルトを作ってもらいなさい」

子供達の後姿を見送ったマダレンは、少しばかり皮肉を込めた微笑みを浮かべながら言った。

「あの子達、まるで鳥に餌をやるみたいな顔してたわね」

エヴァは異国の珍しい緑色の鳥を思い出した。

私がああ鳥だったら良かったのに。

そしたら今頃、船の上であの人と一緒にいられたのに。

ある晴れた日の午後、長いスカートの裾を絡げ、息せき切って石の階段を駆け上がる女がいた。

白い頭巾を被り地味な色の服を身に着けた娘で、前掛けに包んだ何かを大切そうに抱き締めている。

頬を染め目をキラキラと輝かせ、まるで少女のように若く見えるその女は、次期城主の奥方のエヴァである。

エヴァは踊り場の正面にある部屋に飛び込むと窓辺に駆け寄った。

窓からは城の裏手にある野原が見渡せた。

この時期は、緩やかな斜面一面に鮮やかな紫のイヌサフランが咲き乱れている。

開け放した窓から入ってくる早秋の風が、頭巾を後ろで結わえているリボンをさわさわと揺らした。

「神様……」

エヴァは手に持っていた手紙を胸に押し付けると、跪いて頭を垂れ感謝の祈りを捧げた。

そして、手紙に唇を押し当ててから封を切った。

アルテュス、アルテュス、アルテュス……！！！！

読んでいたエヴァの唇が震え、青い瞳が曇ると涙がポロポロと零れる。

涙でインクが滲み、慌てて手紙を畳むと膝の上に置いて両手で顔を押しさえた。

だが、止めようとしても、涙はまるで泉のように後から後から湧き出てくる。

嗚咽を我慢できなくなったエヴァは、事件の後からずっと張り詰めていた糸が切れたかのように声を上げて泣きじゃくった。

「義姉上、兄上からの手紙は？」

暫くして、居間に下りてきた義姉にヤンが不安そうな顔で尋ねる。

居間にいた皆がエヴァの方を見た。

「お元気そうよ。無事向こうに着いて、10月末には帰って来ますって」

泣いた所為でエヴァの目元は少しばかり赤かったが、その晴れやかな笑顔を見て、ヤンはホッとしたように体の力を抜いた。

「それはよかった。では、後1月もしないうちに戻られるのですかね？」

エヴァは嬉しそうに頷く。

初めはあまり嬉し過ぎて信じられず、涙が止まった後、何度も何度も手紙を読み返したのだった。

「ご無事で帰って来ますように」

「義姉上、良かったね!!」

ヤン以外の子供達は、兄のことを少しばかり恐れていたが、仲の良い義姉が笑っているのが嬉しかったのだ。

「明日から忙しくなるわ。貴方達のお兄様の好きな物を全て準備しておきたいの」

あの人が世界一美味しいと言っていた葡萄酒は、確か、ポエルゴンデイ工産だったわよね？

ポエルゴンデイエってどこにあるのか知らないけど、そこから葡萄酒を取り寄せなければならぬ。

勇気を出して、お義父様に尋ねてみよう。

杜松の実の香りをつけた塩漬けキャベツに、ブナの木屑で燻した燻製のハム。

それから、蜂蜜でほんのり甘みをつけたピリツと辛い粒入りマスタード。

あと、3年間熟成された赤いグドセ・チーズに油の乗った鴨の丸焼

き。

何も忘れないように、書き留めておかなくちゃ。

嵐を通り抜けた『ラ・ソリテア号』と商船3隻は、それから快適な追い風に恵まれ、順調に航海を続けていた。

その日は、日没までに約180マイルを進んだ。

ティミリアに戻る前に、一部の品物をステュニアで売る予定だったので、途中敵国の水域を通り抜けなければならない。

アルテュスは甲板に出て水平線を見つめながら呟いた。

「行きと同じように敵船に遭遇しなければいいのだが」

私掠船の船長だった時と立場が入れ替わり、今度はこちらが狙われる方だった。

傍にいたメレー又はその独り言を聞いていたようだ。

「海賊にもですよ」

新大陸から戻る商船を狙うものは多い為、注意をするに越したことはなかった。

厄介なことは避けて、出来るだけ早く国に戻りたいのだ。

アルテュスは見張りの人数を増やすことを指示すると、『悪酔いブイヨン』の許に向った。

出港してから既に1月が過ぎ、新鮮な食料の蓄えはかなり減っていたが、珍しい野菜や果物で作られる料理は穀物のスープや塩漬けキヤベツにうんざりしていた船乗り達には好評だった。

アルテュスは料理長が差し出す皿を黙って受け取ると、近くの木箱に腰を下ろす。

皿の中身はどうやらペティンと呼ばれる芋を煮て潰し、塩と香辛料で味付けしたもののようだが、不味くはない。

「ラードがクリームを入れたら美味いんじゃないか？」

そう言ったアルテュスに『悪酔いブイヨン』は頷いた。

「流石だね、船長。今度はラードを入れてみるよ」

東の空が薄っすらと白く染まった頃、見張り台に上っていた男が、けたたましい叫び声を上げ皆を起こした。

「船だ!!! 船だあ!!!! 船を発見!!!!」

まだ薄暗い船の上をバタバタと船乗り達が駆け回り、辺りは一斉に騒がしくなる。

「船長、この距離でははっきりとは分かりませんが、どうやら海賊

船ではないようです。どうしますか？」

大きな欠伸をしながら甲板に出て来たアルテュスにアレンが問いかけた。

「風向きはこっちの方が有利だな。よし、接近しろ」

そう答えたアルテュスは、後ろに続く商船には近寄らぬように伝えろと連絡係の男に命じた。

武器倉庫の鍵が開けられ、列に並んだ乗組員達は次々と手渡される武器を手に甲板に駆け上がって行く。

朝靄の中にぼんやりと浮かぶ帆船の黒い陰が段々と大きく明瞭になり、やがてどつしりとした存在感を持つ3本マストのキャラベル船が姿を現した。

「国旗はないようだな」

アルテュスは自国の旗を揚げさせ、威嚇襲撃を命じる。

だが、暗い空に爆音の反響が途絶えても、キャラベル船からは何の動きも見られなかった。

「おい、あの船の帆はおかしくないか？」

所々破れたキャラベル船の四角帆はだらりと力なく垂れ下がり、風に煽られてはバタバタと音を立てている。

「確かに何だかふらふらしていますね。水夫達は何をしているのでしょうか？」

「油断するな、罨かも知れないぞ」

キャラベル船に接舷した『ラ・ソリテア号』から、武装した水夫達が次々と乗り移って行く。

風向きが変わり、キャラベル船がゆつくりと向きを変えるのを『ラ・ソリテア号』に残った船乗り達は固唾を呑んで見つめていた。

こちらを向いた船縁に何か黒っぽい塊がぶら下がっている。

「何だ、あれは?!?!」

「動物の死骸だろうか？」

「海豚ではないか？」

『ラ・ソリテア号』に残った男達は、キャラベル船に移った者達に身振り手振りを加えて、船縁に正体不明の物体があることを伝えた。

暫くして一人の男が大声で報告する。

「甲板には至る所に戦いの痕跡が見られますが、皆海に放り込まれてしまったのか死体ひとつありません。船室にも誰もいませんでした。今、数人が船倉を調べに行っています」

別の男が興奮した大声で続ける。

「あそこにぶらさがっていたのは、3歳位の子供の遺体です。死んでから数ヶ月は経っていると思われれます。」

「子供だと?!」

「いったい誰がこんな残酷なことを……」

そこに船倉から戻って来た男達が、衣類など身の回りの物以外は何もなかったことを告げた。

アルテュスは、キャラベル船の航海日誌と見られる片側を糸で綴じた紙の束をばらばらと捲った。

航海日誌の所々に書かれている祈りの言葉は、ラテン語ではなくガイデア語だった。

「やはり、新教徒の船のようだ。新大陸に向う途中だったのを何者かに襲われたのだろう」

「敵国の船か、海賊か、それとも……」

アレンが呟くと、ゆらゆらと揺れる帆船を見つめていたメレーヌが幾らか強張った顔で遮った。

「私達の耳に入る国からの情報は数ヶ月前のものです。今、故郷ではいったい何が起こっているのでしょうか？」

「さあな。どうせ、あの条約など既に何度も破られているからな」
アルテュスは眉を顰めた。

「遺体は敷布に包んで海に葬るように」

周りの男達は重々しく頷いた。

皆、キャラベル船を襲った悲劇が、敵国や海賊の引き起こしたものでないことを感じていた。

「罪のない子供まで手にかけるとは、我が国はどうなってしまったのか？」

自分達の留守の間に条約は破られ状況は悪化しているのではないか？

故郷は無事なのだろうか？

朝日がキラキラと眩しい海に哀調を帯びた歌声が響き渡る。

暖かく包み込むような歌声に海の男達は涙を浮かべた。

静かに、静かに、日が暮れる
密やかに、密やかに、ピロートの足音を残し

蛙は雨を喜び唄を歌い、野兔は音もなく走り去る
鳥達は巢の中で寄り添い、眠りに落ちる

安らかにお休み、愛し子よ

『髭の三日月』が口を嚙むと、二人の水夫が船縁に置いた板をゆっ
くりと傾けた。

新教徒の子供にはラテン語の祈りよりも、子守唄の方がいいだろう
と船長が言ったのだ。

帽子を手に厳粛な顔をした船乗り達は、軽い水音を聞くと胸に十字
を切る。

鼻を吸る者もいる。

それぞれの持ち場に戻り、やがて船が速度を上げ始めると、皆、同
じ思いを胸に遠退く幽霊船を見つめていた。

急げ、急げ！！

早く故郷に戻らなくては！！！！

ある晴れた日の午後、エヴァは裏庭で太陽の匂いのするシーツやシヤツを取り込んでいた。

ふんわりと広がる真っ白なシヤツはとても大きく、本人のものではないことは一目瞭然である。

この季節にこのような晴天は稀だ。

その日は朝早くから城の洗濯女達が溜まっていた洗濯物の山を相手に奮闘していたし、エヴァもしまつてあったアルテユスの服を虫干ししシヤツやシーツを洗濯することに決めたのだった。

乾いた洗濯物を入れた籠を抱えて城に向かおうとしたエヴァは、大きなシーツを二人がかりで畳んでいる女中達の話に思わず歩みを止めた。

「……………じゃあ、あんたは」

「そう、絶対駆け落ちだと思っわ！」

「でもあんな大人しい子が、まさかねえ……………」

「本当かどうか分からないことをそんな風に噂にするのは良くないと思っわ」

辺りを憚らず大声で話していた二人にエヴァは、そう言うと足早にその場を離れた。

「義姉上」

庭で遊んでいた子供達がエヴァの姿を見かけて駆け寄って来る。

「サラは義姉上を襲った強盗に攫われたの？」

マリーにそう尋ねられたエヴァは黙って頭を振った。

それは違うと思う。

女中達にはあのように注意したけれど、本当は駆け落ちをしたのだらうと思った。

でも話すことはできなかった。

皆の知らないことを私は知っている。

数日前の夕方、部屋に入ってくるなりエヴァの足元に身を投げ出して泣き出した女がいた。

歳はエヴァとあまり変わらないと思われる、サラという名の数年前から城で働いている女中だ。

そばかすの浮いた丸顔に赤味があった金髪の娘で、地味で大人しい性格で仕事は遅かったが、言われたことはきちんとするので、他の使用人達の間でも評判は悪くなかった。

初めは何を言っているのかさっぱり分からなかったのだが、椅子に座らせて水を飲ませると少し落ち着き、真っ赤な鼻ですすり泣きながら語り始めた。

この城に勤める前から故郷の村の男と結婚の約束をしていたのだが、最近になって他の男を好きになってしまった。

約束と言っても二人の間だけのものだから、知らん振りすることもできるけれど、やはりきちんと別れてから新しい恋人と一緒にいたいと思う。

しかし、婚約者は正直で働き者なのだが、カツとすると暴力を振るう傾向がある。

その為、本人と会って直接別れを告げる勇気が出ない。

それに直接会いに行くには、少しばかりの休暇をもらえる感謝祭を待たなければならない。

その頃にはもう、とサラは自分の腹に両手を置いて俯いた。

手紙で別れを告げようと思ったが、自分は字を書けないし相手が納得してくれるような文も思いつかないと女中は嘆いた。

「だったら私が手紙を書いてあげるわ。だからそんなに泣かないで」

エヴァは服の裾に口付けながら感謝の涙を流すサラを困ったように見下ろした。

それから3日後、サラは城から忽然と姿を消した。

置手紙もなく、数少ない持ち物もそのまま女中部屋に残していなくなった娘を使用人達は心配し、城主に行政官に届け出ることを許してもらった。

あの手紙を元婚約者に出して、新しい男の人と一緒に出て行ったのかしら？

その人は彼女を大切にしてくれるのだろうか？

婚約者がいる女性を孕ませるなど、新しい相手は不実な男なのではないのか？

相手がちゃんとした人だったら、彼女は夜逃げなどしないで、ちゃんと暇をもらって出て行ったのではないか？

エヴァは自分が書いてやった手紙の内容を思い起こした。

できるだけ相手を傷つけないように言葉を選んで書いたつもりだ。

だが、別れを告げる手紙である。

どんなに優しい言葉を選んでも、相手に突きつける事実は変えようがない。

エヴァは別れを告げられた婚約者を思って、悲しい気持ちになった。

離れてしまった気持ちは元には戻らないのだろう。

知らない人だけど、あまり悲しむことはありませんように。

そして、どうか、どうか彼女が幸せになれますように。

市場の薄暗く埃っぽい路地は客や商人らで大いに賑わっていた。

道の両側に立つ店の間には色とりどりの布が張られ、道行く人々を雨や日差しから守っている。

そのような中を群集よりも頭一つ飛び出した大男が、人混みを掻き分けながらしつかりした足取りで進んでいた。

店の前に立つ店員が通行人に盛んに呼びかけている。

「いらっしやい、いらっしやい!!」

「あつと驚く程安い本物のダマスク織りの絨毯ですよ!!」

「寄ってらっしやい、見てらっしやい!!!!」

「イズニック産の陶器に、後宮で大人気のイズミル産の絹糸の反物だよ!!」

「琥珀、琥珀、琥珀!! 東海で採れた最高級の琥珀!!!!」

「その巨那。産地直送の象牙細工は如何ですか!!」

かさ張る包みを脇に抱えた男は、熱心に呼びかける声にも振り向かず歩いていたが、とある店の前で立ち止まった。

他の店のように客引きがないその店には、入り口には濃い赤のビロードの布がかかっており、外から見ただけでは何を売っているのかさっぱり分からない。

男はあたりの喧騒にも負けない良く響く声で一声かけると、カーテンを捲って中に入って行った。

アルテュスは辺りを見回した。

前回来た時から何も変わっていなかった。

剥き出しの板で囲われた小部屋には、真ん中に大きな机があった。

その周りでは、3人の女が針仕事をしている。

机の両側には小さな引き出しの沢山ついた筆筒があり、部屋の奥の棚には棒に巻いた布地が積まれている。

「これは、これは、『ラ・ソリテア号』の船長様!!」

隅の方に座っていた太った親父が両手を擦りながら近付いて来た。

アルテュスは抱えていた包みを机の上に置き、中から淡い青に横糸に銀糸が使われている豪華な絹布と、地味な色合いの質素な女物の服を取り出した。

「この生地でこの服と同じ寸法の衣装を仕立てて欲しい。5日後にはスチュヌアを発つのだが、それまでに仕上がるか？」

話を聞いていた女達がざわざわと話し出すのを、店の主人は手を振って黙らせた。

「勿論出来ますとも！ さっさ、こちらにお座りください。お見積もりをいたしますので」

エヴァに自分の代わりに自分の服を航海に連れて行って欲しいと言われた時には、そんな女々しいことなどできるかと思ったのだが、帰りにスチュヌアでドレスを作らせてやるうと考え直して持ってきたのだった。

だが航海に出てから、自分の船室に大事にしまって時折出して眺めているなどは、絶対に本人には知られたくなかった。

手紙をもらってから、何故か時間が経つのが遅くなった気がする。

それでも少しずつ季節は移り変わり、やがて城の果樹園の林檎も赤く実って、木々の間を吹き抜ける風も大分冷たくなった。

葡萄酒、マスタードとチーズも取り寄せたし、キャベツは樽に漬けて込んである。

ハムは食糧貯蔵質の天井の梁にぶら下がっているし、丸々と肥えた鴨が中庭の鳥小屋を歩き回っている。

晴れた日に寢室のシーツや肌着は全て洗濯したし、新しいシャツを10枚も縫ったのだ。

エヴァはもう一度、全ての準備が整っていることを確認して小さな溜息を吐いた。

後十日、それとも一週間位だろうか？

ここでじっと待っているのは耐えられないわ。

ヤンに頼んで、前のように一緒に港に行ってもらおう。

あの人が船から降りた時に直ぐ傍にいたい。

そう決心すると、自分の荷物をさっさと纏めて、義弟を探しに部屋を出た。

初めは反対していたヤンだったが、エヴァが熱心に説得した甲斐があり、とうとう一緒に港に向うことを約束した。

しかし、義姉に付き添うのは自分一人ではなく、父親に頼んで城にいる騎士3人にも同行してもらおうようにした。

父親は初めに話を聞いた時には渋い顔をしたが、翌日、思い直したように、息子と嫁が港に向うことを許した。

どうやら、アルテュスが儲けをきちんと持って帰るか不安な様子だ。

ヤンはまだ若い真面目で一本気な性格で、アルテュスよりも信用できると思われた。

長男を亡くし自分の跡継ぎをアルテュスにすると仕方なく決めたが、やはりずっと救いようのないならず者だと思っていた次男を少しばかり疑う気持ちを拭い切れなかったのだ。

ヤンは父親の許しを得ると、港での計画を練り始めた。

義姉上の身に何かあったら、兄上に申し訳が立たない。

港町では兄上の使っていた部屋を借りれるだろう。

ヤンは宿屋の間取りを思い浮かべた。

昼間もできるだけ、動かない方が安全だろう。

兄上の船が港に着いたら直ぐに宿屋に連絡が来るように、海事当局に頼んでおけば良い。

片時も義姉上の傍を離れるまい。

夜は騎士達と交代で部屋の前で寝ずの番をしよう。

とうとう『ラ・ソリテア号』は長い長い航海の最後の港であったスチュヌアを後にした。

数日後には故郷に戻る。

その思いは船乗り達の日焼け風で荒れた顔を明るくした。

皆の歌声も随分と元気良くなり、きびきびと作業を進めている。

船室で寝床に横になったアルテュスは頭の後ろで腕を組んで、ゆらゆらと揺れるランタンを眺めていた。

予定通りに仕上がった衣装は油紙で包んで、木のトランクに入れてある。

あの生地はさぞエヴァの瞳の色を際立たせて美しく見せるだろうと思っ
て選んだのだ。

喜んでくれるだろうか？

エヴァにはあまり派手な装身具は似合わない。

そう思ったアルテュスはスチュヌアの市場で小粒の真珠を選び首飾り
を眺めた。

もう少しで夢にまで見た妻を胸に抱き締めることができる。

数ヶ月間の長い旅をして来たというのにこんなことを考えるのはおか
しいが、港に着いてから家までの距離がとても長く感じられるだ
ろう。

エヴァは俺のことを待っているのだろうか？

壮大な大型帆船が次々と港へ入って来る様を、人々は驚嘆の眼差しで見守っていた。

外国の船も多く行き交うティミアの港だが、これだけの帆船が揃うのはそんなに頻繁にあることではない。

「あれは、ド・タレンフォレスト家のご子息率いる船団だ」

「ああ、『ラテディム海のオーガ』殿だろう？」

「新世界から無事戻って来たのだな」

「こつやって陸から眺めているだけで、何だか勇ましい気持ちになるな」

灯台から知らせを受けて駆けつけた者達が、大声で商船に呼びかけ波止場へと誘導している。

丁度港町にある教会の10時の鐘が鳴り始めた。

秋らしい曇り空だが、風が強く雨は降りそうもなかった。

海から吹きつける湿気を帯びた風は上着を着けていても肌寒いほどだ。

海は波が高く緑がかった灰色だ。

そんな中を風にも波にもビクともせず帆船は厳かに静々と進んで

行く。

寒さにも拘らず集まって来た人々で辺りは一斉に騒がしくなり、やがてビールや菓子を売る者まで現れた。

波止場に着き錨を下ろした船からは、次々と陸に係留索が投げられ、棧橋が掛けられた。

直ちに海事当局に向うことに決めた『ラ・ソリテア号』の船長が姿を現すと、人々の間に歓声が沸き上がった。

アルテュスは、アレンとメレー又ニ商船の警備と荷下しの監督を命じると、帳簿係と水夫を一人連れて細い石畳の道を上がって行った。子供が数人、目を輝かせ耳を澄ませながら3人の男達の後をぞろぞろとついて行く。

港町の少年にとって、この国で最も有名な私掠船の船長を間近で見ると、彼の言葉を聞けるなんて夢みたいだった。

だが男の屈強な体躯や精悍な顔つきに、子供達は少々気後れを感じているようで、さすがに話しかけようとする者はいなかった。

酒場で一杯飲み、ゆっくりと風呂に入って休みたい気持ちもあったが、アルテュスは用事をさっさと済ませ一刻も早く家に帰りたいかった。

まだ船に乗っているように幾らか頭がふらついたが、すっかりとし

た足取りで石の階段を上がって行く。

ティミリアの海事当局は、港を見渡せる丘の上の中世時代に建てられた建物の中にあった。

鉄の兜を被って槍を手にした門番に挨拶をすると鉄の格子が嵌った門を開けてもらう。

入り口前の階段を上がり切った所で、建物の中から出て来た顔見知りの職員が声をかけてきた。

「これは丁度良いところに来られた、ド・タレンフォレスト殿。奥方とご兄弟の泊まられている宿屋に使いを出すところでした」

「何だと？」

相手の不機嫌そうな声に、睨まれた男は慌てて説明する。

「一週間程前にお二人でこちらに来られて、ド・タレンフォレスト殿の船が入港したら直ぐに知らせを寄こして欲しいと仰っていましたので……」

「どこの宿だ」

男の答えを聞くとアルテュスは眉を顰め、さっさと船と積荷の登録を済ませてしまおうと大股に建物の中に入って行った。

「義姉上！ どうやら兄上の船が到着したようです！！」

エヴァの許に騎士達を残し、港に様子を見に行っていたヤンが息急
き切って戻って来た。

窓辺で縫い物をしていたエヴァは裁縫道具を取り落とし椅子から飛
び上がった。

膝がガクガクと震えている。

「ああ、神様！……！」

崩れ落ちないように椅子の背に？まりながら叫んだ。

「早く港に向わなくては……！」

ヤンは慌てて駆け出そうとするエヴァを引き止めた。

「義姉上、どうか落ち着いてください。兄上が船を降りられるのに
はまだまだ時間がかかります。海事当局に行かれれば、我々がここ
に宿泊していることも分かりますし」

「でもヤン、私は早くご無事な姿が見たいの」

だがエヴァが哀願するような素振りを見せても、ヤンは頑として動
じなかった。

「すれ違う可能性が高いです。やはり、ここで待ちましょう」

エヴァは渋々頷いた。

「わかったわ。でも下に行って待つことにするわ」

エヴァは宿屋の食堂に下りると、入り口の良く見える場所に腰掛けた。

ここからだつたら彼が入って来たら一番に見えるわ。

でも、これからの時間が今までで一番長く感じられるのではないかしら？

上の空で手続きを済ませ、最後に差し出された手紙を見もせず懐に突っ込んだアルテユスは建物を飛び出した。

『ラ・ソリテア号』の帳簿係と水夫も慌ててその後を追いかけるが、背の高い船長になかなか追いつけない。

エヴァとヤンが港町に来ている。

嫌な予感がするとアルテユスは思った。

家で何かあったのか？

街角から飛び出してきた何かに激しくぶつかり立ち止まったアルテユスは、素早く剣の柄に手をやった。

狼藉者かと思ったのだが、どうやら違うようだ。

汚れた石畳の上に背負っていた籠もるともひっくり返った男を驚い

た顔で見下ろした。

哀れな男はやつとのことで体を起こすと、地べたに座り込んだまま
途方に暮れた顔で辺りに散らばった卵を見ている。

大半は割れてしまい、残りは汚い水溜りに落ち込んで売り物にはな
らないだろう。

ああ、俺は何を焦っているんだ？

アルテュスは硬貨を数枚男に放ってやった。

財布を出した弾みで、懐からガサリと音を立てて分厚い手紙が足元
に落ちた。

泥に汚れた手紙を見つめて眉を潜める。

誰からだ？

宛名の筆跡は自分の知らないものである。

だが首を傾げ、歩きながら封を切って広げると、中にはもう一通手
紙があった。

こちらはよく知っている筆跡のものだった。

その手紙に素早く目を通したアルテュスの体は、まるで冬の海にで
も落ちたように急にぞつと冷たくなりそれからカツと熱くなった。

「何だこれは?!」

几帳面で優しい書き手の性格が表れたその文字は間違いようがなかった。

顔色を変えて破り捨てようとしたが思い直したように懐に突っ込むと、もう一通の手紙を読み出した。

見る見るうちにその顔は怒りで歪み、赤黒く染まって額には血管が浮き上がった。

やっと起き上がった卵売りの男は仁王立ちになった男の顔を盗み見ると、転がるようにしてその場を逃げ出した。

暗い瞳をギラギラさせ歯軋りしている大男は獣のような唸り声を上げる。

そして急に全速力で駆け出すと、後ろから仲間が驚いて引き止めるのも聞かずに、港町を目指して丘を駆け下りた。

ソーセージを焼く匂いと煙が立ち込めた薄暗い酒場は、船乗り達の話し声と酔っ払いの歌声で大層騒がしかった。

一番奥まった席に一人で座った男の顔は暗くてよく見えないが、どうやら先程からかなりのピッチで酒瓶から直に酒を喉に流し込んでいるようだ。

既に空の瓶が5本程テーブルの下に転がっていた。

男は時折唸り声とも怒鳴り声ともとれる声を出して、重い拳でテーブルを殴りつけている。

近くに座った者達は気になるのか、ちらちらと横目でその様子を眺めているが、近寄ったら怪我をしそうなその男に声をかける者はいない。

その時、扉が開き冷たい風と共に頬を赤く染めた若い娘が入ってきた。

港町の職人の娘だろうか、酒場に客を求めに来る女達とは違い質素な服装をしている。

娘は店の中をぐるりと見渡すと、入り口近くにいた船乗りにも声をかけた。

男は立ち上がって店の奥の方を指差す。

娘は頷くと、男が指差した方向に人混みを掻き分けて進み始めた。

途中、酔っ払った船乗りが口笛を吹いて卑猥な言葉を浴びせ、女の体に触れようとする。

娘は怯えたような顔で男の手を振り払い、暗いテーブルの前に立った。

酒を飲んでいた男は両手で頭を抱え込んでいる。

「あの」

「……」

何度呼びかけてもビクともしない男に痺れを切らしたのか、女はテーブルの上に小さな包みを置くと男の耳元で叫んだ。

「『ラ・ソリテア号』の船長さんですね。お預かりした物を確かにお渡ししました」

急にガシツと腕を掴まれた娘は、恐怖に目を見開き悲鳴を上げた。

「遅いわね」

エヴァは心配そうに扉の方を見ながら言った。

「多分、色々手続きに時間がかかっているのでしょう」

「それにしても、さつき貴方が港から戻ってから4時間以上経っているわ。何か面倒なことが起こったのではないかしら？」

義姉にはそう言ったがヤンも少々不安になってきていた。

こんなに時間がかかるものなのだろうか？

アルテウスと一緒に取ろうと思っていた昼食も、仕方なく少し前に自分達だけで済ませた。

「やっぱり港に行って見ましょうよ。これ以上ここにいたらどうにかなってしまっわ」

そう言つと、エヴァはシヨールを手にして立ち上がった。

ヤンは頷くと、食堂の隅でトランプをしている騎士達に声をかけた。

万が一すれ違った時のことを考えて、宿屋の亭主に伝言を頼むと、一行は宿屋を出た。

「義姉上」

セイセイと息を切らしながら、殆ど走るようにして歩いて行くエヴァに後ろからヤンが声をかける。

「義姉上、そんなに走つたら転びますよ！」

歩調を緩め振り返つたエヴァは、額の汗を拭い照れたような笑みを浮かべた。

「だつて、嬉しくて自然に足が速くなつてしまつたもの」

やがて、辺りは倉庫と思われる建物が多くなり、荷物を運ぶ人々とすれ違つようになつた。

もうすぐだ。

もうすぐ船長さんに会える。

まるで羽でも生えたようにエヴァは軽々と坂道を駆け下りていく。

船舶修理場の建物の角を曲がつた時、波止場にある大きな帆船が目

に入り、エヴァは喜びの声を上げた。

鬼のように怖ろしい顔をした大男に肩を掴んで揺さ振られ、その娘は泣きながら説明した。

娘の父親は港町の靴屋だった。

一週間前に柔らかい鹿の皮で作らせた女性用の靴を父親の店に取りに来た客に頼まれたのだ。

訳あってこれから外国に向うのだが、この包みのある船の船長に渡さなくてはならない。

だが、彼の船が自分が出発する前にティミアアに着くか分からないので、靴屋の娘に言付けて行きたいとその客は言った。

娘はすすり泣いた。

「お許してください。私は何も知らないのです！！ ただその女の方に頼まれただけで……」

「女だと?!」

「金髪に青い目で天使のように美しい方でした。お使いの駄賃にと銀貨一枚下さって。でも、こんな目に遭うと知っていたら……」

泣いている娘の腕をきつく掴んでいた男は急にその手を放すと、娘の顔も見ずに手を振った。

「失せる！！」

娘が他の客を押し退けながら酒場から飛び出して行くと、立ち上がって成り行きを眺めていた人々は座り直し、何事もなかったかのように自分達の会話に戻った。

小さな包みの中には、思ったとおりルビーとダイヤをあしらった指輪が入っていた。

ティアベの小さな教会で、花嫁の指に嵌めてやったものだ。

アルテュスはがっくりとテーブルの前に腰を下ろすと両手で頭を抱えた。

僅かに残っていた希望の光も消え失せてしまった。

たったの半年も待てなかったのか……

男の唇が自分自身を嘲笑うかのように歪む。

自業自得だ。

過去に痛い目に遭っているのに、また同じ過ちを繰り返す俺は大馬鹿者だ。

血が流れるほどきつく唇を噛み締める。

何故、何故だ、エヴァ……！！！！

一生俺の傍にいと誓ってくれたのではなかったか？

君は俺の妻になって幸せではなかったのか？

あの笑顔は偽りだったのか？

別れの手紙の文章からはできるだけ傷つけないとの思いが伝わってきて、それがまた辛かった。

蜂蜜色の柔らかな髪と薔薇色の頬、澄んだ青い瞳を思い出して、男は悲しみに胸を押し潰されていた。

だが、いくら泣きたいと思っても、涙は一滴たりとも流れることはなかった。

波止場は商船の積荷を降ろす人々で賑わっていたが、その中に夫の姿は見えなかった。

『ラ・ソリテア号』の泊めてある場所に行くと、ヤンが作業をしている水夫に声をかけた。

水夫の話によると、午前中のうちにアルテュスは海事当局に向ったとのことだった。

何か問題があったのかもしれない。

エヴァ達が海事当局の様子を見に行こうとその場を離れかけるとバ

タバタと二人の男が走って来た。

「デズマル航海士殿!!」

男達が呼びかけると船縁から顔を見せた男が答える。

「今呼んで来ます!」

「何かあったのか?」

ヤンの問いに水夫と思われる男が訝しげにヤンと一緒にいたエヴァと騎士達を見た。

「……もしかして、船長の奥様では?」

もう一人の男が恐る恐る口を開いた。

エヴァの代わりにヤンが答える。

「そつだ。兄は今どこに?」

「船長は今お取り込み中で……」

口籠った男に畳み掛けるように尋ねる。

「場所はどこだ?」

「『赤獅子館』という名ばかり立派な酒場です」

相手は仕方ないという風に肩を竦めて答えた。

いつたい兄上は何をしているのか？

船を降りた船乗りが時折、羽目を外すということは知っている。

だけど、乗組員達を船に残したまま積荷も降ろし終わっていない状態で、何故自分だけさっさと酒場に行ってしまったのか？

出港前にエヴァと一緒に港で暮らして、少しは兄のことが理解できたと思う。

そんな無責任な人じゃない筈だ。

ヤンは釈然としないものを感じながらも、説明された酒場に向った。

今度はエヴァが後から小走りについて来る。

酒場でやることといたら、酔っ払って身分の卑しい女と戯れること。

兄上は女といるのではないのか？

義姉上を連れて行って大丈夫なのだろうか？

ヤンはそつと後ろのエヴァを振り向いた。

「やっぱり義姉上は、ここで待っていた方が良いのではないですか？」

港に残ることを提案して見るが、エヴァはにっこりして頭を振った。

「大丈夫よ。早く行きましょう」

もう一通の手紙は男からのものだった。

妻を誘惑した男。

妻が俺を捨てて選んだ男。

いつからだ？

ふと以前港で見知らぬ男と話していたエヴァを思い出す。

もしかしてあの時から既に男がいたのではないか？

いくら貴公が自分のものだと印をつけても、彼

女の心は自由です。

そして、彼女は私と一緒にいくことを承諾してくれました

ではこいつはエヴァの体にあるあれを見たんだな。

嫌な思い出が蘇る。

あの女のように、エヴァもこいつに脚を開いたのか。

胸の中がカツと熱くなり、アルテュスは苦しそうに顔を歪めギリと歯軋りをした。

妻も相手の男も絞め殺してやりたい。

二人共まだ港にいるのか？

どこに行くつもりなのだろうか？

ヤンと一緒に聞いたが、弟も共犯なのか？

ふらりと立ち上がると硬貨を数枚テーブルに放り、まだ半分程残っている酒瓶を手に酒場を出た。

アルテュスは港に向かってふらふらと歩いていた。

さすがに飲み過ぎたようだ。

そう思ったが、時々立ち止まっては酒を煽る。

それでもしなけりゃ狂っちまいそうだ。

最後の一滴を飲み干したアルテュスは腕を下げて、前を見つめたまま酒瓶を落とした。

ぼんやりと駆けて来る女を見つめる。

女は泣いているように見えた。

何が悲しいんだ？

新しい男に愛されているんだろう？

そいつと遠くに行ってしまうんだろう？

眉を顰めて睨みつけてやっても、それが目に入らないようにエヴァは赤い顔で駆け寄って来た。

「……船長さん」

何かに耐えているような顔で見上げてくる。

エヴァの顔に触れようと手を上げかけたアルテュスはギュッと拳を握った。

他の男に抱かれた癖にそんな顔をするな！！！！

「おかえりなさ……」

急にアルテュスに腕を強く引かれ、エヴァは息を呑む。

「どっしたの？」

尋ねても答えずにエヴァの腕をきつく掴み、顔も見ずに港に向う道を飛ぶように進んで行く。

エヴァは一生懸命同じ速度で走ろうとするが、引き摺られるような形になり、苦しそくに顔を歪めた。

「あつ、靴が！」

躓いて片方の木靴が脱げてしまったエヴァを、まるで荷物のように肩に担ぎ上げるアルテュスにヤンが追いついた。

「兄上、どこに行かれるのです！！！」

引き止めようと袖を掴んだ腕を振り払ったアルテュスは、剣を抜き放ち血走った目で弟を睨みつけて叫んだ。

「この女は俺の妻だ。邪魔する者は斬り捨てるぞ！！！」

ポカンと口を開けて立ち止まった弟には構わず、エヴァを担いだまま波止場に向かって走った。

後には、エヴァが落とした木靴を手にしたヤンがぼんやりと立っていた。

丁度船乗り達が列に並んで給料を受け取っている時に、船長が女を抱えて戻って来た。

「出航の準備だ！」

その声に皆驚いて顔を見合わせるが、通常の給料の倍を払うと言われて、躊躇する間もなく持ち場についた。

『ラ・ソリテア号』の乗組員は、船長の突飛な思いつきには慣れていたし、この船に乗っていることをとても誇らしく思っていた。

その上、いつもより金が貰えるなら願ったり叶ったりだ。

数ヶ月の長い航海からやっと港に着いたばかりだと言うのに、船を降りようとする者はいなかった。

出港作業が済むのを見届けたアルテュスは、エヴァを担いだまま船室に向った。

エヴァは目を閉じて微笑みながら、その間ずっとアルテュスの肩の上で男の上着にしがみついていた。

腹を圧迫されて苦しかったが男の体温を感じる。

やっと、やっと会えたのだ。

先程チラッと見た夫の顔は前よりも更に日に焼け、少しばかり痩せ

たように見えた。

それとも頬に影を作っている無精髭の所為だろうか？

だが狭い船室に入った途端、硬い寝床に投げ出されて小さな悲鳴を上げる。

酔っ払っているのかしら？

服からも随分お酒の匂いがするけれど。

寝床の上に起き上がると、アルテュスは背を向けて屈み込み大きなトランクの中を探っていた。

「これに着替える」

そう言つて大きな包みを寝床に投げると、男はエヴァの顔も見ずに船室を出て行った。

気遣わしげにその後姿を見送つたエヴァは、気を取り直すと荷物を包んでいる油紙を開いた。

「まあ、何て美しいのでしょうか！」

包みから出した衣装を寝床の上に広げ、両手を打ち合わせて感嘆の声を漏らす。

それは、春の海のようにキラキラと光る明るい青の絹のドレスだっ

た。

雲のような純白のレースが襟と袖口を飾っている。

……これを私に？

震える指先で滑らかな生地にとつと触れる。

これを着てもいいってことよね？

「これでいいのかしら？」

時間がかかったが、何とか一人で身に着けることが出来た。

胸から腹までぴったりと締め付けるドレスは、腰の辺りを膨らませたスカートの前が開いており、一面にビーズの刺繍をした銀色の布地が窺える。

袖は肩の部分を小さく膨らませ、所々をリボンで結んでいる流行の型だった。

包みの中に一緒に入っていた小箱には、小粒の真珠の首飾りが淡い光を放っていた。

こんなに美しい物をくださるなんて、船長さんは何てご親切なのだろう。

髪は一人で結い上げることはできないわ。

でも、こんなドレスに三つ編みでは可笑しいし……

少し考えて、解いたまま背中流すことにした。

恥ずかしいけれど、船長さんに綺麗に見られたいから。

視線を感じて振り向くと、船室の開いた扉の枠に寄りかかるようにしてアルテウスが立っていた。

暗くて表情は良く見えないが、じっとエヴァのことを見つめているようだ。

エヴァは頬を染めて微笑んだ。

「……………良く似合う」

その低い声を少しばかり素っ気無く感じたのは気の所為だろうか？

「どうもありがとうございます」

礼を言うと、アルテウスは大したことではないとでもいう風に首を振った。

エヴァは首を傾げて夫の姿を見つめる。

抱きついたりしたら嫌がられるかしら？

でも、ずっと寂しかったから……………

戸口を塞いでしまうほど大きくがっしりとした体。

あの長い腕に抱き締められたい。

逞しい胸に顔を埋めたい。

ドキドキしながらそっと一歩を踏み出した。

だがエヴァが近付いて来るのに気がつくど、アルテュスは顔を背け船室を出て行こうとする。

「船長さん？」

去って行く大きな背中を追うように問いかけたが、短く鋭い声で遮られた。

「ついて来い！」

「でも、靴が……」

エヴァの小さな声はアルテュスの耳に入らなかったようで、どんどん先に行ってしまう。

仕方がなくエヴァは裸足のまま、汚さないようにドレスの裾を絡げて男の後を追った。

甲板では乗組員達が忙しく立ち働いていた。

既に港を出てから数時間が過ぎており、港町は影も形もない。

辺り一面に広がっているのは、緑がかった灰色の海である。

彼らの邪魔にならないように注意してアルテユスの後を追いかけた。

メインセイルの右側には10人程の水夫が集まり何か作業をしているようだ。

男達を押し退けて船縁に手をかけたアルテユスはふらふらしながらその上によじ登った。

エヴァはハツとして小さな悲鳴を上げかけたが、急に腕をきつく掴まれ体を引き上げられた。

足元がグラグラと激しく揺れ、慌ててしゃがみ込む。

アルテユスと一緒に、縄で吊り下げられたボートの中に座ったエヴァは問いかけるように男の顔を見上げた。

だが男は縄に手を添えて立ったまま船縁から身を乗り出している水夫達に指示を喚いている。

ボートはずるずると降りて行き、やがて水に浮かんだ。

アルテユスは屈み込むと乱暴な手つきでボートの腹から縄を外す。

そして縄をぐいと引き寄せると、腕の力だけで帆船の横腹をよじ登り始めた。

エヴァは目を丸くしてその様子を眺めていたが、男の姿が船縁を越えて見えなくなり、縄が引き上げられると初めてボートの縁を掴み腰を浮かして呼びかけた。

「船長さん?! どうしたの?」

「さっさと船を出せ!」

吐き捨てるようにそう言った船長を船乗り達は驚いた顔で見つめる。

「でも」

「命令だ!!!」

それでも皆、まだ躊躇っているように動かずに船長とその隣にいる航海士を見つめている。

アレンがアルテユスの腕を掴んだ。

「船長、いったい何をするつもりなんですか?! 絶対に後悔しますよ!」

アルテユスは腰から短銃を抜き、焦点の合っていない目を眇め、非難するように叫んだ航海士の頭を狙う。

「命令に従えない奴は撃ち殺す」

銃声が轟き、船乗り達は慌てて持ち場に戻った。

帆が一杯に風を孕み、『ラ・ソリテア号』はぐんぐん速度を上げ始めた。

風に乗って、か細い叫び声が船乗り達の耳に届く。

「アルテュス、アルテュス!!! ……行かないで!!! ……
……どうして? ……」

アルテュスは顔を顰めて耳を塞ぎ、何度も壁にぶつかりながらよろよろと船室に戻った。

そして、寝床に崩れ落ちるように倒れ込むと、そのまま睡魔に襲われ意識を手放した。

窓から差し込む朝日に目を覚ましたアルテュスは、寝床の上に起き上がり呻き声を立てた。

頭がガンガン割れるように痛い。

喉がカラカラに渴いて口の中が粘っている。

まるで洋酒漬けの李にでもなったような気分だった。

俺は何でこんなに飲んだのか?

もう直ぐティミリアに着くのだな。

早く家に帰って、エヴァに……

そこまで考えて、怖ろしいことを思い出した。

別れの言葉が綴られたあの手紙。

懐を探り皺になった手紙を取り出すと、歯を食い縛って凝視した。

何度読んでも期待したように内容は変わる筈はなく、苦しそうな溜息を吐いて寝床の上に放り出す。

これは確かにエヴァの筆跡だ。

だが、何か引つ掛かる。

思い出せ。

何か妙なことがなかったか？

痛む頭を両手で抱えて目をきつく閉じる。

床が軋みながら傾き、トンと軽い音がして目を開いたアルテュスは屈んで足元に転がっているものを拾い上げた。

片方だけになってしまった底の磨り減った小さな木靴。

アルテュスは血の気の失せた顔を強張らせた。

船室を飛び出して階段を駆け上がり、甲板に出ると額を突き合せて何やら相談していた船乗り達がぱっと辺りに散らばった。

アルテュスは自分から慌てて視線を逸らす男達には構わず、ずかずかと船尾楼に歩み寄った。

涙ではつきり見えないが、『ラ・ソリテア号』は自分を置き去りにして去って行く。

「アルテュス、アルテュス!!! ……行かないで!!!」

いくら呼んでも夫は戻って来てくれなかった。

「……………どうして？」

帆船から押し寄せて来る波折りがボートを大きく揺らし、小さな悲鳴を上げてボートの縁に縋りつく。

波の頂上に持ち上げられて、次の瞬間谷底に転がり落ちた小さなボートは危うく傾き、水飛沫が長い髪を濡らした。

すっかり声が噎れてしまったエヴァは、両手に顔を埋めると肩を震わせてすすり泣いた。

何故こんな仕打ちをされるのかさっぱり分からない。

ただ自分の一生を捧げようと思っていた人に捨てられたことが悲しかった。

言われたことはないけれど、好かれているのだと思っていた。

とんだ自惚れだ。

帆船の姿は見る見るうちに豆粒のように小さくなり、やがて水平線に消えてしまった。

ボートはゆらゆらと頼りなげに広い海の上を漂っている。

やっと泣き止んだエヴァはボートの底に仰向けに寝た。

次第に暗くなってくる空は雲に覆われ灰色だったが、それでも素晴らしく美しかった。

泣き腫らした臉や火照った頬に当たる風が心地良い。

耳の辺りでちやぶちやぶと水音がする。

エヴァは天と海に身を委ねるとゆっくりと目を閉じた。

死ぬのは怖ろしくなかった。

懐かしい父と、どこかで待っていてくれるだろう母と弟のことを想った。

泣き過ぎたのだろうか、それともこの揺れの所為だろうか、体中から力が抜けてふと意識が途切れそうになる。

暗い海の上、木の葉のようになると回ると回るボートの中で、春の海のような美しいドレスを纏ったエヴァはいつしか深い眠りに落ちていた。

「アレン！」

アルテュスは舵取りに指示を与えている航海士の傍に行くが、相手は冷たい瞳で船長を一瞥するとそっぽを向いてしまった。

「おい、何を怒っている？」

「覚えていないんですか？」

「……いや、漠然としか」

アレンは口籠る相手に背を向けたまま、きつい口調で言った。

「自分が奥さんにした仕打ちも？」

思わずアレンの腕を掴んだアルテュスは哀願するように問い詰めた。

「お願いだ、教えてくれ！ 何があつた？ 俺はいつたい何をしたんだ？」

航海士は肩を聳やかした。

「あんたは止めようとした俺の頭に銃を突きつけてぶっ放したんですよ！」

「だが、おまえはびんびんしているではないか」

「酔っ払っていて手元が狂ったからいいものの、命中していたら今頃はあの世です」

「……すまなかつた」

珍しく素直に頭を下げた男は恐る恐る尋ねた。

「それで、エヴァは？」

「本当に覚えていないんですか？」

アルテュスは顔をクシャクシャに顰めると首を振った。

エヴァの悲しい叫び声が微かに耳に残っている。

「俺は、妻を……殺してしまったのか？」

アレンはやつと相手を哀れむような目付きで見上げると答えた。

「ボートに乗せて海の真ん中に置き去りにしたんですよ」

「場所は？」

「どうするのですか？」

「当たり前だ、直ちに探しに行くぞー！」

「ちょっと待ってください。今すぐ計算しますよ！」

弾んだ声で航海士は答えた。

上手廻しの号令がかかると、船乗り達の顔がぱっと明るくなり皆きびきびと作業に勤しみ始めた。

早く、早く!!!

ボートを降ろした場所に帰るのだ。

船乗り達の掛け声が途切れ途切れに辺りに響き、『ラ・ソリテア号』は素早く針路を変更する。

「西南西へ27マイル、その後、西に直行して38マイル」

昨日の夕方から航海日誌に記された情報を基に海図の上にその位置を割り出した。

運良く風向きが変わり、追い風を受けた帆船は白い水飛沫を上げながら波を乗り越え進んで行く。

アルテュスは怖ろしい顔をして甲板の上を行ったり来たりしていた。複雑な気持ちだった。

助かって欲しいと思うと同時に、裏切られた怒りも未だに胸の中で燻っている。

エヴァの顔を見たら、自分が苦しい思いをすることが分かっていた。憎しみすら感じてしまつかも知れない。

それでも、やはりもう一度あの大きく青い澄んだ瞳を覗き込みたか

った。

あの優しい笑顔が二度と自分に向けられることはないと分かっていても。

何とこの船は鈍いのだ!!!

もっと早く進めないのか？

「後どの位かかるのか？」

「この速度でしたら、4時間程で戻れるでしょう」

「もっと早く進めないのか？」

「これで精一杯です」

「もう少し速度を上げる為、何か海に捨てられるものはないのか？」

「船長」

噛み付くように問いかけてくる船長を航海士は手を上げて黙らせた。

そうだった。

俺が無理に出港させたから、食料だって十分じゃないのだ。

お願いだ。

どうか、どうか……

昨夜の強い風に空を覆っていた厚い雲が千切れ、久し振りに太陽が顔を覗かせていた。

藍色の海にすつと長く白い航跡が走る。

「そろそろです」

「おい、何か見えるか?!」

船長に呼びかけられた見張り番は、慌てて一生懸命に目を凝らすのが、視界に広がるのは水ばかりだった。

「自分で見に行く」

アルテュスは縄に手をかけると横静索をすすると登り始めた。

あっという間に見張り台によじ登ったアルテュスは、おろおろしている見張り番を押し退けると、片手をひさしにして前方を睨みつける。

暗く広がる海面は、西日を反射してキラキラと光っていた。

しかし、期待していたものはどこにも見えなかった。

昨日の風向きから考えて、ボートの流された可能性のある水域を既に2時間以上も彷徨っているのだ。

これ以上探しても無駄だろう。

そう思ったアレンは見張り台を見上げて呼びかけた。

「船長！」

「……」

「船長、もうすぐ日が暮れます。もうこれ以上……」

「黙れ！！！」

見張り台の上に立った男は、眉を顰め歯を食いしばって前方を見つめている。

もう手遅れなのだろうか？

二度とあの優しい声を聞き、愛らしい姿を見ることはできないのか？

……俺が、殺してしまったのか？

「おお、あれは何だ?!」

アルテュスと反対の方角を見ていた男が叫び声を上げた。

はっきりとは分からないが、確かに黒っぽい点が水面を漂っているようだ。

「北北東に向え!!」

直ちに号令がかけられ、帆船は針路を変えた。

甲板に降りたアルテュスは近付いて来る黒い物体を食い入るように見つめていた。

無意識のうちに両手を組み合わせ、祈りの言葉を口にしていた。

辺りを包む黄昏の中でも次第にボートの姿がはっきりと現れてくる。

叫びながらバタバタと走り回る船乗り達で甲板の上は一斉に騒がしくなった。

「もうちよつと右だ、右!!!!」

「進みすぎだ、戻れ!!」

「おい、鍵竿だ!!」

「縄を持って来い!!」

「こつちだ、こつちだ!!」

やっとのことでボートを引き寄せると、船縁に身を乗り出していた皆が息を呑んだ。

一瞬の静粛の後、辺りは怒鳴り声と足音で騒然となった。

「うわっ!!!!」

「止める！！！」

「おい、早く押さえる！！」

「放せ　　！！！！」

台所から様子を見に来ていた『悪酔いブイヨン』が揉み合っている男達に駆け寄ると、そのうちの一人を甲板に力一杯突き倒し、その背中の上にドシンと腰を下ろした。

手首と足首を縄で縛られた男は、薄暗い船室の埃っぽい床の上に転がされていた。

この船の上では一番広くて居心地の良いとされる船長の寝室であるが、くの字に体を曲げて家具の間に挟まっている様子は随分と窮屈そうだ。

やっとのことで上半身を起こした男は、足と肘を使って体の向きを変えようと苦労している。

しかし、自分の体を支え切れず床に崩れ落ちる時に頭を激しく打つてしまい、食いしばった歯の間から呻き声とも悪態とも取れる言葉を漏らした。

皮膚には縄が食い込み、変な形に曲げていた脚は痺れていたが、体の痛みよりも胸が押し潰されそうに苦しかった。

あの時、引き寄せたボートの中を覗いた瞬間、恐怖に体が凍りついた。

底に水の溜まったボートには誰も乗っていなかったのだ。

一瞬間が混乱して、海に落ちたエヴァを救おうと海に飛び込もうとした。

溺れてしまってから既に何時間も経っているかも知れないのに。

だが、周りにいた部下達に押さえつけられ、その拳句に罪人のように縛り上げられてしまった。

確かに罪人に変わりあるまい。

俺はエヴァを殺してしまったのだから。

港に戻ったらこいつらは俺を行政官に突き出すつもりなのだろう。

こんなに縛ったりせずとも逃げ出したりしないものを。

正直に罪を認めたら斬首されるのだろうか？

それでいいのだ。

死ぬのは怖くない。

今までもずっと死と隣り合わせの生活だったのだから。

……だが、死んだらこの胸の苦しみはなくなるのか？

少しは楽になれるのだろうか？

……それとも地獄の火に身を焼かれ続けなければならないのか？

『ラ・ソリテア号』の乗組員は、憂鬱そうな顔をして淡々と仕事をこなしていた。

いつものように歌を歌う者もない。

「おい、おまえは知ってるか？ 船長の奥さんはいったい何をしたんだね？」

一人の船乗りが『髭の三日月』の袖を引っ張って小声で尋ねた。

「どつやら噂じゃまた留守の間に間男されちまったそうぞ」

『髭の三日月』が口を開く前に近くにいる男が口を挟んだ。

「男の俺だって惚れちまうような男振りの癖に、実に女運の悪い男だな、うちの船長は」

「……でも、そんな風には見えなかったけどな」

『髭の三日月』は考え込みながら独りごちた。

俺のことをティムと呼んでくれたし。

美丈夫な船長にお似合いの愛らしい人だった。

青い大きな瞳を輝かし嬉しそうに船長の姿を追っている彼女を見て、船長が心底羨ましいと思ったんだ。

船長は部下の手前照れていたのか、そっけない風を装っていたが、それでも時々彼が妻を見つめる優しい眼差しに気付いてしまった。

二人は愛し合っているように見えたのだが、あれは幻だったのか……

「それで、俺に何をして欲しいのだ？」

食事と用を足す為、甲板に連れ出されたアルテュスは、前に座る二人の航海士の顔を代わる代わる見ながら尋ねた。

アレンとメレー又は、自分らを含む『ラ・ソリテア号』の乗組員は、誰もアルテュスを司法機関に引き渡すつもりはないことを告げたのだ。

「別に何もしなくていいです。もし何か聞かれたら我々は奥さんが亡くなったのは事故だと証言しますから、このまま『ラ・ソリテア号』の船長でいてください」

「罪を償いたいと思っているのは分かります」

「そりゃ、船長は牢屋に行つて運良く斬首にでもなつたら、自分の罪の一部を償つた気持ちになつて少しは楽になるでしょうよ。だけど、そうしないで、海を眺めながら今までどおりに船に乗っていた方が苦しいでしょう？ だつたらそうすべきだと思いませんか？」

「船長が捕らえられたら、いったい何人の男が路頭に迷うと思うのですか？ 船長がこの船の上でしたことによつて、我々は皆呪われた船乗りになつてしまったのですから」

アルテュスは唇を噛んで俯いた。

船の上では死者は災いをもたらすと思われている。

事故で死んだ者でも船を海の底に引きずり込む力があると信じられているのだ。

怨恨を持っている女だったら、それこそセイレーヌのように恐れられるだろう。

そしてセイレーヌと関わりを持ったこの船の乗組員全員が、将来乗り込む船を危険な目に晒す可能性がある訳だ。

エヴァは人を恨むようなことは絶対しないだろうに。

命を奪うだけでは飽き足りず、俺は思い出の中のエヴァまで怪物に変えてしまったのだ。

悔やんでも悔やみ切れない。

苦しそうに顔を歪めたアルテュスは、魔除けの蹄鉄を打ち付けてあるマストの前で皆の言うとおりにすることを誓った。

ティミリアの港町は武装した警備の兵達でいっぱいだった。

『ラ・ソリテア号』はいつもの停泊場所を使うことが出来ずに、仕方なく隣町の漁港に錨を下ろした。

「いったい何が起こっているのだ？」

波止場で漁船に乗っている男にメレーヌが尋ねると、漁師は驚いた

顔をした。

「何も知らないなんて、外国の方ですか？」

航海から戻ったばかりで国の新しい情報は知らないのだと説明すると、相手は納得いったように頷いた。

「数週間前からここらではこの噂で持ち切りなんですけどね。ティミリアにずっと待たれていた王様のご一行がお見えになっているんですよ」

男の話では、王とその家族の為に町の貴族や裕福な商人の屋敷は全て徴用され、更に王と一緒に宮廷も移動して来たのでお付きの者達を泊めるのに宿屋は全て満員だそうだ。

「ティミリアに行ったら泊まる所どころか、食い物にも困るのではないか？」

「そうですね。ここに残りますか？ 船の上でも眠れますし」

結局、陸に降りた皆は近くの農家から豚を何匹か調達すると港近くの空き地に石を積んで竈を作り丸焼きにした。

『悪酔いブイヨン』は仲間達の為に、農家から買った粟と麦粉ではんのりと甘い濃厚なスープを作った。

最後の一樽のビールが回され、食後には赤く熟しているのに酸っぱい林檎を競い合って食べた。

船を降りてから、アルテユスの様子は普段と変らなかった。

てきはきと部下達に指示を与え食料を確保すると、焚き火の近くに腰を下ろし船乗り達の話に相槌を打っている。

ちらちらと不安そうに船長の様子を見ていた男達はホッと胸を撫で下ろした。

気でも狂ってしまうのではないかと心配したが、どうやら大丈夫なようだ。

食事が終わると皆眠るために船に戻った。

月もなく暗い夜だった。

疲れ果てた男達は毛布に包まると次々と夢の国に旅立って行ったが、一人だけ眠れない男がいた。

皆が寝静まった船の中、その男は船室の狭い寝床の上で丸くなり、呻き声を上げて髪を掻き篦り一人苦しみ悶えていた。

窓から聞こえる蹄の音に、図書室の窓辺で本を読んでいたヤンは、本を放り出すと階段を駆け下り霧雨の中に飛び出した。

やっと兄上が戻って来た。

あんな形で港で別れ不安で堪らなかったが、何日待っても『ラ・ソリテア号』は戻らなかつた為、仕方なく騎士達と城に帰って来たのだった。

馬を降りて召使に手綱を渡している男の姿を見ると急いで駆け寄った。

「兄上！」

アルテュスは眉を顰めると顔を背け、足早にヤンの横を通り過ぎようとした。

「兄上、待ってください。義姉上は？」

その声にピタツと足を止めたアルテュスは雨に濡れた顔を強張らせ、刺すような眼差しで弟を睨み付けた。

そして、急にヤンの腕を掴むと引き摺るようにして自分の部屋に向った。

途中、彼らを見かけた妹達が近づいて来ようとしたが、ヤンは自由な方の手を振って離れていると合図をする。

自分の腕を万力のようにギリギリと容赦なく締め付け引き摺っている兄は、それほど怖ろしい顔をしていたのだ。

部屋の扉を乱暴に開くとヤンの中に突き飛ばしたアルテュスは、扉に鍵をかけると弟の襟首を掴んだ。

「二度と、あの女の話をするな！」

壁に押し付けた弟を睨みながら、地を這うような低い声で言った。

ヤンは血の気の失せた顔で、それでも兄の目を真っ直ぐに見て答えた。

「義姉上のことをあの女なんて言わないでください。義姉上をどうなさったのですか？」

アルテユスの顔がカツと赤黒く染まり、ヤンは殴られると思って歯を食い縛り身構えた。

だが、兄は弟を殴らずに急に手を放すと顔を背けて苦しそうに呟いた。

「エヴァはもうここには戻ってこない」

ヤンは濡れた服のままベッドにどさりと腰を下ろして頭を抱え込んだアルテユスを見つめていた。

何があったのか知らないが、兄上は義姉上のことを誤解しているのではないか？

怒った兄上は怖いけど、何か言った方がいいのではないのか？

両手の拳を握り締めて大きく息を吸い込んだ。

「鴨の丸焼きにポエル何とか産の葡萄酒に塩漬けキャベツと燻製ハムと3年間熟成させたチーズ!!!」

アルテユスはキョトンとした顔で唐突に喚き出した弟の方を見た。

「……………何だ？」

「義姉上が兄上の為に準備したものです。それから新しいシャツと肌着と……………」

「もういいー！」

勢い良く立ち上がったアルテュスは、ヤンの腕を掴むと扉の方に引っ張って行き、鍵を開けて部屋から追い出した。

再びベッドの上に腰を下ろすと虚ろな瞳で雨の霰に濡れ曇った窓を見つめる。

わざわざ俺の好物ばかり取り寄せてくれたのか？

別れるつもりなら、普通服を仕立てたりしないのではないか？

エヴァ、エヴァ……………

俺は何か酷い間違いを犯してしまったのではないだろうか？

とてつもなく愚かなことを……………

雨が降っている。

ざあざあと水の流れる音がする。

こんなに降ったら、花壇が水浸しになってしまうわ。

何でこんなに体がだるいのだろう？

瞼が重たくて目を開くことが出来ない。

でも外は夜なのだろう。

真っ暗だから。

まるで蜂蜜酒を飲み過ぎた時のように頭がくらくらするわ。

小さな手がそろそろと布団から出ると、確かめるように傍らのシーツに触れた。

それともこのベッドが動いているのかしら？

その時、床が軋むような音を立てて傾き、慌ててベッドに縋りついた。

……ここは、船の上？

雨だと思ったのは、波の音？

「おやおや、お目覚めかね？」

聞きなれないしわがれた声が耳に入った。

重たい足音がぼんやりとした明かりと共にベッドに近付いてきた。

「ほら、これを飲みなさい」

力強い手が背中を支え、口元にコップが当てられた。

喉がカラカラに渴いていた。

エヴァはコップを両手で掴むと貪るように飲み干した。

爽やかな香りがする柑橘類を絞った水のような。

目を閉じたままのエヴァの体を同じ手がまたそっとベッドに横たえた。

「ピート、船長を呼びに行け！」

答えは聞こえなかったが、軽い足音が走り去っていく。

……船長ってアルテュスのこと？

無理に目を開くと、ベッドの傍に吊るされたランタンの明かりに照らされて、見知らぬ髭面の男が自分を覗き込んでいた。

「これは、別嬪さんだな！」

男はほうほうと感心したように声を上げ、もじゃもじゃの髭の間から歯を覗かせた。

「……」

その時、近付いて来る慌しい足音が耳に入って、エヴァは期待を込めた眼差しを扉の方に向けた。

船室に入って来た男の顔は影になっていて良く見えなかったが、中の背ですらりとした姿は夫のものではなかった。

男はベッドに近付くと、起き上がるうとするエヴァを押し止めるような身振りをして、脇に立っている髭面の男に問いかけた。

「で？」

「ああ、何も問題ないようだ。暫く定期的に水分を与えて安静にしていれば元気になるだろう」

横になったままエヴァは毛布を握り締め、不安そうな瞳で二人の男を見比べた。

後から入って来た男はまだ若く、短く刈った金髪に細い口髭を蓄え、体にぴったりと合った黒っぽい色の服を着て腰に剣を帯びている。

男はランタンの明かりの中に屈み込んで、じっとエヴァの顔を見つめた。

近くで見ると目尻には細かい皺があり、どうやら初めに思った程若くないらしい。

「私達の言葉が分かりますか？」

「……」

答えようとしたが声が出せずに頷いた。

「ご安心なさい。ここには誰も貴方に危害を与えようとする者はいない」

「……」

「この船はG国海軍の軍船『セレスト号』。王のご一行を迎える為にティミリアに駐屯していたが、これから軍港ギースに戻る途中で。私はG国海軍中佐のルイス・ド・クレリゴー、こちらは船医のマティアス・ダノ」

信用できる人達のようなだとエヴァはホツとした。

だが、男は眉を潜め非難を含んだ口調で続けた。

「貴方の乗っているボートを見つけたのが昨日の明け方だから、あれから丸々2日眠っていたことになるのですよ。あんなボートで沖に出るなど気違い沙汰だ。貴方はどこから来たのですか？ どこに行くつもりだったのです？ 転覆する前に我々が通りかかっていな

かつたら今頃は海の底ですよ」

エヴァは困った顔をした。

乗りたくて乗った訳ではない。

「貴方の名前は？ お父さんの名前は何と何というのです？」

「まあまあ、そんな質問攻めにしなくても」

船医が取り成すように口を挟んだ。

「まだ疲れているのだろう。ギースに着くまでたっぷり時間はある。彼女も話したくなったら自分から話してくれるだろうよ」

「頑固な奴だ。港に積荷をほったらかしにしてどこに行っていたのか、言つつもりはないのだな」

城主は挨拶に来た船乗りの息子を見て腹立たしげに言った。

一昨日家に戻って来たばかりだが、部下には一週間後に港に戻る約束をしているので、明日の朝早く発たなければならない。

「……」

アルテュスは不貞腐れた顔でそっぽを向いている。

積荷はちゃんと届け出て、倉庫に運び込まれている。

何故父に文句を言われなければならないのか。

すると父親は違うことを言い出した。

「勝手に嫁を連れて帰って来たかと思えば、今度は離婚でもするつもりか？」

顔を顰めて何も答えない息子に男は溜息を吐いた。

「もう飽きてしまったのか？」

「お話がそれだけでしたら……」

「別にあの娘の肩を持つ訳ではないが、おまえが留守の間は色々頑張っていたぞ。暴漢に襲われた時は可哀想なことをしたが」

アルテュスは顔を上げて父親を見つめた。

「襲われたってどういことですか？」

「聞いていなかったのか？」

急に顔色を変えて詰め寄るようにした息子に父親は驚いた顔をした。

エヴァ、エヴァ……

部屋に閉じ籠ったアルテュスはがっくりと床に膝をついた。

……裏切られたのではなかった。

俺は取り返しのつかないことをしてしまった。

父は大事には至らなかったと言っていたが、もし奴らに犯されていたとしても君は何も悪くないのに。

拳をきつく握り締め、歯を食い縛って胸の苦しみに耐える。

エヴァが怖い目に遭っていた時に、傍にいて守ってやれなかったことを悔やんでももう遅い。

彼女を守るどころか、俺は不義を働いたと決め付けて海の真ん中に置き去りにしてしまったのだから。

あの手紙も、指輪も……

妻を襲った者は俺を強請るつもりだったのか？

何かひっかかるとあれからずっと考えていたが、やっと分かった。

エヴァは革靴など履いたりしない。

あの時も、磨り減った木靴を履いていた。

片方だけ俺の手元に残った哀れな小さい木靴。

中に納まっていた可愛らしい足は今頃……

アルテュスは呻き声を上げて床の上に前向きに倒れた。

そのまま床に何度も額を激しく打ち付ける。

腹の底から湧き上がってくる自分自身に対する怒りをどつすれば良いのか分からなかった。

数日後の夕方、ティミリアの港に戻ったアルテュスは、直ちに『ラ・ソリテア号』の乗組員の泊まっている宿屋に向った。

皆はホツとした顔で船長を迎えた。

屋根裏部屋に落ち着いたアルテュスの許にアレンが来て、別の船に仕事を見つけて去って行った男達の人数を伝える。

呪われた船に残る者は少ないのではないかと諦めていたアルテュスだったが、半分以上の男が残っていることを聞いて満足そうに頷いた。

代わりの者は簡単に見つかるだろう。

出港の予定日までまだ後2週間もあるのだ。

行き先は決まっていた。

本当はエヴァと一緒に行く予定だったのだ。

辛い任務を果たした後は、友人のマテオ・ダヴォグールの所に行く

つもりだった。

慰めてもらおう為ではない。

彼の見解を聞きたかったのだ。

部屋に独りになったアルテュスは懐からくしゃくしゃになった妻の手紙を取り出した。

誰かがエヴァの筆跡を真似たのだろうか？

だが、手紙の文章からはエヴァの気配が感じられるのだ。

読んでいると彼女の優しい声が聞こえるように思えるのだ。

アルテュスは両手で頭を抱えると大きな溜息を吐いた。

俺は何をしているのだろうか？

これが偽物だと分かったとしてもエヴァはもう戻って来ない。

血が滲むほど唇を噛んで頭を垂れると両手を組み合わせた。

俺の祈りなど必要としていないだろう。

天使のような君は真っ直ぐ天に昇ったに違いないから。

……でも、俺にできることはこれしかないんだ。

男物のシャツを身に纏い髪をきつちりと布で包んだエヴァは、船室の硬いベッドの上に蹲っていた。

考えても考えても良い案は浮かばなかった。

港に着いたらどうしよう？

ギースがどこなのかもはっきりと分からない。

西の方だとは思うけど、ティミリアから遠いのかしら？

お金も持っていないし、どうやって帰ったらいいのだろうか？

でも、城に戻ることはできない。

私はもう必要とされていないのだから。

多分夫は他に好きな人がいるのだろう。

肩を落として小さな溜息を吐く。

私が子供だったのだけ。

……逆らいもせず、あんな風にボートに乗せられて。

酷いことをされたと思うのに、何故か怒りも憎しみも感じることはできなかった。

胸の中にあるのは、信じていた人に裏切られた悲しみだけ。

お父さんの家に帰る訳にもいかないわ。

父を想うと鼻がつんとして涙が溢れそうになった。

……………お父さん!!!!

慌てて涙を食い止めるようにギュッと目を瞑り唇を噛んだ。

泣いては駄目。

もし、私が船長さんに捨てられたと知ったら、お父さんはとても心配して病気になってしまっただろう。

私を結婚させたことを悔やんで自分を責めるに違いない。

弟とお母さんのことを何年もずっと後悔してきたお父さんに新たな苦痛を与えたくない。

どこに行ったらいいのだろうか？

誰を頼ったら？

それに……

エヴァは虚ろな瞳で船室の窓から見える海を見つめた。

私は口を利くことも出来なくなってしまうた。

救助されてから、ずっと声を出すことができない。

言葉は喉から外に出ようとしているのに、何故か話すことが出来ないのだ。

顔を真っ赤にして苦しそうに声を絞り出そうとするエヴァを診た船医は言った。

「死ぬほど怖い目に遭った所為だろう。精神的なものだからある日突然治るだろうが、それまでは気長に待つしかない」

初めは顔を見る度にエヴァを質問攻めにしていた中佐は、やがて諦めたように何も尋ねなくなった。

そして、エヴァを自分の客として礼儀正しく丁寧に扱ってくれている。

だが、客といっても軍船である。

あてがわれた船室から一步も出ることを禁じられ、食事の時だけ正装して食堂に行くことを許された。

ドレスはアルテウスにもらった一着しかないので、船室にいる時の為に男物の服を貸してもらっている。

女物の着替えも化粧品もないことをエヴァに詫びた中佐は、退屈するだろうと自分の本を何冊か貸してくれた。

ギリシア古典や聖書の中に何故か表紙がボロボロになった翻訳版のボツカッチョの『デカメロン』が混じっており、エヴァは夢中になつて読み耽つた。

本を読んでいる間は辛い事を忘れていられた。

これまでの数ヶ月がまるで夢のように思われてくるのだ。

軽いノックの音に、本を膝の上に置いたままぼんやりと空を見つめていたエヴァは扉の方を振り向いた。

「マリナ、夕食の時間だ。そろそろご用意を」

そう言つて船室の中を覗き込んだのは医者のマティアス・ダノだ。

この船の人は私のことを海から来た者　マリナ　と呼ぶ。

名前を聞かれてエヴァと答えたのだが、唇の動きだけではマリナと読み取れたのかも知れない。

素性の知れない私にこの人達はとても親切にしてくれる。

感謝の気持ちと共に、任務中に自分のことで煩わせて申し訳ないという気持ちがあるエヴァはできるだけ役に立ちたいと思つていた。

軍人達にもその思いは伝わった様子で、毎日の食卓の準備は自然とエヴァに任されるようになった。

食堂に着くと、エヴァは音を立てないように手際よく皿とコップを

並べ、パン切れを籠に盛る。

見習い水夫が大きな樽から注いでくる葡萄酒の入った瓶をテーブルの中央に置き、すり潰した胡椒や生姜を零さないように注意しながら小皿に入れた。

海軍中佐でこの船の船長であるルイス・ド・クレリゴーは、向かいの席に座って隣の船医の話に頷きながら食事をしているマリナを見つめていた。

不思議な女だ。

船の上の質素な食事にも嫌な顔もせず嬉しそうに食べている。

大海原に頼りないボートに乗って漂っていた美しい娘。

初めは誰かが中にいるなどとは思わなかったから、ぐっすりと眠ったマリナを見つけた時は心底驚いた。

服装や装身具から見ると金持ちの商人か貴族の娘のように見えた。

だが、その仕草は少しも気取った所がなく、まるで羊飼いの少女のように無邪気で、男の目には大層新鮮に映った。

口が利けない海から来た娘。

後、数日でこの船はギースに到着する。

そうしたらマリナをどうすれば良いのか？

まさか兵舎に連れて行く訳にはいくまいし。

食事の後、マリナを船室に送って行ったルイスが食堂に戻ると、窓辺の椅子に座ってシェリーを舐めるようにちびちびと飲んでいた船医のマティアスが振り向いた。

「それで？」

「何だ？」

「あの娘をどうするつもりだ？」

マティアスのからかうような口調が癪に障ってルイスは素っ気無く答えた。

「実家に連れて行く」

船医は驚いたように片方の眉を上げると口を開いた。

「本気かよ。お堅い軍人さんにもやっとな春が訪れたのか？」

「せめて話せるようになるまでは面倒を見てやるつもりだが、おまえの考えているようならつもりはない」

ルイスは不機嫌そうにそう言うと、マティアスに背を向けて部屋を出て行った。

クリスマスの三日前の夕方、吹雪の中を港の入り口にある塔の間を通っていく帆船があった。

甲板には一人の男が、乗組員達が入港の作業で忙しくしている中、身動きもせず、静々と近付いて来る雪を被った丘を見つめている。

冷たい風にもビクともしないで立っている男の睫には雪が絡まり、まるで涙のように光って見える。

アルテュスは苦しそうに顔を顰めると白い息を吐いた。

ここで初めてエヴァを見かけたのだ。

赤いショールに包まって俺の方を見ていた。

あの時、俺はとんでもない勘違いをして……

もし過去に戻ることができたら。

……あの瞬間からやり直したいと思う。

だが時間は過去に遡ることはなく、着々と歩み続けている。

そして俺の記憶は傷口から血を滴らせたまま、永遠にこの胸に刻み付けられているのだ。

決して癒えることのない傷。

エヴァ、エヴァ、君がいる所から俺のことは見えるのだろうか？

毎晩眠れぬほど苦しんでいる、死ぬほど後悔していると知ったら、君は少しは楽になるのか？

明日は君を愛している人を苦しませない為に一芝居打たなければならぬ。

上手くできるだろうか？

ちゃんと嘘をつけるだろうか？

見覚えのある田舎の小道。

時折ドサリと枯れ枝に積もった雪が落ちる音がする。

どんよりと曇った空は低く、朝から白いものがちらちらと舞っている。

あの日も雪が降っていた。

エヴァと初めて一緒にこの道を歩いた夜。

俺に会ったりしなければ、今頃彼女は元気にこの道を歩いていたかも知れないのに。

見覚えのある景色を辛そうに眺めながらアルテュスは、凍った道を町に向って進んで行った。

婚礼を挙げた教会の横を通る時には流石に平静ではいられず、ブルブルと震えながら駆けるようにして通り過ぎた。

目的地に着いたアルテュスは片手で胸を押さえながら動悸が静まるのを待った。

古ぼけた小さな家はあの時からまったく変わっていなかった。

屋根には重たそうに雪が積もり、捻れた煙突から白い煙が一筋出ている。

家の窓は、明かり取りの奥まった小窓以外は断熱の為に雨戸が閉めてあった。

玄関の前は雪を掻いた跡があるが、既にその上から薄っすらと粉雪が積もっている。

何も変わっていないことに少しばかりホツとしたアルテュスは、大きく深呼吸をすると手を上げて戸を叩いた。

戸を開けた中年の女は背の高い男の頭から爪先までジロジロ見ると、頭を傾げながら口を開いた。

「あなたはもしかして……」

「ゴンヴァル殿の息子だ」

アルテュスの言葉に女の表情が少しばかり緩んだ。

ゴンヴァルの世話をしている女だろう。

エヴァの被っていたような頭巾で頭を包み、黒い服に前掛けを着けている。

引き締められた薄い唇と頑固そうな顎をしているが、茶色の瞳は鹿の目のように優しい。

「こここの所あまり具合が良くなって、寝込んでしまっているんですよ」

台所の暖炉脇の釘に雪に濡れた外套を掛けながら女が言った。

冬になると持病のリウマチが酷くなるのだとエヴァが言っていた。

「おまえさん、お客様だよ」

小さな暖炉に赤々と火が焚かれた薄暗い部屋は暖かかった。

壁にはめ込んだベッドの中に口元まで毛布をかけて横たわっていたゴンヴァルが扉の方に顔を向ける。

アルテュスはギュッと拳を握り締めると部屋の中に足を踏み入れた。客を通す為、扉を押さえて脇に避けた女は一緒に話を聞くつもりはないらしい。

飲み物を持ってくると言っつて、そつと扉を閉めると台所に戻つて行つた。

「義父上……」

お元氣かと尋ねそうになつたアルテュスは、口を嚙むと俯いて首を振つた。

前回見た時よりも一回り小さくなつてしまつたように見えるゴンヴァルは、とても顔色が悪く全然元氣そうではなかつたのだ。

勧められた椅子に腰を下ろしたアルテュスは、娘そっくりの青い澄んだ瞳で見つめられ、居心地悪そうに身動きして目を逸らした。

ゴンヴァルは不安に揺れる瞳でじつと娘の夫を見つめていたが、やがて恐る恐る口を開いた。

「……娘は、エヴァは死んだのですね？」

頬を殴られでもしたかのようにアルテュスは蒼白な顔で立ち上がる

とベッド脇に跪いた。

「申し訳ない」

「……」

「貴方の大事なお嬢さんを私が殺してしまった」

深く頭を垂れて呻くように呟いた。

「それでも、あの子は幸せだったのでしょうか？」

期待を込めたその言葉に、苦しそうに顔を歪めて頭を振る。

幸せだった筈がない。

俺に出会ったことがエヴァの不幸の始まりだったのだから。

薪の爆ぜる音だけがパチパチと響く静かな部屋の中、二人の男は暗い表情で、それぞれの想いに浸っていた。

「どうぞぞ」

いつの間にか部屋に戻って来ていた女が、アルテュスに温めた飲み物の入ったコップを勧めた。

いつか同じような寒い冬の日、エヴァが作ってくれたものと同じ香りがする。

熱い葡萄酒を啜ると香辛料の香りが鼻腔に広がり舌が痺れた。

ずっと黙っていたゴンヴァルが体を半分起こし、女に近寄るように手招きをした。

「隣の部屋にあるあれを取って来てくれ」

「はい」

暫くして部屋に戻って来た女は病人の膝の上に筒のような長細い包みに乗せた。

ゴンヴァルは暫くそれに触れずに眺めていたが、やがて震える手で取り上げると婿の方に差し出した。

「このようなことを虫の知らせといふのでしょうか。これは貴方が持っていた方が良い」

アルテュスが問うように見上げると、ゴンヴァルは悲しそうな微笑を漏らした。

「宿に帰ってから開けてください」

そしてベッドにゆっくりと横たわると女の方を見て言った。

「少し疲れてしまった。暫く眠ろう」

暇乞いをして背中を向けた娘婿にゴンヴァルが声をかけた。

「それで、子供は？」

アルテュスは顔を顰めて頭を振るとそつと部屋を後にした。

何か深い事情があるのだろう。

マティアスは暫くそつとしてやった方が良かったと言っていた。

だから自分の家に連れて行こうと思ったんだ。

この娘の話を知りたい。

いったい何処の誰なのか。

何故、あんな海のと真ん中にいたのか。

ルイスは馬車の中で自分の前に座る女の横顔を見つめた。

娘は曇った窓を指で擦って外を覗いている。

船の上で自分が矢継ぎ早に質問を浴びせると、ずっと困ったような顔をして頭を振っていた。

口が利けないことが分かった時、字が書けるのではないかと驚ペンとインク壺を差し出したのだ。

その時のことを思い出した男は肩を竦める。

まるで触れたら火傷でもするかのように慌てて手を引っ込めた娘は、怯えた顔をマティアスと自分に向けたのだった。

しかし、初めに思ったように娘は文盲ではなかった。

試しに本を与えると貪るように読んでいる。

だが、貴族の娘のようななりをしていても、飾り気のないその仕草は洗練されたものではない。

そのうえ、助けた時に裸足だったので仕方なく見習い水夫の木靴を与えたが、足を痛めることもなく履いているようだ。

不思議な女だ。

豪華なドレスと木靴という不釣り合さは、どうも外観だけではないように思えるのだ。

ルイスは子供の頃から何でも物事をはつきりさせないと気の済まない性質だった。

部下達に口煩い上司だと思われているのも知っている。

好奇心というよりも、自分が全てを制御しているという安心感が欲しいのだ。

声が出せるようになったら、彼女は全てを話してくれるのだろうか？

エヴァは曇った窓から外を覗きながら、向かいに座った男に気付かれないようにそっと溜息を吐いた。

とても親切な方だと思っているのに何故か完全に心を許せない自分が嫌だった。

嘘を吐いた訳ではないけれど、素性を隠しているのだから同じようなことだ。

けれども、ルイスの質問に答えるつもりはなかった。

父親の所に帰されるのならまだしも、アルテュスの家には絶対に戻れないのだ。

女は結婚前は父親に結婚後は夫に守られると決まっているのだから、私が結婚していることが分かったら無理矢理に夫の家に帰されてしまっただろう。

だから決して素性を知られてはならなかった。

名前も……

名前を聞かれ答えようとして途中で口籠ったエヴァを見て、船医は笑って頷いたのだった。

「いいよ。我々はあんたを海から来た娘、マリナと呼ぶことにしよう」

お医者さんは私をそっとしておいてくれたけど、この方はまるで私の心の中を見透かすような眼差しで見るのだ。

一緒に行っても大丈夫なのだろうか？

別れを告げる時、お医者さんは安心させるように言ってくれたけど。

ルイスは幾らか煩い所はあるが誠実な男だ。

あんたを困らせるようなことはしないだろう。

ルイス・ド・クレリゴアの生家は、ギースの町外れのクレレグーという村にあった。

代々ド・クレリゴア家に受け継がれてきた領地である。

ギースは中世時代から軍港として栄えた町だ。

ルイスの曾祖父は、この国の海軍大佐として前世紀のS国との海戦の際に手柄を立てた男だった。

祖父も父も叔父も海軍に勤めていたので、長男であるルイスも7歳になると当たり前のように海軍兵学校に入れられ、翌年から見習い水夫として軍船に乗っていた。

その頃のルイスは几帳面で大人しい子供と思われており、船乗り仲間の間での評判は悪くなかった。

努力家で野心も持っていた少年は運も良かったのだろう。

丁度良い按配に乗っていた船の船長付きの小姓の一人が病に倒れ家に戻らなければならなくなり、代わりにルイスが呼ばれたのだ。

その後も士官候補生に推薦され、とんとん拍子に昇格して、一年前に32歳で今の地位に就いたのだった。

一年の殆どを軍船の上で過ごしている男は未だに独身で、休暇になると母親が待っている実家に戻る。

女は嫌いではなかったが、玉の輿を期待して擦り寄ってくる女達にはうんざりしていた。

そのうち跡継ぎを儲ける為に妻を娶らざるを得なくなるだろう。

せめて、それまでは自由に生きたいものだ。

やがて馬車は町を出て泥濘んだ田舎道を走り始めた。

この地方は冬でも滅多に気温が氷点下になることはない。

この日も朝から霧雨が降っていたが、雪にはなりそうもなかった。

さて、母には何と言ってマリナを紹介したら良いのか？

男はずっと窓から外の景色を眺め続けている娘を見ながら思案していた。

数日後、荷造りを終えたアルテュスは、仲間達に2週間で戻って来ると約束をしてトリポルトに向けて旅立った。

だが、町を出る前にある建物の前で馬車を止めさせ、御者に暫く待つように言っただ中に入っ行って行く。

煤に汚れ石には苔の生したその建物の入り口には門番の小屋があったが、用を足しにいつているのか誰もいなかった。

アルテュスは案内も待たずに中に入ると、階段を上り薄暗い廊下を進んで突き当たりの部屋の扉を叩いた。

男の声がそれに応え、引き摺るような足音が扉に近付いて来た。

扉についている小窓が開き、外にいる人間を確認しているようだ。

「先日、仕事を頼んだ者だ」

「ド・タレンフォレスト様ですね」

鍵を開けた男は部屋の中にアルテュスを招き入れた。

建物の中でも毛皮の外套に身を包み、やはり毛皮のついた黒い帽子を被った中年の男だ。

立った襟と帽子の間から覗く赤ら顔は白髪の間違った髭に覆われている。

天井の高く広い部屋は薄暗く寒く、所狭しと様々なガラクタが置いてあるようだ。

だが、暗さに目が慣れてくると、ガラクタと思われたのは大小の額に入った絵画だったことが分かる。

大部分には布が掛けてあり、風景画あるいは肖像画なのか見ることができなかつた。

ミシミシと軋む床の上をアルテュスは男の後について、家具の陰になっっている隅の方に歩いて行った。

そして、立ったまま懐から財布を取り出すと、机の上に投げ出した。

「約束の金だ」

台に上がって棚の上から布に包んだ四角い物を降ろした男は、それを両手で抱えて机の上にそっと置いた。

包みを解こうとした男をアルテュスが身振りで止める。

「ご確認なさらなくて良いのですか？」

「ああ、そのままでもいい。ご苦労だった」

アルテュスは領収書を受け取ると、包みを小脇に抱えて足早に建物を出て行った。

待たせておいた馬車に飛び乗り、出すように命じて座席にどさりと

腰を下ろす。

御者がパシリと鞭を鳴らし、走り出した乗り物は町を出て解けた雪で泥濘んだ田舎道を進んで行く。

四角い包みを大事そうに膝の上に抱えたまま、アルテュスは魂を抜かれたかのようにぼんやりと馬車に揺られていた。

寄木細工で床を覆った贅沢な部屋は鬱金色と萌黄で纏められていた。

奥の壁には、彫刻され金箔で覆われた額縁にキラキラと輝く大きな鏡が嵌め込んである。

ガラスのついた窓には重たいビロードのカーテンがかかっている。

暖炉には赤い火が燃え盛り、部屋の中には濃厚な香水の香りを含んだムツとするような暖かい空気が籠っていた。

そして、暖炉前の安楽椅子には、むく毛の子犬を膝に乗せた年配の婦人が腰掛けていた。

レースの襟以外は飾り気のない黒っぽい服を着ているが、結い上げた白髪に輝く髪飾りと大きな宝石のついたペンダントが女の身分を示している。

若い頃はさぞかし美しかったと思われる女の顔は青白く、頑固な性格を表すように眉間と口元に深い皺が刻まれている。

女は斜め前に立った息子の方を見もせず、犬の毛に白く細い指を通しながら口を開いた。

「それで、どうなさるおつもり？」

「彼女が口が開けるようになるまでは、ここに置いてもらいたいと先程から……」

「ご自分のなさっていることをちゃんと分かっているのでしょうか？ 貴方はド・クレリゴー家の当主なのですよ。身元の知れない唾の女など連れてきて」

女は自分が苦勞して纏めようとした縁談を次から次へと断る息子に憤慨していた。

また面倒なことは自分に任せたまま、さっさと死んでしまった夫に対しても腹を立てていた。

だが母親のそんな気持ちに気付かないようにルイスは突っ立ったまま、イライラと上着から出ているシャツの袖を引っ張っている。

「では、母上は身寄りのない可哀想な娘をこの寒い中に放り出せと言われるのですか？」

「そのようなことは言っていないません。大体ちゃんとした家の娘だったら何故一人で海になど出たのです？」

「何か事情があるのですよ。とにかく、陸にいる間は私がマリナを保護しますので」

ルイスはそう言って、母親に頭を下げると反対される前にそそくさと部屋を後にした。

「マリナ、今日は天気も悪くない。ギースに行つて見ませんか？」
与えられた小部屋の窓際に座つて刺繍をしていた娘はその声に顔を上げた。

黄色い花模様の描かれた薄紅色のふんわりとした服を纏い、頭には縁をレースで飾つた薄手の布を巻いている。

その姿を満足そうに見ながらルイスは思った。

思ったとおりこの娘にはこのような明るい色が良く合う。

母上が怒っているのは、俺が彼女に亡くなった妹の服を貸してやったからだ。

これから町に行つて新しい服を作つてやるつもりだが、出来上がるまで普段着代わりにあの豪華な空色の衣装を着せておく訳にもいきまい。

着替えを持っていないマリナに、放つておけばどうせ虫の餌食になる服を少しばかり貸してやつて何が悪いのだ。

幸いなことに小柄でほっそりしていた妹の服はマリナにぴったりだった。

召使に妹の外套と帽子を持って来させると、自分も毛皮の外套を羽織って玄関に向った。

ガタゴトと騒がしく走る馬車の中、ルイスは向いに座るマリナに説明する。

「ギースでは毎年クリスマスの季節になると市が開かれるのです。その期間は近辺の町村から大勢の人が集まって来て、港には外国の船も多いから色々面白い物が見えますよ」

確かに自分がマリナを町に連れて行ったら、これからどんな噂が流れるかは見当がつく。

俺は構わないが、彼女はどう思っているのだろうか？

俺と噂になったりしたら迷惑なのだろうか？

じっと見つめるっていると、マリナは頬を染めて居心地悪そうに視線を逸らした。

そんな様子を見ながらルイスは考える。

母上も一目見れば分かるだろうに、一度も会おうとしないのだから。

この娘の顔には気立ての良さが表れている。

高貴な生まれではないかも知れないが、表面だけ美しい偽善者達と比べたらどれほどましか。

ふと妙な考えがルイスの脳裏を過ぎる。

もし、いつまで経っても声が出せないままだったら、いつそのこと妻にってしまったらどうだろうか？

エヴァは祭りの雰囲気を楽しんでいた。

この地方特有の尖った塔のある大きな教会の前広場は、市に来た人々で大いに賑わっていた。

外国の商人に近く、の村から来た農夫、晴れ着を着た娘や一張羅を身に纏った船乗り、そして買い物に訪れた客に混じって武装した警備兵の姿がちらほら見えた。

ティアベの市とは比べ物にならない賑やかさだ。

屋台を一つ一つ見て歩いていた二人は、途中で魚のフライを掴んでビールを飲み、立ち止まって大道芸人の芸や芝居を見た。

喜劇役者の夫婦が舞台の上で喧嘩をして男の方が大袈裟な身振りで尻餅をつく、観客はワツと拍手喝采して笑い転げた。

エヴァも思わずクスリと笑みを漏らす。

笑うのは本当に久し振りだ。

エヴァは隣の男が満足そうに自分のことを見ているのに気付かなかった。

占い師の小屋に行ってみようと誘われ、ルイスの後に続いて人混みから出たエヴァは、小屋の前の木に寄りかかり背を向けて立っている男を見かけると息を呑んで立ち止まった。

黒っぽい服に身を包んだ男は、背が高く、逞しい体つきをしているのが後ろからでも分かった。

黒い縮れた髪が帽子からはみ出している。

ルイスが驚いたように自分を見ているが、体が強張ったように動かない。

「どうしたのです？ 気分が悪いのですか？」

ドクンドクンと耳鳴りがする中、気遣わしげな問いが遠くに聞こえた。

どうしてこんな所で会ってしまうの？

船長さんはもう私の顔も見たくない筈なのに。

エヴァはルイスの後ろに隠れるようにして大きな男の背中を見つめていた。

その時、小屋の中から若い娘が出てきて、待っていた男の腕を取った。

エヴァ達の所からは、女が顔を紅潮させて何やら熱心に男に話しかけているのが見えた。

胸がズキンと痛んだ。

あの人の新しい恋人、それとも新しい奥さんなのだろうか？

馬車に乗ってからずっと寒そうに青ざめた顔をしているマリナを向かいに座る男は気遣わしげに見守っていた。

窓から外を覗いているが、その目には外の景色は何も映っていないようだ。

市を見ている時は寛いでいるように見えた。

芝居を観ている笑顔さえ浮かべていたのに。

あそこで彼女は何を見たのだろうか？

ルイスはマリナが怯えたように自分の背中に隠れた場面を思い起こした。

あの時、自分達は占い師の小屋に行こうとして、急にマリナが立ち止まったのだった。

別に怖がるようなものは辺りに何もなかったと思う。

小屋の前には笑い合っている恋人達がいた。

近くの村から祭りに来たと思われる若い男女の他に回りには誰もいなかった。

マリナは何にあんなに怯えたのか？

結局テントには入らずにそのまま帰って来てしまったが、もし占い師に会いに行っていたら何か分かったのだろうか？

この娘のことを理解したい。

独りで海の上を漂っていた理由、口を利けなくなった原因を知りたい。

何があったのか？

何故こんなに悲しそうな瞳をするのか？

同情を込めた視線でマリナの方を伺いながらルイスは決心した。

マティアスにはあまり質問をするなど言われたが、家に戻ったら様子を見て話してみよう。

「確かに、これはどう見ても別れの手紙だな」

マテオ・ダヴォグールは手紙をテーブルの上に投げ出すと、向いに座って頭を抱え込んでいる親友を見つめた。

テーブルの上には食後に召使が持って来た胡桃の入った鉢と酒の入ったコップがあった。

「それで……」

口籠ったマテオにアルテユスが顔を上げる。

「何だ？」

「貴様はどちらの方が楽になるのか？」

「……」

「これが偽物だった方がいいのか？ それとも……」

「分からないんだ。エヴァが俺を裏切ったことが事実だと知ったら、良心の呵責は減るのだろうか？ だが同時に胸の苦しみは増すのではないか？」

「貴様は何でまた女にそんなにのめり込むんだ？ 浮気されたらさつさと離縁して別の女を捜せばいいだろう？ この世の中半分は女なんだから」

「……」

「貴様に否という女は滅多にいないだろうに」

アルテユスは黙ったまま、テーブルの上の半分酒の入ったコップを虚ろな瞳で見つめている。

「何故彼女でなくてはならないのだ？」

口籠った男を幾分哀れみの浮かんだ眼差しで見ながら言った。

「それは、ただ彼女を自分の所有物として見ていたからではないのか？ 飼い犬に手を噛まれたとでも思っているのではないか？」

「違う！！ 俺は……」

テーブルの上でギュッと拳を握り締めると俯いた。

俺には今更そのようなことを言う資格はない。

彼女を愛していたなどと……

どうしてこんな気持ちになるの？

もう忘れなくてはならないのに……

布団に潜り込んだエヴァは声を立てずに泣いていた。

あの日、ルイスと一緒に市に行ってからエヴァの心は乱れっぱなしだ。

特に夜になってベッドに入ると余計なことを悶々と考えてしまうのだ。

町で見かけた男はアルテュスではなかった。

後姿が似た人を見かけただけで、何故こんなに動揺するのだろうか？

今頃夫は他の女の人と一緒にいるのだと思うだけで、息をするのが苦しいほど胸が痛くなるのだ。

それはどんな人なのかしら？

多分、貧しい代書人の娘などではなく、家柄の釣り合う美しく優しい人なのだろう。

エヴァは深い溜息を吐くと寝返りを打った。

仰向けになると熱い涙がつと頬を伝いパタパタと枕に落ちた。

彼を憎むことができれば、少しは楽になるのだろうか？

憎しみを胸に抱くことができさえすれば……

だが、頭に浮かんだアルテュスの笑顔に自分を見る優しい眼差しに、エヴァは苦しそうに眉を寄せ歯を食い縛った。

酷いことをされたら頭では分かっているのに、思い出すのは楽しかったことばかり。

ずっと一緒にいたかった。

彼もそう思ってくれていると信じていたのに、どうして……

こんなになっても、愚かな私はまだ何か期待しているのだろうか？

もうきつぱりと諦めて、これからどうするのかを考えなくてはならないのだ。

いつまでも中佐様に甘えている訳にはいかないわ。

それに、どうやら怒らせてしまったようだ。

私が彼の質問に答えようとしなから。

エヴァは暗い天井を見つめ、いつまでも眠らずに物思いに耽っていた。

このまま春になるのだろうかと思われるほど暖かい日が続いていた。ルイス・ド・クレリゴーは先程から屋敷の庭をイライラと歩き回っていた。

春になったら海の上に戻らなければならない。

休暇の間も軍の機関から情報は伝わってくるので、王の視察旅行がどうやら順調に進んでいるらしいことを知っていた。

南部の新教徒に支配された町も王の正当性を認めて服従を誓い、丁寧に行を迎えたということだった。

だが春にはヴァスコル地方の海岸沿いの反逆している町に向う予定なのだ。

交渉で何とかなれば一番だが、万が一の為に海から攻撃できるように軍船を配置することを命じられている。

その前にマリナをどうするか決めなければならない。

ルイスの母親は未だにマリナを受け入れるつもりはないらしく、息子が旅立ったら直ぐにでも彼女を屋敷から追い出しそうだ。

あれからマリナに何度か話したのだが、彼女は硬く心を閉ざしているようで答えようとせず、未だに声を出すことができない。

そして先程、無理矢理鷲ペンを持たせようとしたルイスに逆らって、インク壺をひっくり返したマリナに思わず酷いことを口走ってしま

った。

命を救ってやった代わりに恩を感じてもらいたいと思っている訳ではないのに。

大人しそうな顔をしている癖に頑固な娘だ。

ルイスはグシャグシャと髪を掻き耑った。

しかし、何故こんなに気にかかるのだろうか？

彼女に対して責任を感じているというのもあるだろうが、本当にそれだけか？

最後まで面倒を見てやりたいと思うが、最後までいつまでだ？

彼女が話せるようになるまで？

それとも……？

もし、この腕に抱き締めたらどんな感じがするのだろうか？

柔らかそうな唇に触れたら？

彼女はどんな顔をするのだろうか？

急にマリナの顔を見たくて堪らなくなったルイスは足早に屋敷に戻ると、階段を駆け上がった。

「船だ！！ 船だ ……！！」

見張り台に立った男が金切り声を上げた。

確かに霧のかかった灰色の水平線に帆船の姿がぼんやりと見えるが、この距離ではまだ敵船かどうかは分からない。

バタバタと甲板の上が騒がしくなった。

「おい、船長を呼びに行け」

メレーヌに命じられた水夫が駆け足で船室に向ったが、暫くすると困惑した顔をして戻って来た。

そして眉を潜めたメレーヌを見上げながら口籠った。

「……邪魔をするなど」

チツと舌打ちをしたメレーヌは、水夫に持ち場に戻るように命じると、腹立たしげに足音を響かせながら狭い階段を下りていく。

本当にどうしようもない船長だ。

この船に残ると約束してくれたのは良いのだが、クリスマス休暇から戻って来てからはまるで腑抜けだ。

一日中船室に閉じ籠り、中を覗いたアレンの言うことには立派な額に入れた奥さんの肖像画を前にぶつぶつ呟いているのだそうだ。

そして三日に一度はぐでんぐでんに酔っ払って命令を下すどころか、ちゃんと立つこともできないのだ。

「船長、船長！……！」

鍵のかかっている船室の扉を両手の拳で叩く。

急に勢いよく扉が開かれてメレー又は弾き飛ばされそうになった。

慌てて壁にすがり付いて体を起こすと目の前の男に目を見張る。

二日酔いで寝込んでいると思った船長は、甲冑を身に纏い武装していたのだ。

だがその顔色は蒼白で目だけが炭火のようにキラキラと光っている。

そしてアルテュスは、口を開いたままの部下を見下ろすと不機嫌な声で言った。

「騒がしいぞ。まだ距離はあるだろう？ 接舷してから呼びに来い」

それだけ言うと、航海士を押し出してボタンと扉を閉めた。

相手側の帆船は一隻ではなかった。

初めに目に入ったのは武装した3本マストのガレオン船で、続いて5本マストの巨大なガレオン船が姿を現した。

いずれもマストにはためいているのは敵国の旗である。

その頃になってやっとアルテュスは甲板に出て来た。

後どの位で敵が射程に入るかを尋ねると、大砲を確認しに向った。

「船長、本当に接舷するつもりなのですか？」

航海士の不安げな顔に気付かないように、アルテュスはその場を離れながら言った。

「ああ、去年のこともあるし。奴らもそう簡単には降参しないだろう」

メレー又は唇を噛み、隣にいるもう一人の航海士を問うように見た。

アレンは肩を竦めると、木箱に座り自分の銃に弾丸を込めている船長を見ながら口を開いた。

「船長だって初めから負けると分かっている戦はしないだろうよ。それに俺達は自分達で希望してこの船に乗っているんだ、違うか？」

「……ああ、そうだよ」

「大丈夫さ。今まで『ラ・ソリテア号』は運に恵まれていた。今回も運命の女神は俺達を見放しやしないさ」

同僚のその言葉にメレー又は頷くと船長の大きな背中を見つめた。

そつだ、船長がわざと自分の部下を危険に晒すはずがない。

奥さんの死に大分打撃を受け、捨て鉢になっているのではと心配したが、『ラテディム海のオーガ』がその名を汚すようなことをする訳がない。

そう思うとメレー又は薄い微笑みを唇に浮かべ、部下に指示を与えに向った。

アルテュスは口元を引き締め、段々と近付いて来る敵船を鋭い眼差しで睨みつけていた。

ドカーン！！！！！

号令と共に曇り空に響き渡るような音を轟かせて、敵船目掛けて大砲が撃たれた。

ズーン……！！！！！！

殆ど同時に敵船にカツと明るい光が点つたと思うと、続けて『ラ・ソリテア号』は強い衝撃に揺すぶられた。

男達の怒鳴り声と足音で辺りが一斉に騒がしくなる中、水夫が駆け足で船長達の許に被害を報告に来た。

「死者2名、負傷者5名、そのうち2名は軽症です。弾着点は左舷、船首楼前方約24インチ、フォアマストおよびバウスプリットへの被害はありません」

アルテュスは唸り声で答えると、航海士を呼び付けて言った。

「針路を北北西に変更して接近しろ」

アレンは心得たと言う風に頷いた。

ミシミシと音を立てて『ラ・ソリテア号』は素早く方向を変え、やがて帆に風が入った。

辺りはまだ昼過ぎだというのに既に薄暗くなってきた。

あまり時間はなかった。

凄まじい砲撃戦が繰り広げられる中、舵取りの脇に立ったアルテュスは冷静に指示を与え続ける。

そして、火薬の匂いが漂い水煙の上がる海の上『ラ・ソリテア号』は上手く敵の射撃を避けながら、少しずつ敵船に近づいて行った。

敵の操舵手が頭を撃ち抜かれ崩れ落ちると、軍船は波任せに海の上を漂って行った。

まるで獲物を追いかける猛獣のように私掠船は舵取りを失った船に襲い掛かった。

冷たい風が帆船の間を通り抜け、ガクンとガレオン船の船体が衝撃に慄いた。

関の声を上げながら武装した男達が次々と敵船に飛び移って行く。

瞬く間にガレオン船の甲板は激しい戦闘の繰り広げられる戦場と化した。

『ラテデイルムのオーガ』とその部下達は、剣と斧で血に彩られた道を切り開き敵の司令部を目指して進んで行く。

敵の兵も負けじとばかりに剣を振るい火縄銃で撃ち返す。

しかし、軍船の兵は決死の覚悟でかかって来る私掠船の船乗り達に押され気味で、やがて敵の弾に指揮官が倒れると次々と降参して自ら捕虜となった。

アルテュスは負傷者の世話を部下に頼むと『ラ・ソリテア号』に戻り、大型ガレオン船を追って行く。

武装していない商船は撃ち合いが始まった頃に戦場を逃げ出したのだが、足の速い帆船は次第に距離を縮め日暮れ前に追いつくことができた。

ガレオン船は『ラ・ソリテア号』の姿を確認すると威嚇射撃も待たずに降伏した。

念の為に武装をしたアルテュスを含む数人の男達は積荷を確認する為、商船に乗り移った。

甲板にいたガレオン船『サンタ・ヘレナ号』の船長と名乗った男と乗組員を捕らえると、アルテュスは部下達と灯りを手に船の中を進んで行った。

新世界に向う船には通常武器や農具、織物、葡萄酒やブランデー等

向こうでは手に入らない物を積んでいる筈だ。

途中数十人の乗組員を捕らえた船乗り達は、その者達を縛り上げるとその場に残し、久し振りの豊漁にわくわくしながら軽い足取りで暗い船底に繋がる階段を下りて行った。

食糧貯蔵室に所狭しと積んである樽や麻袋を満足そうに確認した男達は、灯りに驚いて床を駆け回る動物の鳴き声に声を上げた。

「おい、鼠がいるぞ！」

「直ぐにでも鼠狩りを計画しなければならんな。イタチを放すように言っておけ」

『ラ・ソリテア号』には鼠を退治する為にイタチを乗せているのだ。食料貯蔵室を出た一行は、船首を目指して暗い船底を進んでいた。

「何だこの匂いは」

カンテラで廊下を照らしていた男が鼻に皺を寄せて呟いた。

確かに辺りには鼻をつんと刺激するような臭いが漂っている。

何か腐った物と尿と汗の入り混じったような強い臭いである。

「家畜を乗せているんだろう」

アルテュスはそう言うと、男達にさっさと進むようにと促した。

やがて、男達は外側から大きな鉄の門で閉じられた船倉の分厚い扉に突き当たった。

だが、扉を開くと途端に吐き気を催すような強烈な臭いが男達を包み、入ろうとした彼らの足を竦ませた。

同時に波の音や何か軋むような音に混じって異様な物音が耳に入る。祈りの言葉を呟いているような低い声と重い鎖を引き摺る音。

アルテュスは男のカンテラを取り上げると、辺りを照らすように前に掲げた。

暗闇の中にキラキラと光る目玉がずらりと見えて、隣に立った男が怯えたような声を出す。

「こりやいったい何の動物ですか?!」

「……人間だ」

アルテュス達が捕獲した大型ガレオン船は奴隷貿易船だったのである。

翌日は朝早くから戦死した者達の弔いで忙しかった。

帽子を握り締めてその様子を見守っている『ラ・ソリテア号』の乗組員は、麻の袋に縫い込まれた仲間が海に落とされる度に、申し訳なさそうに顔を顰めて胸に十字を切った。

長い航海の間、共に辛酸を嘗めてきた同僚がいなくなってしまうのは悲しかったが、同時に自分が生き延びれたことにホッとしてい

ただ。

彼らの魂が安らかに眠れますように。

地上を彷徨って、俺達を海の底に誘き寄せようなことがありますように。

「それで、どうするのですか？」

食事中、前に座ったメレーヌに尋ねられたアルテュスは溜息を吐いた。

「俺はどんな姿をしていたとしても、人を品物のように売り捌くことは感心しない。ギースの軍港にガレオン船を引いて行き、捕虜のことも含めて海軍の判断に任せたいと思う」

「でも、あれだけの人数だったら一儲けできますよ。捕虜だって近くの港で海事当局に引き渡せば良いじゃないですか。何でまた今まで絶対寄り付こうとしなかったギースに向う気持ちになったのです？」

アレンが口を尖らせて不服そうに言った。

「随分時間が経ったからな。思い出したくない嫌な過去だったんだが、もうどうでもよくなった」

「ギースまでは2週間程ですかね？」

「そうだな。俺達だけではないからな。もう少しかかるかも知れん」

アルテュスが話は終わったとばかりに殆ど手をつけていない皿を持って立ち上がったので、アレンは仕方なく肩を竦めると船長の背中に呼びかけた。

「彼らの世話は？」

「港に着くまでは一人も死んだりしないように、ちゃんと食べさせて出来るだけ船倉も清潔にしておくように頼んだぞ」

そう言うと、航海士の抗議も聞こえない様子でさっさと船室に下りて行った。

後に残されたアレンは膨れっ面で文句を呟いた。

「らしくもなく良心的になっちまって。修道士にでもなるつもりかよ??」

アルテュスは船室の扉に鍵を掛けると、上着を脱いで寝床の上に放った。

昨日から着たままのシャツは皺が寄って袖が破れ、点々と血の染みがついていた。

それも脱ぎ捨てると、上半身裸のままトランクの前に膝をついて中から新しいシャツを出す。

俯いて唇を血が滲むほどきつく噛み締めながら袖に腕を通した。

エヴァが自分の為に一針一針心を込めて縫ってくれたものだ。

それから、アルテュスは寝床に歩み寄るとその脇の壁に掛けてある額に被せた布を取った。

その途端、ぴくりと身を震わせる。

柔らかな丸みを帯びた頬に、人を疑うことを知らない大きな澄んだ瞳、口元には優しい微笑を浮かべている懐かしい妻。

ぴったりとした純白の頭巾に包まれた髪は、解くと蜂蜜色で甘い香りがして……

「エヴァ……」

絵を見つめる男の唇から苦しそうな声が漏れる。

どんな姿でも良いから、もう一度会いたい……

そんな思いを振り払うように額を壁に打ち付ける。

天国にいる彼女とは二度と会えない。

俺は死んだら地獄に落ちるのだから。

「……許してくれ……」

聞く者のいない懺悔の言葉は、狭い船室に空しく響いた。

「マリナ」

ルイスは苛立つ心を静めようと暖炉の前の椅子に腰を下ろし、体を緊張に強張らせて立っている女にも座るようにともう一つの椅子を示した。

先程から何とかマリナを説得しようとしているのだが、彼女は どうしても俺の質問に答えようとしなない。

今も硬い表情を崩すことなく椅子に浅く腰掛けると、俯いてスカートを引つ張って皺を伸ばしている。

男は溜息を吐くと、できるだけ落ち着いた声で話そうとした為、いつもよりも低い声で言った。

「マリナ、こちらを向いてください」

「……」

顔を上げた娘をまるで追い詰められた小動物のようだと苦々しく思いながら、ルイスは話し出した。

「いつも貴方が耳を貸そうとしないから最後まで話せていないが、春になったら私は船に戻らなくてはならない。このままの貴方をこの家には残していけないのです。貴方には二つの選択肢がある。一つ目は、既に何度も尋ねたように、お父さんの名前と住んでいる場所を教えてください。そうしたら、私がそこまで送って行く」

「……」

「お父さんは生きているのかと尋ねた時、貴方は頷いたではないか。家に帰りたくない理由があるのなら、無理に帰すつもりはないが、理由を教えて欲しいのです」

「……」

「マリナ、マリナ、何故答えてくれないのです！ 私は貴方の為を思って話しているのだ。何故そんなに頑なに拒むのですか？」

ルイスが思わず声を荒げて立ち上がると、女も弾かれたように慌てて立ち上がった。

「マリナ！！」

部屋を出て行くこととする娘の腕を掴んで引止めた。

「貴方の意向を聞いてあげようと思ったのだが、その驢馬のように頑固な性格は私に選択肢を与えてくれない」

そう言うと、強引に女の体を捕らえ自分の胸に引き寄せると小さな顎に手をかけた。

か細い悲鳴を上げたエヴァを驚いたように放した男は、目を丸くして口を開けた。

「マリナ、声が……」

顔を真っ赤に染めて瞳を潤ませたエヴァは、ルイスの腕から逃れると後も見ずに居間から逃げ出した。

そして、階段を駆け上がり自分の部屋に戻ると扉に鍵をかけ、ベッドに身を投げ出した。

中佐様は何であんなことをしたの？

どうしよう？

どうしたらいいの？

もうここにはいられない。

どこへ行けばいいのだろうか？

「泣いては駄目。考えるのよ」

声は一度出すと、口を利けなくなったことが嘘のように普通に話せた。

生きていくのには、お金が必要だ。

でも、代書人の仕事はもうしたくない。

エヴァは城の女中が家出をしたことを自分の手紙の所為だと思っていたのだ。

私にできることって他にあるだろうか？

家事は一応できるわ。

どこかの屋敷で雇ってもらえるかしら？

その時、ふとある考えが頭に浮かび、エヴァは決心したように口元を引き締めるとベッドから飛び降りた。

「とんでもない！ そんなこと私が許すとても？」

「母上のご意見は尊重します。しかし、この前も母上が仰られたようにこの家の当主は私です。私が決めます」

「自分の親の名前も言えないなんて、何か疚しいことがあるに違いないわ。今までだって唾の振りをしていたに決まっています。貴方は騙されているのよ」

「母上、もうこれ以上話すことは何もありません。失礼します」

固い口調でそう言ったルイスが足早に部屋を出て行くと、母親は深い溜息を吐いて椅子によろよると崩れ落ちた。

気分が悪くなりそうだった。

五人の子供のうち一人だけ生き残ったルイスは、両親の自慢の息子だった。

そして夫が亡くなり、家を継いだ息子にお似合いの嫁を探しているところだったのに。

なかなか身を固めようとしなかったあの子は、突然海から連れ帰った魔性の女に惑わされてしまった。

彼女の目を見れば分かりますって？

綺麗な皮を被った魔女かも知れないのに。

海にはそういう魔物が溢れていると聞いたことがある。

「奥様、大丈夫ですか？」

部屋に戻って来た侍女に声をかけられて初めて自分が涙を流していることに気がついた。

実家から自分についてきた中年の侍女は、召使いというよりも腹心の友に近い。

「アネツサ、おまえはどう思う？」

春になって船に戻る前にマリナと婚約する。

婚礼は、多分秋頃になるだろうと思われる次の休暇に挙げられるように準備を進める。

そう決心したのだが、まだ本人には話せていなかった。

最近はルイスが傍に近寄るだけで、顔を引き攣らせて逃げ出すようになってしまったのだ。

窓際に立った男は陽のあたる庭を見下ろすと、苦虫を噛み潰したような顔をして肩を竦めた。

そこには一足早く訪れた春のような薄い緑色の服を着たマリナの姿が見えた。

見られているとは知らない娘は嬉しそうに笑っていた。

獵犬が二匹じゃれ合いながら彼女の周りを走り回っている。

動物相手だとあんなに自然な笑顔を浮かべるのだなとルイスは苦々しく思った。

どっちにしろ彼女に選択肢はないのだ。

親の許に帰りたくないと言うのなら、ここに残るしかないだろう。

そして母がいるこの家にマリナをこのまま残していくことはできない。

結婚さえしてしまえば母だって彼女を認めざるを得なくなるに違いない。

それは彼女の為なのだ。ルイスは自分自身を納得させようとしていた。

帰る家もない彼女を不憫に思っているからだ。

でなければ誰があんな小娘を妻にしたいなんて思うか。

確かに愛らしい姿をしているが、母の選んだ花嫁候補の中にはもっと美しく洗練された女がいた。

この数ヶ月マリナを観察した結果、どうやら良家の子女ではなさそうだという結論に至ったのだ。

俺が留守の間、屋敷の管理をきちんとできるか不安だが、あの正直そうな瞳は絶対に不義をはたらいたりはしないだろう。

一年の大部分を海の上で過ごす船乗りにとって、それは大事なことだった。

幸いなことに母上もまだ達者だし、傍にいれば色々教わることができるだろう。

ルイスはこれでこの件は片付いたとばかりに窓から目を逸らすと扉に向った。

だが、まだ疑問も残っている。

何故あんなボートに乗って海に出たのか？

見つけた時、何故あのような豪華な衣装を身に纏っていたのか？

何故読み書きが出来るのか？

ルイスは自分自身を納得させるように力強く頷いた。

別に今全てを明らかにしなくても、結婚してしまっただけからゆっくりと話を聞けば良い。

時間はたっぷりとあるのだ。

薄暗い部屋の暖炉にはまだ赤く熾った炭火がちらちらと瞬いている。

エヴァが使わせてもらっている以前は家庭教師が住んでいたというその部屋は狭く質素に纏められていた。

小さなベッドに礼拝用の机、それから長持と家具も最低限しかなかったが、エヴァにとっては十分居心地の良い部屋だった。

不透明なガラスの嵌めこんである小さな窓からは朝の内にはしか日が入らなかったけれど、窓を開け放つと屋敷の裏にある鬱蒼とした森を臨むことが出来た。

春も近付くと夜明け前には森からは陽気な鳥の囀りが聞こえるようになり、エヴァは嬉しかったのだ。

だがその日の夕方、いつもの時間よりも早く何かから逃れるように慌しく部屋に戻って来たエヴァは、暖炉前の椅子にがっくりと腰を下ろすと両手で頭を抱えた。

中佐様は頭がおかしくなってしまうわ。

さつきは、もう少しで自分が既に結婚していることを話してしまいそうになった。

重婚は禁じられているから、もう二度と会わないとしても船長さんが生きている限り私は他の誰とも結婚できない。

それに中佐様は立派な方だと思っし、とても感謝しているけれど、もし私が自由な身だったとしても彼の妻にはなりたいと思わないわ。

それは、彼との結婚が船長さんとのそれと同質だと分かっているから。

この家では自分の居場所を見つけるのは更に難しいだろうし、ただ守られるだけの関係は嫌だった。

中佐様も本当に愛しい方が現れたら、船長さんのように簡単に私のことを捨ててしまうだろう。

財産も地位も持っていない私が彼らと対等な立場というのは無理だから仕方がないことだ。

同じ身分の男とだったら対等になれたかも知れないけれど、本のない仕事だけの生活は思い浮かべることができなかった。

だからと言って何も持っていない女が一人で身を立てられるとは思っていない。

修道院に入るのは嫌だし、だったらやっぱりこの前決めたようにするしかないわ。

でもどうやったら中佐様に承諾してもらえるのだろうか？

最近、中佐様は私を見るといつも不機嫌になられるから……

「俺が留守の間、マリナの保護を頼む」

ルイスが前に跪く騎士達にそう命じると、三人の男は承諾の印に頭を深く垂れた。

いずれも父の代から屋敷に勤めている忠実な信頼できる男達だ。

「できるだけ彼女が自分の部屋を離れないように見張っていて欲しい。一日一回、庭に出るのについて行ってやってくれ。食事も部屋まで運ばせる」

そう言うと騎士達は当惑した顔を上げた。

「マリナ様を監禁なさるといっことですか？」

「監禁とは人聞きの悪い。守ってやりたいだけだ」

ルイスは彼女に最後に話した時の様子を思い浮かべ、腹立たしげに眉間に皺を寄せ唇を歪ませた。

あんな優しい顔をしている癖に何と強情な娘だ!!!

結局、出発するまでに婚約することは叶わなかった。

マリナが拒んだのだ。

嫌われているのかと思ったが、身分がどうのこうのと言っていたから、どうやらそうではないらしい。

ルイスは何故自分が彼女にこのように執着するのか分かっていなかった。

若い頃の苦い思い出の所為で、ルイスは自分の意思に従わない者が我慢できなかったのだ。

その頃、海軍士官になりたての若いルイスの部下の中に反抗的な態度を取る少年が一人いた。

同い年の子供達と比べて驚く程発育のよかったその少年は、14歳で既に大人の体格をしていたということも、彼の態度に影響していたのだろう。

ルイスをあのようにてこずらせた部下は今日まで他にいなかった。

初めは仲良くなろうと努力したのだ。

だが、仕事の中でルイスにとって我慢ができないことが度重なり、少年の人を馬鹿にしたような態度は上司の冷静さを失わせ、やがて事あるごとに二人は衝突するようになってしまった。

叱られている間も皮肉を込めて見返してくる眼差しに堪えることができず、自分の手が痛くなるまで殴ったこともある。

絶対に涙を見せない少年が気絶するまで鞭打ちを命じたこともあるし、三日間食べるものも与えずに牢に繋いだこともあった。

数年後のある日、いつものように口答えをした少年　いや既に少年ではなかったのだが　を殴りつけようと上げた手を掴んだ相手は言ったのだ。

「先程辞表を出してきたから俺はもうあんたの部下じゃない。それでも良いと言うならいつでも相手になるぞ」

反抗的な癖に航海術にはずば抜けて優れていた部下を失ったことに苦い敗北感を感じながら、ルイスは去っていく男の逞しい背中をいつまでも見つめていた。

暫くの間、消息の知れなかった元部下は、数年前から海賊紛いの仕事をしていると風の便りに聞いた。

ルイスが軍船『セレスタ号』に戻ってから一週間程経ったある日、エヴァは騎士達の目を盗んで部屋をそっと抜け出した。

足音を忍ばせて階段を上がると、この数ヶ月間ずっと避けてきた部屋扉を叩いた。

扉を開けた侍女はエヴァの顔を見るとびっくりした表情で後ろの主人を振り返る。

「誰？」

「奥様、マリナ様でございます」

女の膝から飛び降りたむく毛の犬が走ってきて、招かれざる客に向ってきゅんきゅんと鳴いた。

エヴァは臆する気持ちを奮い立たせ、香水の香りのする贅沢な内装の部屋の中に足を踏み入れた。

安楽椅子に腰掛けてトランプをしていた女の前に進むと頭を下げる。

「よくもずうずうしく私の前に顔を出せたわね」

エヴァは俯いたまま唇をギュッと噛んだ。

そしてスカートを握り締めると視線を上げ、女の険のある視線を受け止めた。

「今日はお願いがあって来ました」

ルイスの母親はフンと鼻を鳴らして黙っている。

「奥様がご心配なさっているように私はご子息とは結婚しません。

でもこのままここに残っていることはできません」

息を吸い込むと一息に言った。

「私に男物の服と油紙とシーツを二枚ください。そうしたらここを出て、二度とご子息の前に姿を現さないことを誓います」

暫くエヴァの顔をジロジロと見ていた女がやっと口を開いた。

「貴方の望みの品を揃えさせましょう」

エヴァは空色の衣装を畳むと油紙に包み、それを今度は麻のシーツで包んだ。

そして、もう一枚のシーツを引き裂いて長細い帯を作ると、着ている服を脱いで丁寧に畳む。

もう二度と男の格好はすることないと思っていたけど。

胸に布をきつちりと巻きつけて、その上から男物の服を身につける。

髪は服の中に隠し黒い帽子を目深に被った。

最後に首に真珠の首飾りを巻くと、シャツの襟で隠れるように首元に通した紐をきつく締め上げた。

港町に行ったらこの首飾りを売って旅費を作る予定なのだ。

中佐宛の分厚い手紙をベッドの上に残すと、荷物を担いだエヴァは半年間暮らしてきた部屋を後にした。

約束通りルイスの母親は騎士達を遠ざけてくれたようで廊下には誰もいなかった。

エヴァは自分の姿を見て走り寄ってきた犬の頭を撫でると囁いた。

「ごめんね。行かなくちゃならないの」

門を出ると近くに止まっていた馬車から御者が降りてエヴァの方に歩いて来た。

「港まで送るようにと奥様から言い付かっております」

エヴァが乗り込むと座席の上には小さな皮の袋があった。

中には金貨が二枚。

「ありがとうございます」

遠ざかっていく屋敷を馬車の窓から見つめながらぼつりと呟いた。

ルイスの母親はこの娘を厄介払いできることを喜んでいたが、やはり良心が少々咎めたのだろう。

それに港まで送って旅費を与えれば、息子が戻ってくる時までこの娘が港町をふらふらしていることはないと思ったのか。

やがて屋敷が見えなくなり、エヴァは座席に座り直した。

しっかりしなくては。

まずは港に行ってティアベ行き船を捜すことだわ。

港に臨む丘の上で馬車を降りたエヴァは、辺りを見回すとポカンと口を開けた。

ギースには、軍港とは別にティミリアの港よりも更に大きい商港があったのだ。

まあ、何て大きな港なんだろう！！

いったい何隻の船があるのかしら？

この中からどうやってティアベに行く船を探したらいいの？

堤防に囲まれた港湾に浮かぶ帆船を暫く眺めていたエヴァは、やがて決心したように頷いた。

順番に見ていくしかないだろうから、さっさと始めた方がいいわ。

エヴァは荷物を肩に担ぐと、一番近くに停泊している船に向かって坂を下り始めた。

波止場には所狭しと帆を畳んだ比較的小さな帆船が並び、沖に錨を下ろした大型船と陸の間をボートが往復している。

並んだマストがすらりと伸びる青い空をカモメの鳴き声が過ぎっていく。

きらきらと春の日差しが眩しい日だった。

近くで見ると何と大きいだろう。

中に誰がいるのだろうか？

目の前に聳え立つ帆船の船尾灯の下に書いてある名を読んでいると上から声が降ってきた。

「おい、その小僧！ 何の用だ？」

びっくりしたエヴァは荷物を水に落としそうになり、危ういところで抱きとめると石畳の上に尻餅をついた。

慌てて立ち上がって甲板を見上げ、帽子を取って挨拶をする。

「こんにちは！ この船はどこへ行くのですか？」

髭面の男は笑いながら答えた。

「おいおい、船に乗る前に海に落ちるなよ。俺達は南に行くんだ。仕事を探しているのか？」

「南ってどこですか？」

「ここらで南って言ったら南大陸のG国植民地に決まってるだろ」

「ティアベは通らないですよ？」

「ティアベ？ 今時あんな田舎に商売しに行く船はないぜ」

がっかりしたエヴァは男に礼を言つとその場を離れた。

エヴァは荷物を足元に下ろすと、汗ばんだ額を袖で拭って溜息を吐いた。

空色の衣装は着ている時はそんなに感じなかったのだが、こうして背中に担いでいると驚くほど重たい。

一隻一隻船を見て回るのにかかなりの時間がかかり、ティアベに行く船はまだ見つかっていなかった。

既に時刻は正午を回り腹も空いてきたが、船が見つからないと落ちて着いて食事をする気分にはなれない。

今いる辺りは出港間近の船が多いのか、荷を運ぶ者達と多くすれ違つようになつた。

大きな樽を転がしていた男がエヴァにぶつかりそうになつて悪態を吐く。

「ばやばやしてんじゃねえよ!!」

トランクを担いだ別の男に突き飛ばされそうになり、慌ててその場から逃れた。

少しばかり休憩することに決めたエヴァは、波止場の周りを囲んでいる低い石垣に腰を下ろした。

潮の香りのする風が火照った顔に心地良かった。

辺りに人影はないが、遠くから時折船乗り達の叫び声や犬の鳴き声が風に乗って流れてくる。

ああ、気持ちがいいと目を細めたエヴァは、急にハツとして聞き耳を立てた。

カモメの鳴き声に混じって聞こえてきた歌声に心臓が止まりそうになる。

……水夫のなりをして

船に乗り込み職を得た……

あの日、馬車の中であの人がティムさんと一緒に歌っていた曲を忘れる筈がない。

荷物を手に立ち上がったエヴァは、キョロキョロと辺りを見回して耳を澄ます。

……船首楼に呼び付けて

微笑みながらこう言った……

途切れ途切れに聞こえてくる歌に誘われるように歩き出した。

両替商の店をやっと探し当て金貨一枚を崩して貰ったエヴァは、重

い荷物を担いで港町をとぼとぼと歩いていった。

あの後、歌声は途切れてしまい、いくら捜しても期待していた船は見つからなかった。

多分、皆が知っている歌なんだわ。

もしかしたらあの人の船かも知れないなんて思った私が馬鹿だった。がっかりしたエヴァはその後もティアベ行きの船を見つけることが出来ず、港町に遅い昼飯を取りに行くことにしたのだ。

本当に私は馬鹿だわ。

あんなことされたと言つのに、あの人が今どう過ごしているのか知りたいなんて……

空腹で頭がくらくらするが、狭い通りには如何わしい酒屋が立ち並び、男の格好をしているとはいえ一人で入るのは躊躇われた。

着飾った女と腕を組んだ船乗りや、頭の上に籠や壺を乗せた女、家畜を引いた男などが埃っぽい道を忙しなく行き交う。

やっと落ち着いた雰囲気の宿屋の前に辿り着いたエヴァは、雨と風で色褪せた古い建物を見上げた。

ここで腹ごしらえをしてからまた船を捜すことにするわ。

そう決心すると重たい木の扉を押した。

薄暗い広間は早目の夕食を取る男達で混雑していた。

旨そうな魚のスープの匂いに思わず唾を飲み込んだエヴァは、暫く入り口に立ってベンチに座った男達を眺めていたが、隅の方に空いている席を見つけると、荷物を両手で抱えて歩き出した。

やっこのことで席まで行き着くと包みをベンチの下に押し込んで端に座った。

「すみません！ 魚のスープを……」

山盛りの皿をいくつも持って近くを通る店の者を呼び止めようと叫んでも、エヴァのか細い声は周りの雑音に掻き消されてしまい給仕人の耳に届かない。

立ち上がるうとするとな後ろを通っていた男に勢いよくぶつかってしまい、こっぴどく叱られる。

エヴァはがっくりとベンチに腰を下ろすと、虚ろな瞳で汚れた皿やコップの載っているテーブルを見つめた。

鼻がつんとして涙が浮かびそうになり、慌ててパシンと自分の頬を両手で叩いた。

その時、丁度エヴァの正面の空いた席に割り込んできた大男が、よく通る声で給仕人に呼びかけた。

「ビールをくれ！ それからスープとパンとチーズを二人前頼む！」

そしてどしんと腰を下ろすと目の前の泣き出しそうなエヴァを見て驚いたように声を上げた。

「坊やも食いたいのか？」

相手の答えも待たずに後ろを向いて給仕人に怒鳴る。

「おい、もう一人前追加してくれ!!」

やっぱり……!!!!

エヴァは自分の前に座って二人前の夕食を平らげる男を目を丸くして見つめていた。

この人は『ラ・ソリテア号』の料理長だ。

ええと、何て名前だったかしら？

パンをちぎって湯気を立てているスープに入れながら考える。

では、やっぱりあの人の船はこの港に泊まっているのだけ。

料理長は行儀悪く丸太のような両腕をテーブルの上に寄せ、腕を持ち上げて直接スープを喉に流し込んでいる。

あっという間に自分の分を食べてしまった男は、袖で口元を拭いエヴァを見ると歯を見せてニツと笑った。

「美味いだろ」

「こくがあつてとても美味しいです。これって魚だけのスープじゃないですよね」

「そうだろう！ これは海老や蟹でスープを取っているのさ。よく分かってるじゃないか」

嬉しそうに笑った男にエヴァは勇気を出して尋ねてみた。

「あの、船に乗っていらっしやるんですよね？」

「うん、そうだが。おまえさんは仕事を探しているのかね？」

「ティアベに行く船を捜しているのです」

「……ティアベねえ。この港ではティアベに行く船を見つけるのは難しいだろうな」

俯いてしまったエヴァをしげしげと見つめていた男は考えながら口を開いた。

「俺達は冬になったらティアベに向うから、それまでうちの船で働いたらどうか？」

驚愕に口も利けないエヴァを見て男は笑い出した。

「おまえさんみたいなのには、水夫の仕事はきついだらうから。俺と一緒に台所で働くっていうのはどうだい？」

「はい！　ありがとうございます！！！」

思わず大声で答えていたが、次の瞬間蒼白になった。

料理長は差し出したエヴァの手を握りながら言ったのだ。

「俺はジャック・グロセック『ラ・ソリテア号』の料理長だ。皆には『悪酔いブイヨン』と呼ばれている。一応面接を受けなきゃならんから一緒に連れて行ってやるよ」

面接って誰がするのだろうか？

ジャックさんは私のことが分からないようだけど、あの人にはばれてしまうだろう。

厄介払いした女が生きていると知ったらどうするのだろうか？

今度は絶対に助からないように重石をつけて海に沈められてしまうのだろうか？

暗い顔で黙り込んでしまったエヴァを覗き込むようにして男が言った。

「心配することないぞ。面接って言うっても簡単なもんだし、台所は人手が足りないって皆知っているから問題ないだろうさ」

連れて行かれたのはギースの牢獄のある通りだった。

「ここは囚人に会いに来た家族が使う宿屋だ。他が空いていなかったんで船の者はここに宿を借りているんだが、俺は最初の晩に食べたさっきの店の魚のスープが忘れられなくてね。出港前に今一度食べに行きたかったのさ」

『悪酔いブイヨン』は広間にエヴァを待たせると、ドシンドシんと音を立てて木の階段を上がって行った。

どうしよう？

逃げ出した方が良いのだろうか？

心臓が痛いほどドキドキと高鳴り、エヴァは緊張で冷たくなった手を握り締めた。

とてつもなく長く感じられた時間の後、やっと階段を下りて来る足音が聞こえてエヴァは顔を強張らせた。

『悪酔いブイヨン』の樽のように肥えた体の後ろから姿を現したのは、見知らぬ男だった。

「ああ、この子か？」

「そうだ。幼く見えてもちゃんと料理の味も分かってるんだぞ」

真面目そうな顔をした若い男はエヴァの前に来ると尋ねた。

「名前は何？」

「マリ、えっとマリオです」

「歳は？」

「じゅうはっ、いえ15歳です！」

男はエヴァをジロジロ見つめると考え込むようにして言った。

「歳の割にはチビだな。おまえの顔をどこかで見た気がするんだが……」

「よくそう言われます」

「給料は出ないぞ。代わりに船に乗っている間の衣食住とティアベまでの旅費を約束する」

「はい、一生懸命働きます！」

「いいだろう。俺は『ラ・ソリテア号』の航海士のメレーヌ・デュ・マゴエルだ。出港は明朝六時だ。寝坊したらおいて行くぞ」

「ありがとうございます！」

エヴァはホッとした面持ちで頭を下げた。

初めの一週間は船酔いで仕事をするどころではなかった。

エヴァは一日中暗い船内でハンモックに横たわったまま情けない呻き声を上げていた。

今まで船に乗った時は全然何ともなかったのに、なんでこんなことになるの？

自分を雇ってくれた料理長と航海士に申し訳なくて弱い自分に腹が立ったが、起き上がることさえ出来なかった。

料理長は数日すれば慣れるだろうと笑って、酔い止めの薬草を煎じた湯をもう一人の台所の小僧に持たせてくれた。

ハンモックで寝るのは、船長の船室に設えてある頑丈な鎖で吊った寝床とは勝手が違い、コツを掴むまではその上に這い上がるだけでも大変だった。

広げて両端を鉤に引っ掛けると、ハンモックの方を向いて初めに片方の脚を乗せる。

そしてもう一方の脚を振り子のように動かして弾みをつけると、身体ごと回転させながらハンモックの上に仰向けに乗っかるのだ。

弾みをつけ過ぎると反対側に転がり落ちてしまう。

料理長の言ったように二週間目から大分気分も良くなり、食欲が出

て来たエヴァはやつと甲板に顔を出した。

澱んだ空気の籠っている薄暗い船内とは対照的に、外は夏の日差しが眩しく爽やかな潮風が気持ち良かった。

料理長ともう一人の小僧との三人だけで、五十人を超す男達の食事を作るのは、それも彼らに文句を言われない食事を作るのは並大抵なことではなかった。

天気が良く風も少ない日には竈を使うことが出来たが、少しでも海が荒れると火災の危険があるため火は使えなかったのだ。

その日は幸いなことに竈に火を入れることが出来たので、エヴァは料理長の指図に従い、麻の袋に入った大量の豆の中から石やごみを取り除き、細切れにしたベーコンと一緒に大きな鍋に入れてスープを作った。

長い柄のついたしゃもじを両手で握ってスープをかき混ぜている時にふと思いつき、乾燥させた月桂樹の葉の他にパセリとタイム、それからこれだけは新鮮な葱を刻んで入れてみた。

どつしりとしたまな板の上で大きな丸い黒パンを十ほど薄切りにすると流石に手が痛くなり、人差し指の付け根に肉刺ができた。

食事の時間になると交代で並ぶ男達にスープをよそった椀とパンを小僧と一緒に配り、鍋の底に少しだけあまったスープを二人で分けて食べた。

食べ終わると今度は汚れた鍋や食器を縄の切れ端を巻いたタワシで擦って海水で濯がなければならぬ。

疲れ過ぎて口も利けないエヴァに『悪酔いブイヨン』は良く働いてくれた褒美だと杏を二つくれ、甲板の隅に行つて休むことを許してくれた。

一緒に仕事をしていた小僧は既に昼寝をしに行つたのか姿が見えなかった。

よく熟した杏はとても美味しく疲れた身体に力が戻ってくるような気がした。

以前も思つたけれど、船の上で働くことは大変だけど全然辛いことではないわ。

エヴァは甲板の隅で船縁に寄り掛かり、周りで働く男達を眺めながら微笑んだ。

皆生き生きと楽しそうに働いているわ。

そんな風に少しずつ船の生活に慣れていったエヴァだったが、一つだけ気になることがあった。

船に乗つてからまだ一度も船長の姿を見ていないのだ。

船酔いで寝ていた時は会うことはないと思つたが、甲板に出てからは少なからず構えていたのに肩透かしを食らつた気分だった。

台所を手伝つようになつて一週間が過ぎた頃、とうとう我慢ができ

なくなつて料理長に尋ねてみた。

「この船って船長はいないのですか？」

できるだけさりげない風を装ってそう聞いたエヴァに『悪酔いブイヨン』は呆れたような顔をした。

「本当に何も知らないんだな。『ラ・ソリテア号』の船長は『ラティム海のオーガ』だつて船に乗っている者だつたら誰でも知っているぞ。本名はアルテュス・ド・タレンフォレストと言つてな。そこいらの航海士なんかより帆船の操縦に長け、ずば抜けて強い戦闘力を持ち、その器量と大胆さで他国の船乗りにも名を知られている男だぞ。そしてわしらにとっては愛すべき頼もしい船長だ」

まだ何か言いたそうな料理長をじつと見つめっていると、男は鼻に皺を寄せて付け加えた。

「船長は最近あんまり具合が良くなくてな」

「病気なんですか？」

「いや、病気と言つか。少々頭がいかれちまつたと言つか……」

口籠つた男にエヴァは急ぎ込んで尋ねた。

「まさか怪我をしたのですか？」

「まあ、おまえさんもこの船に乗っているからには知っておいた方がいいだろう。船長は最近奥さんを事故で亡くされてな、それからおかしくなつちまつたのさ」

「奥様を？ 事故で？」

「ああ、そうだ。事故だ。事故ではないなどと言う者がいたら俺が張り倒してくれるわ」

頭を振りぶつぶつと不満気に呟いている男を見ながら、エヴァは少しばかり頬を膨らました。

あの人は自分の意思で私を海に捨てたのに。

だが、この船の乗組員は皆船長のこと好きだから庇おうとするのだろうと思ひあたり、そんな風に慕われている男が羨ましくなった。

硬い寝床に仰向けになったアルテュスは暗く低い天井を力なく見つめていた。

船の傾きによつて窓から入ってくる光が壁の上で揺らいでいる。

そこから少女が優しい微笑みを自分に向けているのを知っていたが、そちらを見る気力はなかった。

自分はこんな風に段々と気が狂つていくのだろう。

今までは昼間は仕事をしていれば意識を逸らすことが出来たのに、最近はどこにいても彼女のことを想つてしまう。

甲板に立てば白い波の間に空色の衣装が見えないか目を凝らしてし

まい、夏の空を見上げれば同じように青く澄んだ瞳を思い浮かべてしまう。

波の音からは彼女の笑い声が響き、風に膨らむ白い帆の影に頭巾のリボンが靡いているような気がしてくる。

そして、昼食に食べたスープまで彼女の作った料理の味がするよう
に思えてしまうのだ。

ずっと船室に閉じ籠ったままの男の顔色は悪く、無精髭が頬と顎を
覆い目の下には黒い隈ができている。

だが、男の苦しみは昼間だけではなかった。

夜になっても穏やかな眠りが訪れることはなく、汗でじっとりと湿
った寝床の中で悶々としていた。

流石に三日程睡眠を取らないと意識が朦朧としてくるが、だからと
いつてぐっすり眠れる訳ではなく、ウトウトしては悪夢を見て飛び
起きることを繰り返すのに疲れ果てて、意識を失うまで酒を飲むの
が習慣となっていた。

初めの数日は何とか船長の気を紛らわせて甲板に出てくるように説
得しようとしていた航海士達も、諦めたのか船室に寄り付かなくな
った。

一日二回料理長自ら運んでくる食事には殆ど手をつけず、酒ばかり
飲んでいるアルテュスを『悪酔いブイヨン』は不安げな眼差しで見
ていた。

船乗りにとって何よりも大事な財産は自分の体だ。

病気になったら船を降りなくてはならない。

このままでは船長は体を壊してしまう。

アルテュスは自分の部下達の密かな企みを知らなかった。

過去の女を忘れるには新しい女が必要だ。

次に訪れる港で彼らは船長を船から引き摺り下ろし、港町の女の許に引っ張っていくつもりだった。

そして数日間、男を誘惑することに慣れている女と一緒に閉じ込めてしまえば良い。

そうすれば、いくら奥さんが恋しくても、男だったら食指が動くだろうよ。

その日は朝から雨が降っていた。

暗い雲に覆われた空は今にも崩れ落ちてきそうに低く、斜めに降り注ぐ冷たい雨が銀色の針のように荒れた海の上に突き刺さる。

泡立ちながら船へと打ち寄せる波を背に男達は不満気に鼻を鳴らした。

穀物を挽いて水で練った食物はまるで漆喰のようだ。

冷たい夕食を配り終え、台所の周りを片付けたエヴァは、一目を避けて髪を乾かせる場所を探していた。

船員達がずらりと並んでハンモックを吊るす船内で髪を解くことはできないだろう。

人気がない船尾に向う途中、船尾楼に上がる階段の所で一人の男に道を塞がれた。

「おい、おまえ！ 何処へ行く？」

「様子を見てくるように命じられて……」

勿論誰にも何も命じられてはいなかったが、解るでしょうという風に船室のある辺りを身振り以示すと、水夫は黙って通してくれた。

急いで船尾楼に上がると今度は中央にある狭い階段を下りていく。

こっちは船長さんの部屋だわ。

姿を見せない船長の様子を少しだけ覗いてみたい気持ちもあったが、見つかったらまずいことになりそうだ。

辺りはしんとしており、通路を歩くエヴァの木靴の音だけが響いている。

船長の船室の近くに予備の縄や帆を締まっておく物置があったのを思い出して、そちらに向った。

幸い鍵はかかっているなく、中に入ったエヴァは脚を縮めると戸を引き寄せた。

ここだったら髪が乾くまでいられるわ。

埃っぽい物置の中は、畳まれた布の上に腰を下ろすと殆ど動けないほど狭かった。

雨に濡れて重たい上着を苦勞して脱ぐと身体に張り付くシャツから長い三つ編みを引っ張り出した。

上着を乾くように広げることはできそうもない。

何とか髪を解いたエヴァは立てた膝の上に額を乗せると溜息を吐いた。

風邪をひかなければいいけれど。

複雑な気持ちだった。

私は彼に会いたいのだろうか？

自分が傷付くことが分かっているのに？

あんな風に何の説明もなしに捨てられたのが、気になっているのかわ。

私と結婚したことを後悔している、別れたいとはっきり言ってくれ

れば良かったのに……

悲しい気持ちで考えていたエヴァは、ふとあることに気付いて青ざめた。

でも、私が生きている間は他の女の人とは結婚できないのだから。

だから殺そうとしたのね……

私は彼の船に乗ってどうしようとしていたのだろうか？

涙がぼろりと零れた。

泣いては駄目。

船長さんのことはもう忘れよう。

冬までちゃんと働いて、黙ってティアベで船を降りればいいのだから。

それでも疲れていたのだろうか。

いつしかウトウトしていたエヴァは突然聞こえてきた物音に飛び上がって目を覚ました。

心臓がドキドキしている。

海賊が襲ってきたのだろうか？

寄り掛かっている壁が何か激突したようにビリビリと震えている。

苦しそうな男の叫び声がする。

エヴァは恐ろしさに身を竦ませた。

何が起こっているの？

ここに隠れていたら大丈夫なのかしら？

だが、エヴァは新たな衝撃と共に耳に入った声にハッとすると立ち上がった。

「……………エヴァ！！！！」

エヴァは無我夢中で暗い廊下に走り出た。

濡れた髪は解いたまま男物のシャツとズボンを身に付け、中に入れた藁が乾くようにと物置の中で木靴を脱いでしまっていたので裸足である。

ドシンドシンと凄まじい音と共に、まるで溺れかけているような誰かに助けを求めるような必死な叫び声がある。

あの声は船長さんだ。

船長さんが危険な目に遭っているんだ。

その時エヴァの頭からは、自分がアルテュスに捨てられたという事実はずっかり抜け落ちていた。

鍵がかかっていると思ったが、船室の扉は少しかり開いて廊下に灯りが漏れ出ていた。

エヴァは壊れた錠前がぶら下がっている扉をそつと押すと中を覗き、途端に恐怖に目を見開いた。

壁には炎の消えそうなカンテラが吊り下がり、ゆらゆらと狭い船室の中を照らしていた。

ふんと酒の強い匂いがエヴァを包んだ。

立っている所からはアルテユスの背中しか見えなかったが、自分の名を叫びながら壁に体当たりしている男はどう見ても気が狂っているとした見えなかったのである。

壁から出来るだけ離れて弾みをつけ家具に体がぶつかるのも気にせず、一時も躊躇せず頭から突っ込んで行く大きな姿は怖ろしいものであった。

「エヴァ……！！！！」

耳を塞ぎたくなる程の激しい音を立てて壁に額を打ち付けた男は、暫くふらつくような危うい足取りで立っていたが、やがて気分が悪くなったのか額に手をやるとずると床に崩れ落ちた。

だが、直ぐにまた立ち上がるとよろよろしながら壁の方に向おうとする。

「止めて！！ もう止めて！！！！」

我慢ができなくなったエヴァは、悲鳴を上げて男の逞しい背中に縋りつき止めようとした。

「アルテユス！！」

後ろから抱き締める腕を振り払おうとしていた男はその声に急に固まったように動かなくなる。

そして、暫くの間、荒い息を吐きながらじっとしていたが、掠れた声で恐る恐る呟いた。

「……………エヴァ？」

硬く筋肉の張り詰めた体からやっとな力が抜けるのを感じたエヴァはそっと回していた腕を解いた。

男の手が自分から離れていくエヴァの手を掴む。

心臓がどくと高鳴り手が震えた。

体の向きを変えたアルテュスは彼女の顔から視線を逸らし、きつく握った小さな手をじっと見つめている。

その額から血が流れているのを見たエヴァが何か言おうと口を開きかけると、急に手を放して床にがくりと膝をついた。

男が何か言ったがよく聞き取れなかったエヴァは、ほつれた髪が俯いた男の頭に触れるほど屈んで耳を澄ませた。

「……………砲丸に腹をぶち抜かれたらいいか？ それとも重石を首に括りつけて海に飛び込んだほうがいいか？」

彼は何を言っているのだろうか？

「縛り首や斬首は簡単すぎるだろう。いったいどうしたら気が済む？ 俺がどうやって死んだら君の魂は安らかになるのだ？ 火刑か四つ裂きの刑か？ 車裂でもいいぞ」

それ以上怖ろしい言葉が聞こえぬように両手で耳を塞いで叫んだ。

「止めて！」

「船の連中は俺に生きて後悔に苦しみ悶えろと言うのだ。だが俺はまだ十分に苦しんじやいない。君以上の苦しみを味わって死ねば何とか……」

「もう何も言わないで」

「釘を打った樽に詰めて海に流されたら」

「いやよ。私は貴方にそんなこととして欲しくない」

みるみる潤んだ青い瞳から涙が溢れて冷たい頬を伝っていく。

「俺は浅ましい奴だ。自分でやったことなのに。こんなになってもまだ、どんな姿でもいいから君に会いたいなどと思ってしまうのだ」

そして、アルテュスはいつの間にか床に座り込んでいたエヴァの顔を初めて見た。

大きな手がぎこちなく長い髪に触れる。

男は苦しそくに顔を歪めた。

「こんなに濡れて」

白い頬に流れる涙を震える指先でそっと拭った。

「こんなに冷たくなって」

眉を顰め唇を噛んで俯いた男をエヴァはじっと見つめた。

もしかして後悔しているの？

とうとうアルテュスは大きな溜息を吐くと自分の胸にエヴァの体を引き寄せた。

「あんな所で一人にしてごめん」

「……」

「守ってやると言ったのに。自分が酷い目に遭わせてごめん」

「……」

「怖い思いをさせてごめんな」

辛そうに耳元に囁かれる言葉にエヴァは口も利けずに涙を流している。

ぼんやりとしたカンテラの明かりがそんな二人の姿を照らしていた。

外は相変わらず雨なのだろう。

船長さんの匂いとお酒の匂い。

部屋の空気は冷たかったがエヴァは胸の中がほっと暖かくなるのを

感じていた。

「自分勝手な俺の願いを聞いて……会いに来てくれて………礼を言う」

アルテュスはかなり飲んでいいのか時々言葉を探すように口を嚙んで考え込んだ。

「………だが………もうこんな所を彷徨っていないで………早く天国に行っておくれ」

どうやら彼は自分を幽霊だと思っているようだ。

エヴァは可笑しくなり思わずクスツと笑ったが、男は気付かないようだ。

眠気がするのか、気だるそうに壁に寄り掛かり目を瞑っている。

「もう、二度と会えない。俺は………愛する妻を殺めた俺は………死んだら地獄に落ちるのだから」

思わず息を呑んだ。

「今何て？　今のもう一度言って？」

「………俺は君と同じ所には行けないから………二度と会えない」

「そうではなくて。私のこと、愛するって」

アルテュスは閉じていた目を開くと顔を顰めながら体を起こした。

「今更こんなことを言っても……」

エヴァは期待を込めて口籠った男の口元をじっと見つめている。

「……ずっと言いたかったんだ。つまらない自尊心さえ邪魔しなければ。だが、今となっては全て遅過ぎるだろう」

「言つて」

哀願するように囁いたエヴァの唇を男の武骨な指がそつとなぞる。

「ずっと君を想っていた。いや、そんな生易しいもんじゃない。どうにかなくなってしまふほど君に恋焦がれていたんだ」

「だったらどうして？」

「別れの手紙を見て嫉妬に狂っちゃまった」

「手紙？」

アルテュスは大儀そうに懐から汚れて皺になった手紙を取り出した。

「これは……」

差し出された手紙を明かりに向けて読んでいたエヴァは驚きに目を丸くした。

所々インクが滲んで読めない文字もあるが、それは間違いなくエヴァが屋敷の女中の元婚約者に書いた手紙だったのだ。

どうして彼がこれを持っているの？

もう一通の手紙を広げたエヴァは混乱した。

書かれている内容が分からない。

……何これ？

私と一緒に駆け落ちするって、どういふこと？

誰がこんなこと……

背筋がすうと冷たくなる。

では、彼女は、サラはどうなったの？

エヴァは真っ直ぐに座りなおすと、また目を瞑ってしまった夫の方を向いた。

「船長さん。確かにこっちの手紙は私が書いたものだけど、貴方に宛てたものではないわ」

アルテュスは眠ってしまったのか、壁に寄り掛かり頭を妙な具合に曲げたまま動かない。

「誰がこんな悪戯をしたのか分からないけど、私は駆け落ちするつもりなんて全然なかった。だって貴方を愛していたから」

最後は呟くような小声で言ったので、もし仮に眠っていなかったとしても男の耳には入らなかっただろう。

暫く黙って考え込んでいたエヴァは決心したように口元を引き締めた。

やがて、立ち上がると両手に力を込めて男の大きな体を動かそうとした。

こんな曲がって眠っていたら寝違えてしまっわ。

本当に眠ってしまったようで、男はされるがままズルズルと床に横たわる。

寝床から毛布を取ってその体にかけてと傍に跪いた。

「まだ貴方の許には戻れない。調べなければならぬことがあるの」

ちゃんとアルテュスが息をしていることを確認すると、縮れた額の髪を掻き上げ、屈み込んで既に血の乾いた痛々しい傷口の脇にそつと口付けた。

夫の彫りの深い顔は無精髭の所為か以前より痩せて老けたように見える。

だが、やつれていても精悍さは失われておらず、彼はやっぱり凜々しい船長さんだった。

ランタンの灯りが間もなく消えそうに瞬いている。

「体を大切にしてお酒も程々にして、ちゃんと生きて。そして、私のことを忘れないでね」

男の耳元にそう囁くと、ポロリと一筋流れた涙を手の甲で拭い、立ち上がって扉に向った。

静かな寝息の聞こえる船室は既に闇に包まれている。

エヴァは物置に戻って大急ぎで身なりを整えた。

幸いなことに髪は少し湿っているだけで、着ているうちにシャツは乾いていた。

心が温かくなると体まで温かくなるから不思議だ。

そう思いながら木靴を履くと、エヴァは頬を染めて口元を綻ばせながら甲板に上がって行った。

もっと一緒にいたかったけれど、今は私は台所の小僧のマリオなのだから。

早く皆の所に戻らないと怪しまれてしまうわ。

「今度こそ船長は完全に気が狂っちゃったと思うんだが」

アレンは鼻に皺を寄せて仲間の船乗りの『髭の三日月』に問いかけた。

「あんたはどう思う？」

『髭の三日月』は尖った顎鬚を引っ張りながら肩を竦めた。

「奥さんがあの世から会いに来たって話だろう？ まあ、それで船長が元気になっただんならいいんじゃないか」

「それはそうなんだが」

口籠った航海士を見ながら『髭の三日月』はニヤニヤした。

「何だ怖いのかよ、おまえさん。大丈夫だよ。船長の奥さんは例え幽霊になっただとしても他人に酷いことなんかできる人じゃないよ」

「そっくだよなあ」

ホッとしたように頷いたアレンは船長の立っている船尾楼を見上げた。

その朝、船長は長い間閉じ籠っていた船室を出て、数週間ぶりに甲板に立ったのだった。

相変わらず顔色は悪かったが、その表情は昨日の雨が嘘みたいに晴れた空のように明るくて、『ラ・ソリテア号』の乗組員達は大層驚いたのだった。

やっと奥さんのことを諦めたのかと思ったのだが、そうではなかった。

自責の念に駆られて苦しむ男の許に天使の姿をした奥さんの霊が現れたらしい。

自暴自棄になっている男を戒め、これからまっとうな人生を送ることを約束させたのだそうだ。

それで船長は生き方を改め、奥さんだけを一生愛し続ける決心をしたと言ったが、本当にこれで良かったのだろうか？

アレンは首を傾げた。

船長のように若くて丈夫な男が、坊さんのような暮らしをするのは不自然だぞ。

『ラテディム海のオーガ』が修道士だと？

いやいや、それは似合わない過ぎるだろう。

けれども、そのうち船長はこの船を降りて修道院にでも入ってしまうのではないか？

それともイエズス会の宣教師にでもなつて野蛮人の住む国にでも行くのだろうか？

これじゃあ、いつかは奥さんの幽霊が禁じたから、もう戦わないな
どと言いだしかねないぞ。

あんなに豪傑で愉快的な男だったのに寂しいじゃないか。

縄を結びつけた桶で海水を汲んで黒く焦げ付いた鍋を洗っていた工
ヴァは、額の汗を袖で拭いながら顔を上げた。

少し離れた所にこちらに背を向けて座り食事をしているがっしりと
した男の姿が目に入り嬉しそうな顔をする。

額の怪我は大したことがなかったようね。

船室にばかり閉じ籠っていたら体に悪いと思っていたから外に出て
きてくれて良かったわ。

ちゃんと食べてくれているようだし……

そう思ってから気がついた。

私ったらあの人のことをまるで家族のように心配しているんだわ。

家族……

お父さん、お元気かしら？

やっぱりティアベに着いたらそつと様子を見に行ってみよう。

エヴァはきれいになった鍋を乾かす為に逆さにして置くと、両手を空に上げて痛む腰を伸ばした。

休憩時間だわ！！

船の中でハンモックに寝ても良いのだが、それよりも太陽の光が暖かい甲板で仕事をする男達を眺めていたかった。

エヴァは皆の邪魔にならないように影になっている隅の方に行くと、麻の袋を敷いてその上に横たわった。

大層疲れて眠たいのだが、航海士と話している背の高い男が気になる。仕方がない。

そして昨日のことを思い出しながら小さな溜息を吐いた。

私はあの人を憎むことはできなかった。

あんなに後悔している様子を見て、直ぐ許す気持ちになってしまったわ。

あの方は私を想っていると言ってくれた。

アルテュスの言葉を思い出し頬を染める。

信じてもいいのだろうか？

一度捨てられた悲しみは純真な心を臆病にしていた。

愛しい人をもう一度信じたいという気持ちと共に、苛められた子猫のように二度と痛い思いをしたくないという気持ちを拭い去れないのだ。

それに私が死んでしまったと思っっているあの人は、いつまで私のことを好きでいてくれるのだろうか？

この船の人は皆、彼に早く新しい女の人を見つけてあげたいようだ。

直ぐにでもアルテュスの前に姿を現して全てを話してしまいたい衝動を抑えて、エヴァは寝返りを打つと腕で目を隠した。

私は自分の決めたことをやるしかないんだわ。

全てが終わった時、もし船長さんが再婚していたりしたら、私達は別れる運命だったというだけのことよ。

だけどここの船の上にいる間だけは……

エヴァは両手で目を擦ると、雲ひとつない明るい夏の空を見上げた。

船長と航海士の給仕は台所の小僧がすることになっている。

幸いなことにもう一人の小僧がその権利を絶対エヴァに譲ろうとしなかった為、同じ船の上においてもアルテュスと顔を合わす機会は訪れなかった。

それでもある日、食事の時間に船長が自ら台所の方に歩み寄ってきたことがあった。

どうやら『悪酔いブイヨン』に話したかっただけのようだが、近くで鍋から料理をよそっていたエヴァは動揺し、丁度その時に船が波に揺すぶられて持っていた皿を中に入った塩漬の豚肉とキャベツごと床に落としてしまった。

船の上では食料は貴重品である。

食べ物を粗末にした不器用な小僧は飛んで来た料理長に背中を小突かれ、もう少しで鞭打ちされそうになってしまった。

恐怖に目を見開いたエヴァは、それでも興味ないようにその場を離れて行く船長を横目で窺いながら、か細い悲鳴を上げて謝った。

「ごめんなさい。ごめんなさい!!! もう二度とこぼしたりしません!!! 一週間ずっと食事抜きでいいから許してください!!!」

暫く相手の肩を掴んで睨みつけていた『悪酔いブイヨン』は、エヴァを乱暴に突き飛ばすと怒鳴った。

「おまえはそんなに華奢で小さいから今回は見逃してやる。だが、今度やったら鞭打つぞ!!!」

「はい、ありがとうございます!」

「おい、俺達は腹が減ってた。ごちやごちや話してないでさっさと仕事をしろよ!」

「そつだ、そつだ!!」

痺れを切らした男達に怒鳴られたエヴァは慌てて袖で涙を拭くと、しゅもじを手を取った。

エヴァが遠慮したので、ニールという名のもう一人の小僧は残った料理を全部自分の皿に入れてしまった。

だが大盛りの皿を料理長に見られた小僧はこっぴどく叱られた。

「何でおまえがこの船の誰よりも沢山食べなくちゃならないんだ？
！ マリオに半分分けてやれ！」

「でも料理長。こいつは罰も受けてないし、自分の食べる分を床に落としてしまったと思えば……」

「黙れ!!! いつからおまえは俺に意見できるような立場になったのだ？！ こいつの罰は俺が決める。おまえに関係ないんだ。いから半分分けてやれ」

ニールは不服そうに唇を尖らすと、自分の皿からエヴァの皿にキヤベツと豚肉を少しばかり移した。

何で料理長はこんな奴に優しくするんだ。

もし、僕がやったのだっいたら、躊躇なんかしないで鞭打ちの刑にしたらどうに。

不公平だ!!

エヴァは自分が船に乗ってから色々と教えてくれたニールが、それから素っ気無い態度を取るようになったことを残念に思っていた。

私は仕事中に余所見をしないように注意しなければならぬわ。

あの人の姿を探すのは休憩時間だけにしよう。

天気の良い日は甲板に残ることができるので嬉しかった。

遠くからでもアルテュスの姿が目に入ると胸がドキドキするのだ。

その日はあまり風がなく昼食の準備をしている時に料理長から、釣りをしている男達の所に行って魚が釣れたか見て来いと命じられた。エヴァは桶を手にとって船尾に向っていた。

帆を潜って左舷に行くと、釣りをしている男達に混じってアルテュスの横顔が見え、思わず足が竦んでしまった。

どうしよう？

料理長が魚を待っているから引き返すことはできない。

エヴァは胸を高鳴らせながら男達に近付いた。

船縁に身を乗り出し桶に水を汲みながら、息を潜め近くにいる男の気配を敏感に感じ取るうとする。

耳に入ったよく知っている男の声に思わず手が緩み桶が海に落ちて

しまい、危機一髪の所で垂れ下がった縄を捕まえた。

私ったら何をしているのかしら？

また失敗して叱られてしまうわ。

やっと水が溢れる桶を甲板に引き上げると、アルテュスから顔が見えない位置に回り、エヴァは男の一人に声をかけた。

「釣れましたか？」

男は振り向いてエヴァを見ると、頷いて自分の足元にあった桶からヌルヌルと光る魚を手掴みでエヴァの桶に入れてくれた。

魚をもらったのにあまり長居をしてはおかしいと思い、桶を持ち上げると台所の方に戻ろうとした。

だがその前に、手を伸ばせば届く距離にいる男の逞しい背中を絶るように見つめてしまう。

その視線を感じたのか男がこちらに振り向きそうになり、慌ててその場を離れた。

台所に向いながらエヴァは、気付かれなかったことに安堵しつつも少しばかりがっかりした気分を抑えられなかった。

暇潰しに歌おうよ

美しい娘の過去の恋

娘は水夫のなりをして

船に乗り込み職を得た……………

航洋船の船長は水夫を船首楼に呼び付けて

微笑みながらこう言った

おまえの優しい顔も

金の巻き毛も、たおやかな姿も

あの人を思い出させるのだ

遠い港に残してきた愛しい人を……………

からかうのは止してください

南の島で生まれ育ったこの私

私は孤児で両親も私に似ている姉妹もおりません

北海から来た船に乗り

貴方の国の港に着きました……………

並んで縄を引く男達の間力強い歌声が響き渡る。

唄のように船長が台所の小僧に気を留めることはなく、そのようにして時は過ぎていった。

台所の仕事にも慣れたエヴァは、酷い失敗をすることもなく毎日を過ごしていた。

朝、甲板に出ると一番に遠くからアルテユスの様子を確認することがいつの間にか日課となっていた。

起床の合図と共にハンモックから飛び降りて階段を駆け上がり、船室から出てくる船長の姿が見える位置に陣取って朝食のパンを切るのだ。

食事の時間はゆっくりと見ている暇はなかったが、日が暮れて船室に引き上げる前の一時、アルテユスが船縁に寄り掛かり海を眺めていることを知ったエヴァはその時間になると自分も甲板に出て胸を高鳴らせながら、暗い空に浮かび上がる黒い大きな影をじっと見つめるのだった。

季節は移り変わり、いつしか帆を靡かせる風も肌寒いものとなっていった。

その日は朝から辺りを包んでいた濃い霧の所為で、『ラ・ソリテア号』の乗組員達は近付く危険を前もって察知することができなかつ

た。

戦い慣れていない台所の小僧などは兵力どころか足手まといにしかならない。

ドーン !!!!!!!

凄まじい爆音に鼓膜がビリビリする。

敵の攻撃が始まったのだ。

顔を顰め額に汗を浮かばせながら一生懸命に綱を引く男達の頭上を敵の砲弾が唸りながら掠めて行く。

現在『ラ・ソリテア号』をまともに射撃できる敵船は一隻だけだが、残りの二隻も綱にかかった魚を逃がすまいと素早い動きを見せている。

敵の弾が命中するのは時間の問題だろう。

アルテュスの船ではその頃やっと装填が終わり、緊張した面持ちの砲手達は号令に従い次々と大砲の音を轟かせた。

「おい、あれに接近しろ。火縄銃の準備をしておけ」

正面から立ち向かったら絶対に勝てない。

だったら不意をつき、こちらから体当たりをして行って、逃げ道を作るしかないさ。

方角を変える度に帆船は激しく揺れ、耳を塞ぎたくなるような大砲の音が連続して響き渡り、エヴァは生きた心地がしなかった。

どうなってしまうのだろうか？

暗くて隣に座っているニールの顔はよく見えないが、震えているのだろう、カチカチと歯が鳴るのが聞こえる。

怖いけど。

ここに何も知らないでいる方がもっと怖いわ。

「上に行つて様子を見てくる」

エヴァがそう言つて立ち上がると、恐怖のあまり船酔いをしているのかニールは具合悪そうに頷いた。

甲板に繋がる階段を上つたエヴァはそろそろと外に顔を出した。

直ぐに目に入ったのは所々破れてぼろきれのように垂れ下がった帆と、斧で邪魔な縄や手摺りを壊しながら大砲を移動している男達である。

辺りには煙と火薬の臭いが漂っている。

船尾楼の方に向おうとするが、火縄銃を構えてマストの影に隠れている男に怒鳴られた。

「馬鹿野郎！！！！ そんな所でふらふらしていたら頭をぶち抜かれるぞ！！！！」

丁度その時、敵の砲弾がメインマストを掠めズタズタになった帆に火が燃え移った。

直ちに数人の男が水を汲んだ桶を担いで命がけでマストに登り、きな臭い煙を放つ帆に水をかけている。

幸いぼやで消し止められたが、敵に撃たれたらしい男が足場を失い甲板に転がり落ちてきた。

男は死んでしまったのか、変な具合に体を曲げたままびくともしない。

エヴァは青ざめて震えながら、唇を噛み締め四つん這いになって進んだ。

船長さんの許に行かなくちゃ……

彼が無事なことをこの目で確かめに行かなくてはならない。

勿論、恐怖を感じてはいた。

だがそれよりもアルテュスが危険な目に遭っている時に、自分がその場において役に立てるかも知れないということが嬉しかった。

船縁に寄り掛かり銃を構えたアルテュスは、険しい顔つきで近付いて来る敵船を睨みつけていた。

今すぐ敵の包囲を突破できなければ、『ラ・ソリテア号』は沈没してしまっだろう。

数週間前までは死んでもどうなっても構わないと思っていたのに、執拗に生命にしがみついている自分が不思議だった。

こんな所で死にたくない。

俺を信じてついて来てくれた仲間達を死なせたくない。

畜生！！！！

これでお終いか？

何とかならないのか？

……………生きて……………頭の中でエヴァの優しい声が聞こえた。

体に力が漲るのを感じる。

エヴァ、君に約束したようにこんな所で死んだりするものか。

傷付いた帆船は大きな曲線を描きながら敵の軍船に向かって針路を変更した。

「よし、全速前進だ！！！！」

『ラ・ソリテア号』は白い飛沫を上げ波を掻き分けてぐんぐんと相手に迫って行く。

敵の不審な行動に驚いた軍船も慌てて向きを変えようとするが、アルテュスは相手が躊躇したその一瞬を逃さずに叫んだ。

「撃て！！！！ 撃ちまくれ！！！！」

耳を劈くような爆発音が一斉に辺りに響き渡った。

その間も帆船は速度を上げ敵船に突っ込んで行くが、体勢を立て直した敵も負けじとばかりに反撃してくる。

弾丸を込める為に銃を下ろしたアルテュスは、その時、肩に焼けるような痛みと衝撃を食らって仰向けに倒れた。

「船長、船長！！！！」

周りの部下達が慌てて駆け寄って来た。

すかさず敵船から開の聲が上がる。

「大丈夫だ。掠っただけだ」

アルテュスは皆を安心させるようにそう言うと、船縁を掴んで体を起こそうとした。

エヴァは目の前に広がる悪夢のような光景を見つめて動けないでいた。

これが戦なんだ。

仲間が怪我をしても助けることもできずに戦い続けなければならぬ。

自分の身を守る為、まだ生きている仲間達を守る為に。

煙の中でアルテユスの姿をやっと見つけた途端、彼が撃たれて後ろに倒れるのを見たエヴァは放心したように立ち竦んだが、次の瞬間、死んだ兵の脇に転がっている火縄銃を手にしていた。

頭がカツと熱くなり、心臓がドキドキと高鳴って耳鳴りがする。

落ち着くのよ。

幸か不幸かその火縄銃は弾が込められ撃つばかりとなっていた。

船縁に駆け寄り銃を構えながらエヴァは祈りの言葉を口にしていった。

…………… お願いします。

一生のお願いです。

この船をお守りください。

…………… 船長さんを助けてください。

私が危険な目に遭った時、守ってくれたあの人を今度は私が助ける番だ。

騒がしい叫び声を上げる敵の兵達の表情もはつきりと分かる程、敵

船は至近距離にあった。

この距離では的外せないだろう。

周りの者の力を借りて立ち上がったアルテュスに狙いをつける男達を睨みつけ、エヴァは口を引き結び目を細めると引き金を引いた。

「撃て！！！！」

ほぼ同時に装填し終わった敵と味方両方の大砲が撃たれる。

火縄銃もパチパチと賑やかな音を立てる。

「やった！！！」

敵の弾を巧みにかわして、軍船の船腹に大きな穴を開けることに成功した船乗り達の間には歓声が響き渡る。

脱出成功か？

男達は信じられないという顔で、見る見るうちに遠ざかる敵船を見つめている。

エヴァは火縄銃を膝に乗せたまま甲板にぺたりと座り込んでいた。

アルテュスの方に駆け寄りたいたい気持ちがあるのだが、膝が震えて立ち上がることもできなかった。

彼が撃たれた時、もう少しで取り乱して泣き叫びそうになってしまった。

大声で自分の正体をばらしてしまいそうになってしまった。

でも、そうする前に何故か銃を掴んでしまったのだ。

敵の指揮官と見える男に命中したかどうかは分からない。

あの人の受けた傷と同じく肩を狙ったのだけだ。

エヴァは心配そうな瞳でアルテユスの赤く染まったシャツを見つめる。

普通に立って話しているけど、手当てをしなくて大丈夫なのかしら？

「おい、もっと早く進めないのか？」

イライラと歩き回りながらアルテユスが航海士に怒鳴った。

まだ逃げ切れた訳ではなかった。

残った二隻の船が憎い敵を逃がすまいとばかり迫って来ている。

メインセイルがかなりの被害を受けた『ラ・ソリテア号』は、いつもの速度で進むことができないのだ。

こんなにもたもたと漂っていたら直ぐに追いつかれてしまうぞ！！

そして、前方に振り向いたアルテユスは、顔を強張らせ失意に打ち

のめされた呻き声を上げた。

『ラ・ソリテア号』の乗組員達は青ざめた顔で、風に吹かれて流れる霧の中から新たに姿を現した黒々とした勇ましい艦隊を凝視していた。

エヴァは当惑した顔で目の前の二人の男を見比べていた。

『ラ・ソリテア号』の甲板には左舷にも右舷にも、ずらりと乗組員一同、航海士から雑用係の小僧までが並んでいる。

皆、疲れている所為か放心した笑顔で向かい合う二人を見つめていた。

そりゃ、二人共船乗りなんだから海の上では出会うこともあるだろうけど、さっきは驚いて思わず声を上げそうになってしまったわ。

丁度、私が船長さんの船に乗っている時にこんなに良い具合に現れるなんて……

複雑な気持ちだった。

一方は2度も自分の命を救ってくれた男。

自分を憐れんで家に連れて帰り家族にまでしようとしてくれた、もう二度と会えないと思っていた男だ。

そして、もう一方は後悔しているとはいえ自分を海に捨てた男。

だが、彼は自分の夫であり、愛している男でもある。

現在、自分は一人の許から逃げ出し、もう一人からは身を隠しているのである。

中佐様にはとてもとても感謝しているけど、彼の希望に応える事はできない。

二人を見てはつきりと悟ってしまったわ。

中佐様はとてもご立派で、船長さんはまるで盗賊のように見えるけれど。

どうか中佐様が私が出て行ったことを知ってあまり傷付きませぬように……

彼には幸せになって欲しいと心から思う。

あんな目に遭っても私の気持ちは変らなかった。

あの夜、船長さんの気持ちが聞けてとても嬉しかった。

夫だからというのもあるけれど、私はこの人が好きなんだ。

彼を見つめていると胸が熱くなり体が火照ってくるのだ。

彼に抱き締められたり、触れられたりしたい……

エヴァはアルテュスの逞しい体軀を見つめながら、頭に浮かんだはしたない思いに顔を赤らめそつと溜息を吐いた。

嫌だわ、私ったらこんな所で何を考えているんだろう？

その時、エヴァは妙なことに気がついた。

どうして二人はまるで掴み合いでもしかねないような顔で睨み合っているのかしら？

戦いは呆気なく終わった。

急に目の前に現れたG国艦隊の勇ましい姿に恐れ戦いた敵軍は、沈没しかけている一隻を見捨てて慌てて逃げ出そうとしたのだった。

加勢を受けた私掠船は血気を取り戻し、艦隊と一緒に逃げる敵船を追い詰め降伏させた。

そして今、艦隊の隊長を兼ねる海軍中佐のルイス・ド・クレリゴーが私掠船『ラ・ソリテア号』を訪問しているのである。

中佐は頭には羽のついた兜を被り、隙のないぴったりとした軍服を着て胸は甲冑で覆っている。

後ろにはやはり軍服を着た兵が槍を握り整列していた。

それに対して、私掠船の船長は額に垂れ下がるぼさぼさの髪に血に汚れて破れたシャツのままだった。

両側には同じく薄汚れたなりをして疲れ切った顔をした乗組員達。

アルテュスは肩を怒らすと渋々口を開いた。

「あんたに借りを作るのは実に不本意なんだが、この際仕方がない。

あの時、現れたのがあんたの率いる艦隊でなかったら我々は今頃海の底だったろうからな」

そう言つてルイスに向つて頷く程度に頭を下げた。

「助けてくれた礼を言つぞ」

中佐は眉を潜めて頭を振つた。

「人に礼を言つ時ぐらいは、その偉そうな態度を改めたらどうだ？」

そして、アルテュスが肩を竦めるのを睨みつけながら続けた。

「人の迷惑を考えないのか？ 私達は大事な任務の途中なんだ。君達を助けたお陰でかなり遅れてしまった。敵と鬼ごっこもいいが、勝ち目のない戦いに目を瞑つて飛び込んで行くのは愚か者だけだろう？」

「我が国の海軍が腰抜け野郎ばかりだから、こつやつてのさばつてくる敵を俺達が退治しなけりゃならないんだろうが」

相手の人を馬鹿にするような眼差しに、ルイスは顔を引き攣らせ、両の拳をきつく握り締めて掴みかかりそうになるのを我慢しているように見えた。

「アレン、うちの船長はあの軍人さんのことを知っているのか？」

同僚の航海士の問いにアレンは肩を竦めた。

「詳しいことは知らないが、船長は以前海軍に勤めていたからな。知り合いだったとしても不思議じゃないよ」

メレー又は考え込むようにした。

「仲が悪そうだったな。ド・クレリゴー中佐は若く見えるが、もしかして前に船長が言ってた口煩い上官というのはあの人のことだったのではないか？」

「うちの船長のことだから多分海軍でも何か問題を起こして追い出されたのかも知れないな」

「船長がギースの軍港には絶対近付きたくないと言っていたのと同係があるのかもな」

年若い航海士の言葉にアレンはニヤニヤした。

「中佐の顔を見たか？ 多分と言うかあれは絶対女絡みだよなあ」
海軍時代のことは知らないが、アルテュスが私掠船の船長になってからはずっと一緒だったアレンは彼の女性遍歴を知っている。

夫のいる女に手を出して殺されそうになったこともあるのだ。

結婚するまではまるで別人だったからなあ。

その頃、部下達がそんな噂をしていることを知らないアルテュスは、軍船『セレスタ号』の医務室にいた。

『ラ・ソリテア号』にも一応医師と言つか簡単な手当のできる者は乗っているのだが、軍船の方が備品も整っているし病室もあったので、船医の好意に甘えて利用させてもらうことにしたのだった。

敵船との戦いで傷付いた乗組員の治療がやっと終わり、船医のマテイアス・ダノはアルテュスに近づくように手招きした。

髭面の船医は感心したように頷きながら肩の傷口を洗っている。

「おまえさんは本当に運が良いんだな。弾が半インチでもずれていたら今頃はあの世だぞ」

出血は多かったが、幸いなことに傷は表面的なものだった。

化膿さえしなければ二週間ほどで癒えるだろう。

「おまえさんのことをよく覚えていぞ。俺の所に来ても絶対に泣かない子供だったからな」

手当てが終わったマテイアスは血に汚れたシャツを羽織ながら立ち上がった大男を見上げて目を細めた。

「大きくなつたな」

後片付けをしている助手の少年がチラッとアルテュスの方を見た。

アルテュスはフンとそっぽを向いたが、その顔は照れくさそうに少しばかり赤らんでいるようだった。

ルイスは会議室の椅子にそっくり返って脚をテーブルの上に投げ出し、低い天井を見上げながら考えていた。

甲冑を脱ぎ軍服の上着を椅子の背に引つ掛け、シャツの胸元を肌蹴てこの男にしては珍しく寛いだ姿だ。

まさかこんな所であいつに会うとは思わなかった。

俺の自信を揺がす唯一の存在である二度と会いたくなかった男。

いつまで経っても忘れることのできない苦々しい思い出……

絶対に人には知られたくない俺の過去だ。

だが、海賊紛いのことをしている嫌な奴でも、我が国の船が敵に襲われているのを見殺しにはできなかった。

あんなちっぽけな船で敵の艦隊に挑むなど気違い沙汰だ。

ルイスは、自分の中に彼らの勇氣に感服する気持ちがあるのを認めたくはなかった。

相変わらず生意気な奴だ。

ルイスは形の良い眉を寄せ不愉快そうな顔で暗い天井を睨んだ。

俺は奴を憎んでいるんだろうか？

何年も前のことだと言つのに……

やがて男は決心したようにパンと膝を叩くと、大声で部下を呼びつけ、走り寄ってきた見習い水夫に指示を与えた。

いつまでも引き摺っている訳にはいかないだろう。

この辺で決着をつけてやろうじゃないか。

真夜中に軍船『セレスタ号』に呼ばれたアルテュスは訝しげな顔で、制服を着た少年の後ろを歩いていった。

汚れたシャツを着替え上着は着ていないが腰には剣を帯びている。

まるで士官に叱られるに行くような気分になっている自分に気がつき苦笑いを浮かべた。

カンテラを掲げた少年はある部屋の前で立ち止まり拳で扉を叩いた。

「中佐殿。『ラ・ソリテア号』の船長を連れて来ました」

アルテュスが薄暗い部屋の中に入ると、見習い水夫は敬礼をして出て行った。

シャツのボタンを首元まで閉じて制服の上着を着込んだ男は、扉の方を見ると腰掛けていた椅子から立ち上がった。

思わず敬礼をしそうになったアルテュスは、ぎゅっと拳を握り締め軽く頷くと、相手が話し出すのを待った。

「……」

「……」

気まずそうに咳払いをしたルイスは元部下に身振りで座るようと近くの椅子を示す。

そして、やっと口を開いた。

「……怪我は大したことがなかったそうだな」

「俺の体が心配でこんな時間に呼びつけたのか？」

アルテユスのからかうような口調にムツとした男は思わず硬い声で答えた。

「既に私の部下でもない無礼な海賊など、どうなっても構わない」
ガタンと音を立てて私掠船の船長が立ち上がる。

倒された椅子が騒がしい音を立てるが、二人共そちらを見ようともしなかった。

「海賊だと？ 無礼なのはどっちだ？！ 喧嘩をする為に呼んだのかよ！！！」

「おい、怒鳴るな。耳が痛い」

「注意しろよ。俺はもうあなたの部下じゃない。大人しく殴られて

なんかやらないからな！」

二人の男は燃えるような怒気を帯びた眼差しで睨み合った。

丁度その時、ドンドンと扉を叩いて答えも待たずに会議室に船医のマティアスが入って来た。

脇に酒瓶と片手にコップを三つ挟んでいる。

「客を呼んで何も飲み物を出さない訳にはいかないだろう」

二人の様子に気がつかない風を装ってコップに酒を注ぎながら尋ねた。

「それで、仲良く昔話でもしていたのか？」

「私はこの男に話があるんだ。席を外してもらいたい」

ルイスはイライラしたようにそう言ったが、髭面の男は恍けた顔で笑ってアルテュスに酒を満たしたコップを差し出した。

「俺には気にせず話してくれて構わんよ」

アルテュスは椅子に座り直すと面白そうにマティアスを見ながら口を開いた。

「こうしていると少しばかり懐かしいような気持ちになる」

「そうだろう。おまえさんが被害妄想になっていただけで、皆別におまえさんを嫌っていた訳じゃないさ。この男だつて自分の部下を本当は大切に思っていた筈だよ」

肩を竦めるアルテュスを睨みつけてルイスが言った。

「君が故意に人を怒らせるようなことをするから悪いのだ。いつもいつもまるで人を試すように。ミレナのことだつて……」

ルイスが思ったようにアルテュスは笑つたりしなかった。

その代わり小さな溜息を吐くと言った。

「そうだな。今はあなたの気持ちが分かるよ。仮に女の方が気を変えたんだとしても、俺はあなたにあんなことをしてはいけなかったんだ」

そして椅子から立ち上がるとルイスに手を差し出した。

「あなたが俺にとってよい上司ではなかったように、俺もよい部下ではなかったな」

中佐は元部下の手を握りながら言った。

「もう過去のことだ」

傍からマティアスが口を挟む。

「そうそう、今は中佐殿には陸で帰りを待っている可憐な婚約者がいるしな」

「ふーん、結婚するのか？」

「ああ、そのつもりだ」

相手を憎む気持ちはいつの間にか胸の中から消えていた。

……お幸せに……

初めて本心からその言葉を口にしながらもアルテュスは知らなかった。

自分の所為でまた中佐が幸せになれないことを……

それからは何事もなく時は流れ、やがてまた雪の降る季節が訪れた。

ある日、料理長にクリスマスの一週間前にはティアベに着くと告げられたエヴァは、ホッとすると同時に寂しい気持ちになった。

海では怖ろしい目にも遭ったし、船の上の生活はとても不便だと思
う。

それに、自分が女だということを隠し続けるのにも苦労した。

塩を含んだ風の所為で唇はひび割れ顔と手は日に焼け、髪は梳かす
こともできずこんがらがって多分切らなければならぬだろう。

服も垢と塩でごわごわになっている。

それでも、とても楽しかったわ。

船長に近づく機会は殆どなかったので正体がばれる心配はなかった
が、今となってはそれも少しばかり残念に思えてしまう。

もしかしたら二度と会えないかも知れないのだ。

本当に何も知らせずに船を降りてしまっていていいのだろうか？

後になって自分が後悔するようなことにはならないのか？

エヴァは頭を振ると両手で頬をパシンと叩いた。

ここまで来てこんなに気持ちがふらふらするのは、私が弱い証拠だわ。

これからすることは必要なことだ。

このまま男の服を脱いで船長さんの傍に残って幸せになったりしたら、それこそ後で後悔するに決まっているわ。

数日後の夕方、『ラ・ソリテア号』は港の入り口に建っている二つの塔の間を通っていた。

空はいまにも雪が降り出しそくに低く灰色だ。

エヴァは皆の邪魔にならないように甲板の隅で船縁に？まりながら、潤んだ瞳で目の前に聳える古びた建物を見上げていた。

風と塩で表面の石は白く変色し下の方には貝や海草がこびり付いている。

だが、何と大きくて力強いのだろう。

エヴァが生まれる前からずっとティアベの町はこの二つの塔に守られてきたのだ。

……ただいま戻りました

自分の生まれ育ったこの町にもう一度戻れたことは奇跡に近いので

はないかと思つたエヴァは、跪いて神に感謝の祈りを捧げた。

長い長い旅からやっと暖かい我が家へ帰つて来た気がする。

エヴァは凍えた指先に息を吹きかけながら微笑を浮かべた。

私つたらまるで子供みたいに興奮しているわ。

懐かしいこの町に戻れたことがとても嬉しかった。

帆船は静かに港に滑り込み、既に大勢の人達が集まっている波止場に錨を下ろした。

作業を終えた乗組員達は給料をもらう為、甲板に一列に並び始めた。

後ろの方で背伸びをしながらエヴァは、会計係の机の横に立っているのは誰なのか確認しようとしていた。

だがどうやら若い方の航海士のようなようだった。

船を降りる前にもう一度船長さんの姿を見たいけど、いったいどこにいるのかしら？

既に自分の分の金を懐にした『悪酔いブイヨン』がエヴァの傍にやつて来た。

自分の荷物と一緒にしまつてあつたエヴァの大きな包みを抱えている。

「ほら、おまえさんの荷物だ。達者でな」

そしてエヴァの手を熊のように大きな手で握って付け加えた。

「もし気が変わったらこの船に戻って来るといい。俺達は正月の3日に出港する予定だから」

エヴァは泣き出しそうになって頷いた。

「ありがとうございます。ジャックさんもお元気で」

『悪酔いブイヨン』もつられたように太い腕でごしごしと目を擦ると、もう一度困ったことがあったら自分達の泊まっている港町の宿屋に来るようにと行って去って行った。

さて、これからどうしようかしら？

今日は泊まる所を探してお父さんの様子を見に行くのは明日にした方がよさそうだわ。

給料はもらえないものと思っていたが、挨拶をして船を降りようとしたエヴァをメレー又は呼び止め、金貨一枚をくれたのである。

ルイスの母親からもらった金もあるので、急に自分がとても金持ちになったような気がした。

そして今、エヴァは重たい布の包みを抱えて懐かしい道を歩いていった。

港町の宿駅に泊まるつもりだったが、よく知っている景色を眺めているうちに堪らなくなり、外からだけでも見に行こうと自分の家に向って歩き出した。

途中で荷物だけでも宿屋に置いてくればよかったと後悔しながら、エヴァは息を切らしつつ凍った道を進んでいた。

毎日仕事を探しに通っていた道である。

近くには、春にはタンポポの若い芽や良い香りのするスミレを探したり、夏には野苺を摘んだりシロツメクサで冠を編んだりした野原があり、見慣れた自然の生垣や今は枯れ枝を北風に晒している大きな櫛の木があった。

子供の頃は母に連れられて近くの農家に山羊の乳や卵を買いに行ったり、父のゴンヴァルと一緒に港町に出かける時、父の手を放して転んで膝を擦り剥いたこともある。

いつしか走るようにして道を急いでいたエヴァであるが、自分の家のある通りに出ると急に戸惑ったように歩みを止めた。

父に姿を見られてはならなかった。

どうしてこんな所に一人にいるのかと聞かれるだろうし、本当のこととは絶対に知らせる訳にはいかない。

しかし、この寒い中いつまでも外に立っていても何も分からないだろう。

お父さんは冬になると具合が悪くなるから。

少し前から小麦粉のようにサラサラとした雪が降り出し、辺りには人っ子一人いない。

窓から覗いてみたら何か分かるかしら？

エヴァはゆっくりと辺りを見回しながら灯りの漏れている小さな窓に一足一足近付いて行った。

ドンッ！！！

急に家の扉が開き飛び出してきた男に突き飛ばされたエヴァは尻餅をついた。

痛む尻を擦りながらやっとのこと立ち上がって振り返ると、背の高い男はそちらを見ることもなく何やら喚きながら角を曲がって行ってしまった。

どうして？

エヴァは男が消えた街角を見つめながら不安そうな顔をする。

あれは船長さんだった。

顔は見なかったけれどあの姿は間違えっこない。

どうして船長さんは私の家に行ったの？

何であんなに慌てて走り去って行ったのだろうか？

寒気が足元から這い上がってきてエヴァは思わず身震いをした。

知らないままではいられなかった。

急いで家に近付くと扉を拳で叩く。

だが答えはなかった。

ずっと叩き続けていると、誰かがぶつくさ言いながら近付いて来る足音が聞こえた。

「今度はいったい何だ？」

扉を開いた不機嫌そうな中年の男が、驚きで口も利けないエヴァを睨みながら言った。

「ニコラス、なんだい物乞いかい？　うちは施しができるような身分じゃないよ。早く追っ払っちまっておくれ！」

後ろから女の怒鳴り声がする。

扉を閉めそうになった男にエヴァが慌てて尋ねた。

「ゴンヴァルはいますか？」

「ゴンヴァル？　知らないよ。ここは俺達の家だ」

「いつからここに住んでいるのですか？　お願いします、教えてくださいだ

さい！ 前にここに住んでいた代書人はどこに行つたのですか？」

エヴァの必死な声に男は玄関に入って扉を閉めるように言った。

「こんな所で話していたら凍えちまう」

そして台所から出てきた女と二人でエヴァのことをジロジロと見た。

「さっきの男も代書人がどうのこうのと言っていたが。一月ほど前に、ここに住んでいた爺さんが死んで後家さんも出て行ってしまったので、俺達がこの家を安く買ったのさ。あんたは身内かね？」

エヴァは青ざめて唇を振るわせた。

「父です」

「……それは残念だったね」

二人は決まり悪そうな顔になり、エヴァに台所に入るように勧めた。

「私達は良く知らないのだよ。ここに来た時には既に葬式も終わって家具も運び出された後だったからね。暖かい飲み物をどうだい？」

「いえ、ありがとうございます。お邪魔しました」

エヴァは礼を言うと、急いで家を出た。

お父さん、お父さん……！！！！

エヴァは薄っすらと雪の積もった道をとぼとぼと歩いてた。

辺りは既に薄暗くなってきている。

冷えた頬に熱い涙がぼろぼろと零れた。

もう少し前にティアベに来ていたら顔を見ることができたかも知れなかったのに。

そう思うと残念で堪らない。

喉に何か塊がつかえたように苦しくエヴァは呻き声を上げながら空を見上げた。

暗い空から音もなく次から次へと雪片が降ってくる。

白い花びらはエヴァの睫や髪にとまり冷たい雫となった。

暫く泣いていたエヴァは袖で涙を拭くと、きりつと唇を引き締めた。

こんな私を見たらお父さんはきつと心配するだろう。

私は天涯孤独の身になってしまった。

だから強くならなくてはいけないわ。

お父さんもお母さん達と一緒に天国から私のことを見守ってくれて
いるだろうから……

そう思うと、足元に降ろしていた荷物を背中に担ぎ直し、しっかりとした足取りで歩き出した。

「エヴァちゃん?!」

驚愕の叫び声を上げたマリヴオンは、暫くエヴァが幽霊ではないのか疑っている様子だったが、ちゃんと生きていると分かると甲斐甲斐しく世話を焼き始めた。

「まあ、何てなりをしているんだい？　こんなに雪に濡れて冷たくなって！　服だってボロボロじゃないか」

直ぐに湯を沸かし風呂の準備を始めた女を感謝の眼差しで見ながら、エヴァは簡単に事情を説明した。

「エヴァちゃん、入ってもいいかい？」

布を敷いて湯を張った狭い桶の中で冷えた手足を温めていると、着替えを抱えたマリヴオンが入って来た。

久し振りに風呂に入っさっぱりしたエヴァは、マリヴオンの服を借りて女の姿に戻った。

「ありがとう、マリヴオン小母さん」

「お父さんは本当に残念だったよ。あんたが生きていると分かっていたらもう少し……」

マリヴオンは頭を振ると涙を浮かべているエヴァの肩を抱き寄せた。女の体は温かく懐かしいラベンダーの香りがした。

エヴァは堪らなくなり女の肩に額を押し付けて泣き出した。

マリヴオンはエヴァが泣き止むまでずっと黙って優しく背中を叩いてくれた。

「……どうして私が死んでしまったと思っていたの？」

「丁度一年前にあなたの旦那さんが訪ねて来てね。あんたがお産で亡くなったと教えてくれたそうだよ」

その時、隣の部屋からマリヴオンを呼ぶしわがれた声が聞こえてきた。

「うちの役立たずの老いぼれはまだ生きていると言っつのに」

そう呟いたマリヴオンにエヴァは言った。

「私はもう大丈夫だから。ペレック爺さんの所に行つてあげて」

マリヴオンが部屋を出て行くと、エヴァはそつと溜息を吐いた。

優しい小母さんが心配するから、もう泣いてはいけないわ。

でも、何故船長さんはそんなことをお父さんに言ったの？

私が死んだと思ったから、お父さんは悲しさのあまり病気が重くな

ってしまったのじゃないかしら？

その時、初めてエヴァの胸の中に夫を恨む気持ちが生まれたのだ
た。

エヴァはマリヴオンに教えてもらい、ずっと家で父の世話をしていた最期を看取った女に会いに行った。

僅かな蓄えは全てゴンヴァルの薬代に使ってしまい収入もない女は、裕福な兄の許に身を寄せたのだった。

その日は雪も降っておらず時折太陽さえその光を雲の間から除かせていたのだが、気温がぐつと下り道は積もった雪が凍り危険だった。

エヴァはマリヴオンの雪靴と外套を借りて、辺りにザクザクと足音を響かせながら田舎の道を歩いていた。

日の出と共にマリヴオンの家を出たので、向こうに長居しなければ日の暮れないうちに戻れる筈だった。

瞳には悲しみの影が見えたが、頬を真っ赤に染め額に汗を浮かべてエヴァは元気に凍った道を歩いていた。

ホツホツと吐く空気が白い煙となって眩しく澄んだ空気に消えていく。

道端の木々の枝からドサリと雪の塊が落ちる音と時折遠くに聞こえるカラスの声の他に音はなく辺りは静かだった。

女の兄はティアベから7、8マイル離れた村に農家を持っていた。

昼は立ち止まらずにマリヴオンの持たせてくれたパンとチーズを齧

りながら歩き続けたお陰で、村に入ったのは午後の早い時間だった。女とその家族は驚いたようだったが、愛想よくエヴァを迎えてくれた。

壁と床にタイルを敷き詰めて大きな暖炉のある暖かい台所にエヴァは腰を落ち着かせて、女の話聞いていた。

マリアという名のその女は黒い服を身に纏い家の中でも頭を布で包んでいる。

農家の主人は近くの村に春に蒔く野菜の種を買い付けに行っており留守だったが、その妻と子供達は台所の床にしなやかな柳の枝を積み上げ籠を編んでいた。

マリアは申し訳なさそうに何もエヴァに形見として残せる物がないことを謝った。

「痛みを和らげるとても良い薬が見つかったのですが、目玉が飛び出るほど高くて、お嬢さんの旦那様に頂いたお金も全て薬代に消えてしまいました」

エヴァは唇をぎゅっと噛み締め頭を振った。

「……最期は眠るように安らかでした。もうすぐ妻と子供達に会えると喜んでいましたから」

女は燃えさかる暖炉の火を見つめながら病人の死を語った後、エヴァの方を見て慰めるように言った。

「去年の冬から体力もなくなり殆ど寝たきりでしたからね。お嬢さんのことがなくても長くはなかったと思いますよ」

「でも……」

女は思い出すように梁が剥き出しになっている天井を見上げた。

「あの日は丁度、私が飲み物を持って部屋に戻った時、二人共とても深刻な表情で……聞こえてしまったんですよ。エヴァさんの旦那様はベッド脇に跪いていて、大事なお嬢さんを殺してしまつて申し訳ないとゴンヴァルに謝っていました。どうやって亡くなったとは言わなかったんですよ。でもあの人は妻もそうだったように多分お産で死んだのだらうと」

エヴァはそつと手の甲で涙を掃った。

では船長さんは嘘を吐いた訳ではないのだわ。

あの人のことだから、多分毎年クリスマスには会いに行くという約束を守るうとしてティアベに向つたのだらう。

エヴァは立ち上がると女に頭を下げた。

「ありがとうございます。父の傍に貴方がいてくれて本当によかった」

そして、端切れに包んだ金貨一枚を差し出した。

「この位しかお礼ができないけれど。どうぞ受け取ってください」

初めは遠慮していた女も兄の家で肩身が狭い思いをしているのだろ
う、最後には受け取ってくれた。

エヴァは暇を告げると農家を後にした。

辺りは赤みがかった金色の光に染まり、氷柱の下がる枯れ枝はキラ
キラと輝いている。

胸の中には黒ずんだ染みのように寂しく悲しい気持ちは残っていた
が、来た時よりは安らかな気分だった。

神様、感謝します。

お父さんが亡くなる時に一人ではなかったことを。

そして、あまり苦しまずに天国に召されたことを……

さあ、日が暮れる前にティアベに戻らなくてはならないわ。

マリヴオン小母さんは本当に親切な人だ。

年が明けるまでの間、彼女の申し出をありがたく受け入れてティア
ベに滞在するつもりだった。

私は家事を手伝うことができるし、ペレック爺さんの相手をするこ
とができる。

できるだけ小母さんの役に立ちたいわ。

それでも迷惑をかけてしまっただろうけど。

クリスマスの祭日にはマリヴォンとブドック夫婦の子供達が食事に
来る予定だったのである。

長男は貿易商の父親の仕事を手伝っており、実家の近くに家を建て
妻と2歳になる娘と一緒に暮らしていた。

そして次男はトリポルトの神学校に在籍しており、近いうちにある
村の司祭になることが決まっていた。

子供の頃何度か遊んでもらった記憶があるが、もう何年もあってい
ない。

エヴァは遠慮してその間は宿屋に泊まると言ったのだが、マリヴォ
ンが許す筈はなく、皆と一緒にクリスマスを祝うことになった。

「お父さんが亡くなったばかりでお祝いするような気分じゃないだ
ろうけどね。忙しくしていれば一人で寂しく悲しみに閉じ籠るよう
なこともないだろうから」

色々考えながら歩いているうちに辺りは薄暗くなってくる。

でも、この丘を越えればティアベまでもうすぐだわ。

エヴァは額の汗を拭くと手にした杖を突きながら坂を登り始めた。

寒さの所為かずっと人の姿を目にしていなかったが、怖くはなかつ
た。

空の上からお父さんが見守ってくれている気がするから……

翌日からエヴァは台所で祭りの料理を作るマリヴオンを手伝った。

手を忙しく動かしていれば余計なことを考えなくて済む。

「ほら、エヴァちゃん。ちょっと掻き混ぜておくれ」

袖を捲くつたエヴァが、木のしゃもじでこつてりとしたスープを混ぜると、白い湯気と一緒に甘い栗の匂いが辺りに漂った。

マリヴオンは丸くて大きなパンを薄切りにして籠に盛っている。

雉のパテは既に焼き上がっているし、詰め物をした鶯鳥は後は竈に入れるばかりである。

素焼きの大きな皿には毎年クリスマスの時期に作られる生姜や肉桂などを利かせ砂糖をまぶした様々な形をした焼き菓子が山盛りだ。

そして、マリヴオンの夫が仕事から持って帰って来た蜂蜜をたつぷりと使った南国の甘い菓子や、炒って香辛料をまぶした木の実はある。

日が暮れて客が着き、家の中は一斉に賑やかになった。

長男の妻は次の子を妊娠中で大きな腹を抱えていたが、バターと甘酸っぱい香りのする林檎のタルトを焼いてきた。

幼い娘は涎でべとべとになった焼き菓子を両手に握り、父親が家から持ってきた木の柵の囲いの中に座ってご機嫌だ。

広間は薄暗いが暖炉には赤々と火が燃え、テーブルの上には高価な蝋燭が何本も燭台に立ててある。

皆がテーブルにつくと、神学校に行っている次男が立ち上がって感謝の祈りを捧げた。

来年からある村の教会を受け持つ彼にとって家族でクリスマスを祝える最後の年となる。

アルテュスの家とは違って食事中には皆盛んに話した。

「王様の悪口を言ったりするんじゃないよ」

政治の話をしていた男達に顔を顰めてマリヴオンが言った。

「僕が言っているのではなくて、最近そういう内容の風刺画が首都ではばら撒かれているそうなんだ」

「確かに、二年以上もかかった視察の旅を終えて二月もしない内にいとも簡単に講和条約は破られ、数百人も死者を出しているんだからなあ。色々言われても仕方がないだろう」

「物騒な世の中になったもんだよ。ここら辺はまだ安全と言えるけど、いつ飛び火するか分からない」

エヴァは隣に座った男にそっと尋ねた。

「怖ろしくはないの？」

男は柔和な眼差しで、真面目な顔をして自分を見つめている娘に頷くと答えた。

「怖ろしくはないさ。もし何かあったとしてもそれが神の思し召しなのだから」

食事が終わると皆揃って厚着をして、雪の道を歩いて町の教会に向った。

教会には小さな町には珍しく立派なキリスト降誕の情景の模型があり、エヴァは子供の頃からクリスマスマスの礼拝に行くのが楽しみだったのだ。

色をつけた木彫りの人形は皆それぞれ表情豊かで、その中でも幼子を見守る聖母の優しい顔がとても好きだった。

年が替わり一週間が過ぎた頃、エヴァは友人一家に別れを告げた。

マリヴォンは心配して自分の夫について行かせようとしたが、エヴァは笑って断った。

「大丈夫よ、マリヴォン小母さん。男の子の格好して乗合馬車で行くから」

ありがとうと言って少しばかり皺のよった丸い頬に接吻すると、女

は顔をくしゃくしゃにして泣き出した。

「エヴァちゃん。お父さんはもういなくてもこの町には私達がいることを忘れないでおくれ。私はあんたのことを娘のように思っているんだから」

休み明けのこともあり馬車はかなり混んでいた。

家鴨を入れた籠を抱えた農婦と大きな麻の袋をいくつも担ぎこんだ商人らしい男が口論を始め、狭い馬車の中は女の金切り声とその声に驚いた家鴨の鳴き声で大層騒がしくなる。

エヴァはやつとのこと隅の方に席を見つけると、大きな荷物を座席の下に押し込んで腰をおろしマリヴオンが作ってくれた弁当の包みを膝の上に乗せた。

馬車が出る頃になってもう一人職人と見られる服装をした男が飛び込んできて席に割り込んだ為、エヴァは隣の太った女に潰されそうになった。

これだけ詰め込まれると外は寒くても、馬車の中は暑い位だった。

「坊やは見習い奉公にでも行くのかね？」

ガタゴトと馬車に揺られながら隣の農婦が話しかけてくる。

エヴァが答えようと口を開きかけると向いに座った中年の女が指を振って遮った。

「当てて見せよう。あんたは……」

何か大事な任務があるんだねと言われたエヴァは黙って頷いた。

黒いシヨールを被った女はぐるりと目玉を回すとニツと黄ばんだ歯を見せた。

「私は占い師のステレン」

「エヴァンです」

「エヴァン、勇気を出しな。怖ろしい目に遭うだろうが、あんたはやり遂げられるよ」

エヴァはにつこり笑って頷いたが、女が続けて言った言葉にハツとする。

「そして、いつかは元の姿に戻ることができるだろうよ」

私がこれからしようとしていることは……

キュツと口元を引き締めて真っ直ぐに座りなおす。

しっかりしなくちゃ。

人の命がかかっているんだから。

それから、私の………

「船長はいつたいどうしちまったんだろうなあ？」

『悪酔いブイヨン』はまったく手をつけていない皿を見つめて呟いた。

その日は三日間続いた吹雪も漸く治まり、『ラ・ソリテア号』の船乗り達は久し振りに暖かい食事でありつけたのである。

だが、どんよりとした灰色の雲が太陽の光を遮っており、辺りは昼間から薄暗く、不規則に吹き付ける北風に帆がバタバタと騒がしい。

こんな寒い日に何も食べないで船室に閉じ籠っていたら凍え死んじまうぞ。

あの事件から一年が経ち、やっと少し元気になったと思ったたら、船長は年が明けて船に戻って来てから前よりも更におかしくなってしまった。

奥さんの幽霊が現れた時から酒を控えていたのに、この一週間はぶっ倒れるまで飲んでいる。

何とかしないと取り返しのつかないことになるんじゃないか？

でも何とかって、いつたい何をすればいいんだ？

「おい、どうした？」

丁度台所の近くに來たアレンが、途方に暮れたように突っ立っている料理長に尋ねた。

「船長のことさ。何でまたあんな風になっちまったのか、あんたは知っているかい？」

「昨夜、船室に様子を見に行ったら死にそうな声で誰かに救しを請うていたぞ」

「そりゃ、奥さんにだろうな」

航海士は寒さで赤くなった鼻に皺を寄せて頭を振りながら言った。

「船長の辛い気持ちも分かるけどな。最近この船の上は陰気で堪らん。皆歌うことも笑うことも遠慮してコソコソ話している。奴らが怒り易く神経質になっちまって空気がピリピリしているのを感じるんだ。いい加減にしとかないと反乱を引き起こすぞ」

「何かよい手立てはないものか？」

「やっぱり次に寄る港で娼館に引っ張って行かなくてはならないようだな」

「そんなことで奥さんを忘れることができるのか？」

「まあ、何もしないよりましだろう。やって見るしかないよ」

そんな訳でティアベを出港して数週間後に立ち寄った港町で、アルテュスは部下達によって酔い潰されたうえ、ある建物に運び込まれた。

アルテュスと一緒に部屋に閉じ込められた女はユリアという名のこの店の看板娘だった。

背が高く魅力的な体つきをした若い女で、長く艶のある栗色の巻き毛を持ち、愛くるしい顔には微笑むとぽっかりとえくぼが浮かんだ。

少しばかり我が強く気丈なユリアは、大人しい性格とは言えなかったが、姉御肌で面倒見のいい女だった。

性技よりも人の話を親身に聞くことに長けており、その為に評判が良かったのだ。

客にするのは船乗りでも地位のあるものばかり、店に出るようになったのは数年前でアルテュスとは偶然面識がなかった。

女は外から鍵をかけられた扉を一瞥すると部屋の真ん中に置いてあるベッドに近付いた。

娼館にしては質素な内装の部屋で、壁は煉瓦色の植物がモチーフを作るくすんだ深緑の壁紙に覆われている。

家具はこれだけは立派な天蓋のついたベッドと小さなテーブルに椅子が2脚だけで、テーブルの上には葡萄酒の入った水差しとコップが2つと干した果物と木の実が山盛りになった皿があった。

床は板張りで奥の壁際には下の広間の暖炉に通じる煙突が通っており部屋を温めていた。

ユリアは狭く見えるベッドの上に仰向けに寝ている男を物珍しげに眺めている。

随分立派な体躯の男ね。

船乗りは逞しい人が多いけど、この人と比べると皆貧弱に思えてしまふ。

男はぐっすりと眠っているようだが、時折うなされているのか苦しそくに顔を顰め身動きする。

起こした方が良いのかしら？

「ねえ、起きて……」

逞しい肩に手をかけそつと揺す振ってみたが起きる気配はない。

この男の友人と言う男達に言われたことを思い出す。

でも男と女が寢室に閉じ籠ってやることと言ったら一つしかないでしょう？

起きてもらわなければならぬけど、その前に服を脱がしてしまおうかしら？

……！！！！

体を弄る熱い手と唇に泥沼のような眠りから引きずり出されたアルテュスは、慌てて飛び起きるとベッドから転げ落ちた。

床に打ち付けた腕を擦りながら立ち上がるとベッドの上にしどけない姿でペタリと座った女と目が合った。

「いったいここはどこだ？ 俺はここで何をしているのだ？」

ユリアは緩めたコルセットから零れそうな胸を隠そうともせず、相手を魅惑するような微笑を浮かべた。

「ここは私の部屋。貴方は私のお客様よ」

アルテュスは自分の姿を見下ろした。

シャツはすっかり前がはだけて筋肉の盛り上がった逞しい胸から割れた腹筋は臍の下まで露になっている。

ボタンを閉めようともせず扉に向った男は、鍵がかかっていることを確認すると、険しい顔つきで女の方を振り向いた。

「どういつつもりだ？」

「貴方のお友達がしたことよ。壊したりしないでね、後で私が酷く殴られるんだから」

扉に体当たりをしようと思構えていた男は、それを聞くと体の力を抜いた。

「明日の昼までこの扉が開かれることはないわ。私はユリア、貴方

は？」

「……アルテュス」

「じちらにいらっしやいよ」

「いや、じじでいい」

アルテュスは窓際の椅子を引くとドサリと腰を下ろした。

女は肩を竦めるとベッドを降りて、男の方に一足踏み出しながら言った。

「貴方が悲しい目に遭ったということは聞いているわ」

「……」

「慰めてあげられるなんて自惚れていないけど。貴方のことが知りたいわ」

ユリアはアルテュスの体に触れるほど近付くとゆっくりと足元に跪いた。

丁度同じ頃、トリポルトのある屋敷では、少年の姿をした娘が緊張した面持ちで主が現れるのを待っていた。

「ヴァデ・レトロ・サタナー!!!」

居間に足を踏み入れた男は、椅子から立ち上がったエヴァの姿を見るなり目を剥き、そう叫んで胸元に十字を切った。

自分の方を横目で窺いながら、じりじりと後ずさって行く男の様子を見ていたエヴァは噴出した。

「ダヴォグール様、私は幽霊じゃないですよ」

「……君は本当にエヴァン……いや、エヴァ・ド・タレンフォレストか？ 兵学校では俺の生徒であり、俺の親友の妻となった女性か？」

咳き込みながら尋ねた男に少年の格好をしたエヴァは黙って頷いた。

男は笑わなかった。

「奴が言っていたように君は海で溺れたのではなかったのか？」

固い表情を崩さず目を細めて付け加えた。

「場合によっては君は招かざる客だということを理解しておいてもらいたい。あんな男だがアルテュスは俺の友人なんでね」

そして、控えていた召使に大急ぎで酒を持って来るように命じると、エヴァに太い薪が威勢よく燃えている暖炉の前の椅子を示した。

「座りたまえ。強い酒が要りそうだ」

この男にしては珍しく口を噤んだまま、自分も向かいの安楽椅子に腰を下ろすと傍らのテーブルに置かれた酒瓶を取り、杯になみなみ

と注いだ。

そして、それを一息に飲み干して手の甲で口元を拭った。

「アルテユスなら数日前にここを出たばかりだぞ」

「はい、知っています」

「彼の前に顔を出すのが怖いのか？」

「ダヴォグール様、私の話を聞いてもらえますか？」

頷いた男にエヴァは肩から力を抜き、暫く膝の上に乗せた両手を見つめていたが、やっと決心したように顔を上げると口を開いた。

「私は船長さんが思っているように不義を働いたりしていません」

マテオは片方の眉を上げ、皮肉な笑いに唇を曲げた。

「だが、証拠を見せてもらったぞ」

「……手紙のことですか？」

「ああ」

「あれは確かに私が書いたものですが、ある人の為に代筆したもので、船長さんに宛てたものではありませんでした」

「いや、俺が言っているのは君の浮気相手が書いた手紙だ」

「相手なんていません！！ 私が書いた手紙を誰かが手に入れて悪用したとしか思えません。でも船長さんも、船長さんです。あんな手紙よりも私のことを信用してくれれば良かったのに！」

必死になって説明するエヴァを興味深そうに見ていた男は言った。

「何で奴にもそうやって弁解しなかったんだ」

「あの人がそんなものを受け取っていたなんて全然知らなかったし……何も言えないうちにボートに乗せられて。まさかあんなことするなんて思わなかったから……」

話しているうちに声が震えきて、エヴァは口を噤んで必死で涙を堪えた。

少しばかり表情を緩めたマテオは、膝の上で拳を握り締め俯いている親友の妻に言った。

「先に俺が知っていることを話そう。その後で君の話聞くことにしよう」

エヴァが指先で一筋流れた涙を拭い頷くのを見て男は話し始めた。

「新大陸から戻った日、君が書いた手紙と君の偽の相手が書いた手紙、それから君の結婚指輪がアルテュスの許に届けられたそうだ」

マテオの話聞いて更に謎が増えた。

だが、ひとつだけ分かったことがある。

アルテュスが留守の間起こった不可思議な出来事は全て繋がっていると思われた。

襲われた夜に紛失した結婚指輪、サラの婚約者に書いた手紙、サラの失踪……

ぞくりと背中に寒気がして、エヴァは身震いした。

まるで蜘蛛の巣のように巧みに張り巡らされた罠が見えるようだ。

標的は私かしら、それとも船長さんだろうか？

私があの人と結婚したことを喜んでない人達がいることは知っている。

でも、もし船長さんを憎んでいる人の仕業だったら、目的を達成できていないということになる。

思わず立ち上がって叫んでいた。

「ダヴォグール様！！ 船長さんが、もしかしたら今頃、船長さんが危険な目に遭っているかも知れません！！！」

青ざめて震えているエヴァを見て、マテオは初めて笑顔を見せた。

「ああ、そうだな。だが奴は自分の身を守る術ぐらい知っているよ。

さあ、今度は君の番だ。俺に聞いて欲しいと言った話をしてごらん」
男の優しい声に思わず気が緩み鼻がツンとして涙が溢れた。

「……ごめんなさい。すぐ泣き止みます」

下唇を噛んで涙を堪えているエヴァの頭をマテオの大きな手が安心させるように軽く叩いた。

「泣きたいなら泣いちまえ」

もう我慢ができなかった。

辛い思い出が次から次へと脳裏に蘇り、エヴァは声を上げて泣いた。

我が家と思っていた城の自分の部屋で狼藉者に襲われた恐怖、愛する人に捨てられた悲しみ、大海原に唯一人取り残された心細さ、そして父の死に目に会えなかった後悔、それらの気持ち硬く強張った心から熱い涙と共に流れ出していく。

エヴァの話最後まで聞き終わったマテオは幾つかの質問をした。

相手の答えを聞きながら何度も頷いた男は、眉間に皺を寄せて考え込んでいる。

エヴァは水で湿らせた布を腫れた臉に乗せて、ぐったりと椅子の背にもたれていた。

こんなに泣いたのは子供の頃以来だろう。

そんな素振りにはなならないけど、ダヴォグール様はさぞかし驚かれたことだろう。

でも、何も言わずに傍で見守ってくれたことがとても有難かった。

「君が無実だということを感じるよ。初めにアルテユスから話を聞いた時も直ぐには信じられなかったんだがね。どうやらアルテユスも君もまんまと敵の思惑通りに踊らされてしまったようだな。力を貸してやってもいいが……犯人を見つけるには多分時間が必要だろう」

「……はい、ありがとうございます。どんなに時間がかかっても構いません」

エヴァは顔から布を取って椅子に座りなおすと期待するようにマテオの顔を見つめた。

「いや、先程君が言ったようにアルテユスの命は危険に晒されているかも知れないぞ。できるだけ早い方が良いだろう」

マテオ・ダヴオグールは召使に紙とペンを取りに行かせると、立ち上がって部屋の隅の机に向った。

机の窪みに埋め込まれたインク壺の蓋を取った男は、鷲ペンの先で頭を掻きながらエヴァに言った。

「多く見ても俺は半月しか休暇は取れないだろう。それも夏至の後あたりになるだろうから、その時に結論を出すと決めたら、それまでに色々探らなければならぬ。奴の実家には誰か信頼できる者はいるのか？」

「はい、あの人の弟のヤンがいます。危険なんでしょうか？」

「俺は誰か使用人を考えていたんだが、奴の弟か。それはいいな。歳は幾つだ？」

「確か15歳だったと思います。でも、彼を危険な目に遭わせる訳には……」

「アルテユスの為だ。それにこちらからも人を出そう」

エヴァは驚いたように男を見上げた。

「色々嗅ぎ回るにはオベルが適切だろう。丁度去年から奴の所には見習いが入っているし、留守の間はセラファンとブリスが装蹄の仕事も手伝ってやれるだろうしな」

オベルは陸軍兵学校の装蹄師、セラファンは鍛冶屋、ブリスは馬丁であり、エヴァは兵学校時代にこの三人にとっても世話になっている。エヴァは嬉しそうに目を輝かせた。

「それから、ド・ブロイズは確か君の友達だったな。士官候補生となって他の生徒3人と一昨年の春からリュスカ公の許に行っている。少し早いけど、彼を呼び戻してオベルと一緒に行かせよう」

「でもアルカンの任務は終わっていないのではないですか？」

「どうせ最初から二年という約束だったんだ。だから部隊を離れるのが三月ほど早まるというだけのことさ」

「ありがとうございます!!!」

兵学校で初めてできた友人と再び会えることがとても嬉しかった。

「ダヴォグール様、私にも何かできることはないでしょうか？」

真面目な顔でそう尋ねたエヴァにマテオは呆れた顔をした。

「君は既に散々酷い目に遭っているというのにまだ何かしたいのか？」

「でも、私だけ安全な場所で何もなかったようにぬくぬくしている訳にはいきません。力を貸してくださいさる皆の為にも何かをしたいのです」

「危険だぞ」

「分かっています。だから直接調査に加わるのではなく、例えば兵学校の台所を手伝うとか、この屋敷の女中として働くとか……」

それを聞くと大男の教官は出し抜けに笑い出した。

「奥方を女中としてこき使ったなんてあの男に知られたら大変なことになるぞ」

「でも、私にはその位しかできることが……」

「ちょっと待ってくれ。エヴァ・ド・タレンフォレストとしてはそんなことする訳にはいかないが、兵学校の生徒のエヴァンだったら……いや、暫く考えさせてくれ」

だが、エヴァかエヴァンかなど、屁理屈に過ぎないのは分かっている。

マテオは書き終わった手紙を畳んで熱い蠟を垂らし封印しながら苦笑いを浮かべた。

アルテュスは絶対俺を許さないだろう。

それこそ青筋を立てて怒って、俺は絶交されてしまっただろうな。

「君の義弟への手紙だ。直接本人に手渡すようにさせようと思う。留守にしているとかそういうことはないだろうな？」

「城を出たのは一年以上も前なので分かりません」

「まあ、不在だったらその時はその時で考えるか」

マテオは立ち上がると女中にエヴァを部屋に案内するように命じた。

「君を兵学校に連れて行く訳にはいかないが、少ししたら君と仲が良かった数人をここに来させよう」

案内されたのは以前泊まったことのある屋敷の主人の部屋だった。

エヴァは赤々と火の燃えている暖炉に手を翳しながら考えた。

ダヴォグール様は本当に親切なお方だ。

やっぱり何か彼の役に立つことがしたい。

どうしたらいいのかしら？

急に良いことを思いついたエヴァは両手を打ち合わせた。

そうだわ、私にできることがもうひとつあったわ！

男は椅子の上に座ったまま身動きもしなかった。

その足元に蹲った女は露になった胸を隠さずに腕で囲い、その癖恥らうように俯き加減に顔を背けている。

そして上からの視線を意識して僅かに向きを変え男の脚に擦り寄った。

自分からは決して手を出さずに男が我慢できなくなるように仕向ける。

どうすれば男の心を虜にできるか十分心得た女の手管だ。

アルテュスは椅子の背にもたれて、そんな女の方をぼんやりと見下ろしていた。

官能的な曲線を描く脱ぎかけたドレスの上から覗く白く丸い肩にむつちりとした乳房。

女は大層魅力的だったが、男は上の空でまったく別の女の姿を思い浮かべていた。

初めての夜、狭い船室の寢床の上でランプの明かりの中に仄かに浮かび上がった姿を思い描くと、悲しみと恋しさに胸が震えた。

染み一つない真っ白ですべらかな肌、慎ましやかな膨らみを見せる愛らしい胸、生まれたての赤子のような柔らかな腹、ほっそりとした少年のような腰。

全てが男の欲情を掻き立てるに十分な素質を持っていながらも聖母のように清らかで、組み敷くとまるで天使を犯しているような気分になったのだった。

薄汚い手垢をつけて汚してしまった美しい体。

今は俺の所為で魚の餌食になってしまった愛しい体。

可哀想な俺のエヴァ……

深い溜息を吐くとアルテュスは椅子から立ち上がり上着を脱いだ。

そして、その上着を足元の女に放ると、俯いてぎこちない指で自分のシャツのボタンを留める。

「悪かったな。この体は既に俺の物じゃないんだ。俺はその隅にでも寝るから、あんたはベッドを使ったらいい」

そう言うとベッドの上にあった毛布を掴んで部屋の奥に行き、毛布に包まって温かい床の上に寝そべった。

もし君が俺を裏切ったとしても。

……俺には君しか愛せない……

エヴァの父親のことを思い出すと胸が痛む。

俺は一生悔やむだろう。

何故あの時、ゴンヴァルにエヴァが死んだかと尋ねられた時、何でもない顔で元気ですと答えることができなかったのか。

エヴァ、君を俺を憎んだだろうか？

それでも俺に生きると言ってくれるのだろうか？

もう何もできることはないが、毎年クリスマスにはティアベに向おう。

君の愛する人々が眠る墓地に行き、俺達が結婚したティアベの教会で君と義父上の為にミサをあげさせよう。

……………そして、最後の審判では喜んで神の裁きを受けよう。

眠りに落ちる瞬間、アルテュスはふと優しい息吹が自分の額と閉じた頬を撫でるのを感じた。

船の上で愛しい妻の幽霊の傍で眠りについた時のように……

「起きて」

耳元で呼びかけた女の声に飛び起きたアルテュスは目を擦りながら辺りを見回した。

時刻はかなり遅いようで弱い冬の日差しが雨戸を開けた窓に照っていた。

コリアは既にコルセットをきちんと紐で閉じて肩掛けを羽織り、梳った髪を背中に纏め身支度を整えている。

「朝食の準備ができているわ。どうぞ出て行く前に食べて行ってね」

小さなテーブルの上には、湯気の立つオートミールの粥や林檎と干し杏を煮たもの、ゆで卵に焙ったベーコンなどが所狭しと並べられ

ていた。

アルテュスは白い光の差し込む窓を見つめた。

不思議なことにとても穏やかな気持ちだった。

エヴァ、君が俺に安らかな眠りを送ってくれたのか？

久し振りに良く眠れた所為か空腹を感じる。

女が素焼きのコップに注いで差し出したビールを一息に飲み干したアルテュスは、テーブルに並んでいる料理を片っ端から片付けて行った。

向かいに座ってテーブルに頬杖をつき、まるで自分の息子を見るような慈愛に満ちた瞳でその様子を眺めていた女が口を開いた。

「貴方のこと気に入ったわ」

男は一瞬ユリアの方を見て片方の眉を上げたが、女が何も言わないので、また皿に目を落として油の滴るベーコンに齧り付いた。

小さく肩を竦めたユリアは小声で歌い出した。

……敵意に満ちて

私は自分自身に不滅の戦いを挑む

自分の心に、希望に反逆するの

そしてその苦しみには少しの同情も沸かない

目を見開いたまま私は死に立ち向かうのだから

敵である愛の意見に従いながら

愚かな者よ

自分自身を愛していないのに

私がおまえを愛することを期待しているのか……

「何の歌だ？」

「知らないの？ 王弟ボワイエ公の取り巻きの一人であるデポルテが書いた詩に宮廷音楽家のモーデュイが節をつけた今流行りの歌よ」
くだらないとばかりにフンと鼻を鳴らした男を真っ直ぐに見つめて
ユリアは言った。

「貴方は奥さんの死に責任を感じているのね？」

アルテュスは顔を強張らせて小さく頷いたが口をきつく閉じたまま
だ。

「でも、貴方の奥さんは幸せだったと思うわよ」

「何故そう言い切れる」

「だって私が奥さんだったら嬉しいもの。死んでからもこんなに愛されて……とても羨ましいわ」

だが、男は皿を押しやりながら苦々しく言った。

「俺に出会ったことが妻の不幸の始まりだったのさ」

金を渡そうとしたが、女は既にお友達からもらっているからと断った。

「それに貴方は何もしなかったじゃない」

アルテュスは黙って頷くと、椅子の背にかけてあつた上着を掴み扉に向った。

扉には鍵はかかっておらず、勢いよく扉を開いたアルテュスは後ろに隠れていた連中にぶつかりそうになる。

「うわっ、船長!！」

「あれっ、ここにいたんですか？」

「びっくりさせないでくださいよ!！」

アルテュスは嫌そうに眉を顰めて、慌てている部下達に言った。

「白々しい。おまえらが仕組んだことだろ？ さっさと船に戻るぞ!！」

だが、港に向う道、船長はアレンの肩に手を置くと言った。

「心配掛けたな。お陰で久し振りに良く眠れたぞ。飯もちゃんと食べたし、もう大丈夫だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9222o/>

竜騎兵と花嫁

2011年10月17日02時59分発行